松浦市文化財調査報告書 第５集

宮ノ下り遺跡

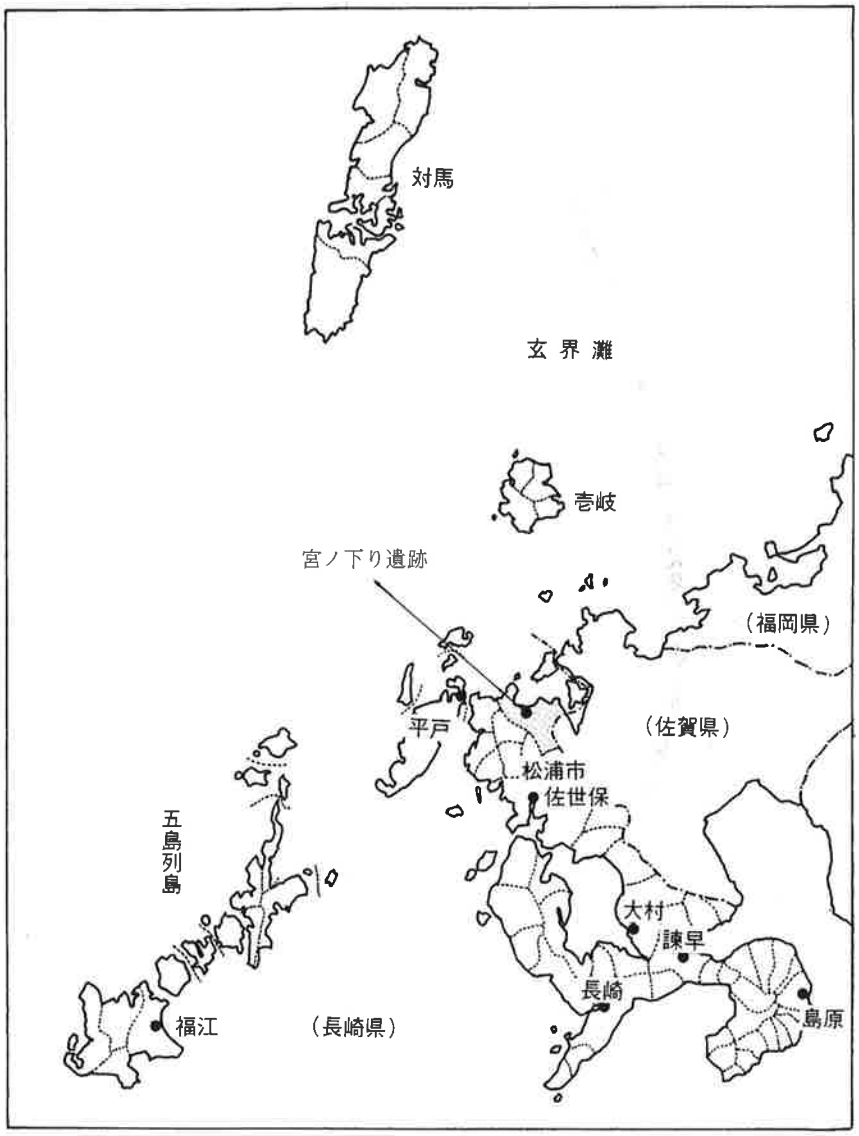
志佐川地区県営圃場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1989

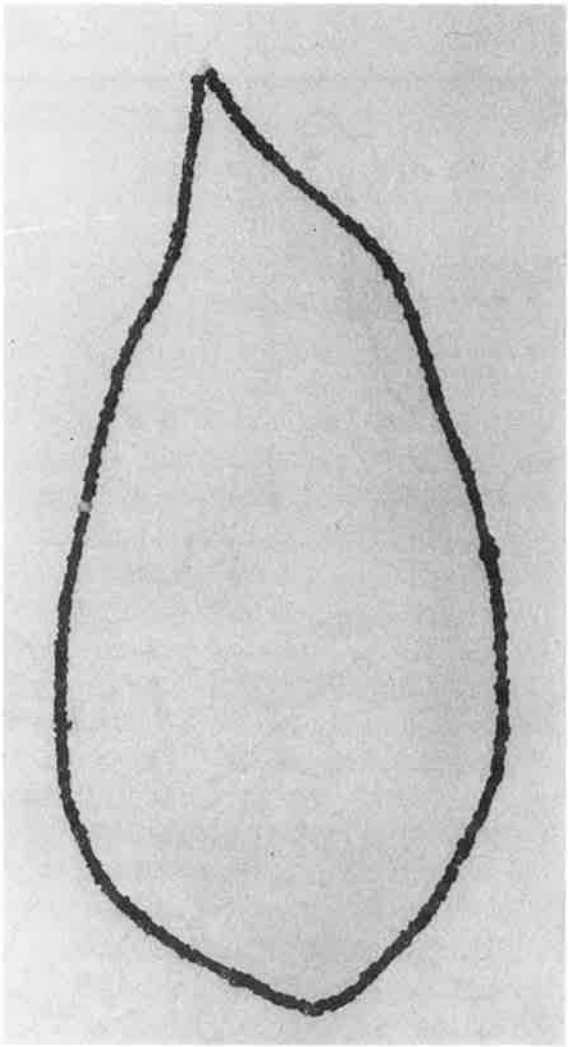
長　崎　県
松浦市教育委員会

松浦市文化財調査報告書 第５集

宮ノ下り遺跡



長崎県松浦市教育委員会



ガラス小玉

発刊にあたって

わたしたちの住む松浦市は、青い海と緑の大地に囲まれた環境にあり、美しい自然に恵まれています。原始・古代より人びとが住みつき、豊かな生活を営んできました。また、古くから大陸との交流をうかがわせる遺跡も数多く知られています。なかでも舶載の青銅鏡が出土した栢ノ木遺跡、中国、朝鮮半島産の陶磁器が数多く出土した楼楷田遺跡などはその代表的なものといえましょう。このように、松浦市には貴重な文化財が数多く残されています。

文化財行政の当面する重要な課題の一つに埋蔵文化財の保護対策があげられます。近時、必然的に産業経済の発展に伴い宅地造成や各種の開発事業が相継いでいます。開発事業は規模の大小にかかわらず遺跡破壊の問題を含んでおり、当教育委員会においても以上の事情を勘案して、やむをえず保存できない埋蔵文化財については事前の発掘調査を行って、出来るだけ正確な記録保存につとめているところであります。

今回の報告書は、県営志佐川地区圃場整備事業に伴い、志佐町高野免字宮ノ下り一帯についての埋蔵文化財の発掘調査についてまとめたものであります。報告書の内容にみられるように、旧石器時代から縄文・弥生・さらに鎌倉時代にいたる複合遺跡であることも確認され、多くの成果を得ることができました。

本調査にあたっては、長崎県文化課先生方並びに地元作業員の方のほか、多くの人達の御指導、御協力、御理解によるものであり、ここに心から深く感謝を申し上げます。

本調査のまとめが、今後の文化財保護・活用の一助となれば幸いです。

平成元年３月

松浦市教育委員会

教育長　　呼　子　俊　一

例　　言

1. 本書は、長崎県営圃場整備事業に伴う昭和60年度から昭和63年度にかけて実施した宮ノ下り遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、松浦市教育委員会が県北振興局と委託契約を結び事業主体となり、長崎県文化課の指導を受けて、松浦市教育委員会があたった。
3. 本書の執筆は、市社会教育課主事中田敦之があたり、地理的環境の項は長崎県立島原高等学校教諭久原巻二氏より玉稿を賜わった。
4. 遺構の実測は、県文化課安楽勉・村川逸朗と中田があたり、遺物の実測は、松岡清美と中田があたった。遺物・遺構の製図は、松岡・堀川玲子があたり中田が協力した。
5. 調査時の写真撮影及び整理後の遺物写真は中田があたった。
6. 本書の作成にあたっては、県文化課の御協力を賜わった。
7. 編集は、松岡の協力を得て、中田があたった。
8. 調査によって出土した遺物は、松浦市教育委員会が保管の任にあたっている。
9. 本書は、松浦市文化財調査報告書第５集にあたる。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに …… 1
　1　発掘調査に至る経過 …… 1
　2　調査の組織 …… 2
Ⅱ　地理的・歴史的環境 …… 4
　1　地理的環境 …… 4
　2　歴史的環境 …… 7
Ⅲ　調査の概要 …… 13
　1　第１次調査の概要 …… 13
　2　第２次調査の概要 …… 14
　3　第３次調査の概要 …… 14
　4　第４次調査の概要 …… 17
Ⅳ　土層及び検出遺構・遺物 …… 20
　1　第１次調査における土層及び検出遺構・遺物 …… 20
　2　第２次調査における土層及び検出遺構・遺物 …… 35
　3　第３次・第４次調査における土層及び検出遺構・遺物 …… 55
Ⅴ　まとめ …… 89

挿　図　目　次

第１図　松浦市内地質図 …… 5
第２図　遺跡周辺の地形分類図 …… 6
第３図　周辺遺跡分布図（$\frac{1}{25,000}$） …… 8
第４図　周辺遺跡出土遺物 …… 9
第５図　第１次調査区域（$\frac{1}{2,000}$） …… 13
第６図　Ｃ地点調査区域図（$\frac{1}{300}$） …… 13
第７図　第２次調査区域（$\frac{1}{3,000}$） …… 15～16
第８図　第３次・第４次調査区域（$\frac{1}{1,500}$） …… 17
第９図　Ｃ６北壁土層図（$\frac{1}{40}$） …… 20
第10図　集石土壙実測図（$\frac{1}{30}$） …… 21
第11図　第１次調査出土遺物①（$\frac{1}{3}$） …… 22
第12図　第１次調査出土遺物②（$\frac{1}{3}$） …… 23
第13図　第１次調査出土遺物③（$\frac{1}{3}$） …… 24
第14図　第１次調査出土遺物④（$\frac{1}{3}$） …… 26
第15図　第１次調査出土遺物⑤（$\frac{1}{3}$） …… 27
第16図　第１次調査出土遺物⑥（$\frac{2}{3}$） …… 28
第17図　第１次調査出土遺物⑦（$\frac{2}{3}$） …… 29
第18図　第１次調査出土遺物⑧（$\frac{1}{3}$） …… 31
第19図　第１次調査出土遺物⑨（$\frac{1}{3}$） …… 32
第20図　第１次調査出土遺物⑩（$\frac{1}{3}$） …… 33
第21図　銅銭拓影（$\frac{1}{1}$） …… 34
第22図　第２次調査土層図（$\frac{1}{40}$） …… 36
第23図　Ｔ22柱穴検出状況図（$\frac{1}{60}$） …… 37
第24図　Ｔ31石棺実測図（$\frac{1}{20}$） …… 39～40
第25図　Ｔ31石棺出土ガラス小玉実測図①（$\frac{1}{1}$） …… 41
第26図　Ｔ31石棺出土ガラス小玉実測図②（$\frac{1}{1}$） …… 42
第27図　１号住居跡実測図（$\frac{1}{60}$） …… 43
第28図　１号住居跡出土遺物①（$\frac{1}{3}$） …… 44
第29図　１号住居跡出土遺物②（$\frac{1}{3}$） …… 45
第30図　２号住居跡実測図（$\frac{1}{60}$） …… 45
第31図　２号住居跡及び周辺出土遺物（$\frac{1}{3}$） …… 46
第32図　第２次調査出土遺物①（$\frac{2}{3}$） …… 47

第33図　第2次調査出土遺物②（$\frac{2}{3}$）…… 48
第34図　第2次調査出土遺物③（$\frac{1}{3}$）…… 49
第35図　第2次調査出土遺物④（$\frac{1}{3}$）…… 51
第36図　第2次調査出土遺物⑤（$\frac{1}{3}$）…… 52
第37図　第2次調査出土遺物⑥（$\frac{1}{3}$）…… 53
第38図　第2次調査出土遺物⑦（$\frac{1}{3}$）…… 54
第39図　第2次調査出土遺物⑧（$\frac{1}{3}$）…… 55
第40図　第3次・第4次調査土層図（$\frac{1}{60}$）…… 56
第41図　第3次調査掘立柱建物跡図（$\frac{1}{240}$）…… 57
第42図　AB31 遺物出土状況（$\frac{1}{50}$）…… 58
第43図　第3次・第4次調査出土遺物①（$\frac{2}{3}$）…… 59
第44図　第3次・第4次調査出土遺物②（$\frac{2}{3}$）…… 61
第45図　第3次・第4次調査出土遺物③（$\frac{2}{3}$）…… 62
第46図　第3次・第4次調査出土遺物④（$\frac{2}{3}$）…… 63
第47図　第3次・第4次調査出土遺物⑤（$\frac{2}{3}$）…… 66
第48図　第3次・第4次調査出土遺物⑥（$\frac{1}{3}$）…… 67
第49図　第3次・第4次調査出土遺物⑦（$\frac{1}{3}$）…… 69
第50図　第3次・第4次調査出土遺物⑧（$\frac{1}{3}$）…… 70
第51図　第3次・第4次調査出土遺物⑨（$\frac{1}{3}$）…… 71
第52図　第3次・第4次調査出土遺物⑩（$\frac{1}{3}$）…… 73
第53図　第3次・第4次調査出土遺物⑪（$\frac{1}{3}$）…… 74
第54図　第3次・第4次調査出土遺物⑫（$\frac{1}{3}$）…… 76
第55図　第3次・第4次調査出土遺物⑬（$\frac{1}{3}$）…… 77
第56図　第3次・第4次調査出土遺物⑭（$\frac{1}{3}$）…… 78
第57図　第3次・第4次調査出土遺物⑮（$\frac{1}{3}$）…… 79
第58図　第3次・第4次調査出土遺物⑯（$\frac{1}{3}$）…… 83
第59図　第3次・第4次調査出土遺物⑰（$\frac{1}{3}$）…… 85
第60図　第3次・第4次調査出土遺物⑱（$\frac{1}{3}$）…… 86
第61図　第3次・第4次調査出土遺物⑲（$\frac{1}{4}$）…… 87
第62図　第3次・第4次調査出土遺物⑳（$\frac{1}{3}$）…… 88

図　版　目　次

図版 1　遺跡遠景　（西より） …… 93
図版 2　調査風景 …… 94
図版 3　調査区の土層 …… 95
図版 4　柱穴検出状況 …… 96
図版 5　遺物出土状況 …… 97
図版 6　集石土壙検出状況とB地点配石検出状況 …… 98
図版 7　1号住居跡検出状況 …… 99
図版 8　2号住居跡検出状況と完掘状況 …… 100
図版 9　1号石棺検出状況 …… 101
図版10　1号石棺検出状況と土壙 …… 102
図版11　溝状遺構検出状況 …… 103
図版12　第1次調査出土遺物①（$\frac{1}{3}$） …… 104
図版13　第1次調査出土遺物②（$\frac{1}{3}$） …… 105
図版14　第1次調査出土遺物③（$\frac{1}{3}$） …… 106
図版15　第1次調査出土遺物④（$\frac{1}{3}$） …… 107
図版16　第1次調査出土遺物⑤（$\frac{1}{1}$） …… 108
図版17　第1次調査出土遺物⑥（$\frac{1}{1}$） …… 109
図版18　第1次調査出土遺物⑦（$\frac{1}{3}$） …… 110
図版19　第1次調査出土遺物⑧（$\frac{1}{3}$） …… 111
図版20　第1次調査出土遺物⑨（$\frac{1}{3}$） …… 112
図版21　第2次調査出土遺物①（$\frac{1}{3}$） …… 113
図版22　第2次調査出土遺物②（$\frac{1}{3}$） …… 114
図版23　第2次調査出土遺物③（$\frac{1}{3}$） …… 115
図版24　第2次調査出土遺物④（$\frac{1}{1}$） …… 116
図版25　第2次調査出土遺物⑤（$\frac{1}{1}$） …… 117
図版26　第2次調査出土遺物⑥（$\frac{1}{2}$） …… 118
図版27　第2次調査出土遺物⑦（$\frac{1}{2}$） …… 119
図版28　第2次調査出土遺物⑧（$\frac{1}{2}$） …… 120
図版29　第2次調査出土遺物⑨（$\frac{1}{2}$） …… 121
図版30　第2次調査出土遺物⑩（$\frac{1}{3}$） …… 122

図版 31　第 2 次調査出土遺物⑪（$\frac{1}{3}$）…… 123
図版 32　第 3 次・第 4 次調査出土遺物①（$\frac{1}{1}$）…… 124
図版 33　第 3 次・第 4 次調査出土遺物②（$\frac{1}{1}$）…… 125
図版 34　第 3 次・第 4 次調査出土遺物③（$\frac{1}{1}$）…… 126
図版 35　第 3 次・第 4 次調査出土遺物④（$\frac{1}{1}$）…… 127
図版 36　第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑤（$\frac{1}{1}$）…… 128
図版 37　第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑥（$\frac{1}{2}$）…… 129
図版 38　第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑦（$\frac{1}{3}$）…… 130
図版 39　第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑧（$\frac{1}{3}$）…… 131
図版 40　第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑨（$\frac{1}{3}$）…… 132
図版 41　第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑩（$\frac{1}{3}$）…… 133
図版 42　第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑪（$\frac{1}{3}$）…… 134
図版 43　第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑫（$\frac{1}{3}$）…… 135
図版 44　第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑬（$\frac{1}{3}$）…… 136
図版 45　第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑭（$\frac{1}{3}$）…… 137
図版 46　第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑮（$\frac{1}{3}$）…… 138
図版 47　第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑯（$\frac{1}{3}$）…… 139
図版 48　第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑰（$\frac{1}{2}$）…… 140
図版 49　第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑱（$\frac{1}{2}$）…… 141
図版 50　第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑲（$\frac{1}{2}$）…… 142
図版 51　第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑳（$\frac{1}{3}$）…… 143

表　目　次

第 1 表　周辺遺跡地名表 …… 9
第 2 表　宮ノ下り遺跡調査区一覧(1)・(2) …… 18～19
第 3 表　第 3 次・第 4 次調査遺物出土点数 …… 58
第 4 表　石鏃計測表 …… 64

Ⅰ　は　じ　め　に

1.　発掘調査に至る経過

長崎県においては、昭和58年度に10カ年間の第三次土地改良長期計画を策定し、県内各地で農業基盤整備事業を推進している。

松浦市においても県営圃場整備事業として志佐川地区が計画された。対象区は志佐川上流域の柚木川内・田ノ平・横辺田・稗木場・長野・赤木・池成・高野・里免に及ぶ受益面積119 *ha*である。農地造成は昭和58年度を初年度として実施されており、現在では稗木場・長野地区を残すのみとなっている。志佐川地区は水田ということもあり、県が実施した遺跡周知事業においては空白地になっていた。

昭和61年２月13日、高野地区において圃場整備事業に先立ち、県北振興局による志佐川地区排水路工事が行われていた。たまたま現地を筆者が訪れると水田掘削工事の排土の中に多量の遺物が散乱し、また、工事壁面にも遺物が包含されているのを発見した。事は急を要すると判断し、急ぎ筆者より県文化課へその旨の報告を行った。また、遺跡名として発見地の字より宮(みや)ノ下(さが)り遺跡と名称をつけ文化庁に遺跡発見届を提出した。これを受けて２月19日県文化課安楽勉文化財保護主事（現主任文化財保護主事）を急遽派遣し実態を調査するとともに現場にて県北振興局、市農林課、建設業者を交えて五者協議を行った。その結果、①工期の延長が難しく工事を中止させることはできない。②工期内による発掘調査の実施。③調査は20日間で行う。④発掘調査は工事区域内にて行う。⑤発掘調査の経費は原因者負担とする。の５項目について同意が得られた。その後、県文化課と市教育委員会にて調査費、調査体制について協議を行った。その結果、松浦市と県北振興局との間で委託契約書を取り交わした。この間には高野地区の方々や土地所有者の御理解もえることができた。調査主体は松浦市教育委員会があたり、昭和61年２月27日～３月15日までの17日間発掘調査を実施した。以下これを第１次調査と呼ぶ。

昭和63年度高野地区の圃場整備事業の着工に先立ち昭和61年に実施した宮ノ下り遺跡の範囲と遺構の有無を確認する必要が生じ、昭和62年11月県北振興局との間で委託契約を取り交わした。調査の経費負担の問題は、農林省構造改善局長と文化庁長官との間で取り交わされた「文化財保護法の一部改正に関する覚書」を適用し、農家負担分については、松浦市で予算化し、残りの分は県北振興局に負担をお願いした。調査は県文化課の協力を得て、昭和62年11月26日～12月25日までの30日間行った。範囲確認調査は17.4 *ha*の圃場整備予定地の削平地を中心に２*m*×２*m*を基本とする試掘壙を設定する方法で調査を進めた。設定した試掘壙は68箇所で、調査面積は349 ㎡である。以下これを第２次調査と呼ぶ。

範囲確認調査の結果、遺跡が５箇所発見された。その遺跡としての面積は約37,700 ㎡ に及ぶことも判明した。遺跡の範囲が広いため、いかに保護していくかで協議を進めた。協議には県北振興局土地改良課、県文化課それに市農林課、土地改良区理事、市教育委員会の間で行った。

数回の協議の結果、ようやく一部を除き盛土による設計変更にて回避することで合意がなされたが、この背景には、付近にて住宅団地造成による大量の排土があったことに起因する。しかし、第1次調査で行った1号幹線排水路においても遺跡が確認されており、この地区は工事設計の変更が不可避なため、本調査による記路保存措置を講ずることになった。範囲確認調査同様、農林省と文化庁との覚書の第5項により、県北振興局より負担をし、農家負担分については松浦市で予算化した。

本調査は、松浦市教育委員会が調査主体者となり、県文化課の協力を得て昭和63年2月8日～3月30日までの延べ51日間実施した。この調査を第3次調査と呼ぶ。しかし、調査対象面積1,400㎡のうち100㎡が調査できなかったため、この残りの面積を昭和63年8月24日～9月3日までの11日間実施した。これを第4次調査と呼ぶ。なお、各調査の詳細、内容については後に述べる通りである。

2. 調査の組織

調査主体　松浦市教育委員会

調査総括　呼子　俊一（市教育長）

調査指導　長崎県教育委員会

事務局　浦上　恒男（昭和60・61年度　市教育次長）
宮崎　米一（昭和60年度　市社会教育課課長）
福本　政二（昭和61年度　市社会教育課課長）
尾野伊十郎（昭和62・63年度　市社会教育課課長）
石本　利明（昭和63年度　市社会教育課課長）
宮本　脩平（昭和60年度　市社会教育課次長）
橋口　　達（昭和61年度　市社会教育課次長）
宮本　正志（昭和62・63年度　市社会教育課次長）
中田　敦之（市社会教育課主事）

調査担当　安楽　　勉（県文化課）
村川　逸朗（県文化課）
中田　敦之（市社会教育課主事）

調査協力　長崎県県北振興局耕地部土地改良課
松浦市農林課
土地所有者

整理作業員　松岡清美、長　由美、久家洋子、江口鈴子、三島道子、堀川玲子、松永裕樹子
糸山智子、山崎由紀、井崎美香、金子美佐恵、小山みどり、井村敏彦

調査外業者　山本宗市、白石英敏、末永克己、宮崎正春、尾崎武夫、南 徳右衛門、山本　孝、梶山秋男、知念盛良、里元虎次郎、内野　義、里元英二、大久保　恕、井村敏彦、井上明、田川恭孝、池山フジエ、石本一枝、知念初子、枇杷リク、高谷宮子、深見ミサエ、深見マサ子、藤沢トミエ、松永篤子、七種絹子、末永ミサ子、萩原豊子、土本洋子　山本みどり、吉本トヨ子、柴山ユキエ、山崎アヤ子、藤崎フジエ、小山キヌ、前田久枝、久家フミ子、吉永悦子、本山トヨ子、市山照代、前田ミサホ、大野シオミ、大石美津枝、小浦良子、中川サエ子、浦田チエ子、松田マリ子、藤川京子、今田英子、吉田末千子、三浦スミ子、里元シマ、吉本ミネ、池渕かよ子、田中春江、山本栄美子、久保川ヤエ子、小澤ヨシ、山口ユキ、福田チエ、松田久枝、瀬川ツギ、永益陽子、林フヂノ、里元智恵子、宮本トク、久保川ミツコ

Ⅱ　地理的・歴史的環境

1.　地理的環境

宮ノ下り遺跡は、東経129度42分52秒、北緯33度19分32秒付近に位置し、行政上は松浦市志佐町高野免字田原・宮ノ下りである。志佐川下流部右岸の沖積低地から段丘端にかけて立地している。MR松浦駅から主要地方道佐世保・日野・松浦線によって南へ約1.8㎞の高野集落の西側にある。

松浦市は、九州島の北西部、北松浦半島の北端部とその沖に浮かぶいくつかの島々から構成されている。北に伊万里湾・玄海灘、西から南にかけては北松浦郡の田平・江迎・吉井・世知原の各町、東には佐賀県伊万里市がある。1955年志佐・新御厨・調川の3町が合併して県内8番目の市制を施行し、同年今福町を編入した。面積95.34㎢、人口25,490。[註①]

市の南部には400㎞級の山々があり、南高北低の地勢をなしている。低平地には乏しく、志佐川・竜尾川なども中小の河川ばかりである。対馬暖流の影響を受けて比較的温暖な気候であるが、冬は玄海灘からの季節風がある。

市内の就業人口をみると、第一次産業24.2％、第二次産業32.4％、第三次産業43.2％となり、県平均に比べ第一次・第二次産業が多い。[註②] かつては多くの炭鉱をかかえ、市の基幹産業であったが1969年には全て閉山してしまった。これにともなって人口は激減した。その後、臨海部へ工場誘致が積極的に進められ、調川港には遠洋巻網水揚基地も開設された。さらに石炭専焼火力発電所の建設によって活況をとりもどし、人口も増加傾向に転じている。

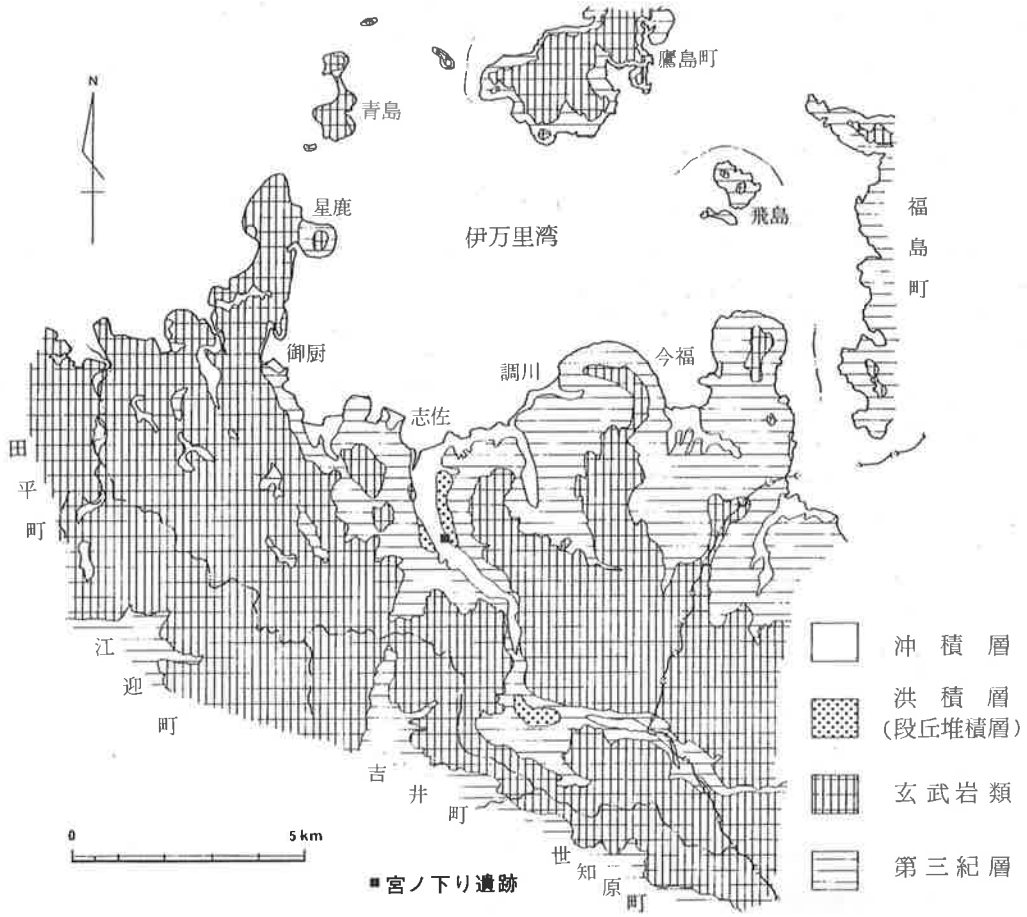
遺跡の所在する高野免は、市の中央部にあり、志佐町の北部に当る。志佐川右岸の段丘面から山麓面にかけて集落があり、中央を主要地方道が南北に走る。北は市の中心街の一部をなす同町里免、西は志佐川を隔てて同町栢木免、南は同町赤木免と接し、東は地すべりで有名な不老山を境として調川町と接している。地内は22の字にわかれ、遺跡のある田原・宮ノ下りは、西端部の水田をなす沖積地である。近年、農地の宅地化が進み、住宅団地が相次いで建設され、地内の人口は倍増した。人口1,544。[註③]

市内の地質は第三紀層を基盤とし、その上に玄武岩が広く分布し、両者が特色ある自然・人文現象をつくり出している。第三紀層は、佐世保（北松）炭田を支えた炭層をもつ堆積岩で、佐世保層群と野島層群とに分けられる。堆積後激しい地盤変動や侵食作用を受け、断層が多くみられる。地形としては、緩やかな山麓や丘陵となっている。玄武岩は、北松浦半島を中心に西北九州に広く分布する松浦玄武岩、あるいは西岳玄武岩類と称されるものの一部である。典型的な溶岩台地や平頂性の孤立丘をなしているが、かつては伊万里市南方を中心として噴出した一大楯状火山であったという。従って、佐賀県境の国見山系が標高700㎞級と高く、北および西に高度を減じている。市域では南東部に400～500㎞の高位台地があり、悪太郎川以西は100㎞以下の低位台地が広く、星鹿半島や大崎地区では海に臨んで柱状節理の海食崖が発達し

ている。玄武岩台地の侵食谷の谷頭や第三紀層との地質境界には溜池が多く、遺跡が立地していることが多い。台地の周辺には急崖があり、以下の第三紀層による緩斜面と対称的である。土地利用でも、第三紀層は水田が多いのに対し、玄武岩台地は畑や山林が多い。また、両者が作用して生まれる北松型地すべりも特徴的である。

海岸線は比較的出入が多い。志佐町大浜には砂丘があるが、全体として沈水海岸の特色を示している。埋立てなどの人工造地が進み、海岸線の変貌が進んでいる。

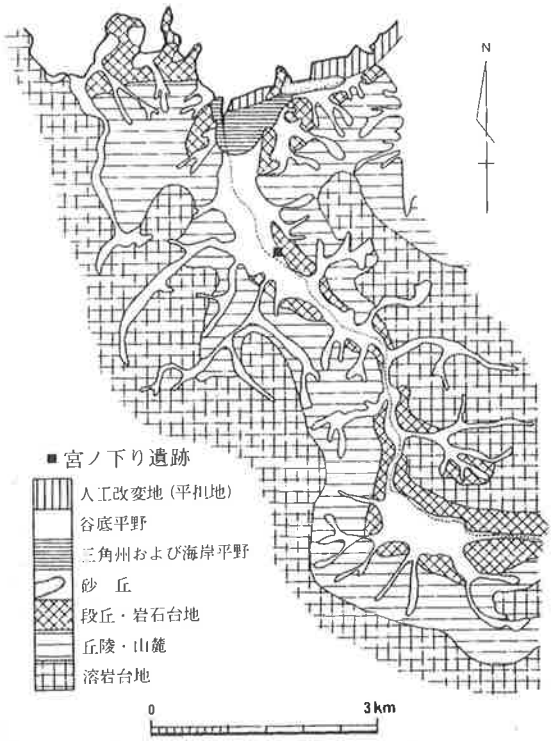
志佐川は市内最大の河川で、最も広い平地をつくり、中心街志佐を支えている。長さ11.5 km、流域面積45.0 km²。佐賀県境の国見山系烏帽子岳西麓に源を発し、深い谷を穿って北および西へ流れ、市域に入って長野の小盆地をつくる。笛吹からは再び細い谷底となり、河道も北へ転じる。落合川を合流して広い沖積地となり、河口部は三角洲となっている。概して河谷は直線状で、断層線に制約されていることを示している。第2図に志佐川中流以上の地形分類図[註④]を示した。志佐川は、溶岩台地を切って流れ、両岸に第三紀層の丘陵・山麓と河岸段丘とが発達している。左岸には標高100〜200mの丘陵が広い。河岸段丘は比高数mから60mまで2〜3段みられ、それぞれ遷急点に対応しており地形発達が窺われる。多くの支流が樹枝状にみられるが、



第1図　松浦市内地質図

いずれも短く、急流である。

宮ノ下り遺跡は、志佐川右岸の南北に細長い沖積低地を主体とし、A～E地区に区分される。標高5～15mほどを計る。東には里・高野・赤木集落ののる段丘地形が連なり、遺跡主体部とは明瞭な段丘崖で区分される。西岸の栢木・庄野にも段丘面がみられる。東岸の段丘面には、縄文時代の久保園遺跡、その北には志佐城（陣の内城）跡があり、西岸（左岸）の段丘面には、弥生時代の栢木遺跡や堂山古墳がありこの地形面が古くから主要な生活舞台として利用されたことを物語っている。



第2図　遺跡周辺の地形分類図

かつて志佐川はかなり奥まで船の遡航が可能で、遺跡の北西に当る庄野免深町には鎌倉時代まで船が入港していたという。遺跡南方の高野橋まで海水が湾入していたとされ、赤木免には潮見鼻という地名も残っている。[註⑤] 従って、遺跡が営まれたころは志佐川は現在より幅広く、三角江状に湾入があって遺跡の近くに船が着岸できたようである。その後の旺盛な土砂の運搬・堆積や江戸時代の新田造成とがあって現在の広い低平地が形成されたと考えられる。さらに志佐川下流部はかつては河道が分流しており、二又川となっていたという。遺跡のすぐ南で分流し、高野の段丘崖下を洗うように流れて市役所方面へと向うものと、現在の流路とがあったという。前者は今も丹花橋をつくる小流として残っており、本遺跡発見の契機となった排水路へとつづき、遺跡東側の細長い凹部となって終っている。宮ノ下り遺跡はこの二又川を形成していた志佐川の中洲状の微高地に立地しており、A・E地区は旧流路に接している。遺跡中央部のC地区から検出された住居跡や石棺墓などの遺構面からは、顕著な洪水性堆積物がみられなかった。両岸の段丘面から離れて低位の氾濫原に構えられた本遺跡は、往時の地形と水を利用し、また、水からも守れる地にあったと考えられる。近年沖積低地に立地した遺跡の調査例が県内でも増加しており、そのひとつとして貴重な遺跡である。

註．①③　昭和63年12月末現在

②　長崎県（1987）長崎県統計年鑑　第34版

④　長崎県（1974）土地分類基本調査「平戸」「佐世保」5万分の1

⑤　松浦市史編纂委員会（1975）松浦市史

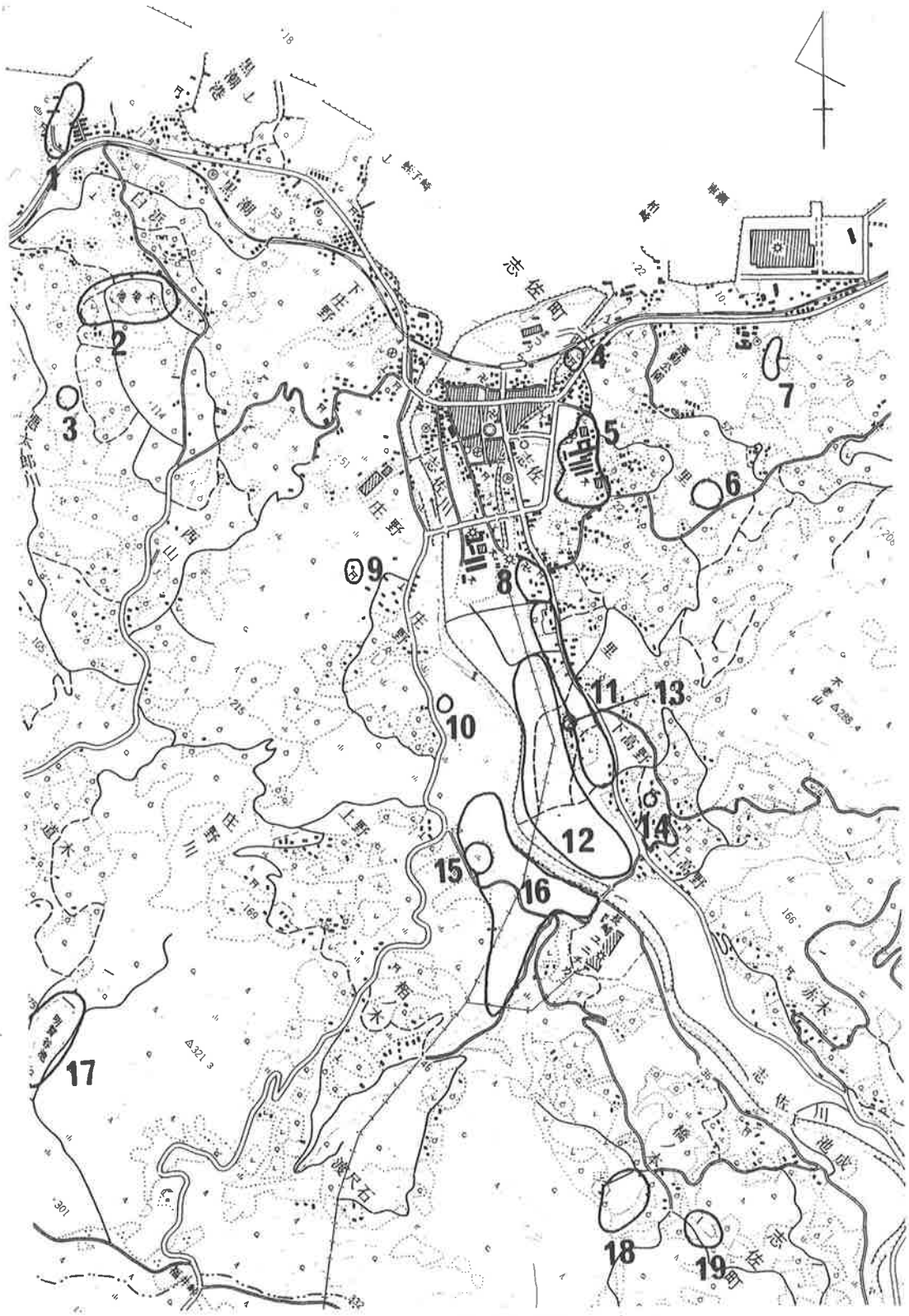
2. 歴史的環境

松浦市を含む西北九州の唐津市から北松浦郡・平戸・佐世保市の地域には、旧石器時代から縄文時代にかけての多くの遺跡が確認されている。なかでも福井洞窟、泉福寺洞穴遺跡などは土器始源期の指標と問題点を提起している。

宮ノ下り遺跡周辺の旧石器時代の遺跡では、昭和40年代頃から注目された辻ノ尾遺跡（第3図5）・明賀谷遺跡（第3図17）があるが、どちらも採集遺物による。辻ノ尾遺跡は、志佐川右岸の標高約20mの台地先端に位置するが、現在は松浦高校・志佐中学校の校庭になっており、わずかに高校体育館北側に包含層が認められる程である。[註1] 遺物にはナイフ形石器、三稜尖頭器、舟底形細石核、細石刃等が採集されている。昭和63年度の志佐中学校改築工事に伴う確認調査でも包含層の確認はできなかった。しかし、攪乱層からの遺物には、舟底形細石核、細石刃とともに12世紀から14世紀にかけての輸入陶磁器の白磁・青磁等も出土している。明賀谷遺跡は、第三紀層と玄武岩の地質境界からの湧水でできた明賀谷溜池の周辺に所在する。志佐川の支流である庄野川はこの池に源を発しており、標高は約250m程である。遺物には、ナイフ形石器、石核、彫刻刀形石器、尖頭状石器等がある。[註2] そのほかの遺跡では、楼楷田遺跡（第3図1）寺田遺跡（第3図7）がある。楼楷田遺跡は、伊万里湾に面した海岸段丘先端部の標高7～16mの階段状を呈す水田部に位置していたが、昭和57年から59年にわたり松浦火力発電所建設に伴って発掘調査を行い、現在は消滅している。出土遺物には、ナイフ形石器、台形石器、剥片尖頭器、角錐状石器、彫器、舟底形細石核と出土量は多くないが貴重な資料が検出されている。

縄文時代では、前述の楼楷田遺跡から縄文中期の住居跡に伴う炉跡が1基検出されている。出土遺物には、土器では早期の無文土器、前期の曽畑式土器、中期の有孔土製品・阿高式土器、晩期の浅鉢。石器では石鏃（鍬形鏃・局部磨製鏃・剥片鏃・鋸歯鏃）、ピエス・エスキーユ、異形石器、尖頭状石器、スクレイパー、石製有孔円板、玉、十字形石器、石核、剥片、磨製石斧、扁平打製石斧、磨石、石皿、砥石と多種にわたる遺物が検出されている。[註3] そのほかでは、散布地として大堤遺跡（第3図2）、辻ノ尾遺跡（第3図5）、寺田遺跡（第3図7）、久保園遺跡（第3図11）、明賀谷遺跡[註9]（第3図17）、池成池遺跡（第3図18）、矢櫃池遺跡（第3図19）があげられる。

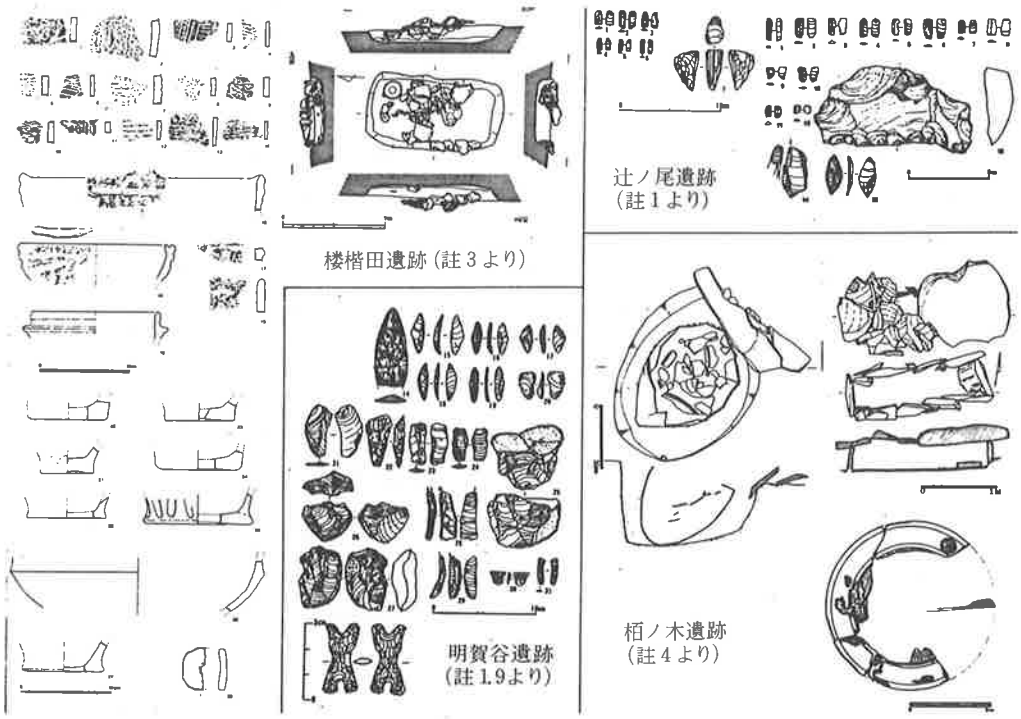
弥生時代の遺跡では、抉入片刃石斧と中期中葉以降の土器が検出された楼楷田遺跡（第3図1）と、昭和45年秋水田畦畔改修工事に際して発見された栢ノ木遺跡（第3図16）がある。遺跡は志佐川の左岸、宮ノ下り遺跡より約300m南西の標高30mに位置する。昭和46年3月に緊急発掘調査を行った結果、箱式石棺墓3基、甕棺墓3基が検出された。この調査は遺跡の一部にすぎず一帯には相当数の埋葬遺構が包蔵されている可能性が高い。第1号石棺は通常の箱式石棺とは形状が異なり支石墓の可能性も指摘されている。第2号石棺の棺内には枕石状の板状石があり管玉2個、ガラス小玉約350個のほかに内行花文鏡片が検出されている。第1号甕棺からも管玉が出土している。[註4] 3基の甕棺の時期は前期末に属する。この栢ノ木遺跡は松浦市の弥生



第3図　周辺遺跡分布図（$\frac{1}{25,000}$）

第１表　周辺遺跡地名表

	名　称	所　在　地	時　代	出土遺物など	遺跡地図番号	備　考
1	楼楷田遺跡	松浦市志佐町白浜免楼楷田、日前	旧石器～鎌倉	ナイフ形石器、台形石器、縄文土器、石斧石鏃、白磁、青磁、石鍋、土師器など	8－33	昭和57～59年調査
2	大堤遺跡	〃　〃　〃　白浜、猿喰	縄　文	石鏃、剥片	8－31	
3	皿山窯跡	〃　〃　〃　京地	江　戸	磁器、トチン、ハマ、ナンキン、五連房式登窯	8－32	昭和56年調査
4	淀姫神社遺跡	〃　〃　浦免宮ノ前	古　墳	須恵器、人骨		明治16年発見
5	辻ノ尾遺跡	〃　〃　〃　辻ノ尾	旧石器～鎌倉	ナイフ形石器、台形石器、細石刃核、石鏃、白磁、青磁	8－76	昭和63年調査
6	観音寺跡	〃　〃　里免観音寺	室　町			
7	寺田遺跡	〃　〃　浦免寺田	旧石器～縄文	細石器、剥片	8－24	
8	陣ノ内城跡	〃　〃　里免陣ノ内	室　町	土師器	8－26	
9	王嶋遺跡	〃　〃　庄野免小楠	室　町？	石壷（2点）、石板（2枚）	8－30	市指定有形文化財
10	庄野の六地蔵塔	〃　〃　〃　島田	安土・桃山	天正14年銘（1586）		県指定有形民俗文化財
11	久保園遺跡	〃　〃　里免久保園 高野免松山、角	縄　文	剥片	8－25	
12	宮ノ下り遺跡	〃　〃　高野免宮ノ下り、田原、三十六　里免砂入	旧石器～鎌倉	本書	8－79	昭和61～63年調査
13	懸仏	〃　〃　高野免松山	室　町	天文４年銘（1535）		市指定有形文化財
14	高野の六地蔵塔	〃　〃　〃　堤田	安土・桃山	天正12年銘（1584）		
15	堂山古墳	〃　〃　栢木免高尾ノ本	古　墳		8－28	
16	栢ノ木遺跡	〃　〃　〃　小久保	弥　生	内行花文鏡、管玉、ガラス製小玉、甕棺、石棺	8－27	昭和46年調査
17	明賀谷遺跡	〃　〃　〃　明賀谷	旧石器～縄文	ナイフ形石器、台形石器、尖頭器、石鏃	8－29	
18	池成池遺跡	〃　〃　池成免橋本	縄　文	剥片	8－23	
19	矢櫃池遺跡	〃　〃　〃　池成	縄　文	石鏃、剥片	8－22	



第４図　周辺遺跡出土遺物

文化を解明する上でも非常に重要な遺跡である。

古墳時代の遺跡では、明治16年（1883）に淀姫神社内発見の石棺の報告がある（第3図4）。砂岩をくりぬき横1m、縦2m、深さ1mあり底に玉石を敷き、鉄片・人骨・土器等が出土したとある。[註5] 淀姫神社は神功皇后の妹の淀姫命と景行天皇・豊玉姫命が祀られている。古来より由緒正しき神社とされており、多くの伝説も残っている。欽明天皇24年の創建である。そのほかでは詳細は不明であるが、刀が出土したという堂山古墳[註6]（第3図15）がある。

古代末期においては、国司・郡司の横暴による治安の乱れ、また、寛仁3年（1019）の刀伊の来寇に代表される異民族の侵入等に対して国家は対応策を施すことができなかった。このため人々は独自の自衛力を備えるようになった。このような背景から出現したのが武士である。本県の豪族的領主として松浦氏がいる。松浦氏は源氏姓で、一字名を名乗っているのが特徴で、それぞれ割拠した本拠地の名称をもって姓としている。松浦氏の出自については、江戸時代に著わされた平戸松浦氏の家譜である『松浦家世伝』によると延久元年（1069）源久が摂津国渡辺荘から肥前国松浦郡志佐郷今福に下向し、松浦氏の祖となったとある。しかし、最近では、刀伊の賊が松浦地方に侵入した時、これを撃退した武士に前肥前介源知という人物がいたことが『小右記』に見える。この源知こそ松浦氏の祖ではないかと注目されており、源久以前に松浦一族の祖がこの地方に土着し、豪族的領主に成長していたことになる。源久の後は直が所領を譲り受けている。直の後は清が御厨氏を、次男栄は有田氏を、三男遊は大河野氏を開いている。いずれにしても平安末期になると横の共和的に連合するというあり方で、庶子独立化の傾向が認められ、他の庶子が惣領の支配に従うといった現象は認められない。平安末期・鎌倉初期の武士団は、その一族を率いる惣領の名が文献に記されるのが常であるが、松浦氏の場合は惣領に相当する人物が認められず、松浦党としてその一族の集団を包括した概念で呼ばれている。この松浦党と呼ばれる集団は、大陸との交渉も頻繁で、海外渡航も盛んであった。藤原定家の日記『明月記』には、「鎮西の凶党～松浦党と号す～数十艘兵船を構え、高麗国の別島に行き合戦して民家を滅亡させ、資財を掠め取る」とあるように、後世の倭寇的活動の常習者でもあったようだ。『有浦文書』に文暦2年（1235）の「いわひろの尼譲状」がある。いわひろ尼は御厨清の妻とみられ、清の遺領を子供たちに配分したのがこの譲状と考えられる。この中に志佐の浦の田、志佐浦の園、志佐銀杏が浦流し作り田などの地名がある。

志佐地方が本格的な武士社会を迎えるようになったのは、松浦直の子清の二男貞からで、『山代文書』寛元2年（1244）当時に志佐六郎貞がみえ、実在が裏付けられる人物である。以後、志佐氏を名乗る人物で、元寇の来襲の時に御家人として戦った貞の嫡子継、継の嫡子の志佐小次郎祝などがいる。継は弘安8年（1285）有田深、山代栄とともに御厨の地頭20数名を代表して訴訟のため鎌倉に赴いている。このことからすれば志佐氏は松浦一族の中でも重要視されていたことがわかる。志佐氏は陣ノ内城（第3図8）に居し、北松浦郡吉井町福井にある直谷城を本城とし陣ノ内城を出城として対鮮貿易に着手していることから、陣ノ内城が海外発展の基

地としての役割を持っていたのであろう。現在では志佐氏の菩提寺である寿昌寺の境内が陣ノ内城跡の中心で、標高約10 *m* の段丘上にある。現存する空堀や土塁、地形からして城跡というよりも地頭当時の館跡とみるべきであろう。志佐小次郎祝の子の志佐三郎有、及びその子志佐小次郎定の親子は延文4年（1359）の筑後川の戦に小弐頼尚軍に加わって出陣したが、菊地軍に敗れ、2人共戦死している。このころの遺跡として複合遺跡である前述の楼楷田遺跡（第3図1）がある。遺跡の主体をなすのは13世紀をピークとする12世紀から14世紀に至る中世の遺構・遺物である。遺構には無数の掘建柱柱穴群と鉄滓が多量に出土するたたら状遺構、集石土壙がある。また、幅約1 *m* に礫を集め遺跡の中央部を縦断する形で検出された道路状遺構は全長が130 *m* にもおよんでいる。遺物では、中国産の舶載陶磁器が多く、特に龍泉窯系青磁碗と同安窯系の青磁碗・皿、白磁の碗・皿などが多い。少量ではあるが朝鮮産陶磁器の象嵌青磁や粉青沙器などの高麗・李朝のものが含まれる。また、銅銭は開元通寶（初鋳621年）から崇寧重寶（初鋳1102）までの11種12点が出土している。国内産の遺物には東播系須恵質捏鉢、亀山焼系の甕、土師器碗・皿、土錘、石鍋、再加工の滑石製石錘・バレン状滑石製品などがある。[註7]

南北朝から室町期にかけては松浦氏一族間で一揆が結ばれており、地域支配の体制を強化している。『山代文書』の永徳4年（1384）の下松浦一族一揆契諾状には、「＜しさ＞壱岐守調」「＜しさのしらはま＞白浜後家代弘」の名が見える。調は志佐小次郎定の子である。また、『青方文書』にも「＜しさ＞壱岐守調」、「＜しさのしらはま＞白浜後家代弘」、「＜しさのまつお＞石見守信」の名が見える。室町期に入ると、志佐氏は、盛んに朝鮮に使者を送り、貿易を行っている。志佐氏は、鎌倉時代以来、壱岐にも所領をもち、真弓氏を代官として知行にあたっていた。調の子の志佐源重は世宗3年（応永28年、1421）から遣使し、世宗9年に図書を受け、同13年まで通交している。そして重の子の志佐源義の代に入ると、一層その貿易を推進している。文宗即位年（宝徳2年、1450）遣使して受図書人となり、燕山君10年（永正元年、1504）までの54年間に頻繁な通交を行っている。対鮮貿易に進出した松浦党の中でも最も通交回数が多い。義の子の純勝は、高来郡の有馬貴純と共に、箕坪城の平戸松浦正を攻撃し、正は筑前に奔った。ところが明応年間（1492～1501）に純勝は突然大村・竜造寺両氏より襲われ五島に逃れたが討たれた。純勝の子松房・徳房は有馬氏の下に一時寄属している。こうして志佐氏は本拠を追われたため、同じく松浦党の峯昌が志佐氏を相続して、新たに志佐純元と名乗り、直谷城主となっている。鎌倉以来の志佐氏は滅び、峯氏系志佐氏の時代へと推移することになる。

また、中世の遺物として王嶋神社の洞穴に納められていた滑石製石壷もある（第3図9）。さらに天文4年（1535）銘の懸仏（第3図13）と六地蔵塔が庄野（第3図10）、高野（第3図14）にある。王嶋神社の石壷（高さ30 *cm*、口径21 *cm*）には外面に墨書の文字（経文）が書かれてあり、経壷として製作されたものと思われる。懸仏（径34 *cm*）は木版で、中央に阿弥陀如来坐像を、左右に花びんをそなえ、下方に波文が彫ってある。裏面には墨書きによる縦書きで銘文がある。庄野の六地蔵塔（高さ1.5 *m*）は龕部に2段7仏、竿正面に「逆修」、裏側に「干時

天正十四年丙戌十月吉日一会講衆」と陰刻されている。これは松尾安房守の供養塔と思われる。高野の六地蔵塔（高さ 2.7 m ）は中台をはさんで龕部が上下２段の各２段に各12仏の計48仏が肉彫りしてある。竿正面に「逆修」、左に「干時天正十二年十一月吉日」とある。上位の中台には梶の葉と思われる紋様がめぐらされている。一方、残存する五輪塔群と地名との関係から観音寺跡（第３図６ ）の存在が求められる。

近世における遺跡としては皿山窯跡[註8]（第３図３ ）がある。窯跡は悪太郎川の河口より約800 m 上流の右岸に位置し、昭和56年にダム建設に伴う調査が駒沢大学によって行われている。調査の結果、窯は全長18 m、最大幅 5.6 m ある五連房式登窯であることが確認された。出土品には磁器と窯道具2,812 個があり、磁器のほとんどは染付で笹・野草の植物の絵・網目などの文様をもつ茶碗であった。

このように、弥生時代以降の主要な遺跡が、志佐川沿いに集中した分布を示すのは、沖積地における農業生産と深く関係しているのであろう。また、海路交渉の地として重要であったのであろう。

註１　下川達彌　「長崎県松浦市域における旧石器時代遺跡」　『長崎県北松浦地方の文化』　長崎県立美術博物館　1984

註２　芝本一志・下川達彌　「伊万里湾沿岸における無土器文化」　『古代学研究 46 』 1966

註３　安楽　勉・中田敦之編　『楼楷田遺跡』　長崎県文化財調査報告書第76集　長崎県教育委員会、松浦市教育委員会　1985

註４　正林護　『栢ノ木遺跡（中間報告）』　松浦市教育委員会　1973

註５　松浦市史編纂委員会　『松浦市史』　1975

註６　松浦市埋蔵文化財包蔵地カード　長崎県教育委員会　1982

註７　註３に同じ

註８　倉田芳郎編　『長崎・松浦皿山窯址』　松浦市教育委員会　1982

註９　力武一成・正林　護　「松浦市明賀谷遺跡出土の異形石器」　『長崎県の考古学〔Ⅰ〕』　長崎県考古学会　1979

参考文献

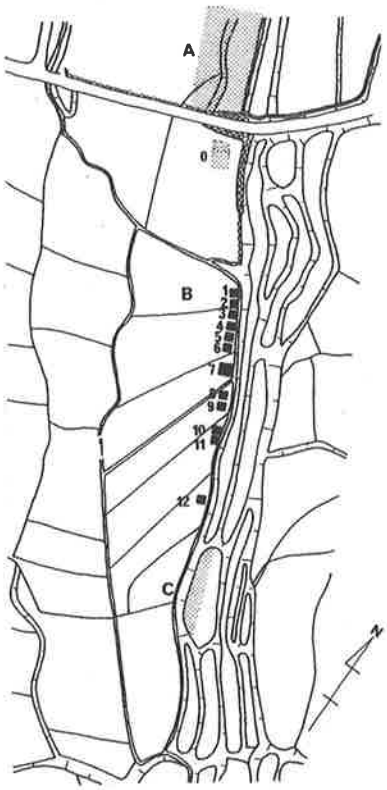
1. 長崎県史編集委員会　『長崎県史』―古代中世編―　1980
2. 外山幹夫　『松浦氏と平戸貿易』　国書刊行会　1987
3. 中田敦之　『松浦市の文化財』　松浦市文化財調査報告書第２集　松浦市教育委員会　1987
4. 角川日本地名辞典編纂委員会　『角川日本地名辞典』―42 長崎県―　角川書店　1987

Ⅲ　調　査　の　概　要

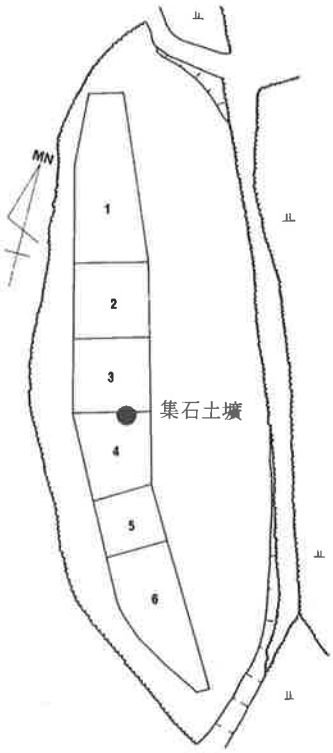
1.　第１次調査の概要（第５図・第６図）

調査は、先ず試掘調査を実施して、遺跡の範囲と土層の状況を確認することを目的とした。排水路工事計画図に基づいて削平される部分の上流域の標高約９ ｍの水田部分と標高約12ｍの階段状の水田部を対象とした。なお、工事中発見した地区をＡ地点とし、その南側にＢ地点、Ｃ地点を設定した。Ｃ地点は包含層が確認されたため緊急調査に切り替えた。発掘調査を実施した面積は、Ｂ地点58㎡、Ｃ地点61㎡である。

Ｂ０区を設定した水田は比較的広く、現水田より22㎝下の所に人為的か自然的なものか不明であるが、拳大から人頭大の礫を並べた配石が検出された。配石は人頭大の礫を志佐川方向に配し、拳大の礫を東側に配してあった。配石の西側の灰黒色粘質土より杭群が検出できた。配石の覆土は濁黄褐色粘質土で、量的には少ないが覆土より中世期の輸入陶磁器である青磁55点、白磁46点、国内産土師器46点、滑石片14点とともに近世磁器片17点も出土している。Ｂ１・２・４・７・10・11の試掘壙で少量の遺物が出土したが、いずれも流れ込みの状況であり包含層の検出はできなかった。Ｃ地点では排水パイプが一部埋設されていたが表土層下100～110㎝において遺物包含層及び集石土壙を検出したため、工事区域内の全面調査を行った。調査の便宜上Ｃ１～Ｃ６まで設定した。



第５図　第１次調査区域（$\frac{1}{2,000}$）



第６図　Ｃ地点調査区域図（$\frac{1}{300}$）

2. 第２次調査の概要（第７図）

第１次調査地点の西側の水田部東西約300 m、南北約１ kmの17.4 haが圃場整備地区に計画された。調査は、圃場整備計画が広範囲に至っているため、まず試掘調査を実施して、宮ノ下り遺跡の範囲と土層の状況を確認することを目的として行った。

試掘調査は、志佐川右岸の南から北へ傾斜した標高５ m～13 mの水田部を対象として行った。試掘壙は工事計画図に基づいて削平される部分と１号幹線排水路を中心に設定した。全体の試掘壙は２ m×２ mを基本とし、調査状況に応じて周囲を拡張した。調査区の各名称は設定した順番にＴ１～T68までを付して呼ぶことにした。全体の調査面積は349 ㎡であった。包含層の有無及び検出した遺構については第２表１・２を参照されたし。調査の結果34箇所の試掘壙から縄文時代から中世期までの遺物3,277 点が出土した。第１次調査で行った１号幹線排水路部分の上流域のＴ15より中世の柱穴・包含層、T22では表土下40～140 cmにおいて縄文晩期の遺物包含層が見られた。T24では表土層下の茶褐色土層から多数の柱穴や遺物が良好な状態で出土した。特に標高7.3 m～7.4 mの水田部からはＴ31より古墳時代の箱式石棺１基と柱穴、T32より溝状遺構、T36より古墳時代の竪穴住居跡１基、T38でも竪穴住居跡１基が検出できた。Ｔ43・44で柱穴、T51・52でも中世期の遺物が出土した。これらを総合して遺構・遺物等の検出より圃場整備地区予定内に５箇所延べ37,700㎡に遺跡が分布していることが確認された。将来の調査を考えて南側よりＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅとする。第１次調査で行った１号幹線排水路地点の面積 1,800 ㎡をＡ遺跡、標高９～10.8 m地点の面積 8,400 ㎡をＢ遺跡、中央部の標高 7.3～8.5 m地点の面積13,900㎡をＣ遺跡、志佐川の蛇行により東西幅が狭い部分の標高 5.7～6.7 m地点の面積 9,000 ㎡をＤ遺跡、最も北側の標高 4.8～5.4 m地点の面積 4,600㎡をＥ遺跡と呼称する（各遺跡の面積はプラニメーターから得た数値である)。Ａ・Ｅ遺跡は中世期、Ｂ遺跡は縄文から古墳時代、Ｃ・Ｄ遺跡は古墳時代を中心とする遺跡であると考えられる。年代測定は^{14}Ｃによる２検体を測定した。その結果、２号竪穴住居跡は1760±75 yB.P.、T22の縄文晩期層が4350±85 yB.P. の数値が得られた。

3. 第３次調査の概要（第８図）

第２次調査の試掘調査結果をもとに、文化財の保護と工事の調整に関して数回の協議が特たれ、盛土による設計変更にて回避することで合意となった。しかし、１号幹線排水路部分に関しては設計変更が不可避なため、本調査することになり、1,400㎡の調査面積となった。

本調査は、あらかじめ耕作土を重機により剥ぎ取った後に、グリット方法による５ m×５ mのメッシュに区切って行い、西から東へＡ～Ｅまで、北から南へ向かって１～37の番号を付し、ＡＡ1、ＡＢ1 のように呼称した。調査はまずＡＢ25～ＡＢ37の南側から始め、排土はＡＤ列と西側の圃場整備地区に積み上げた。南側の調査が終了すると随時北側へと移動した。北側の調査区は水田として利用されていたため、石垣が積まれ、切り盛り部分が見られた。そのため東

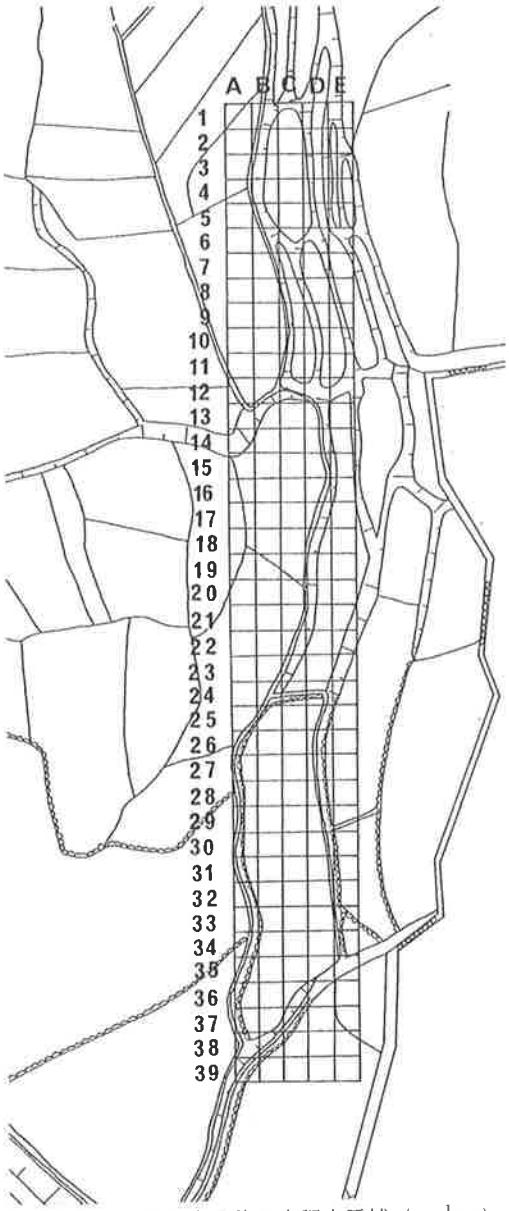
第7図　第2次調査区域（$\frac{1}{3,000}$）

側は土層が薄く、西側の方が厚くなっていた。なお、第1次調査のC地点は、本調査のグリットではAB2～AB5に相当する。第2次調査でT12・13の水田面は各層が埋土で、後世の造成の可能性があるため本調査区域より除外した。調査時における記録措置は、実測図については1/10及び1/20を基本とし、写真撮影も同時に行った。

調査の結果、ほぼ全調査区から中世の遺構・遺物が出土した。南側では多くの柱穴群と遺物が、北側のAE13・14では弥生土器が多数出土した。しかし、調査面積1,400㎡のうちAC8の水田部100㎡の調査が完了しなかったため、翌年度の8月～9月に調査を行った。

4. 第4次調査の概要（第8図）

調査は第3次で終了することができなかったAC8～AC11の100㎡を調査対象とした。面積がせまいため10日間で調査を終了することができた。3次調査同様中世期の遺物が出土したが、遺構の検出には至らなかった。記録措置も実測図は1/10を基本として、写真撮影も行った。なお、第3次調査での北側地区においてと今回の第4次調査での遺物の取上げは、基本土層を中心として、各土層別に行った。したがってAC10－3と呼称するようにした。この説明は、宮ノ下りA遺跡のC10区の3層出土の遺物となる。



第8図　第3次・第4次調査区域（$\frac{1}{1,500}$）

第2表　宮ノ下り遺跡調査区一覧（1）

（旧＝旧石器，縄＝縄文，弥＝弥生，古＝古墳，中＝中世，近＝近世，黒＝黒曜石，安＝安山岩，滑＝滑石
白＝白磁，青＝青磁，土＝土師器，瓦＝瓦器，東＝東播系須恵質揑鉢）

調査区	調査	概要（包含層の有無・検出遺構）	出土遺物
A	1　次	不　明	弥，中（白・青・土・瓦・東），近，黒，安，滑（石鍋）
B－0	〃	列石，杭	弥，中（青・土・瓦），近，黒，安，滑
B－1,2	〃	包含層なし	弥，中（白・青・土），近，滑
B－3	〃	〃	な　し
B－4	〃	〃	弥，中（白・青・土・李朝），黒
B－5	〃	〃	な　し
B－6	〃	〃	な　し
B－7	〃	〃	な　し
B－8	〃	〃	な　し
B－9	〃	〃	な　し
B－10,11	〃	〃	旧，中（白・青・土），黒
B－12	〃	〃	な　し
C－1	〃	包含層あり	旧，弥，中（白・青・土・瓦），黒，安，滑
C－2	〃	〃　ピット	弥，中（白・青・土・瓦・東），黒，安，滑
C－3	〃	集石土壙　ピット	旧，弥，中（白・青・土・瓦・東），黒，安，滑
C－4	〃	包含層なし	旧，弥，中（白・青・土・瓦・東），黒（石鏃），安，滑（石鍋）
C－5	〃	〃	旧，弥，中（白・青・土・瓦・東），黒，安，滑
C－6	〃	〃	旧，弥，中（白・青・土・瓦・東），黒，安，滑
T－1	2　次	包含層なし	な　し
T－2	〃	〃	古（須恵器・土）
T－3	〃	〃	な　し
T－4	〃	〃	な　し
T－5	〃	〃	中（瓦）
T－6	〃	〃	な　し
T－7	〃	〃	黒
T－8	〃	〃	な　し
T－9	〃	包含層あり	旧，弥，中（白・青），黒，滑
T－10	〃	〃	弥，中（青・土・東），近，黒，安
T－11	〃	〃	弥，古（須恵器），中（青・土），黒，安
T－12	〃	包含層なし	中（青），黒
T－13	〃	〃	中（白・土・瓦），黒，安
T－14	〃	包含層あり	弥，中（白・青・土），近，黒，黒（石鏃），安，滑
T－15	〃	〃　ピット	旧，弥，中（白・青・土），近，黒，黒（石鏃），安，滑
T－16	〃	包含層なし	中（青・土）近
T－17	〃	〃	な　し
T－18	〃	包含層あり	中（青・土），近
T－19	〃	〃　ピット	古（土，須）
T－20	〃	包含層なし	な　し
T－21	〃	〃	な　し
T－22	〃	包含層あり	縄，黒，黒（石鏃），安，安（スクレイパー）
T－23	〃	包含層なし	な　し
T－24	〃	包含層あり　ピット	旧，弥，中（青・土・瓦・東），黒，安，滑
T－25	〃	包含層あり	縄，黒
T－26	〃	〃	縄，中（土），近，黒，黒（石鏃）
T－27	〃	〃	な　し
T－28	〃	包含層なし　杭	中（白・青・土・瓦），黒
T－29	〃	包含層なし	な　し
T－30	〃	包含層あり	古（土・須恵器），近，黒，安
T－31	〃	〃　ピット　石棺	古（土，須恵器），黒，安，安（石斧）
T－32	〃	〃　溝	弥，古（土・須恵器），近，黒，安，安（スクレイパー）
T－33	〃	〃	な　し
T－34	〃	〃　ピット	古（土）
T－35	〃	〃　〃	弥，古（土・須恵器），中（白），黒，安
T－36	〃	〃　〃　住居跡	古（土・須恵器）
T－37	〃	〃　〃	弥，古（土・須恵器），近，安
T－38	〃	〃　〃　住居跡	古（土・須恵器），黒，安
T－39	〃	包含層なし	な　し
T－40	〃	〃	な　し
T－41	〃	〃	中（土），近
T－42	〃	〃	中（瓦），近
T－43	〃	包含層あり　ピット	古（土），中（東），近，安
T－44	〃	〃　〃	弥，近
T－45	〃	〃	古（土）
T－46	〃	〃　集石	な　し
T－47	〃	〃	古（土）
T－48	〃	包含層なし	な　し
T－49	〃	〃	な　し
T－50	〃	〃	な　し

第2表　宮ノ下り遺跡調査区一覧（2）

調査区	調査	概要（包含層の有無・検出遺構）	出土遺物
T－51	2次	包含層あり	中（青・土），滑
T－52	〃	〃	古（土），中（青・瓦・東），近，黒
T－53	〃	包含層なし	な し
T－54	〃	〃	な し
T－55	〃	包含層あり	中（青・土），黒，近
T－56	〃	包含層なし	な し
T－57	〃	〃	な し
T－58	〃	〃	な し
T－59	〃	〃	な し
T－60	〃	〃	な し
T－61	〃	〃	な し
T－62	〃	包含層あり	な し
T－63	〃	〃	な し
T－64	〃	〃	な し
T－65	〃	包含層なし	な し
T－66	〃	〃	な し
T－67	〃	〃	な し
T－68	〃	包含層あり	縄，古（土），中（白），黒（石鏃）
AA－26	3次	包含層あり	中（青・土），黒，安，滑
AA－27	〃	〃	旧，弥，中(白・青・土)，黒(石鏃・スクレイパー)，安(スクレイパー)，滑(石鍋)
AA－28	〃	〃	弥，古(須恵器)，中(白・青・土・瓦)，黒(石鏃)，安，滑(石錘・石鍋)
AA－29	〃	〃	縄，弥，古(須恵器)，中(白・青・瓦・土・東)，黒，黒(石鏃)，滑(石鍋)
AA－30	〃	〃	弥，古（須恵器），中(白・青・土・瓦・東)，黒，黒(石鏃)，安，滑，滑(石鍋)
AA－31	〃	〃	弥，古(須恵器)，中(白・青・土・瓦)，黒，黒(石鏃)，安，滑，滑（石鍋）
AA－37	〃	〃	中（白，土，瓦），黒，近
AB－24	〃	包含層あり　ピット	古（須恵器），中(白・青・土・瓦)，近，黒，安，滑(石鍋)
AB－25	〃	〃　〃	弥，中(白・青・土・瓦・東)，黒，黒(石鏃)，安，滑，滑(石鍋)
AB－26	〃	〃　〃	縄，弥，古(須恵器)，中(白・青・土・瓦)，黒，黒(石鏃)，安，滑，滑(石鍋・石錘)
AB－27	〃	〃　〃	縄，弥，古(須恵器)，中(白・青・土・瓦)，黒，黒(石鍋)，安，滑，滑(石鍋)
AB－28	〃	〃　〃	縄，弥，中(白・青・土・瓦)，黒，黒(石鏃)，安，滑(石鍋)
AB－29	〃	〃　〃	縄，弥，古(須恵器)，中(白・青・土・瓦・東)，黒，黒(石鏃)，安，滑，滑(石鍋)
AB－30	〃	〃　〃	縄，弥，中(白，青，黒，土，瓦)，黒，黒(石鏃)，安，滑，滑(石鍋)
AB－31	〃	〃　〃	縄，弥，古(須恵器)，中(白・青・土・瓦・東)，黒，黒(石鏃)，安，滑，滑(石鍋)
AB－32	〃	〃　〃	弥，古（須恵器），中(白・青・土・瓦・東)，黒，安，滑(石鍋・石錘)
AB－33	〃	〃　〃	弥，古(須恵器)，中(白・青・土・瓦・東)，黒，安，滑，滑(石鍋)
AB－34	〃	〃	弥，中(白・青・土・瓦・東)，安，黒，滑，滑(石鍋・石錘)
AB－36	〃	〃	弥，中(青・土)，黒
AC－1	4次	包含層あり	弥，中(白・青・土)，黒，安，滑
AC－2	〃	〃	弥，古(須恵器)，中(白・青・土)，黒，安，滑
AC－3	〃	〃	弥，中(白・青・土・瓦)黒，安，滑，石皿
AC－4	〃	〃	弥，中（白・青・土・瓦・東），黒（石鏃），黒，安，滑
AC－5	〃	〃	弥，中（白・青・土），黒，安，滑
AC－7	〃	〃	弥，古（須恵器），中（白・青・土），黒（石鏃），黒，滑（石鍋）
AC－8	〃	〃	弥，古(須恵器)，中(青・瓦)近，黒(石鏃)黒，安，滑（石鍋）
AC－9	〃	〃	弥，古（須恵器），中（白・青・土・瓦），黒，安，滑（石鍋）
AC－10	〃	〃	旧，弥，古(須恵器)，中(白・青・土・瓦)，近，黒（石鏃）安，滑（石鍋）
AC－25	3次	包含層あり　ピット	弥，古（須恵器），中（白・青・土・瓦），黒，黒（石鏃），安
AC－26	〃	〃　〃	縄，弥，古（須恵器），中（白・青・土），黒
AC－27	〃	〃　〃	旧，弥，古（須恵器），中(白・青・土・瓦)黒(彫器），黒，安，滑
AC－28	〃	〃　〃	弥，中（白・青・土・瓦）
AC－29	〃	〃　〃	弥，古，中（青・土），安
AC－30	〃	〃　〃	弥，中（青・土・瓦），黒，安
AC－31	〃	〃　〃	中（白・青・土），黒，黒（石鏃），安
AC－32	〃	〃　〃	弥，中（白・青・土），黒，黒（石鏃），安，滑，滑（石鍋）
AC－33	〃	〃　〃	弥，古（須恵器），中（白・青・土・瓦），黒，黒(石鏃)，安，滑，滑(石鍋)
AC－34	〃	〃　〃	弥，古（須恵器），中（白・青・土・瓦・東），黒，黒（石鍋），安
AD－7	4次	包含層あり	弥，古（須恵器），中（白・青・土・瓦・東），黒，安，滑(石鍋)
AD－8	〃	〃	弥，古（須恵器），中（白・青・土・瓦・東），黒，安，滑(石鍋）
AD－9	〃	〃	弥，古（須恵器），中（白・青・土・瓦・東），近，黒（石鏃），黒，滑(石鍋)
AD－10	〃	〃	旧，弥，古（須恵器），近，黒，安，滑（石鍋）
AD－11	〃	〃	弥，中（白・青・土），黒，安，滑（石鍋）
AD－33	3次	包含層なし	な し
AD－34	〃	包含層あり	弥，中（土），黒，安
AE－11	4次	包含層あり	中（白・青），黒
AE－12	〃	〃	な し
AE－13	〃	〃	弥，古（須恵器），中(白・青・土・瓦)，黒(スクレイパー)，黒，滑(石鍋)
AE－14	〃	〃	弥，古（須恵器），中（白・青・土・瓦），黒・安・滑（石鍋）

Ⅳ　土層及び検出遺構・遺物

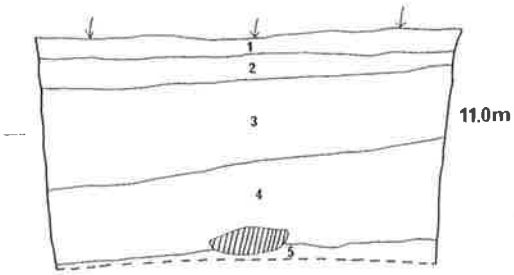
第１次～第４次調査において総数約30,000点余りの遺物が出土した。時代別に見ると、旧石器時代の石器、縄文時代の土器・石器、弥生時代の土器・石器、古墳時代の古式土師器・須恵器、中世の国内産土器・輸入陶磁器・石鍋、近世の陶磁器が出土している。特に注目されるのが古式土師器と多くの中世の遺物であろう。

土層及び検出遺構・遺物の説明に入る前に中世の遺物の形態分類について説明をしておく。輸入陶磁器は、森田・横田氏による分類、山本氏分類、上田氏分類により行った。土師器は、前川氏分類、森田氏分類により行った。石鍋は、森田氏分類に本遺跡の資料を加えて行った。

1.　第１次調査における土層及び検出遺構・遺物（第９図～第21図）

Ｂ地点の調査区を通してみると次の４層に区分できる。１層は現水田の耕作土で15㎝前後の厚さである。２層は暗灰褐色粘質土層で10～15㎝の厚さがある。３層は灰色礫層、礫は円礫で上部に小さな礫を下部に拳大の礫がある。25㎝前後の厚さであるが、Ｂ２試掘壙においては灰青色を呈す。４層は灰色砂層で部分的に礫を含んでいる所もある。Ｂ５試掘壙では５層に黄橙色礫層、６層に灰色礫層とつづいている。遺物は２層と３層中より若干出土しているが、Ｃ地点あるいは東側の階段状の水田部からの流れ込んだものと思われる。

Ｃ地点では次の５層に区分できる。１層は現水田の耕作土で10㎝前後の厚さである。２層は灰褐色粘質土層で、上部には鉄分が沈澱しているためか固くしまっている。段丘先端部にそって傾斜しており５～20㎝の厚みがある。３層は暗茶褐色粘質土層で、小さな玄武岩風化礫と若干の炭化物を含んでいる。北側が厚く40～50㎝ある。４層は暗褐色粘質土層で、３層と同じく礫を含んでいる。厚さは50㎝前後である。５層は灰色粘質土層で、粘性が強く玄武岩風化礫を含んでおり地山である。遺物は２～４層中より中世の遺物に、旧石器から弥生時代の遺物が混在した状況で出土した。

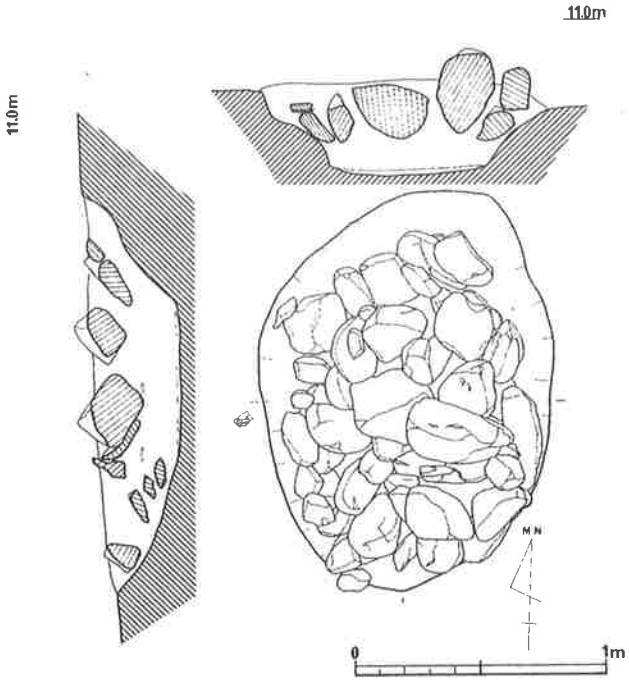


第９図　Ｃ６北壁土層図（$\frac{1}{40}$）

検出した遺構は、Ｃ3・Ｃ4にまたがって集石土壙１基がある。遺構は拳大から人頭大までの礫を花弁状に敷きつめてあり一見縄文時代の集石炉跡を思わせたが、礫は東西１ｍ、南北1.4ｍ内にまとまってあり、中央の礫下より歯と、それよりやや南側では骨片が検出できたが、腐蝕が著しく性別・年齢等については不明である。検出土層は４層上部～下部に位置し、中世期の所産であろう。土壙内の出土遺物は、黒曜石製石鏃１点、弥生土器13点、土師器１点、黒曜石剥片４点、安山岩剥片４点であった。土師器は細片のため時期等は不明である。Ｃ2・Ｃ3より直径25㎝前後の柱穴２個も検出された。検出土層は３層で４層に切り込んでいた。これも中

世期であろう。

A地点の排土中よりの遺物及び掘削工事壁面よりの遺物とB・C地点の遺物は4,639点である。A地点より採集した遺物は422点、B地点より出土した遺物は353点である。C地点からは3,864点が出土している。そのうち108点を図示した。**1**～**40**、**53**、**54**、**56**～**61**はA地点の資料で、**41**～**52**、**55**、**62**はB地点の資料である。**63**～**171**はC地点の資料である。先にA・B地点の遺物について説明を行う。

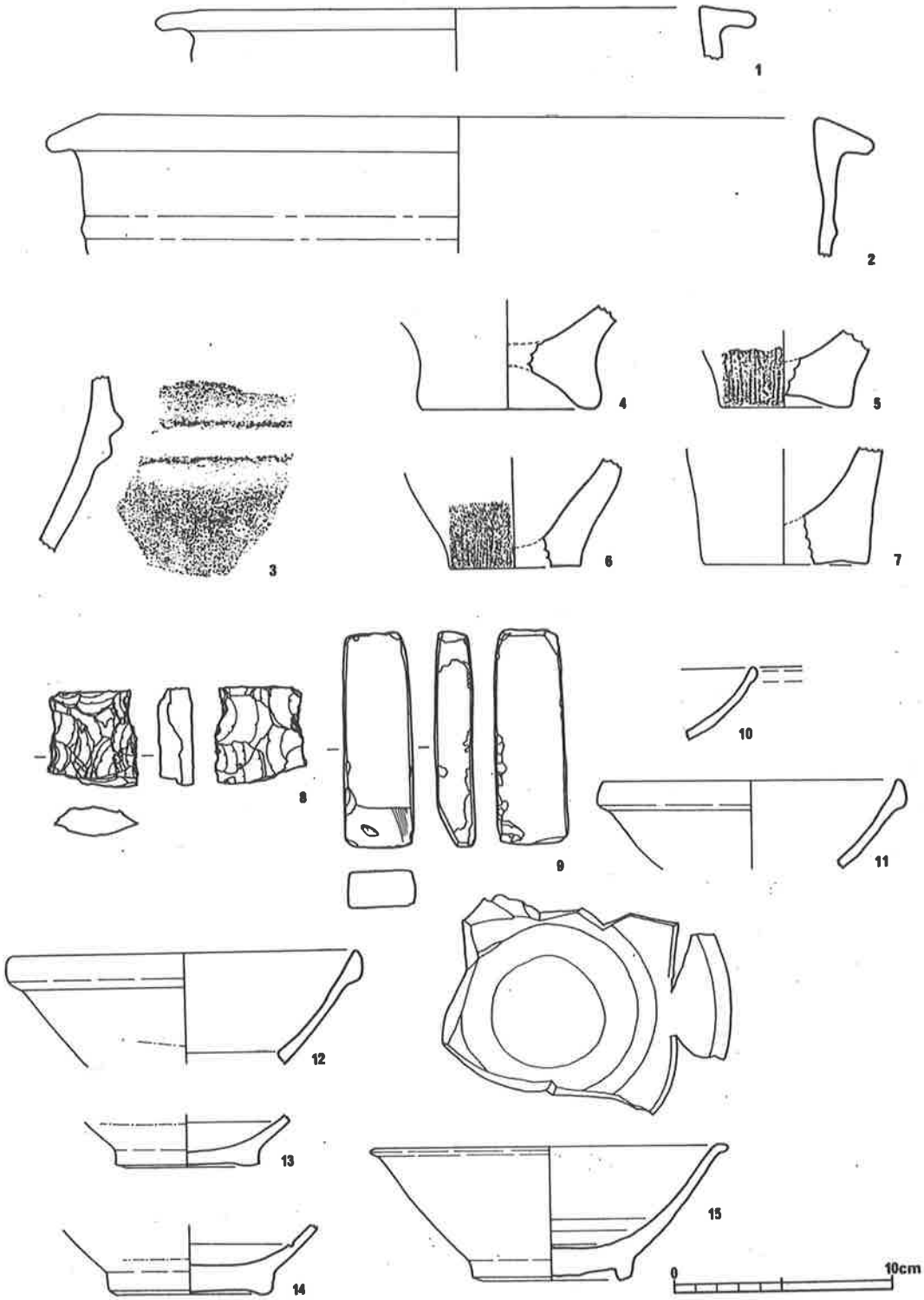


第10図　集石土壙実測図（$\frac{1}{30}$）

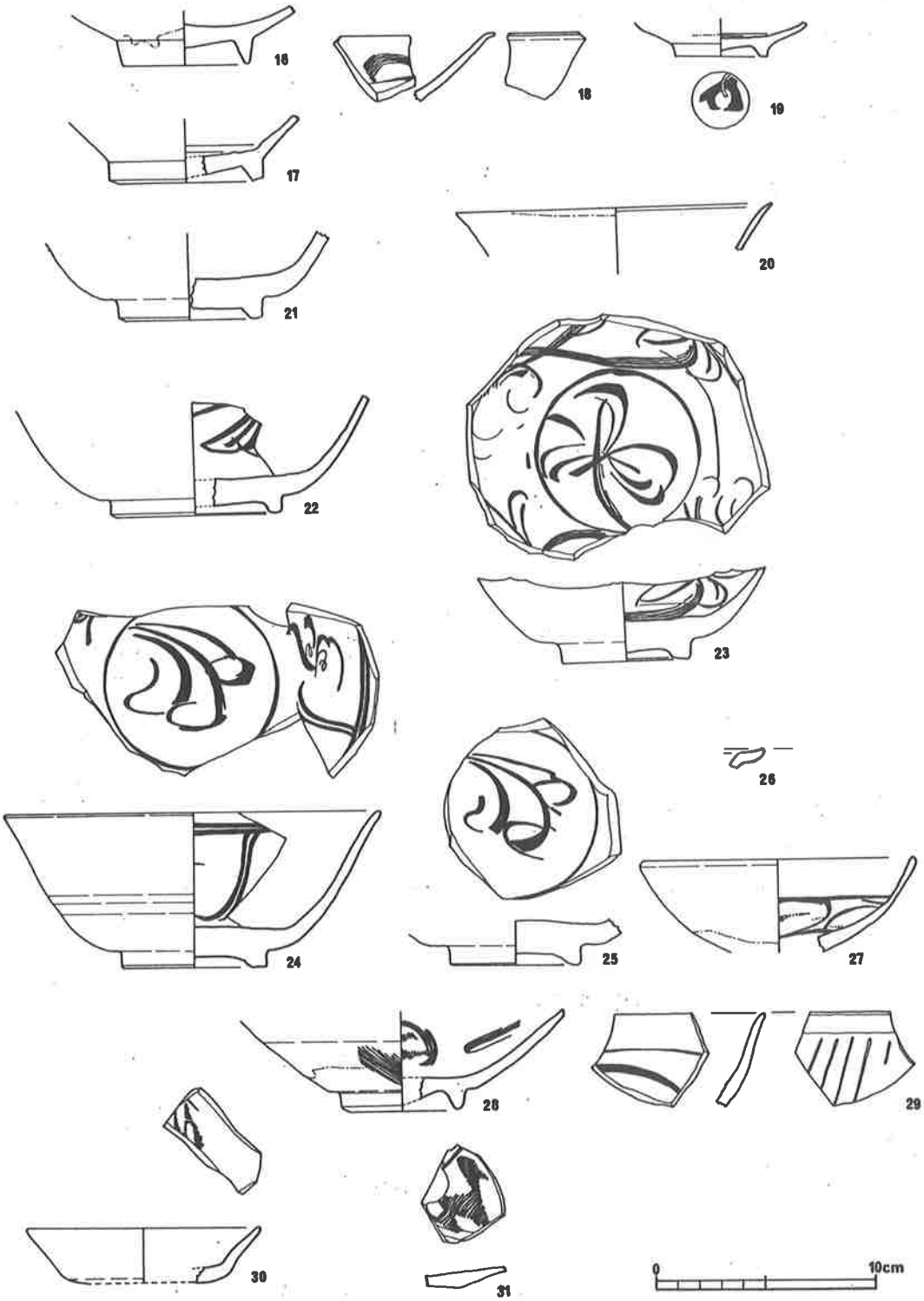
1～**7**は弥生中期の甕形土器の口縁部及び底部である。**1**・**2**は逆L字状口縁をもちやや下がり気味で、内外とも丸くおさめている。**2**には三角突帯貼り付けが1条めぐる。**3**は2条の三角突帯がある。**4**・**5**は中期初頭～前半代の底部で、**4**は上げ底で、**5**はハケ目による調整痕が残る。**6**・**7**も底部で、**6**はハケ目調整痕あり。**7**は立ち上がりが直線的である。**8**・**9**は石器で、**8**は安山岩製スクレイパー、**9**は淡青灰色砂岩製の扁平磨製片刃石斧である。表裏両側辺とも丁寧に研磨されている。使用による刃こぼれがある。**4**・**5**・**9**は工事壁面より採集。

10～**63**は中世期の遺物で、**10**～**20**は白磁、**21**～**26**は龍泉窯系青磁、**27**～**31**は同安窯系青磁、**32**～**38**は国内産土器である。**41**～**52**はB地点の資料で、**41**～**43**は白磁、**44**～**47**は龍泉窯系青磁、**48**～**50**は同安窯系青磁、**51**～**52**は国内産土器である。**53**～**61**は滑石製石鍋である。

10は口縁部に小さい玉縁をもつ碗でⅡ類に属する。**11**～**14**は口縁部を玉縁にする碗Ⅳ類で、**11**は灰黄色の釉で口径13.4㎝、**12**は乳白色の釉で15.8㎝を測る。**12**～**14**は沈線状の段を有する。**15**・**17**は見込みの釉を輪状にカキ取ったⅧ類の碗である。**15**の釉は乳白色で胎土は灰白色である。口径16.4㎝、器高6.15㎝を測る。高台に重ね焼きの跡がある。**16**・**18**はⅤ類の碗で、**16**は細くて高い高台を有し、**18**の口縁部は外反させ端部を水平にしている。内面に櫛で花文を描いている。**19**は内底見込みの釉を輪状にカキ取った皿のⅢ類にあたる。高台見込みには墨書がある。**20**は口縁部に釉がかからない口禿の碗でⅨ類に相当する。**21**は内外 面無文の碗1類である。**22**は内面に蓮華文を横から見た文様を入れている碗である。釉は深緑色を呈す。**23**も蓮華文を片彫りしている。濁緑色の釉を呈す。**24**は2本の沈線によって体部内面を分割し、その中に飛雲文を入れ、内底見込みにキノコ状の文様を3個片彫りしている。

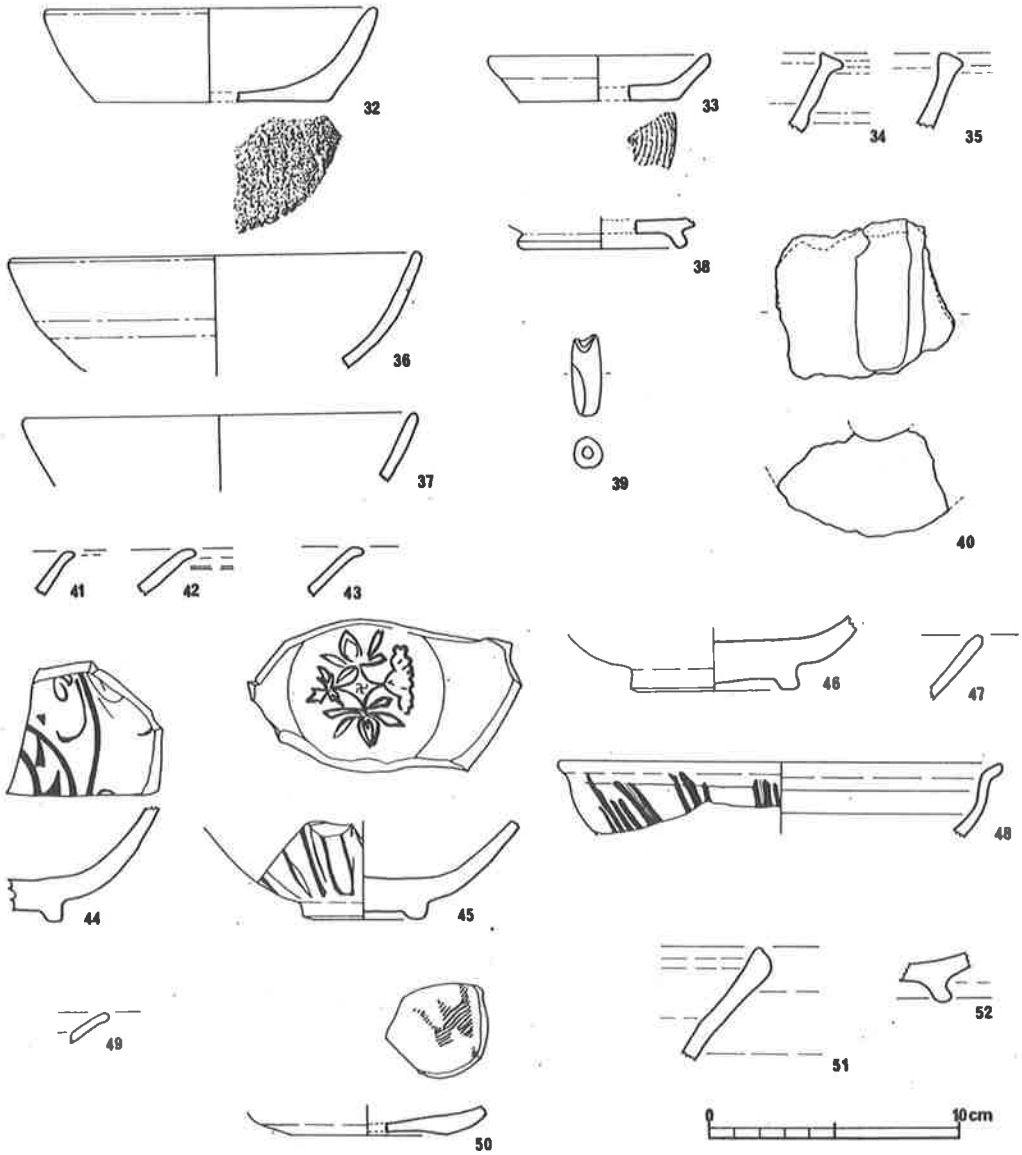


第11図　第１次調査出土遺物①（$\frac{1}{3}$）



第12図　第１次調査出土遺物②（$\frac{1}{3}$）

釉は淡緑色を呈す。口径17㎝、器高7.1㎝ある。**25**も内底見込みにキノコ状の文様を3個片彫りしている。釉は畳付の一部と外底見込みまで施釉され、目跡がある。**26**は口縁部を鋭く外反させた杯Ⅲ類である。**27**は外面無文で内面に櫛目による文様がある碗Ⅰ－1・a類である。**28**は外面に細かい櫛目を有する1－1・b類である。**29**は口縁部をわずかに外反させ、体部外面にヘラ状の施文具により片彫り風の沈線を入れている碗のⅢ－1・C類で、釉はガラス質の黄灰色を呈す。**30**・**31**は皿で、Ⅰ－1・b類に属する。**30**の口径は10.2㎝を測る。**32**は土師器杯である。口径13㎝、器高3.7㎝を測る。回転糸切りによる切り離しである。**33**は土師器小皿で、底部からほぼ直線に口縁部に至っている。口径10.6㎝、器高1.8㎝を測る。切り

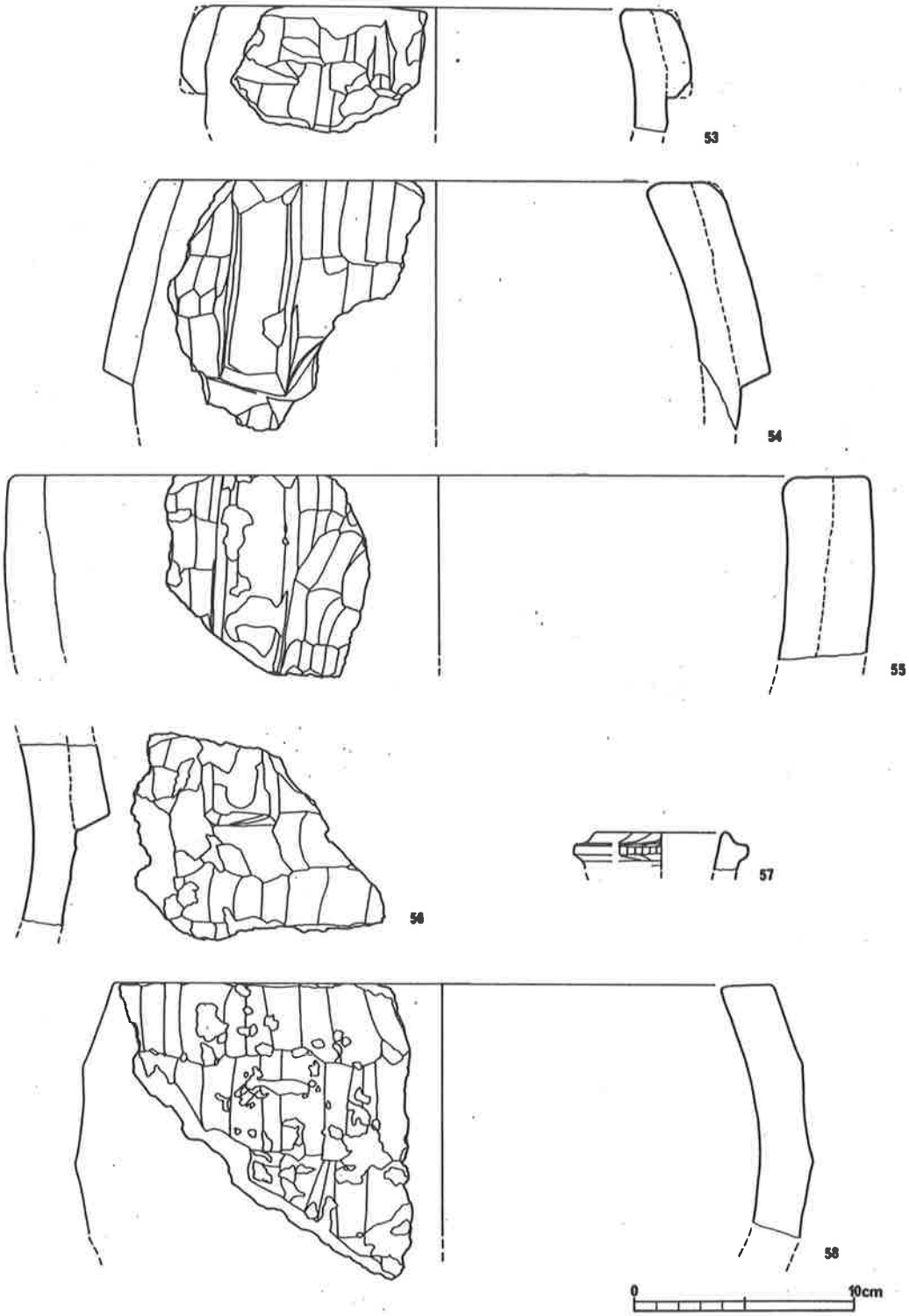


第13図　第1次調査出土遺物③（$\frac{1}{3}$）

離しは回転糸切りである。**34**・**35**は東播系須恵質捏鉢で口縁端部を上下両方向へつまみ上げている。12世紀末～13世紀前半の資料である。**36**は瓦器碗で口縁部を丸くおさめており、内外面灰色を呈す。口径は16㎝を測る。**37**も瓦器碗で、内外面黒色でヘラミガキが見られるが、摩滅のために部分的しか残っていない。**38**は瓦器碗の高台部分の資料である。貼付高台で外反しており、つくりは丁寧である。暗灰色を呈す。**39**は褐色を呈する紡錘形の土錘である。長径3.15㎝、短径1.15㎝ある。**40**は鞴の羽口片で、外面上位に黒色のガラス質のスラッグが付着している。壁面採集の資料である。**41**～**43**は碗Ⅴ類の口縁部片であろう。**44**は内面に草花文を有する碗Ⅰ・2類に属する。**45**は外面体部に鎬蓮弁を有し、内底見込みに花文様を4個配し、中央に卍の文様をスタンプしている碗Ⅰ－5・C類に相当する。**46**は内外面とも無文で底部の器肉が厚い碗Ⅰ－1類である。**47**は碗の口縁部の資料である。**48**は碗Ⅲ－2類に相当する。口縁部の外反は大きく、体部外面にヘラ状の施文具により片彫り風の沈線を入れている。釉は灰緑色で胎土は白色を呈す。**49**は皿口縁部の資料。**50**も皿で、全面施釉後に底部の釉をカキ取っているⅠ－2類である。**51**は東播系須恵質捏鉢で、体部と口縁部にきわだった差がない。**52**は瓦器碗の高台部で外反している資料である。**53**～**56**は方形の耳を有する石鍋で、**53**は体部が内湾・内傾するA－1類で、内面磨きをかけている。口径21.4㎝を測る。**54**もA－1類で、口縁部は平坦仕上げである。外面体部にはノミによる4段の削痕がある。**55**は大型品で、体部が直線的なA－2類である。口径は38.4㎝あり、口縁部は平坦仕上げである。外面は煤で黒くなっている。**56**は口縁部を欠損するが耳の一部がつくA－1類である。**57**は体部を外上方へ直線的に立ち上がらせ、鍔そのものも小さく小型品である。石鍋よりも別の用途が考えられる。**58**は方形の耳を有するか不明であるが、体部が内湾しておりA－1類とも考えられる。口縁部は平坦仕上げで、外面体部にはノミによる削痕がある。口径29.8㎝を測る。**59**～**62**は石鍋の体部及び底部片に孔が穿たれている。**59**は径1㎝の孔、**60**は底部に8㎜の孔、**61**は9.1㎜の孔がいずれも外面から内面方向へ行われている。**63**も欠損しているが孔が穿たれている。石錘の可能性がある。**53**・**56**・**58**は工事壁面より採集、**55**はB0区出土。**62**はB1・2区出土。ほかはA地点の排土採集である。

C地点における旧石器時代・縄文時代・弥生時代の遺物は、34点を図示したが遺物包含層は確認できず、中世期の土層中に混在するかたちで出土している。

63～**68**はナイフ形石器で、**63**・**65**は斜行する刃部を残し、刃潰し加工を施すもので刃部長が器長に対してほぼ半分を占め、胴部が張り、幅広のもので、**65**は先端部を欠損する。**64**・**66**・**67**はいずれも先端部を欠損しているが、刃潰し加工は丁寧である。**68**は素材の剥片ををそのまま利用し、刃潰し加工は表裏面より行っている。**69**・**70**は台形石器で、**69**は横長剥片を利用し、直線する刃部を呈し、刃部に対して器長が長い。表面に平坦な調整剥離を施す。**70**は横長剥片の素材を利用し、折断して整えたものである。**71**は三稜尖頭器で、横長剥片を利用し、裏面より急角度の2次加工を稜上より再調整剥離を施し、断面が三角形状を呈する。



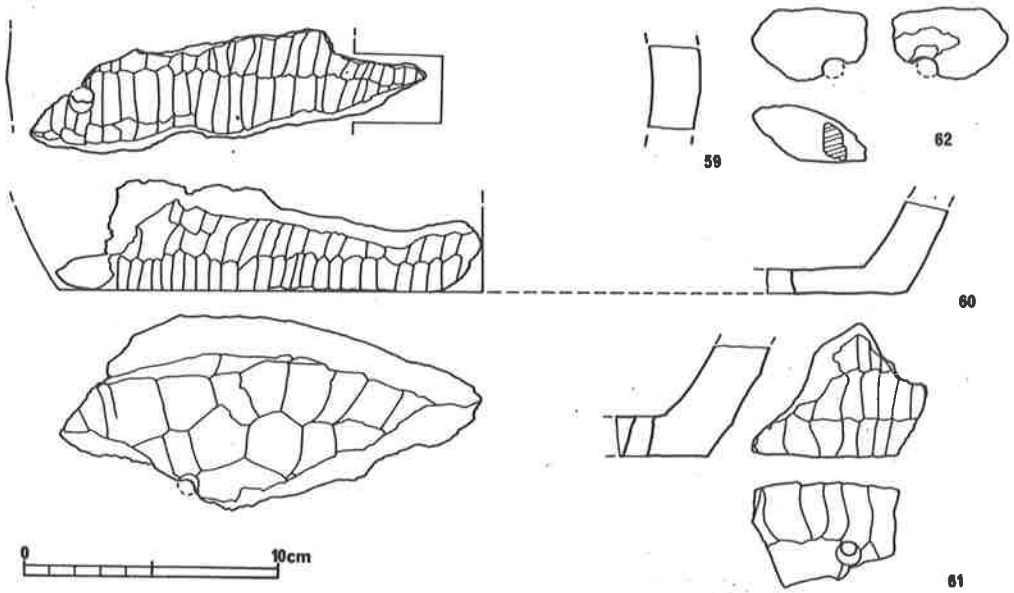
第14図　第１次調査出土遺物④（$\frac{1}{3}$）

72・73 は彫器で、**72** は折断した縦長剥片の裏面から急角度の彫刀面を施している。**73** は二側辺に彫刀面を作り出している。**74** はノッチドスクレイパーである。**75～77** は細石刃の中間部である。**77** はB 10 区出土。

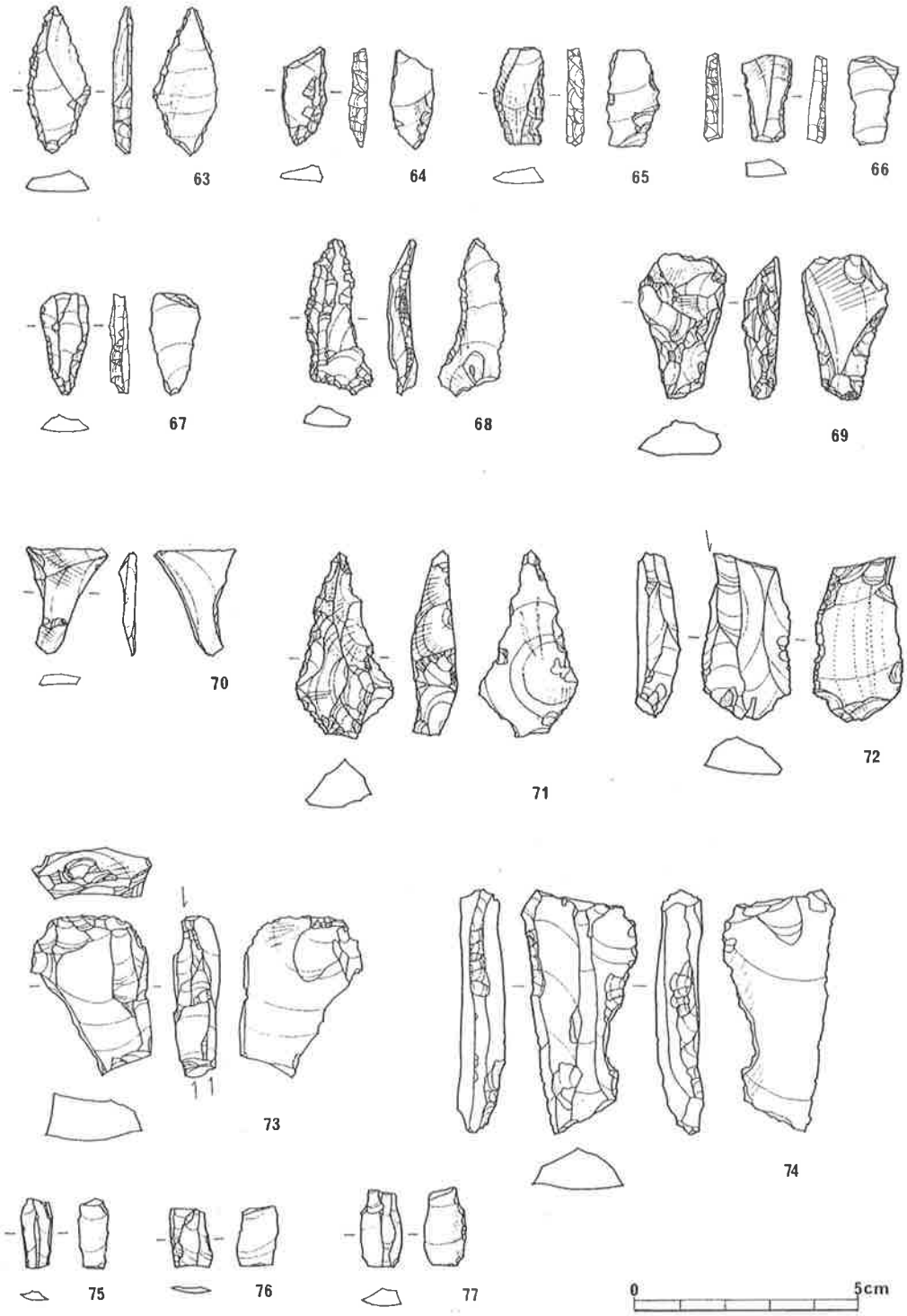
78～93 は縄文時代の石器である。**78～89** は石鏃で、**90～92** は使用痕のある剥片である。**93** は石核である。石鏃は大まかに下端が若干弓なりに内湾する **79・80・82・83・85** と、下端が直線をなす **86～88** とに分かれる。**78** は側縁が直線的になり脚部が尖っている。**81** は先端・脚部を欠損するが三角形状を呈すると思われる。**84** も先端・脚部を欠損する。**89** は脚部のみの資料である。**90** は表面の両側辺に使用痕がある。**91** も縦長剥片で 2 本の稜線を有し、先端部に使用痕がある。**92** も断面三角形を呈する縦長剥片の両側辺に使用痕が認められ、刃器的な使用が考えられる。**93** は打面調整を行ったあと、寸づまりの剥片を剥離している。石材は **78** が透明度の高い黒曜石、**82・88** が灰青色黒曜石である。**86** は花十勝といわれる鉄分を含んだ褐色を呈する黒曜石と思われる。他の 11 点は黒色黒曜石である。**88** は集石土壙内出土。

94～98 は弥生土器である。**94～97** は甕形土器の口縁部の資料で、**98** は甕棺片と思われる胴部の突帯の資料である。**94** は口径 22.6 ㎝の小型で口縁部は短く折れ、三角形に尖り、胴部の張りは少ない。**95** は口縁部がほぼ平坦で外側にはあまり発達していない。突帯はもたず胴部は張らずに直行する。口径 28.8 ㎝を測る。**96** は口縁部が平坦で内側を若干つまみ出し尖り気味にしている。口径 31.6 ㎝ある。**97** は大型の甕口縁部破片で、胎土に砂粒をかなり含んでいる。これらは中期前半代であろう。**98** はコ字形の突帯が 2 条めぐっているが摩滅が著しい。中期後半～後期前半であろう。

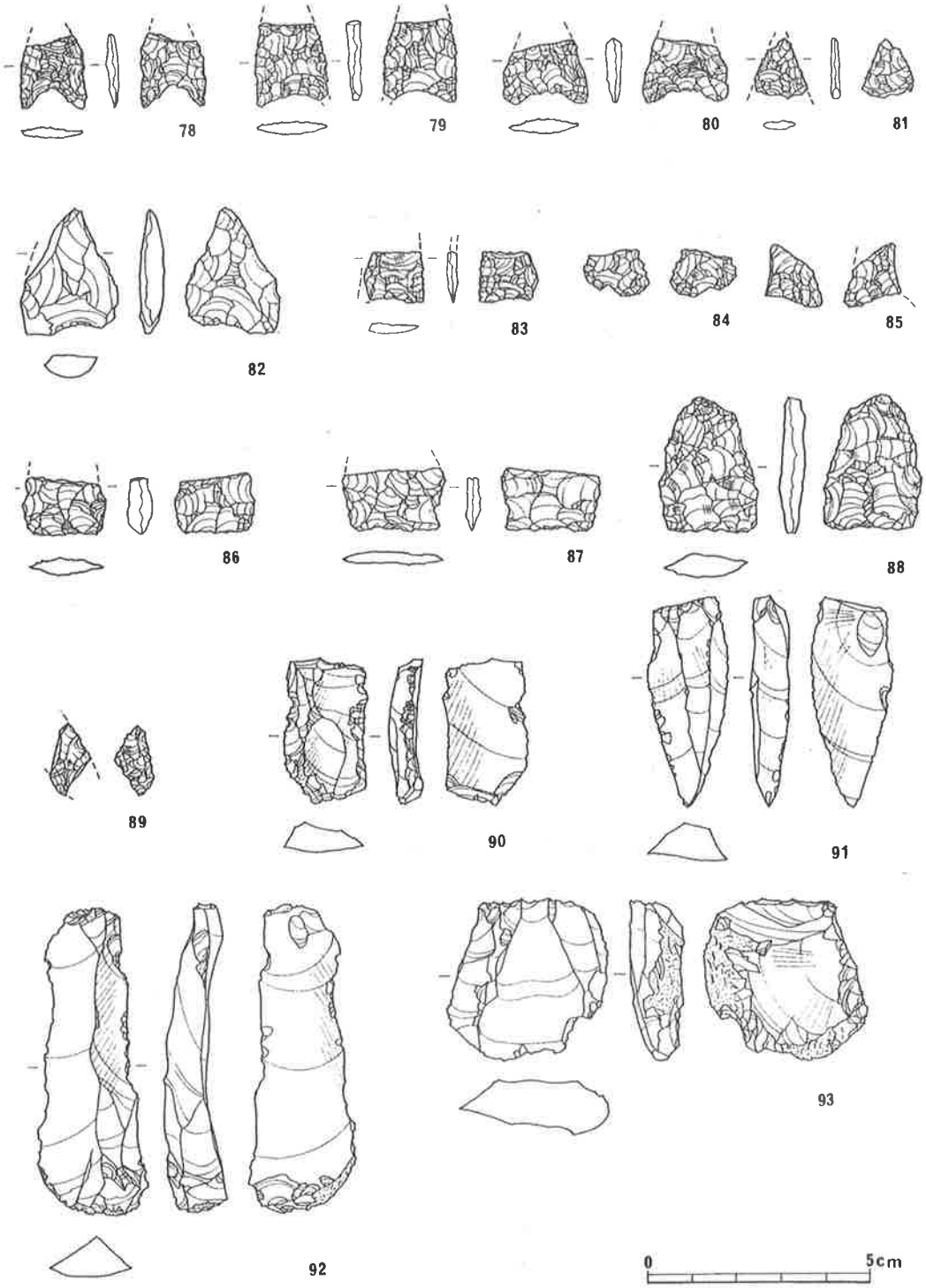
99～162、**164～170** は中世の遺物である。**99～120** は白磁、**121～133** は龍泉窯系青磁、



第15図　第 1 次調査出土遺物⑤（$\frac{1}{3}$）

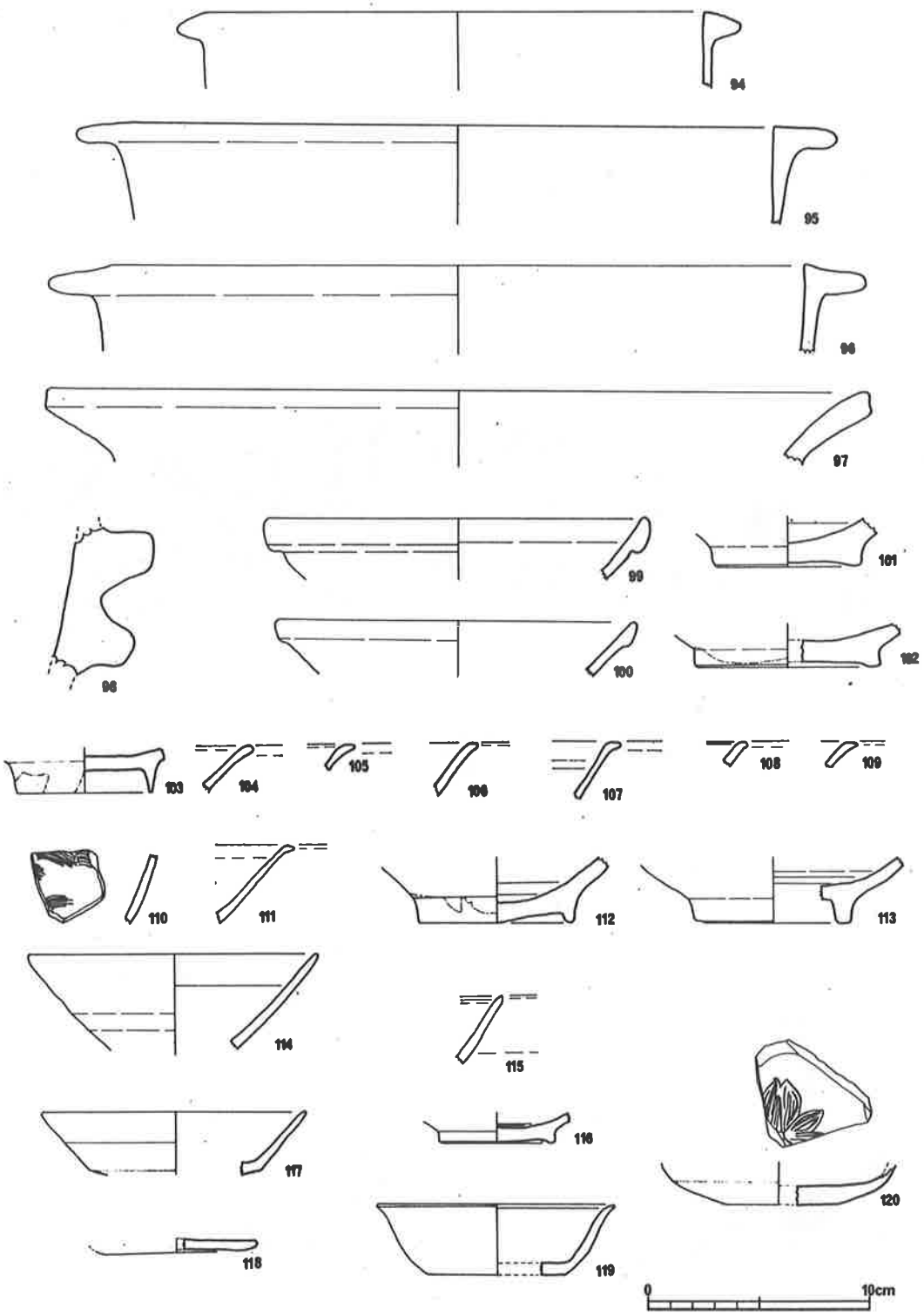


第16図　第１次調査出土遺物⑥（$\frac{2}{3}$）

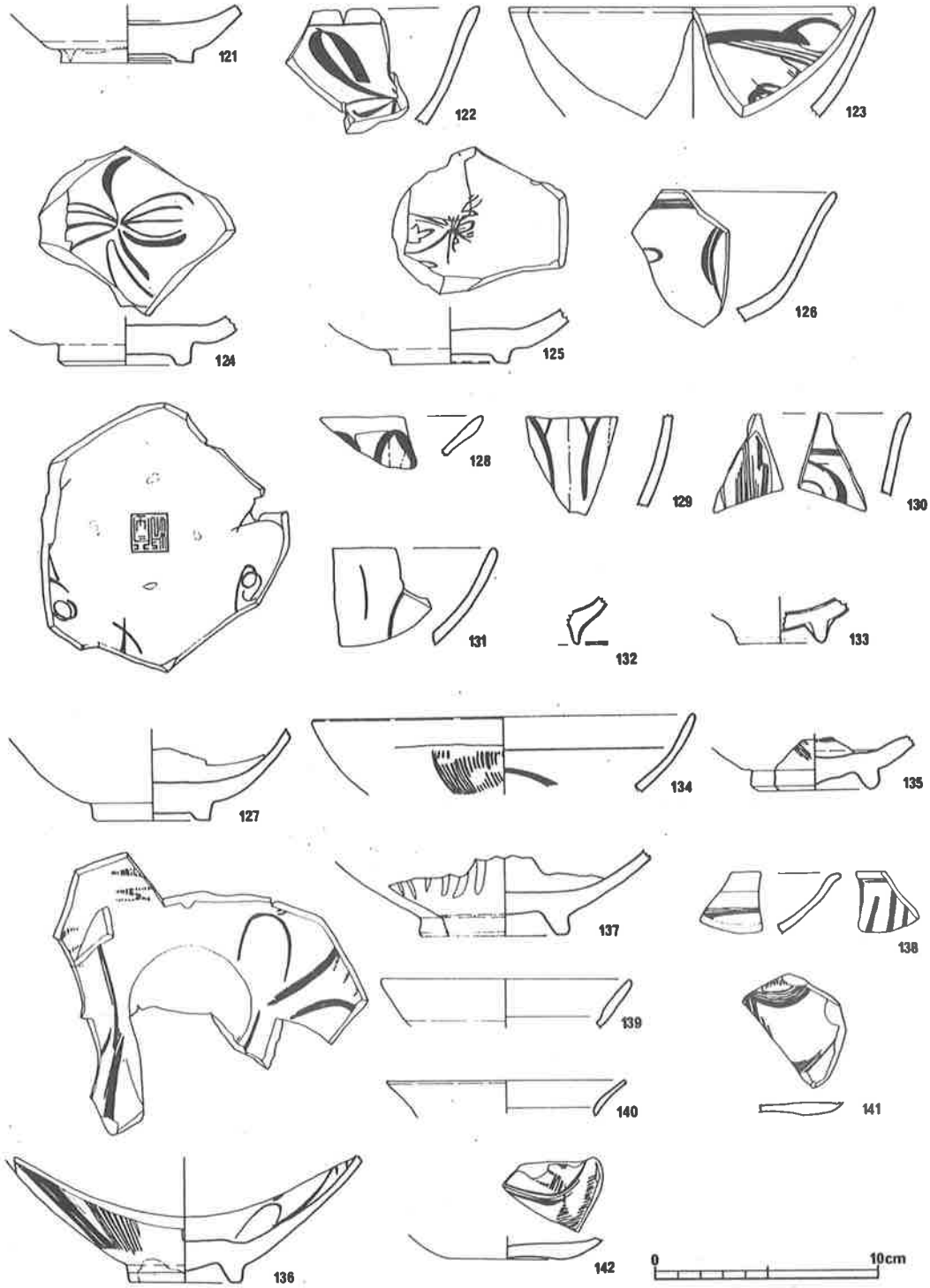


第17図　第１次調査出土遺物⑦（$\frac{2}{3}$）

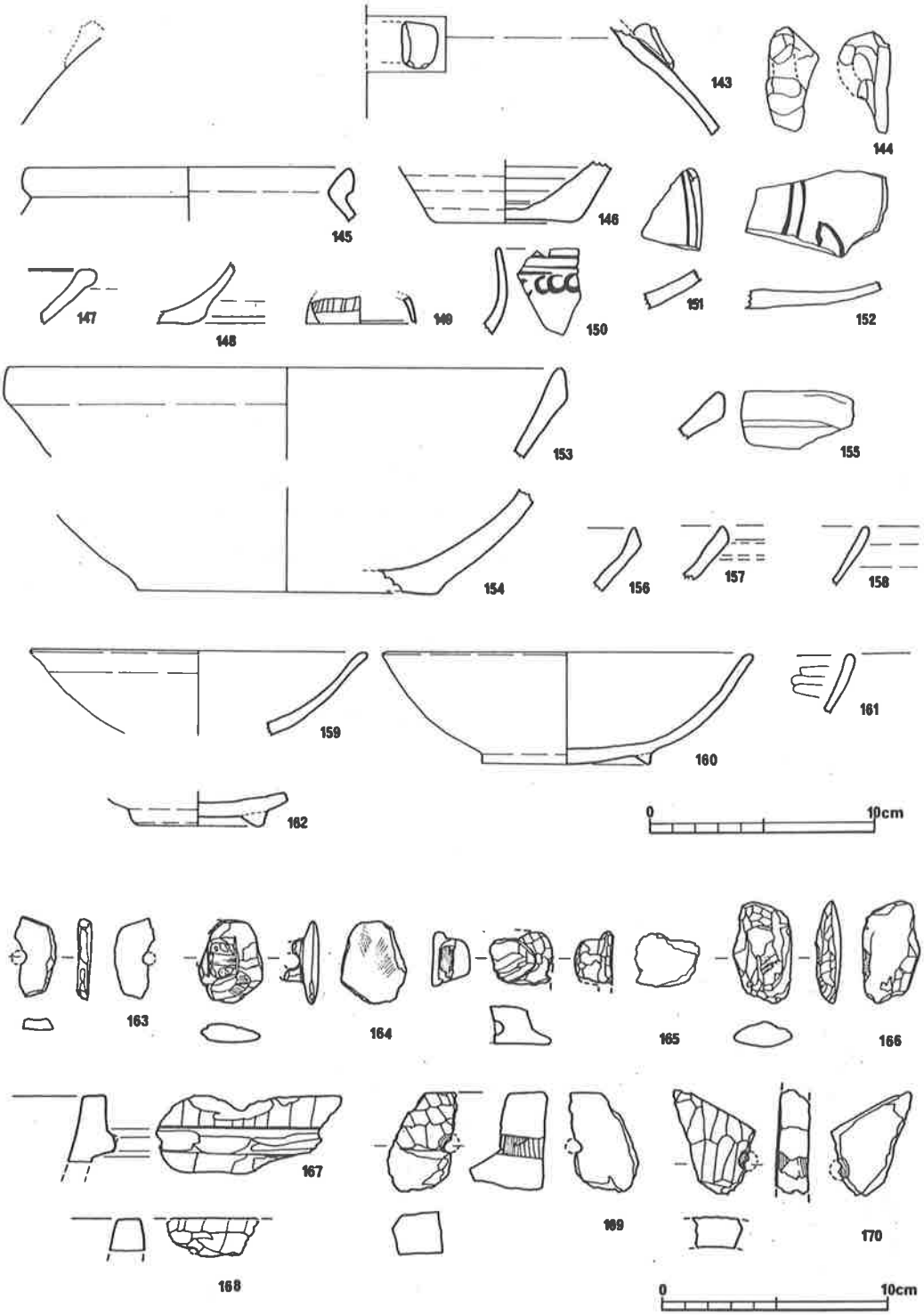
134～142 は同安窯系青磁である。**99～102** は碗Ⅳ類の玉縁口縁と、その底部片である。**99** の口径は 17 ㎝、**100** は 16 ㎝である。いずれも胎土に黒い粒を含んでいる。**101** は見込みに段を有する。**103～110** は碗Ⅴ類である。**103** は細く高く、直立した高台を呈する。**104** はⅤ－1類。**105・106** はⅤ－2類。**107～110** は碗Ⅴ－4類である。**110** は内面体部に櫛目による施文がある。**111～114** は碗Ⅷ類の資料で、**111** はⅧ－1類、**112・113** は底部片で内底見込みの釉を輪状にカキ取っている。**114** は体部が直線的に外上方へ延びるⅧ－2類で、口径 13.2 ㎝ある。**115** は口縁部に釉がかからない口禿の碗Ⅸ類である。**116～120** は皿の資料である。**116** は皿Ⅲ類で見込みの釉を輪状にカキ取っている。**117** は皿Ⅷ－2類で、口縁部を薄く引き出している。口径 13.8 ㎝を測る。**120** も同類であり、内底見込みに草花文をスタンプしている。**118・119** は口縁端部が口禿になった皿Ⅸ類である。**118** は全面に施釉、**119** は底部に施釉されていない。口径 10.8 ㎝、器高 3.2 ㎝、底径 6.4 ㎝を測る。**121** は内外面無文の碗Ⅰ－1類で、全体に薄く緑灰色の釉が施釉されている。**122～125** は碗Ⅰ－2類で、内面に草花文を有している。**122** は第 3 次調査の破片と接合した資料である。釉は淡緑色で胎土は淡灰色を呈す。**123** の釉はガラス質の緑色で、胎土は灰色である。**124** は内底に花文を有し、黄味帯びた緑灰色の釉が一部外底まで施釉されている。胎土は濁灰黄色を呈する。**125** は高台畳付まで緑灰色の釉が施釉されている。**126・127** は碗Ⅰ－4類で、**126** は内面に 2 本の沈線によって分割し、その中に飛雲文を片彫りしている。**127** は内底見込みに文字をスタンプし、砂目跡が 4 ケ所あるが、全面に釉の剥離が著しく文字は鮮明でない。高台畳付に 1 箇所切り目を入れている。**128～130** は外面体部に蓮弁の文様を有する碗で、**128・129** は鎬蓮弁のⅠ－5類、**130** は外面に蓮弁を削り出し、その上から櫛目を縦に入れている。内面には施文し、口縁部を外反させているⅠ－6・b類である。**131** は鎬のない幅広の蓮弁を有する。釉は淡緑色で全体に厚く施釉されている。14 世紀中～15 世紀前半の資料である。**132** は小碗か杯の高台部の資料である。釉は厚くかかり淡茶色を呈す。高台畳付には施釉されていない。胎土は濁黄白色。**133** は小碗で、全体に厚く施釉されている。釉は濃緑色で胎土は明灰色を呈す。**134～136** は碗Ⅰ－1・b類で、内底見込みと体部との境に段を有し、内面上位に沈線を入れている。外面には細かい櫛目を有する。**134** は口径 17 ㎝を測る。**136** は 8 点より接合で釉は緑灰色を呈し、胎土は明灰色である。**137** は外面体部にヘラ状の施文具により片彫り風の沈線を入れている。碗Ⅲ－1・a類である。釉は内面と外面高台上位まで薄く施釉されている。胎土は灰白色を呈する。**138** は小碗である。**139～142** は皿で、**139・140** はⅠ－1・a類で、内外面とも無文である。**141** はⅠ－1・b類で釉は淡緑灰色を呈し、内面にヘラによる片彫りがある。胎土は濁灰色である。**142** は全面施釉後、底部の釉をカキ取っている。**143～148** は輸入陶器である。**143** は四耳壷で、胴部上位に横形の四耳を有する。釉は緑味を帯びた黄灰色を呈し、胎土は暗灰色で、黒色粒を含んでいる。**144** は壷の耳部の破片である。内面の釉は淡褐色を呈し、胎土は灰色である。**145** は壷の口縁部で、口径 14.2 ㎝を測る。釉は黄味を帯びた緑黄色で、胎土は暗灰色を呈する。



第18図　第１次調査出土遺物⑧（$\frac{1}{3}$）



第19図　第１次調査出土遺物⑨（$\frac{1}{3}$）



第20図　第１次調査出土遺物⑩（$\frac{1}{3}$）

146 は壷の底部片で、釉は灰緑色で、胎土は灰色である。**147・148** は同一個体と思われる黄褐釉陶器である。**149** は青白磁の合子蓋である。全体に貫入があり、釉は乳白色で、胎土は白灰色を呈する。口径は2.8㎝を測る。**150～152** は朝鮮産陶器で、**150** は高麗青磁で、外面に白土による象嵌がスタンプされている碗である。釉は緑灰色で、胎土は灰色である。**151・152** は内面見込みに白土の象嵌の二重圏線が描かれている。**153～162** は国内産土器で、10点図示した。土師器はすべて細片が出土しており、器形が復元できる資料は **159** のみであった。

153～158 は東播系須恵質の揑鉢と碗である。**153** は口径24.6㎝を測り、口縁部が玉縁状を呈している。**154** は内面をナデ仕上げし、外面には丁寧なハケ目調整がある。底径は13.2㎝で粘土紐積上げによって成形されている。切り離しは時計回りの回転糸切りである。胎土は灰青色を呈する。**155** は片口の碗片である。**156** は口縁部を若干上方につまみ出している。内面は横位のナデ仕上げである。灰青色を呈する。**157** は口縁部と体部にきわだった差がない。**158** は口縁端部を丸く仕上げている。内面は横位のナデ調整で、胎土は灰色を呈する。**159** は土師器の高台付碗と思われる。内外面に煤が付着している。外面は淡茶色を呈する。口径は14.7㎝である。**160** は約$\frac{1}{3}$が残存していた瓦器碗である。外面は灰黒色で内面は淡黄褐色を呈する。ミガキは不明である。口径16㎝、器高4.9㎝、底径7.2㎝。器形より11世紀中頃から12世紀前半代が考えられる。**161** も瓦器碗の口縁部で内外面へラミガキがあるが、摩滅のため不鮮明である。内外面灰黒色を呈し、胎土は精製された灰色である。**162** も瓦器碗の底部破片で貼り付け高台を有している。内外面ナデ仕上げである。**163～170** は滑石製品で、**163** は有孔円板の破片で中央に穿孔がある。**164～166** は表面を凸起状に把手を削り出し、把手部を穿孔しているバレン状製品である。**164** は凸起部周辺を丁寧に削り、裏面に磨きをかけている。**165** は非常に丁寧な作りで、穿孔部分には幅4㎜ほどの鉄片が付いている。表面には煤が付着しており、裏面に磨きがかかる。**166** は長方形を呈し、把手部分の上位を欠損している。裏面に磨がかかる。同資料は近年、中世期の遺跡で出土例が増加している。本市楼楷田遺跡でも19点出土している。**167・168** は石鍋の口縁部片で、鍔が体部の上位に付き、体部が直立しておりＢ－２類に相当する。**168** には穿孔がある。**169・170** も穿孔のある製品である。**169** は石鍋体部の鍔部分を使用して、表裏面より穿孔している。**170** も内面磨きがある石鍋体部片を使用して、表裏面より穿孔している。第21図は銅銭の拓影で、文字の一部を欠損するが、崇寧重寶もしくは崇寧通寶であろう。初鋳年は宋1102年で直径約3.2㎝、外縁厚さ2.3㎜である。3層出土。石器の出土層位は、3層が **64～70・73・76・80・83・85・89～92・164～166・168・170** である。4層出土は **63・71・72・74・75・79・82・86・87・93・163・167・169** である。**81** はＢＯ区出土。土器・陶磁器の出土層位は、3層が **100・104・110・118・120・122・130～132・135・136・141・142・144・145・147・148・153・155・156・158** である。その他は4層出土である。

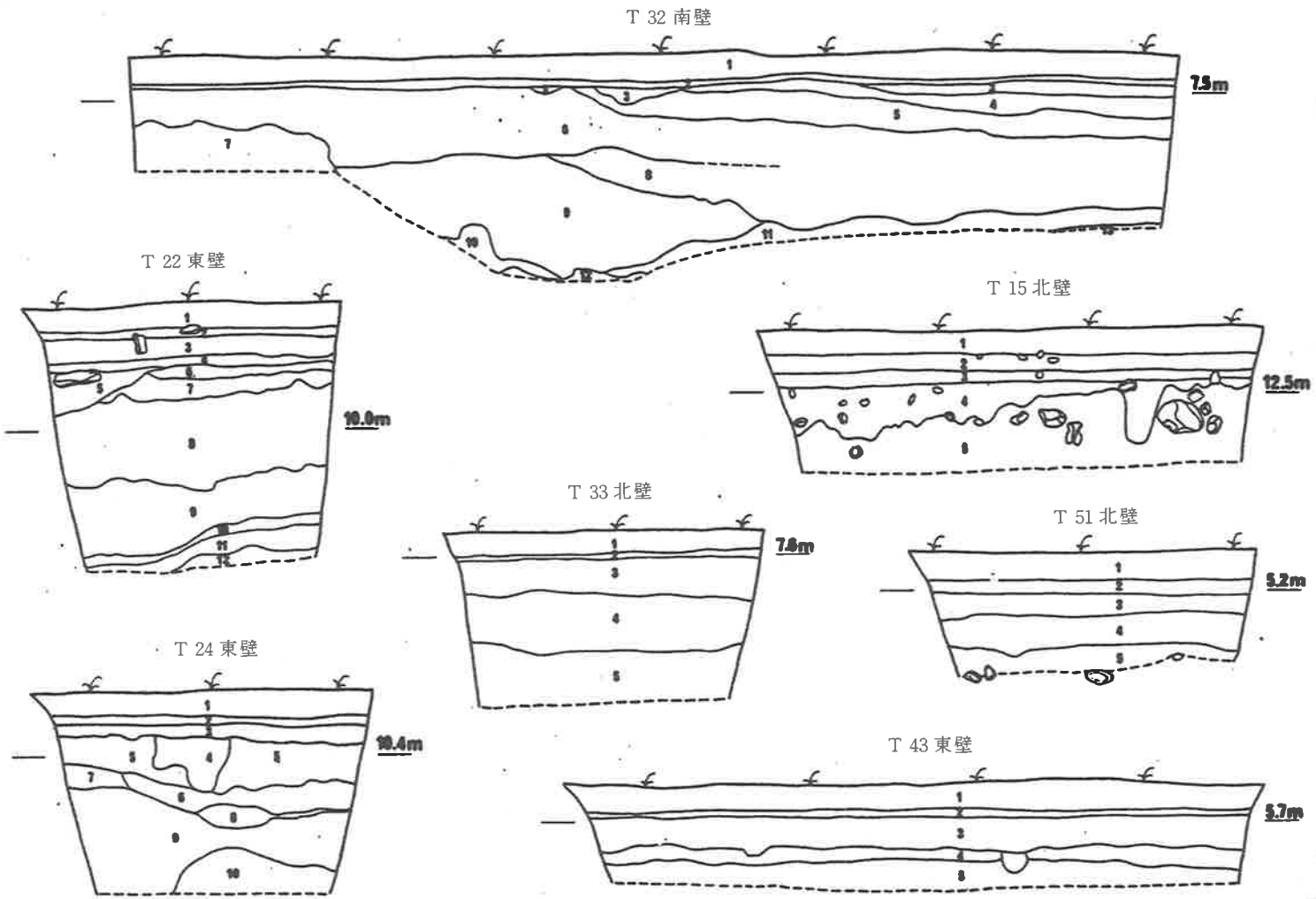
第21図　銅銭拓影（1/1）

2. 第2次調査における土層及び検出遺構・遺物（第22図～第39図）

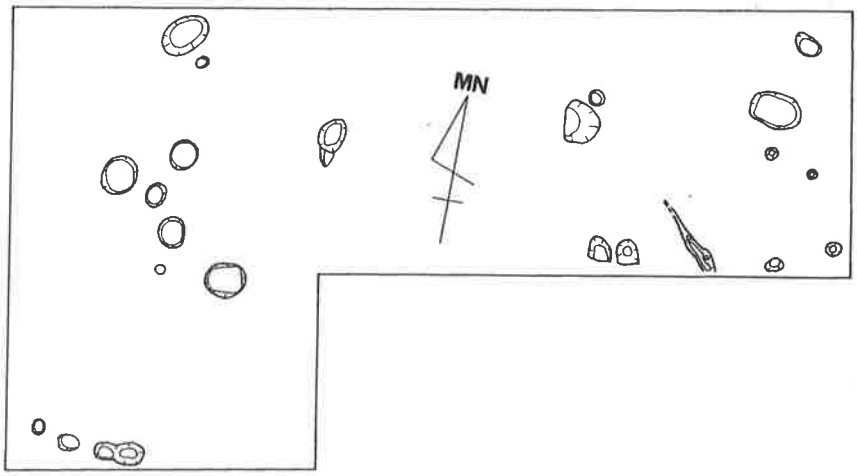
本調査区は、圃場整備全域にわたって削平される部分を中心に調査区を設定した。最も北側のT52と最も南側で標高の高いT16との標高差は約8 *m*である。あわせて、すべての地区が水田として造成されており、土層は地区ごとに様相が異なっていた。

北側に設定したT53からT54を通って中央部のT56・T1をへて南側のT5を通るラインより西側においては各調査区とも河川の氾濫によって堆積したと思われる礫層を検出した。また、東側のT42からT67を通りT17に至るラインでは礫層および灰青色粘土層が確認された。1号幹線排水路部分に設定したT15（宮ノ下りA遺跡）の土層は、1層表土、2層現在の田の床土で黄褐色土、3層灰褐色土、4層黒褐色土、5層暗褐色土である。中世の包含層は3～4層である。5層よりは旧石器の資料が出土している。水田部中央よりやや南側の調査区T22（宮ノ下りB遺跡）の土層は、1層表土、2層現在の田の床土で黄褐色土、3層暗褐色土で黒い斑点が入っている。4層淡黄色土、5層暗褐色土で3層に比べて黒い斑点が入っていない。6層黒茶褐色土で黒い斑点の部分が多い。7層やや黄味帯びた暗茶褐色土、8層暗茶褐色土、9層暗灰茶褐色土、10層黒褐色土、11層灰茶褐色土、12層黒茶褐色土である。地山までは、調査に至らなかった。8～11層は縄文晩期の土器、石器が検出できた。このT22より東側に設定したT24の土層は1層表土、2層黄褐色土で現在の田の床土、3層灰黄色土、4層黒灰褐色土で中世のピットである。5層灰黄褐色土、6層灰黄色で3層に比べて灰色が強い。7層黄灰色土、8層灰茶褐色土、9層暗灰褐色土、10層灰色土でやや黄味帯び粘性が強い。この調査区においては中世のピットが多数検出された。水田部分の中央の調査区T32（宮ノ下りC遺跡）においては、1層表土、2層現在の田の床土で黄褐色土、3層黒茶褐色土、4層灰橙色土、5層灰褐色土、6層と8層は色調がほぼ同じで西側にいくにしたがって区別が困難であった。7層黄灰褐色土、9層も灰褐色で8層より軟らかかった。10層黄灰褐色土、11層暗灰色土、12層黄灰色土、13層黒色土で厚さ1 *cm*あり下部は鮮やかな黄橙色土であった。9層が溝状遺構の部分で中央が深く、60 *cm*程ある。東側が高くなっており、擂鉢状を呈する。このT32より20 *m*西側に設定したT33の土層は、1層表土、2層黄褐色土で床土、3層茶褐色土でかたくしまっている。4層茶褐色混礫土、5層明茶褐色土でさらさらしてしまりがない。3層が古墳時代の包含層である。北側部分の調査区T43（宮ノ下りD遺跡）の土層は、1層表土、2層黄褐色土で床土、3層黒茶褐色土、4層暗褐色土、5層灰黒茶褐色土であった。古式土師器が3層より出土しており、ピットは同時期のものと思われる。最も北側の調査区T51（宮ノ下りE遺跡）の土層は、1層表土、2層黄褐色土で現在の田の床土、3層暗茶褐色土で黒い斑点が入る。4層暗褐色土、5層灰黒褐色土であった。3層が中世の包含層である。

検出した遺構については、第2表1・2のとおりT15・T24において中世期のピットを検出した。また、T19・T31・T34～T38・T43で古墳時代の時期と考えられるピットを検出した。T44では弥生期と考えられるピットを検出した。T24および拡張した調査区で検出したピ



第22図　第 2 次調査土層図（$\frac{1}{40}$）



第23図　T 22柱穴検出状況図（$\frac{1}{60}$）

ットは24である。すべて5層上面で確認した。

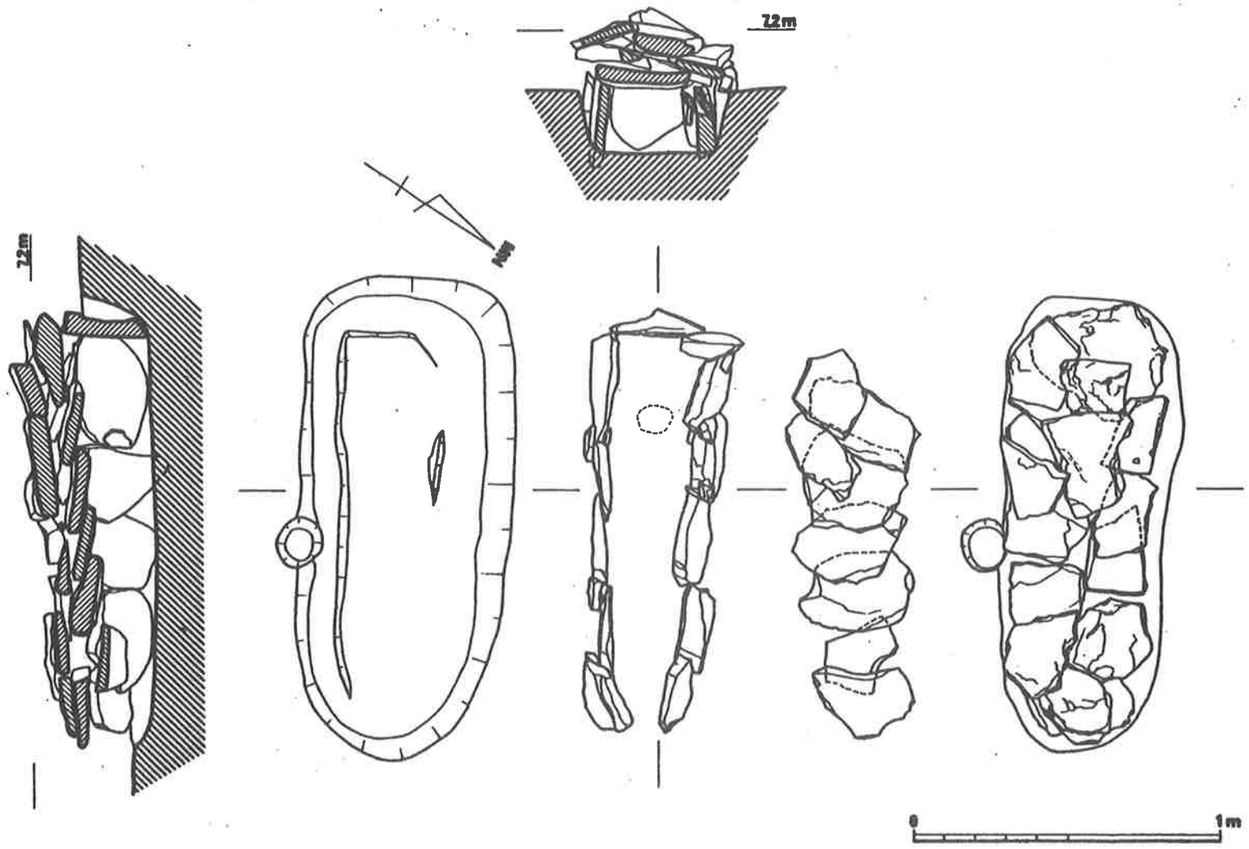
T 31において箱式石棺墓1基を検出した。主軸はN 56°30′Eを測り、棺身はほぼ楕円形を呈している。径は土壙底部で長さ143㎝、幅は55㎝、深さは西側で20㎝、東側で5㎝を測る。蓋石はすべて玄武岩の板状石を使用するが、その配し方は東木口部から置き始め、いわゆる刺身状に順次重ねている。21枚を使用している。上部は2列に、下部は上部よりやや大きい石材を使用している。石材の大きさも一定しているようである。側壁は北壁に5枚、南壁に5枚、西木口部（頭部と考えられる）は2枚の合計12枚の使用であるが、隙間には小さな板状石を置く配慮がみられる。なお、北壁の2枚は棺内に倒れ込んでいる。幾分かは土圧にもよるものだろう。南壁は直線的に並べている。東木口部には石材がないが、抜き取られた状況は考えられないため当初より使用していなかったと思われる。

副葬品としてはガラス小玉328個が出土した。ガラス小玉は特に西側部分のみに集中しており、首飾り的な用途に比定し得れば西枕である事を示している。ガラス小玉の色調は濃緑色と青色を主体として、淡空色を呈する**260**が1点ある。これらのガラス小玉は管状に延ばしたガラス管を切り臼玉状にしたガラス玉が多数出土している。大きさも極小グループの2.9㎜以下が大部分をしめている。小グループ3～3.9㎜ものは**128**・**184**・**192**・**205**・**207**・**291**・**302**・**303**の8点で、それ以上のものはない。比率は極小が97.6％、小が2.4％である。

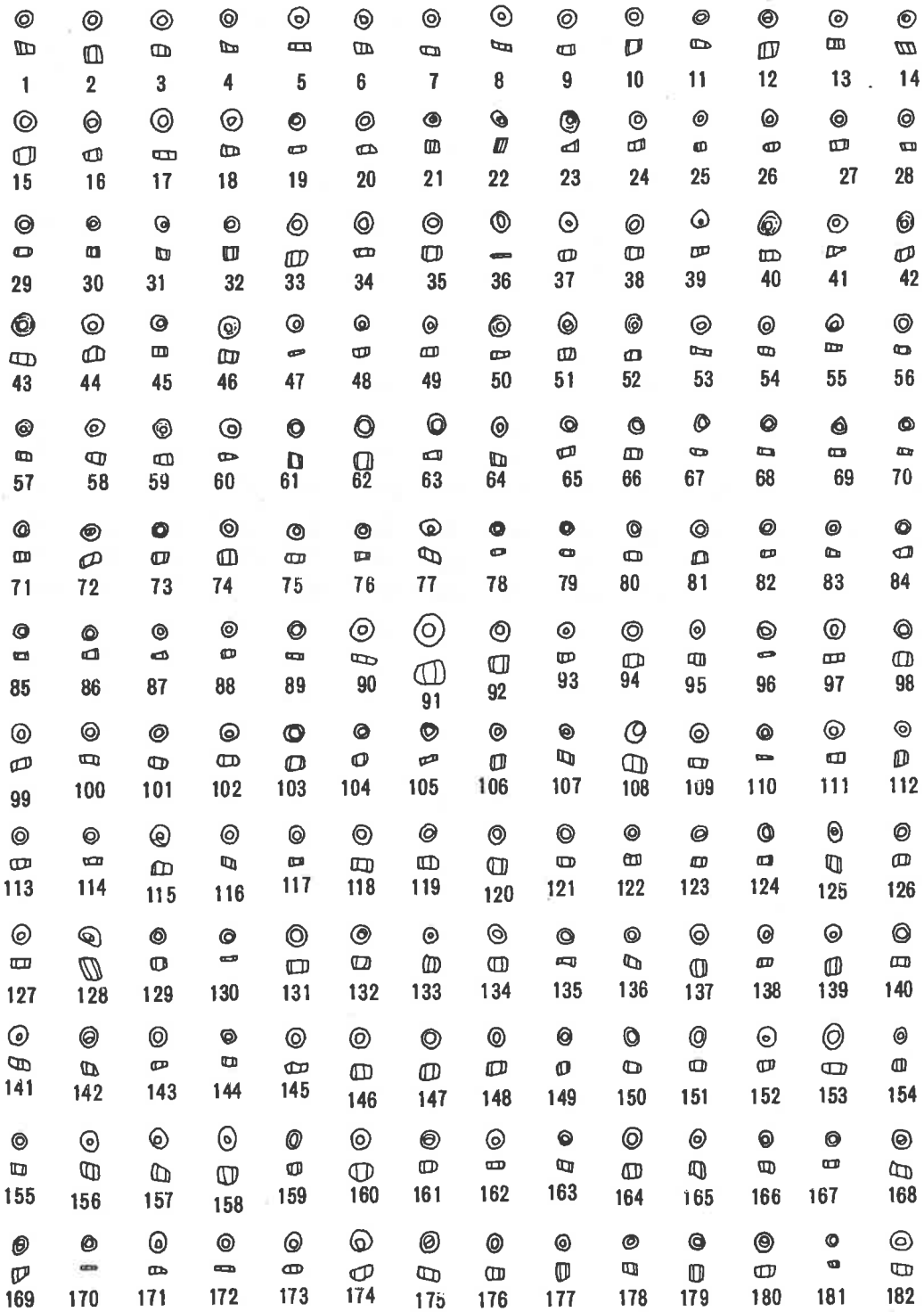
石棺より北側へ40ｍの調査区T 38において表土下20㎝に竪穴住居跡を検出した。以下1号住居跡と呼ぶ。頂部は後世の削平を受けてはいるが残りが良い住居跡である。平面は台形状を呈し、規模は南北辺で4.77ｍ＋α、東西辺4.05ｍで、壁高15～20㎝を測る。住居内には12個の柱穴を検出した。主柱穴は4本である。柱穴の深さは10㎝から30㎝を測る。柱間は南北辺1.85ｍ、東西辺1.9ｍを測りほぼ同じである。主軸方位はN 7°Wを示す。C～Dラインの中央部に焼土と多数の炭化物が床面直上に認められた。掘り込みはなかったが炉跡が考えられる。

遺物は東側壁沿いと住居跡南側に顕著である。**1**～**8**は土師器杯で、体部は内湾気味に立ち上がっている。**1**～**6**は口縁端部を丸くおさめているが、**7**・**8**は尖り気味にしている。**1**は口径13.6㎝、器高5.5㎝。底部をヘラ削りで仕上げている。赤褐色を呈す。**2**は口径14.7㎝、器高5.6㎝。赤褐色を呈す。**3**は口径16.2㎝、器高5.5㎝。淡灰黄色を呈す。**4**は口径15.9㎝、器高6㎝。外面茶褐色を呈す。**5**は口径13.3㎝、器高5.6㎝。赤褐色を呈す。**6**は口径14.6㎝、器高6㎝。外面体部上位には赤褐色で底部は淡褐色を呈す。**7**は口径15.1㎝、器高5.6㎝。淡褐色を呈す。**8**は口径15.3㎝、器高4.9㎝である。体部は薄く仕上げている。赤褐色を呈す。**1**～**8**の胎土には茶色の粒を含む。**9**～**13**は土師器甕である。口縁部は「く」字状に外反している。**9**は外面に粗いハケあり。茶褐色を呈す。**10**は粗いハケを施しているが摩滅が著しい。淡褐色を呈す。**11**は赤褐色。**12**は口縁部から体部にかけてハケを施し、淡褐色を呈す。外面に煤が付着している。**13**は底部破片でハケが施してある。**14**～**20**は住居跡上面での出土遺物である。**14**～**16**・**19**は土師器甕で、**14**の調整は内外面ヨコナデで、胎土に石英粒と雲母を含んでいる。褐色を呈す。**15**は淡灰褐色。**16**は内外面ハケを施し、褐色を呈す。**17**は土師器高杯の口縁部破片で、大きく開いている。赤褐色を呈し、茶色の粒を含む。**18**は須恵器の甕体部破片である。外面に平行条線叩文のタタキを行い、内面は同心円の板具によって青海波文のタタキをみる。外面灰色で内面灰青色を呈する。**19**は内外面粗いハケを施している。**20**は土師器高杯の脚にあたる部分の破片で、放物線をえがく形状を呈する。1号住居跡出土土器群の時期は、長崎県県北においては類例の住居跡の検出がなく資料が乏しいため、現時点では5世紀前葉以降で5世紀代に包括しておく。将来的には細かな年代が与えられるであろう。昭和62年度に調査が行われた長崎県東彼杵町の彼杵中央地区圃場整備事業に伴う白井川遺跡では、古墳時代の住居跡等が確認されており、今後、資料の増加が望まれる所である。

1号住居跡より南へ30㎞に設定した調査区T36でも、表土下40㎝に竪穴住居跡を検出した。以下2号住居跡と呼ぶ。平面形は方形に近い長方形を呈し、規模は南北辺で3.05㎞、東西辺で3.5㎞で床面積は11.16㎡である。壁高は浅く10㎝である。中央部に焼土が認められたため炉跡であろう。また、北側には貼り出し部分が認められる。住居跡内には7個の柱穴を検出したが、主体は不明である。出土した炭化物は1760±75 yB.P.で出土遺物から考えていた時期より古いデーターが得られた。住居跡出土遺物は、1号住居跡が土師器杯を中心とするのに対して土師器甕が中心となっている。**21**は鋭く屈折して外反する口縁で、若干内湾気味に立ち上がり、口縁端部をつまみ上げ丸く仕上げている。外面にハケ目が施され、体部は球形を呈し器壁は薄い。外面赤褐色を呈す。内面は一部黒色を呈す。**22**は内湾気味に立ち上がり、灰黄色を呈す。**23**・**24**は同一個体で、口縁部の内外面に縦方行のハケ目がみられる。茶褐色を呈する。**25**は口縁部と体部を薄く仕上げている。外面赤褐色を呈する。**26**は住居跡外の北側の部分よりの出土で、口縁部を欠損する。口縁部は鋭く屈折する。球形に近い体部をもち1条の沈線を肩部に有している。外面のハケ目は細かく丁寧である。沈線下位に補修孔を有する。器壁は薄



第24図　T 31 石棺実測図（$\frac{1}{20}$）



第25図　T 31石棺出土ガラス小玉実測図①（$\frac{1}{1}$）

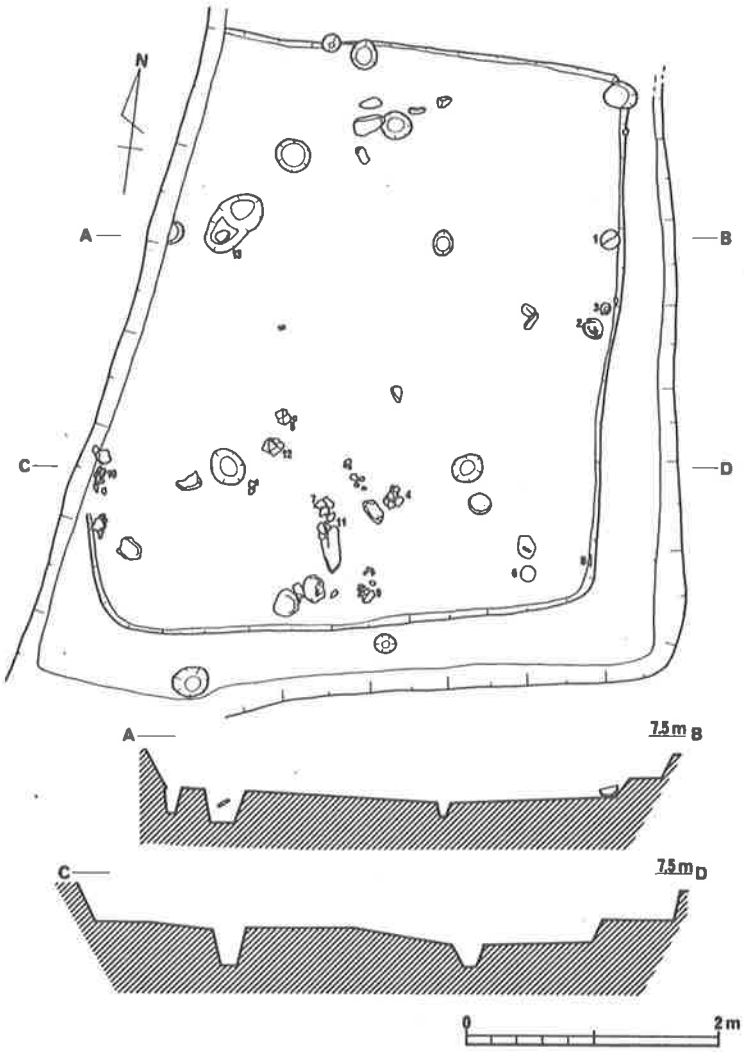
第26図　T 31石棺出土ガラス小玉実測図②（$\frac{1}{1}$）

く仕上げてあり、煤が付着している。茶褐色を呈する。**27** は外面灰色で内面淡黄色を呈す。**28** は赤褐色で、胎土に砂粒を含む土師器高杯である。**29** は屈折して外反する口縁で、若干内

湾気味に立ち上がる。**30**は敲石で先端部に数回の使用痕があり、摩滅が著しい。**31**～**33**は住居跡を検出する前に出土した土師器甕の口縁部の破片である。**33**は口縁端部をつまみ上げている。2号住居跡の時期は、**21**の土師器甕に代表されるように鋭く屈折して外反する口縁で、体部は球形を呈する特徴から布留式土器として位置づけられる。また、**26**の球形の肩部に沈線を有し、丁寧なハケ目が施されている。布留式の古段階の良好な資料である。住居跡は時期的には4世紀後半代である。

第2次調査では2基の住居跡を検出したが、同じレベルの水田部にはまだかなりの住居跡が存在するだろうと思われる。住居跡、石棺墓、溝状遺構とセットでの検出は本市では初見であり一つの集落を検討する上でも良好で、また重要な遺跡であると考える。

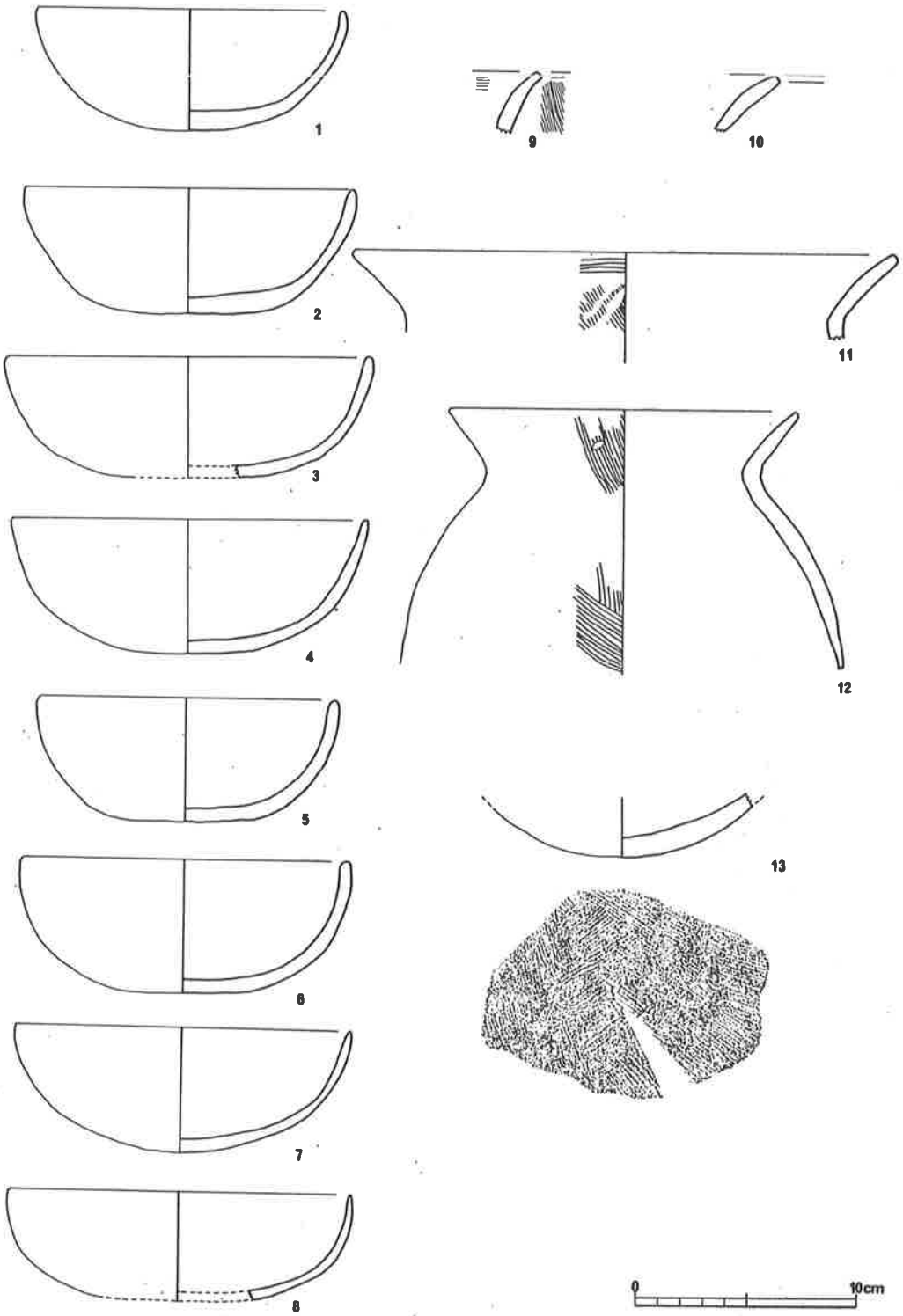
以下は各調査区より出土した遺物である。



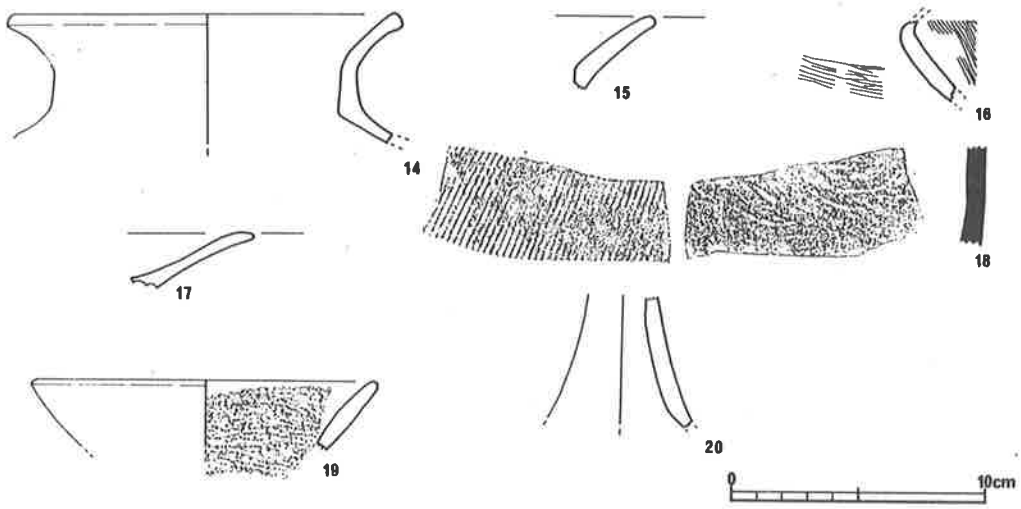
第27図　1号住居跡実測図（$\frac{1}{60}$）

171はナイフ形石器で表面右側辺に裏面より刀潰し加工を施す。T9－3層出土。**172**は剥片尖頭器で、T15－3層出土。**173**はナイフ形石器で先端部を欠損する。刀潰し加工は裏面より施す。T15－3層出土。**174**・**175**は台形様石器で、**174**はT24－3層出土。**175**はT9－3層出土。すべて黒色黒曜石製。

176～**205**は縄文時代の石器である。石鏃は基部の特徴から1類の平基式と2類の凹基式とに分かれる。平基式の1類のものでは石鏃の下端が外湾するもの1a類と、内湾するもの1b類と、直線をなすもの1c類に分けられる。1a類は**186**。1b類は**177**～**183**。1c類は**184**。2類は**176**。**187**～**191**は先端部を欠損している。**179**は安山岩製。**180**は乳白色黒曜石製。その他は黒色黒曜石製である。**177**はT68－3層出土。**182**はT26－3層出土。**187**はT14－

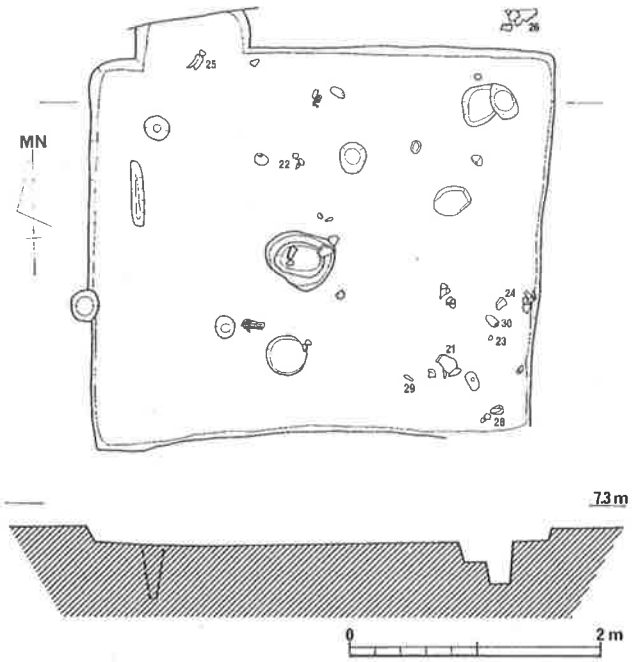


第28図　1号住居跡出土遺物①（$\frac{1}{3}$）



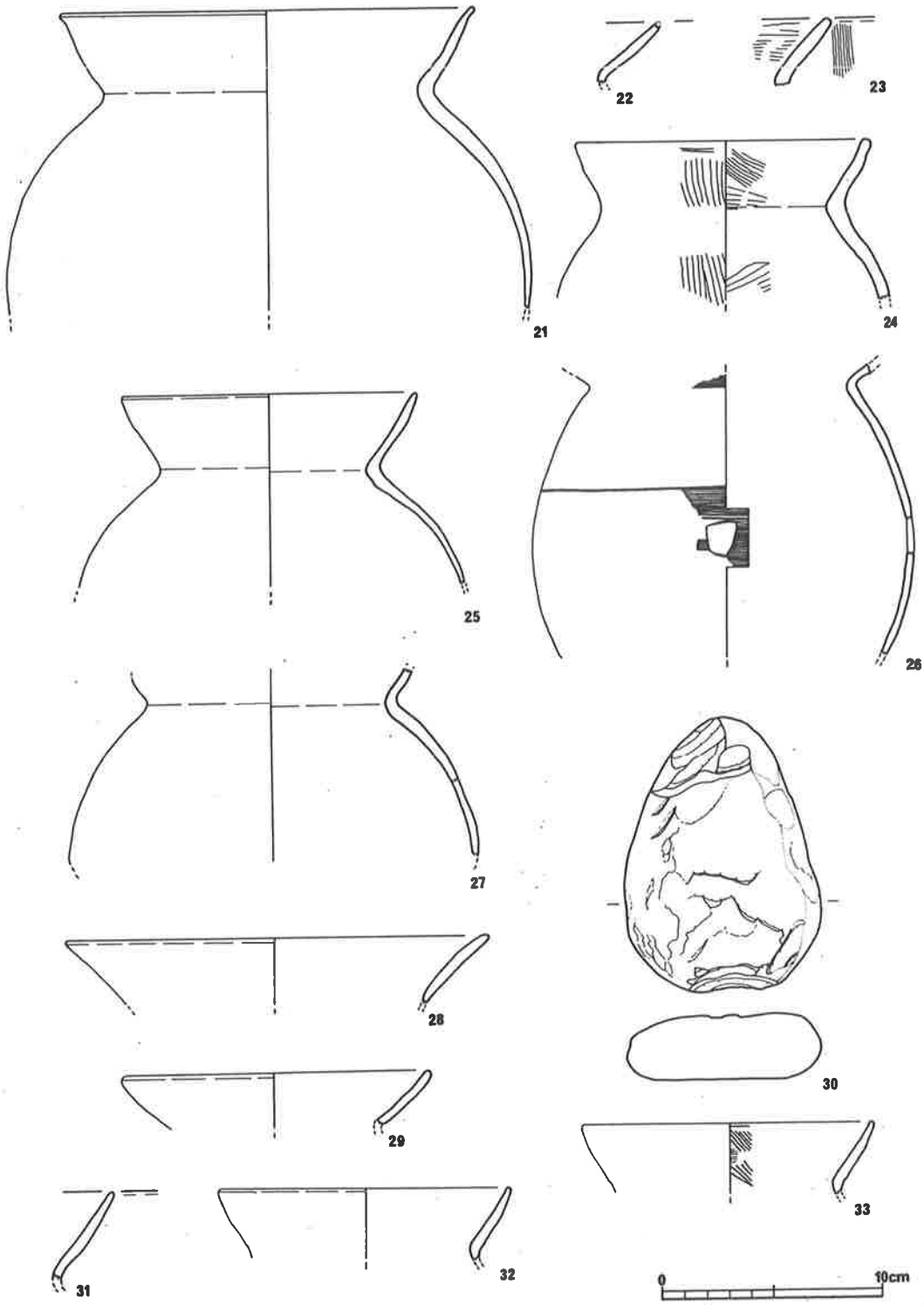
第29図　1号住居跡出土遺物②（$\frac{1}{3}$）

3層出土。その他の12点はT 22出土である。**189**・**191**が8層出土で、他は11層出土である。**185**はサイド・ブレイドで、黒色黒曜石製。T22－11層出土。**192**は安山岩製スクレイパーで、T 32－2層出土。**193**は灰青色黒曜石製のスクレイパーで、T 22－11層出土。**194**～**199**はT 22出土で、**194**は使用痕のある剥片である。黒色黒曜石製で11層出土。**195**は剥片で11層出土。**196**は剥片で8層出土。黒色黒曜石製。**197**は使用痕のある剥片で灰青色黒曜石製。9層出土。**198**・**199**は剥片で黒色黒曜石製。**198**が9層、**199**が11層出土。**200**は黒色黒曜石の石核である。円礫を利用し、打面調整後に一つの打面から、一定方向に剥離を行っている。一部自然面を有する。T 15－3層出土。**201**は安山岩製のスクレイパーである。表面左側辺には使用痕がある。T 22－11層出土。**202**・**203**は安山岩製の剥片で、T 22－9層出土。**204**はT 22－9層出土の凹石である。硬質砂岩製。**205**はT 31－3層出土で、箱式石棺墓より上層から出土している扁平打製石斧である。石質は安山岩系で、器形は短冊形を呈する。刃部の破損が顕著でないため、木材等を切り割るという機能は薄い。むしろ鍬的な土掘具の使用が考えられる。

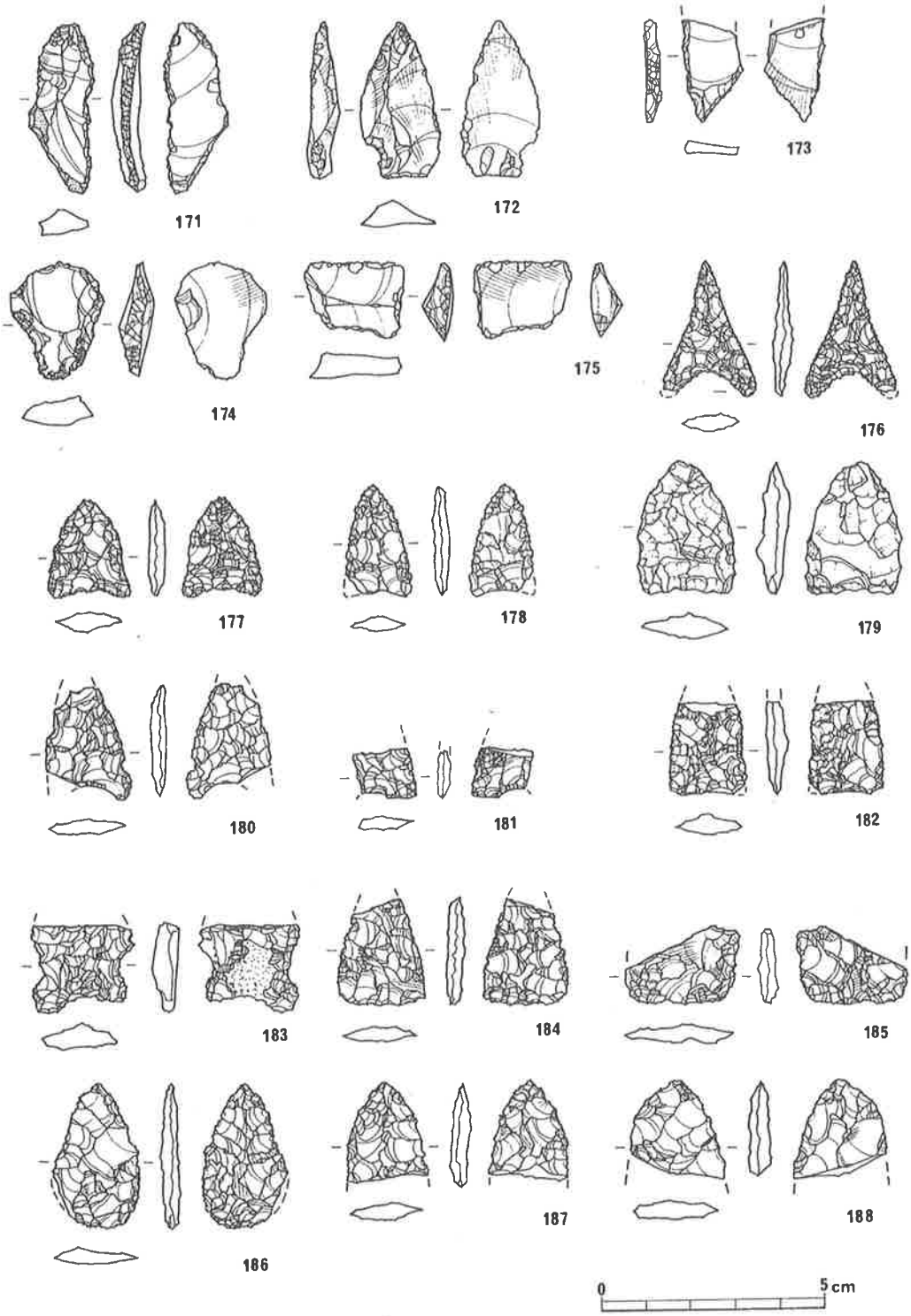


第30図　2号住居跡実測図（$\frac{1}{60}$）

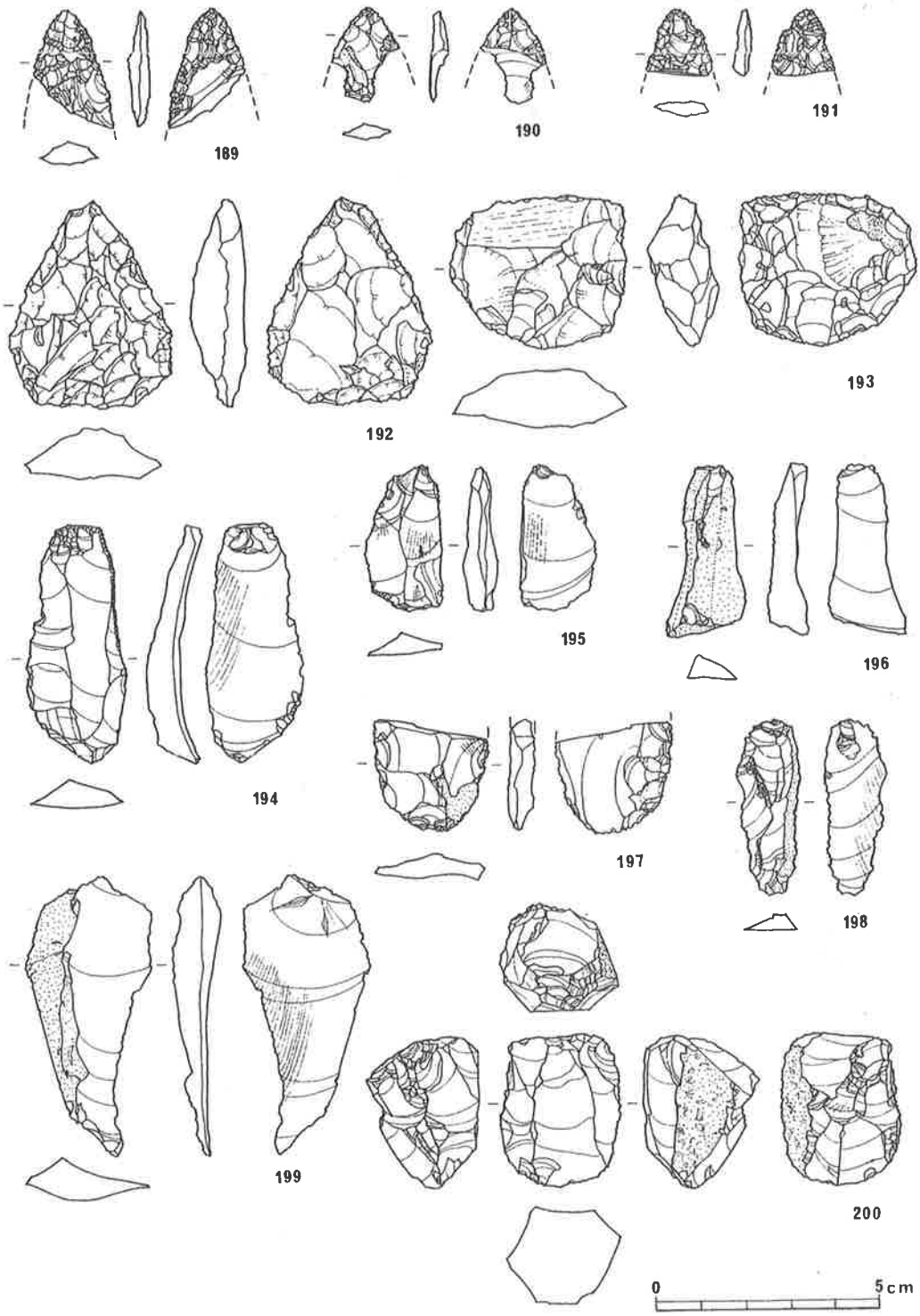
206～**230**は縄文時代晩期の土器で、



第31図　2号住居跡及び周辺出土遺物(1/3)

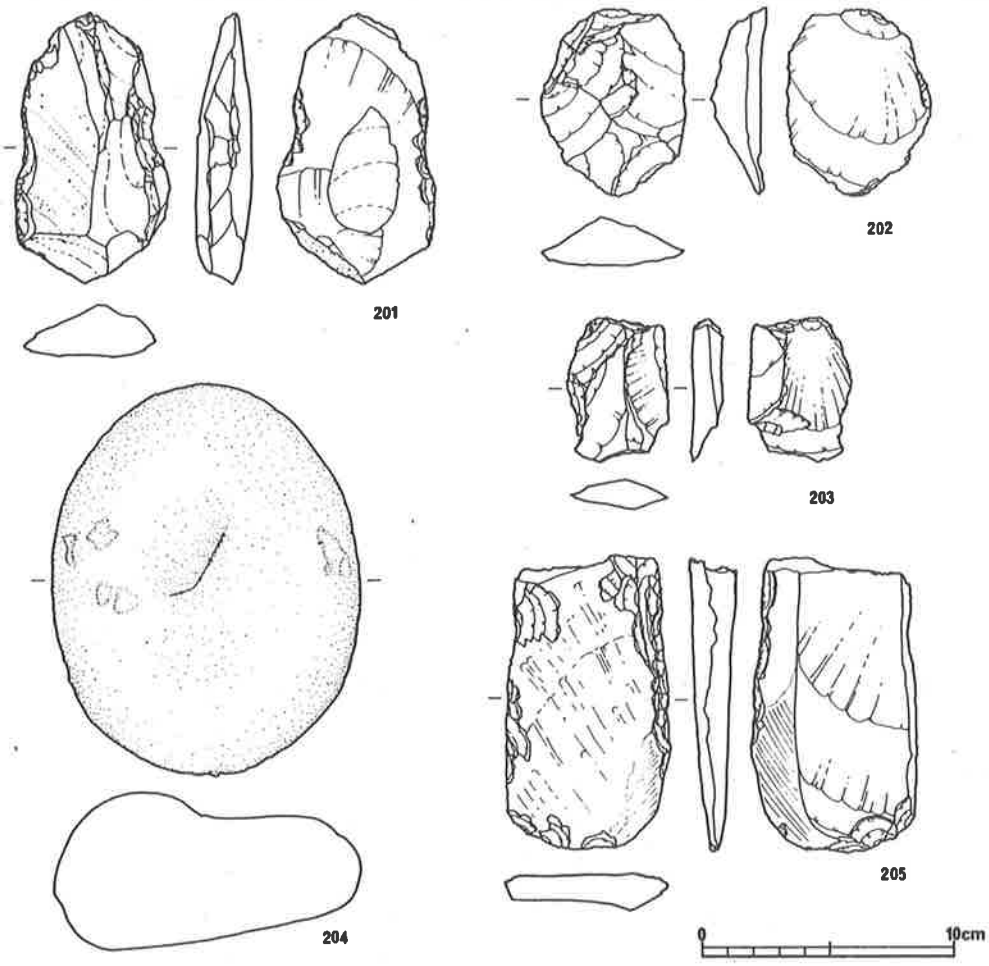


第32図　第 2 次調査出土遺物①（$\frac{2}{3}$）



第33図　第２次調査出土遺物②（$\frac{2}{3}$）

すべてT 22より出土している。ほとんどが粗製土器で精製土器は**222**と**228**の2点のみである。**206**は大形の深鉢で口径45㎝を測る。口唇部は水平で、内外面に粗い条痕を施す。色調は茶褐色を呈する。**207**は口径33.2㎝の深鉢で、内外面条痕あり。摩滅が著しい。黒褐色を呈す。**208**は口径29.4㎝の深鉢で、口唇部は丸く施している。色調は暗褐色で部分的に煤の付着で黒色を呈する。器壁は薄く、整形は外面条痕、内面ナデ調整である。**209**は口唇部は平坦にし、内外面をナデ調整している。茶褐色を呈す。**210**は内外面とも条痕が施されている。淡茶褐色を呈す。**211**は摩滅が著しく外面に若干の条痕が確認できる。色調は外面淡黄褐色で内面黒褐色である。**212**は口縁端部を外反させている。黒褐色を呈する。**213**・**214**は同一個体で、口縁に近い部分が湾曲しており、鉢形になると思われる。内外面とも条痕が施されている。茶褐色を呈する。**215**は口縁部が先細り、やや尖り気味に丸くおさめている。内外面とも貝殻条痕が明瞭で、内面が幅広である。色調は淡茶褐色を呈する。**216**は外面条痕、内面ナデ調整である。黒褐色を呈す。**217**は鉢形の無文土器で内面ナデ調整。口唇部は平坦仕上げである。色調は暗



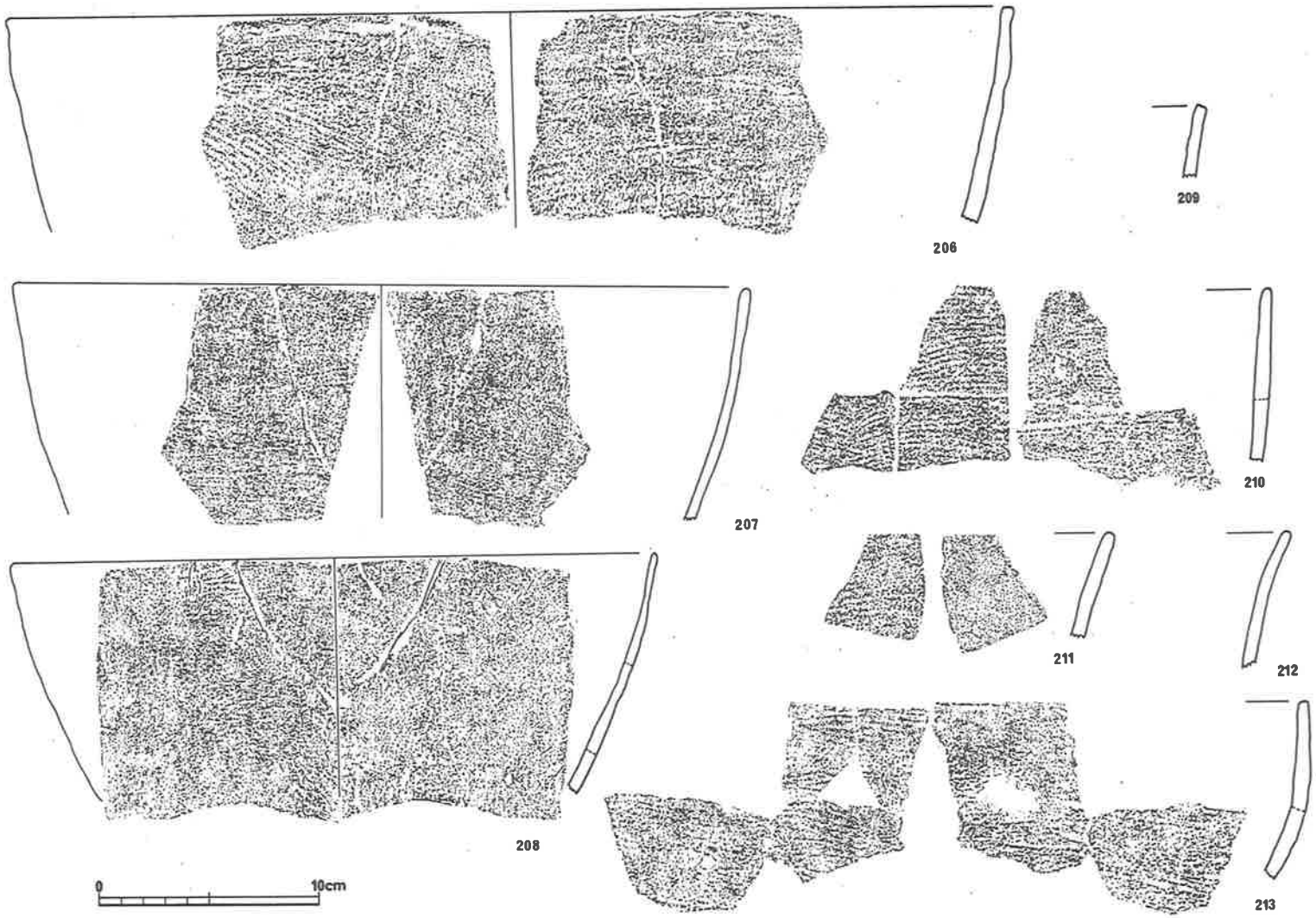
第34図　第2次調査出土遺物③（$\frac{1}{3}$）

黒色を呈す。**218**は「く」字に曲った所で欠損しているので胴部か定かでない。内外面ナデ仕上げが行われている。**219**は肩部に弱い貼り付け突帯を有する土器で、内面茶褐色、外面淡黄褐色を呈し、条痕が施されている。**220**は内面条痕で、外面より穿孔している。淡茶褐色を呈す。**221**は胴部片で、外面条痕、内面ナデ仕上げである。外面褐色、内面茶褐色を呈す。**222**は内外面とも黒色でヘラ磨きが施されている。全体に皿状の器形を呈し、直線的になる。**223**は無文の浅鉢で内外面にナデ調整が施されている。口唇部は丸くおさめている。**224**はリボン状突起を有するが、貼り付けの痕跡が明瞭である。外面は浅い条痕が施され、内面はナデが見られる。色調は淡茶褐色を呈し、口縁から突起部位にかけて煤状に黒くなっている。**225**もリボン状突起を有している。外面条痕で、内面はナデ仕上げである。内面黒褐色である。**226**・**227**は薄手に仕上げてある口縁部片である。壷であろうか。**228**は浅鉢形で「く」字形に外反する口縁に扁球形にふくらむ低い胴をもつものである。口径は26㎝で、胎土、焼成とも良好である。色調は淡橙褐色を呈する。**229**・**230**は底部片である。**229**は底径5㎝でほぼ平底である。**230**は底部断面が台形状を呈する。底径は10.4㎝で赤褐色を呈する。**219**・**223**・**228**は胎土に雲母を含んでいないが他には含んでいる。8層出土は**218**・**223**・**224**で、9層出土は**216**・**217**・**220**～**222**・**229**である。他は11層出土である。各層からの出土遺物は石器も含めて8層108点、9層252点、11層175点であった。これらの土器は晩期前半期の黒川式に相当する。

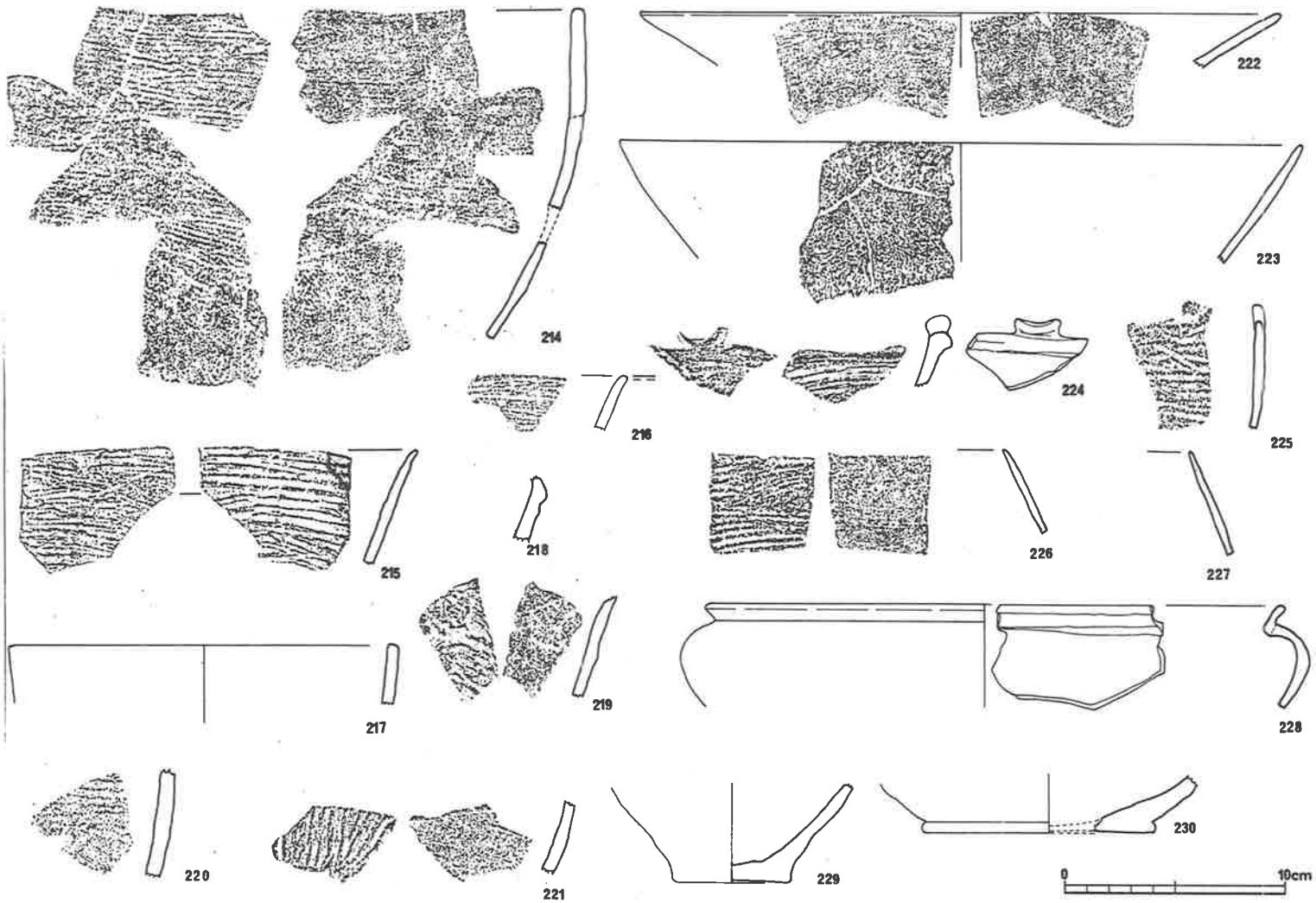
縄文晩期の土器以外では、中期の土器片が1点のみ出土した。**231**は無文で胎土に多量の滑石を混入している。T 26－3層出土。

弥生土器では1号幹線排水路部分の調査区より多数出土している。しかし、図示できたのは3点の底部のみである。その他ではT 24、T44より出土している。**232**は甕の破片であろうか。台形を呈する突帯をもち刻目を施している。色調は外面灰黄色で、内面赤褐色を呈し、砂粒を含む胎土で、焼成は良好である。後期の資料であろう。**233**～**235**は弥生中期中頃の甕形土器の底部で、直線的に立ち上がっている。**233**はT 11－3層出土で、甕棺の底部ではないか。内外面粗く石英粒を多量に含む。**234**もT 11－3層出土。**235**はT 15－3層出土。

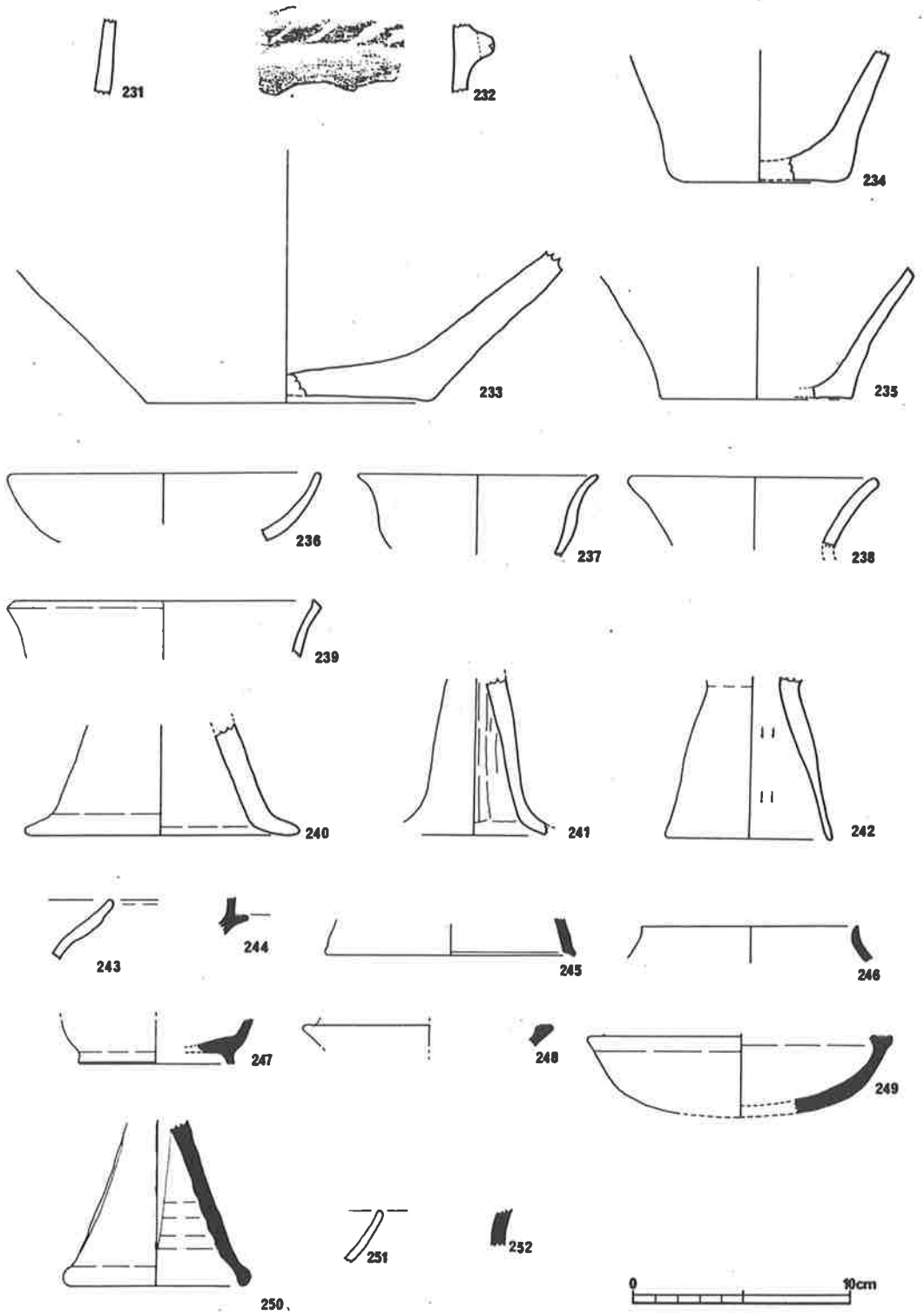
古墳時代の古式土師器及び須恵器はT 11、T30～T 40、T43～T47、T 55、T 68で出土している。**236**は土師器杯で、口径14㎝の比較的小型である。**237**は口径11㎝の小型壷であろうか。胴部を若干肥厚させ口縁端部は外反している。焼成良好で赤褐色を呈する。T 32溝出土。**238**も溝出土の甕である。淡褐色を呈す。**239**は口径13.7㎝で口唇部を平坦にし、内側につまんでいる甕である。褐色を呈する。**240**～**242**は高杯の脚部破片で胎土に茶色の粒を含んでいる。**240**は大きく外反する脚裾部が端部で踏ん張り気味になる。裾部外径12.6㎝を有する。淡褐色を呈す。T 45－3層出土。**241**はスマートで裾部の屈曲が鋭い。内面は縦方向へのヘラミガキ仕上げである。赤褐色を呈す。T 47－3層出土。**242**は脚が長く外方向へ直立する。内面に粗いハケが見られる。褐色を呈す。T 45－3層出土。これらは5世紀代に包括される。



第35図　第２次調査出土遺物④（$\frac{1}{3}$）



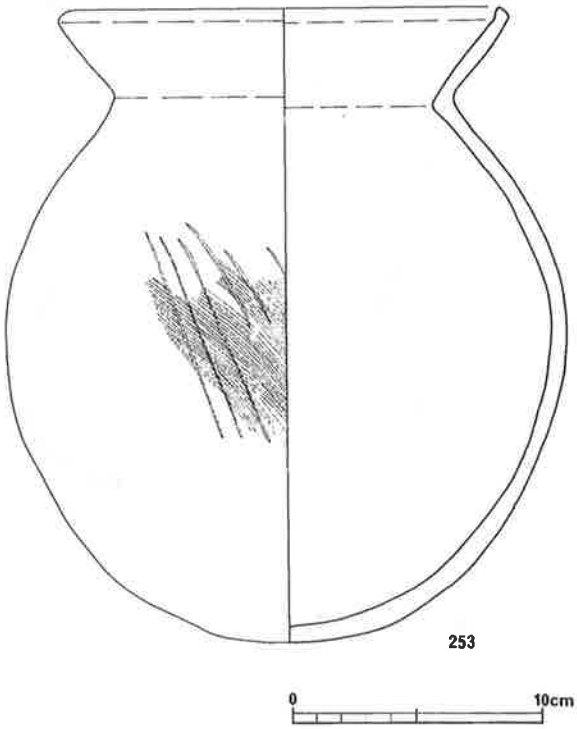
第36図　第２次調査出土遺物⑤（$\frac{1}{3}$）



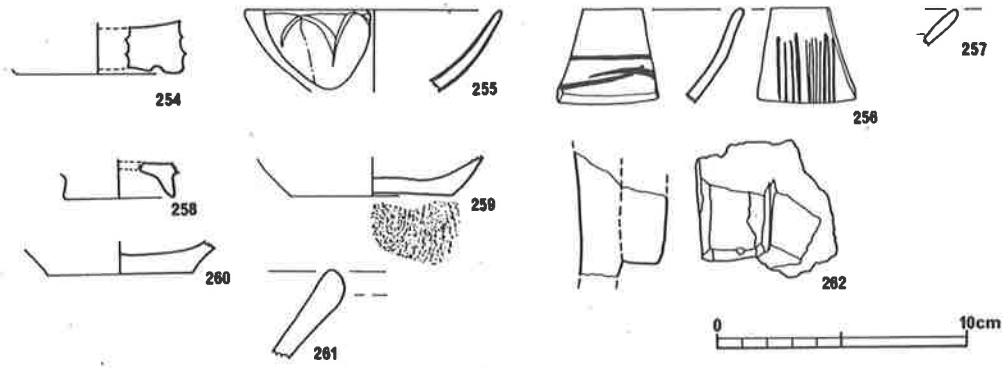
第37図　第２次調査出土遺物⑥（$\frac{1}{3}$）

243 は甕口縁部片で、外面に横位のハケ目が施されている。**244**～**250**・**252** は須恵器である。**244** は杯身で、内湾気味に立ち上っている。T35－3層出土。**245** は杯蓋で、口縁端部に段が見られる。T68－3層出土。**246** は高杯か壷の口縁部破片であろうか。T35－3層出土。**247** は杯身で、高台の接地面はほぼ平らである。T43－3層出土。**248**・**249** も杯身で、T37－3層出土。**250** は高杯脚部で先端部から下端まで長い方形の透孔を施す。脚部径8.6㎝を測る。T11－3層出土。**251**・**252** はT32溝出土で、**251** は土師器杯で、褐色を呈する。**252** は須恵器破片である。資料的には6世紀後半で、**247** が8世紀前半から中葉であろう。**253** は土師器甕で、体部の張りが大きい。口縁部は大きく外反しつつ内湾気味の口縁を有するものである。口唇部は内傾して肥厚する。底部は丸底を呈する。口縁部内外ヨコナデ、体部外面は細かいタタキを行いその上を沈線が施されている。体部中位に煤の付着がめぐっている。胎土には茶色の粒を含む。口径17㎝、器高25.3㎝である。T43－3層出土である。典型的な布留式土器で4世紀後半代に位置づけられる。

中世期の遺物は1号幹線排水路部分で多数出土している。**254** は龍泉窯系青磁碗のⅠ－1類。釉は緑灰色を呈する。T15－3層出土。**255** も龍泉窯系青磁碗のⅠ－5・b類である。釉は深緑色を呈し、胎土は灰色である。T9－3層出土。**256** は同安窯系青磁碗のⅠ－1・b類で淡緑色の釉調である。T9－3層出土。**257** は同安窯系青磁皿の口縁部破片である。釉は淡灰緑色を呈し、胎土は灰白色である。T9－3層出土。**258** は土師器の高台部分である。胎土に茶色の粒を含む。**259** は土師器皿で、切りはなしは糸切りである。外面褐色、内面灰黄色を呈する。T30－2層出土。**260** も土師器皿で、磨滅してはいないが切りはなしはヘラ切りと思われる。外面褐色、内面淡褐色を呈する。T24－3層出土。**261** はT10－3層出土の東播系須恵質捏鉢である。**262** は滑石製石鍋で方形の耳を有している。A類の資料である。T51－3層出土。



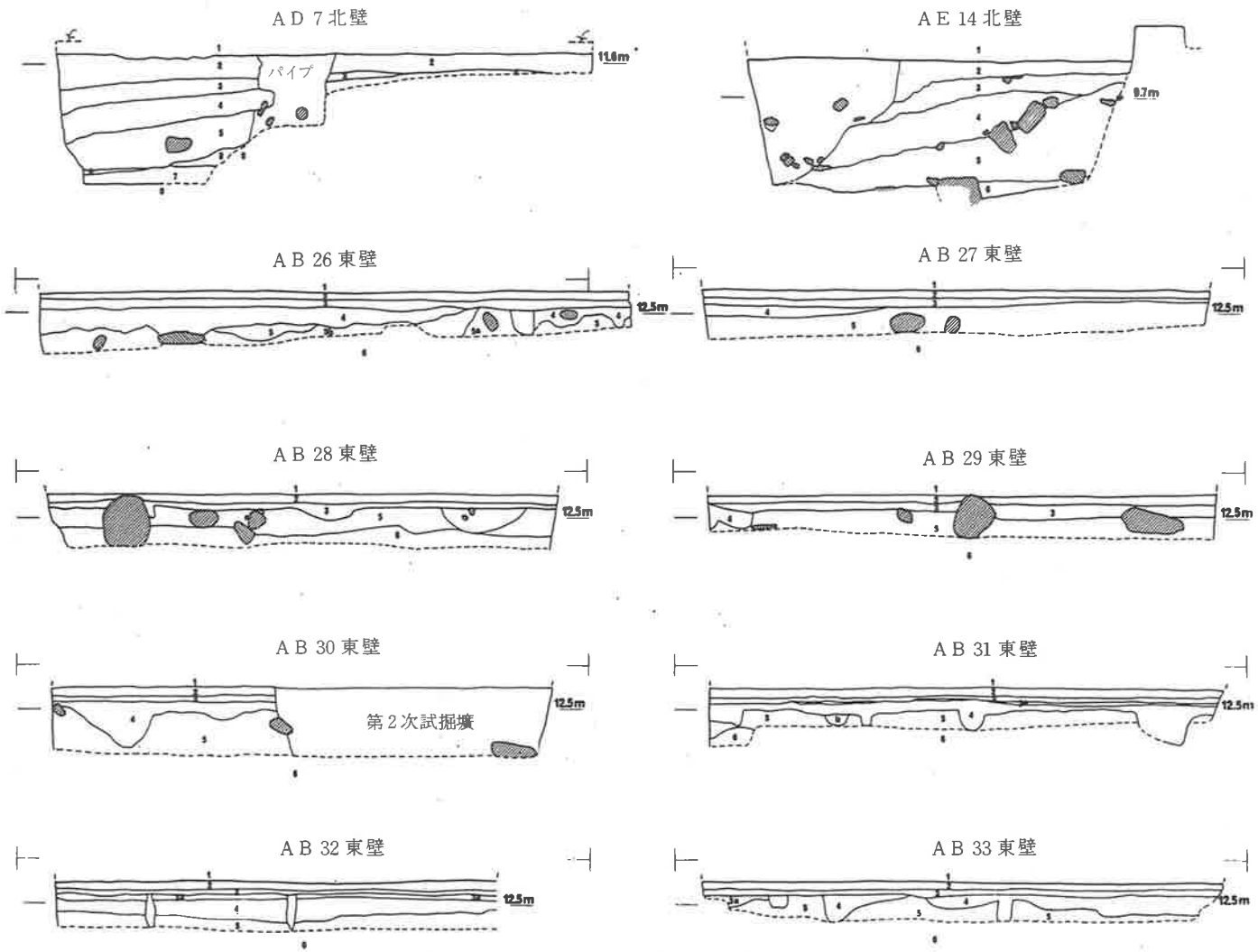
第38図　第2次調査出土遺物⑦（$\frac{1}{3}$）



第39図　第２次調査出土遺物⑧（$\frac{1}{3}$）

3.　第３次・第４次調査における土層及び検出遺構・遺物（第40図～第62図）

本調査では、設計変更できない１号幹線排水路部分において行った。遺跡は、北側で南北に長く東西に狭い棚田と、比較的広くなった南側とに分けられる。したがって、土層も北側と南側では異なっている。土層断面を第40図に示した。最も北側のＡＤ７の土層は１層は表土、２層は現在の田の床土で、黄褐色土、３層濁黄褐色土で、西側にそって傾斜している。４層も傾斜しており黒茶褐色土。５層は暗茶褐色土で30㎝程の堆積である。６層は西側に若干見られ濁黄色を呈する。７層は灰色で西側にのみ堆積している。８層は明褐色で地山である。ほぼ中央部は排水パイプが埋設されており攪乱されている。ＡＤ７より南側のＡＥ14では、１層は表土で30㎝の厚さである。２層は床土で黄褐色土、３層は濁茶褐色土で鉄分の沈殿が認められる。４層は色調は３層と同じだが土層の中に玄武岩風化礫が混在している。５層は灰青色混礫土で、東側が厚く、西側にそって傾斜しており土層も薄くなっている。６層はほぼ水平に堆積しており、灰青色粘質土である。弥生土器が多く出土した調査区の土層で、３層から５層に出土している。西側は石垣の裏込めである。南側の調査区では、東側は2.3ｍ上に、西側は１～1.7ｍで水田に移行する。調査区のほぼ中央で南北の土層状況で層位を区分すると１層は表土、２層黄褐色土で現在の田の床土である。３層は灰褐色粘質土で全面に堆積している。その厚さは10～15㎝でＡＢ29区で最大の数値を出す。全体に黒い斑点が入っている。３ａ層は濁茶褐色粘質土で、ＡＢ31～33の一部に薄く堆積している。４層はＡＢ26～27とＡＢ30～33までに分布し、20㎝程堆積している。一部落ち込んでいる箇所も見うけられる。色調は黒褐色粘質土である。５層は暗褐色粘質土で、各調査区で検出される安定した土層堆積を呈している。５ａ層は灰暗褐色土でAB26でのみ確認した。同じく５ｂ層もAB26のみで黄褐色粘質土である。６層は地山である赤褐色粘質土で、部分的に礫が混入している。しかし、調査区の東側であるAC～ADでは表土層の下にすぐ６層の赤褐色土が現われており、全体的に西に傾向しており、末端部が一番深くなって、石垣の裏込めへとつづいている。



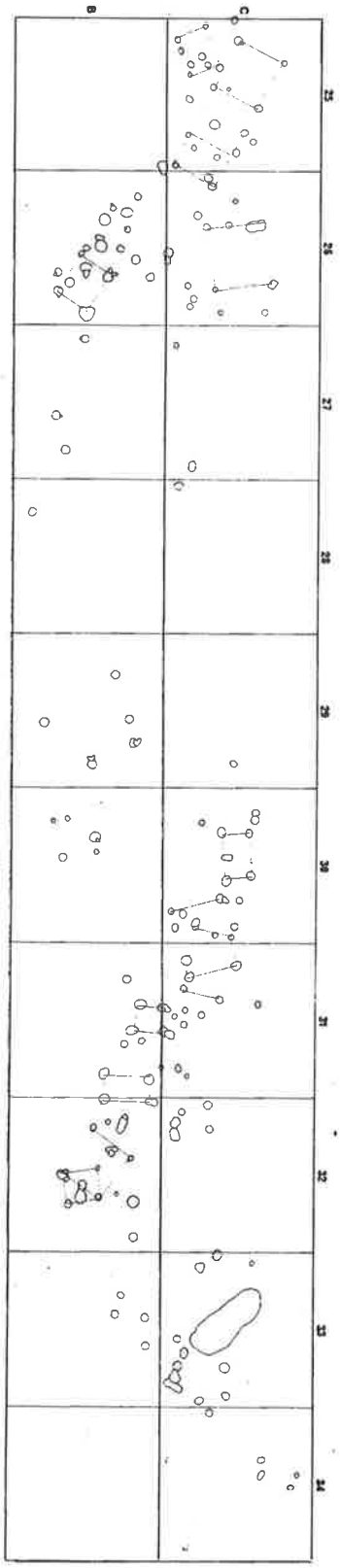
第40図　第3次・第4次調査土層図（$\frac{1}{60}$）

本調査での区域内で検出した遺構は、大小の柱穴のみであった。柱穴はAB26・AC25～26を一帯とする第1群と、AB32・AC30～32を一帯とする第2群に別れる。時期的には縄文時代・弥生時代と中世の複合した柱穴群と考えられる。これらの掘立柱建物跡は模式的に線引きを行った状況では、第1群では南北4.6m×東西1.6mの最大プランと北から1m×1.3m、2m×1.8m、1.4m×1.8mの4基の建物プランを作図することができた。第2群では7基を作図した。北側より1.4m×0.9m、2.2m×1.6m、2.1m×1.2m 0.9m×0.8m、1.5m×0.8m、1.8m×1.5m、1.2m×1mである。青磁・白磁の出土からすると、それぞれの時期は明瞭ではないが、いずれの建物跡も1間×1間の規模をもつものであり、かなり貧弱な状況下である。

第3次・第4次調査の本調査にて出土した遺物は、第3表の通り9,785点である。そのうち柱穴群が検出された南側地区では、総数5,962点が出土している。特にAA列～AB列の26～31区に集中している。特にAB26区では665点も出土している。AC列では33・34区が多いようだ。資料では旧石器時代25点(0.4%)、縄文時代892点(15%)、弥生時代1,204点(20.1%)、輸入陶磁器584点(9.7%)、土師器2,039点(34%)等となっている。その中でも中世期だけの遺物は2,889点である。土師器の割合は70.5%、輸入陶磁器は20.2%であった。第42図はAB31区の517点出土した遺物のドットマップである。北側地区のAE13区では517点が集中して出土している。弥生土器は3層～5層にまたがって535点(63.5%)であった。

以下は、本調査で出土した遺物について説明を行う。

旧石器時代の石器は、36点を図示した。遺物包含層は確認できず、中世の土層中に混在するかたちで出土した。そのうち代表的なナイフ形石器は19点、台形様石器7点、剥片尖頭器1点、舟底形石器1点、スクレイパー1点、使用痕のある剥片1点、彫器1点、細石刃2点、スポール1点、細石核2点であった。**263～281**はナイフ形石器で、細分が可能である。側縁部の2次加工部位によって、二側縁加

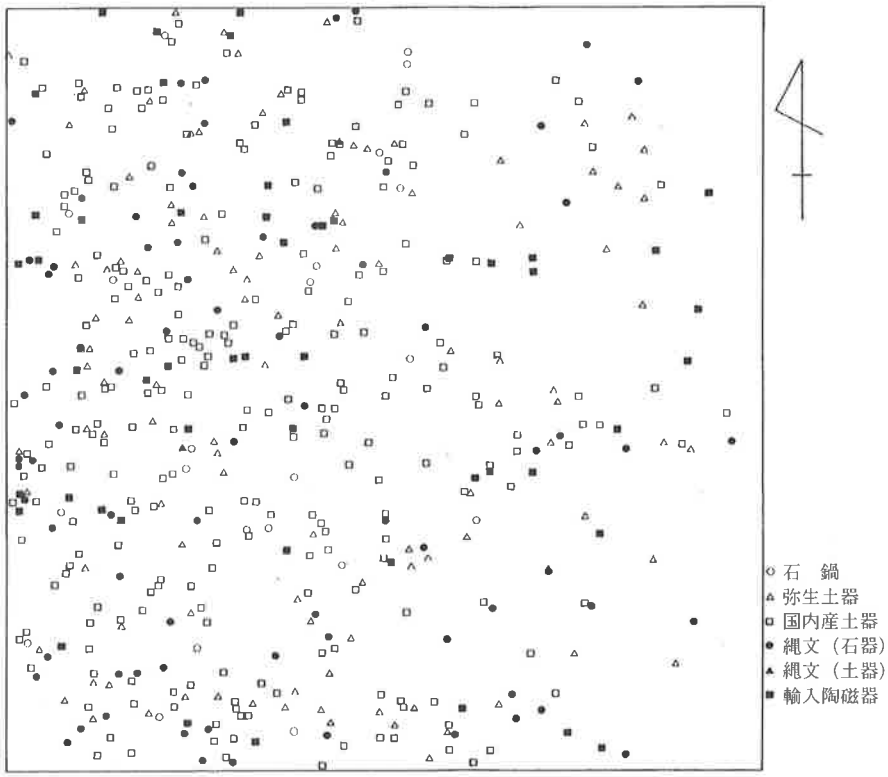


第41図 第3次調査掘立柱建物跡図(1/240)

第3表　第3次・第4次調査遺物出土点数

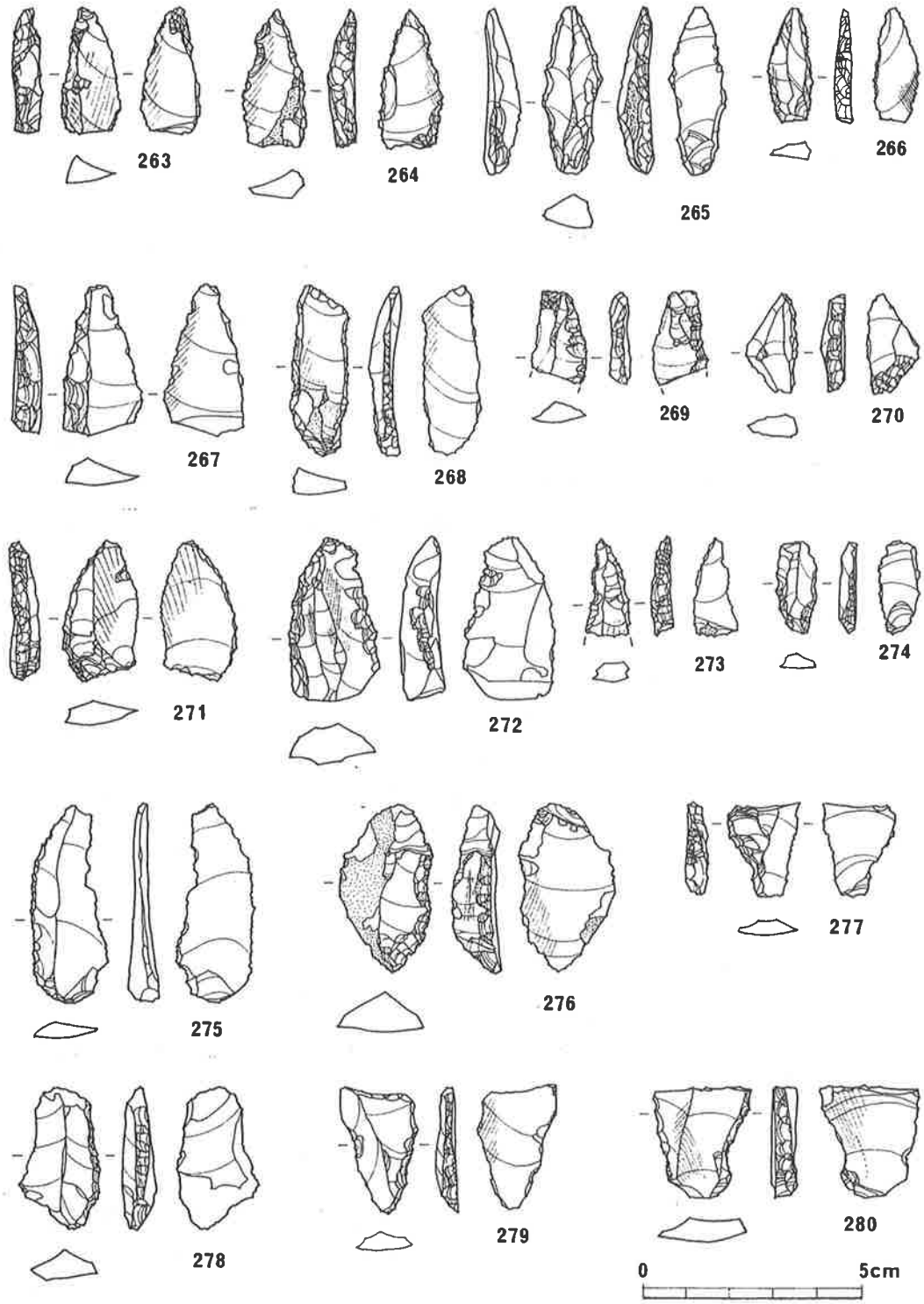
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
E											10		843	86
D							482	259	466	383	80			
C	81	139	174	58	98		35	212	201	216				
B														
A														

	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37
E														
D											25			
C		43	52	28	7	12	57	21	47	108	143			
B	81	275	665	367	283	600	392	517	133	130	177		22	
A			27	376	381	387	358	229						19



第42図　ＡＢ31遺物出土状況（$\frac{1}{50}$）

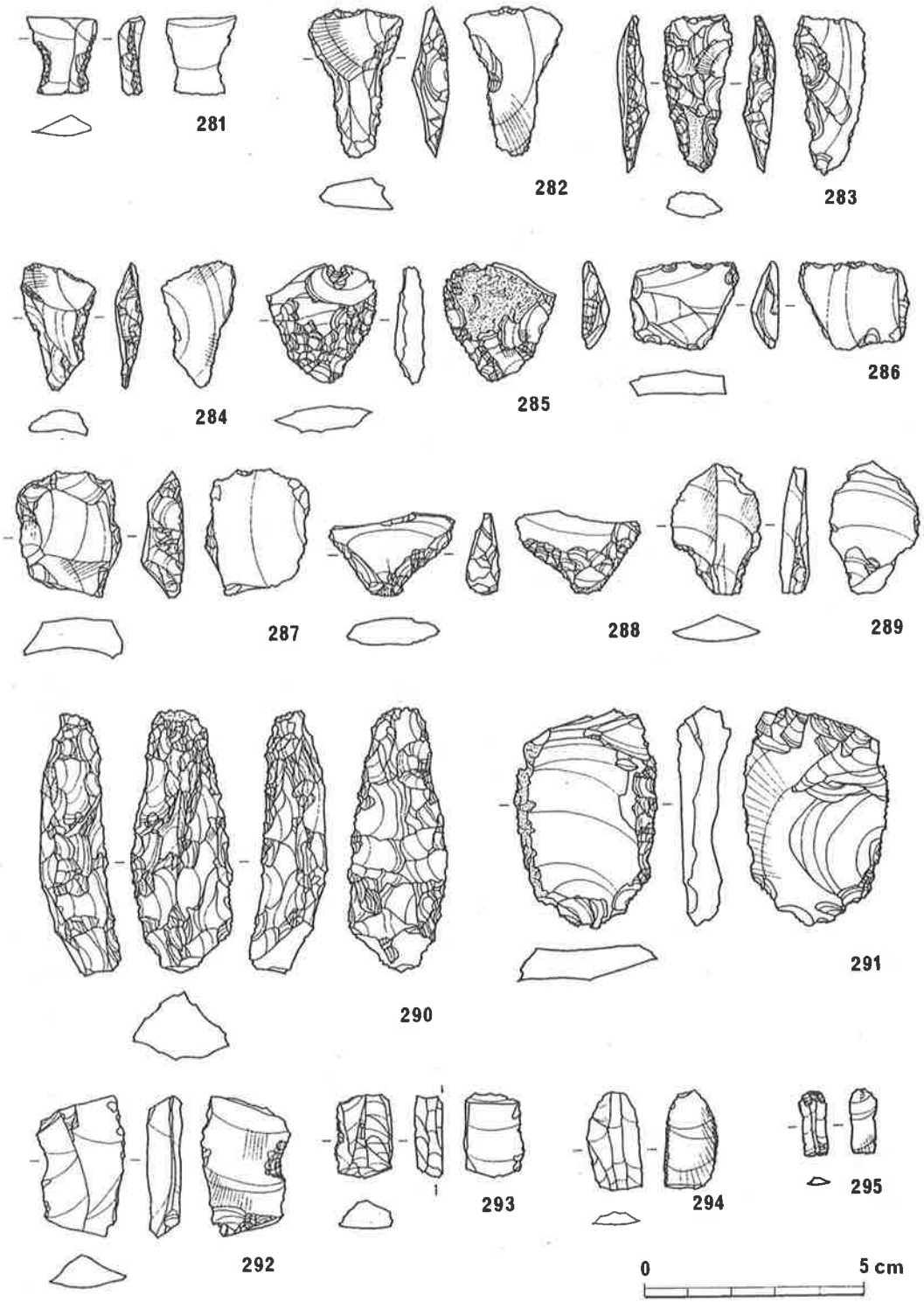
工のものと一側縁加工を施したものとがある。二側縁加工のナイフ形石器は素材の剥片に2次加工を施す**263**・**265**～**270**と**274**がある。**265**は縦長剥片の打面を基部に利用し、基部裏面加工を施している。灰青色黒曜石製である。**269**も基部裏面加工を施す。**263**・**267**は基部欠損。**270**は切出形の形状を呈する。いずれの資料も黒色黒曜石製で刃部には使用による刃こぼれが認められる。一側縁加工のナイフ形石器は、**264**・**271**～**273**・**275**～**281**がある。**273**は表裏より刃潰し加工を施している。**276**は断面三角形状を呈す。**277**・**281**は火を受けたためか全面に貫入が走っている。**282**～**288**は黒色黒曜石製の台形様石器で、刃部及び側縁部の2次加工に特徴をもつ。**282**～**284**は台形様石器で横長剥片を利用し、直線ないし斜交する刃部を呈し、刃部に対して器長が長いものである。**283**は器表面に両端より平坦な剥離を施し、**284**は



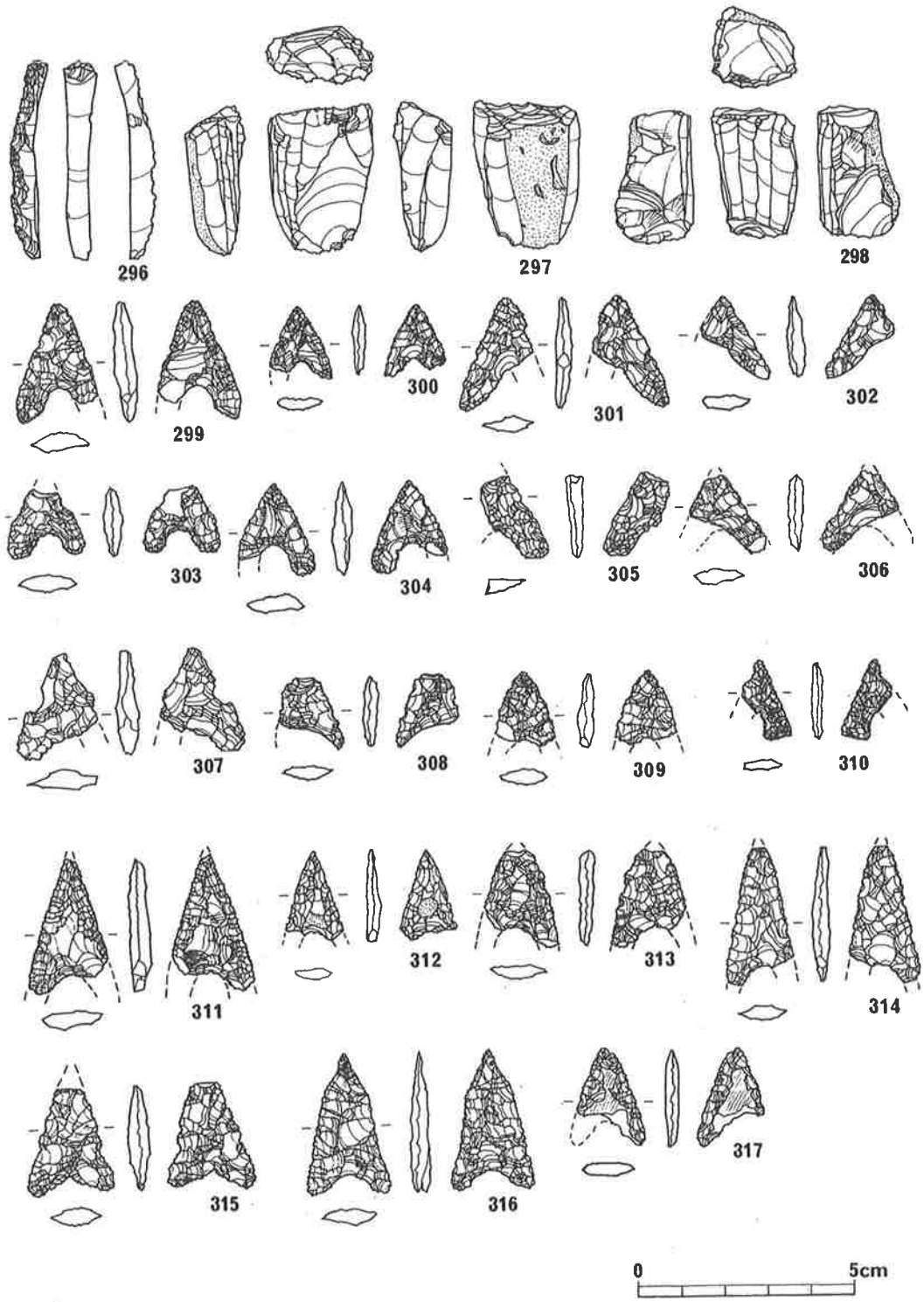
第43図　第３次・第４次調査出土遺物①（$\frac{2}{3}$）

一端より施している。**282**は裏面より鋭角に刃潰し加工を施している。**285**～**288**は器長より刃部の幅が広いもので、刃部と基部がほぼ平行して台形状を呈す。**286**・**287**は一端は調整加工で、他は折断面をもつ。**285**・**288**は曲線を呈する刃部の一端及び両端が突出する特徴をもつものである。**288**は横長剥片の打面を基部に利用している。**289**は黒色黒曜石製の剥片尖頭器で、縦長剥片の打面部を基部に利用し、左右対象的に両側縁より刃潰し加工を施し、湾曲した基部を作り出している。先端部を欠損する。**290**は黒色黒曜石製の舟底形石器で、断面二等辺三角形状を呈す。全面に2次加工を施し、器表面の稜上から両側縁部へと調整後に今度は両側縁部から稜上へと行われている。裏面は両側縁から左右対象的に加工を施している。**291**は黒色黒曜石製のスクレイパーで、一側縁加工は丁寧である。**292**は黒色黒曜石製の縦長剥片を利用し、側縁部の一端に抉入状の使用痕が顕著である。**293**は黒色黒曜石製の彫器で両端より1条の樋状剥離を施している。**294**・**295**とも細石刃の頭部で、黒色黒曜石製。**296**は黒色黒曜石製の第1スポールである。細石刃剥離の際に第1番目に剥離されたもの。**297**・**298**は黒色黒曜石製の細石核である。**297**は打面部調整後に、12条の細石刃剥離を行っている。剥離は背面にまでおよんでおり、半円錐形石核である。**298**は側面観が台形状を呈し、側縁部は背面より粗い調整加工を施し、背面に一部自然面を残す。打面部は平坦で、5条の細石刃剥離痕が残る。舟底形細石核である。出土地区では、**263**はAE13－3層。**264**はAB25－222。**265**はAB28－2。**266**はAD10－2層。**267**はAC10－8層。**268**はAB25－141。**269**はAB28－224。**270**はAC10－2層。**271**はAA31－157。**272**はAD10－5層。**273**はAA30－209。**274**はAC10－3層。**275**はAB31表採。**276**はAB25－46。**277**はAC30－53。**278**はAB30－60。**279**はAB33－29。**280**はAE14－2層。**281**はAB表採。**282**はAB25－269。**283**はAC34－128。**284**はAA37－2。**285**はAB28－244。**286**はAC27－14。**287**はAA31－91。**288**はAB26－287。**289**はAA表採。**290**はAB33－105。**291**はAB25－225。**292**はAB27－267。**293**はAC27－2。**294**はAC8－3。**295**はAB28－9。**296**はAC2－3。**297**はAA31－159。**298**はAA27－246。

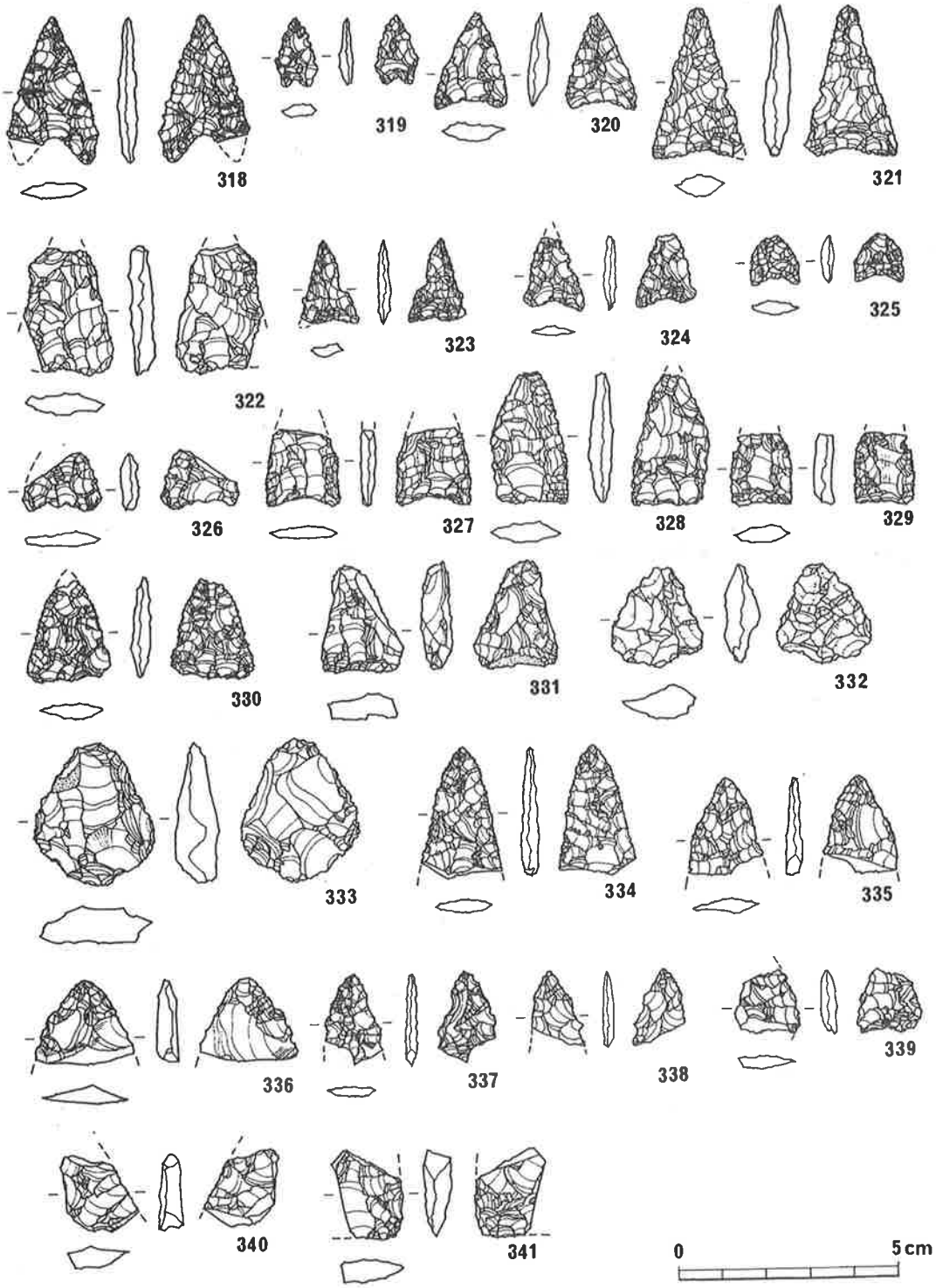
縄文時代の遺物は892点のうち石器69点、土器7点を図示した。石鏃は42点ある。第2次調査同様に基部の特徴から平基式と凹基式とに分けた。1類では石鏃の下端が外湾するものを1a類。内湾するものを1b類。直線をなすもの1c類に分けられる。2類は石鏃の側縁の形が直線的なもので、脚部下端が直接的なもの2a類。脚部下端が丸いものを2b類。脚部が尖るものを2c類とした。石鏃の側縁の形が曲線を描き外湾するものを3類とし、脚部下端が丸いものを3a類。脚部が尖るものを3b類とした。4類は肩部がはり駒形を呈するもの。1a類は**332**・**333**。1b類は**320**～**327**。1c類は**328**～**331**。2a類は**305**・**310**。2b類は**306**・**307**・**315**・**316**。2c類は**299**・**301**・**302**。3a類は**303**・**304**。3b類は**300**。脚部を欠損しているが2類に**308**・**311**・**312**・**314**。3類に**309**・**313**がある。4類は**318**・**319**がある。**334**～**338**は脚部を欠損している。**339**・**340**は先端部と脚部を欠損している。**317**は局部磨製石鏃



第44図　第３次・第４次調査出土遺物②（$\frac{2}{3}$）



第45図　第３次・第４次調査出土遺物③（$\frac{1}{2}$）



第46図　第３次・第４次調査出土遺物④（$\frac{2}{3}$）

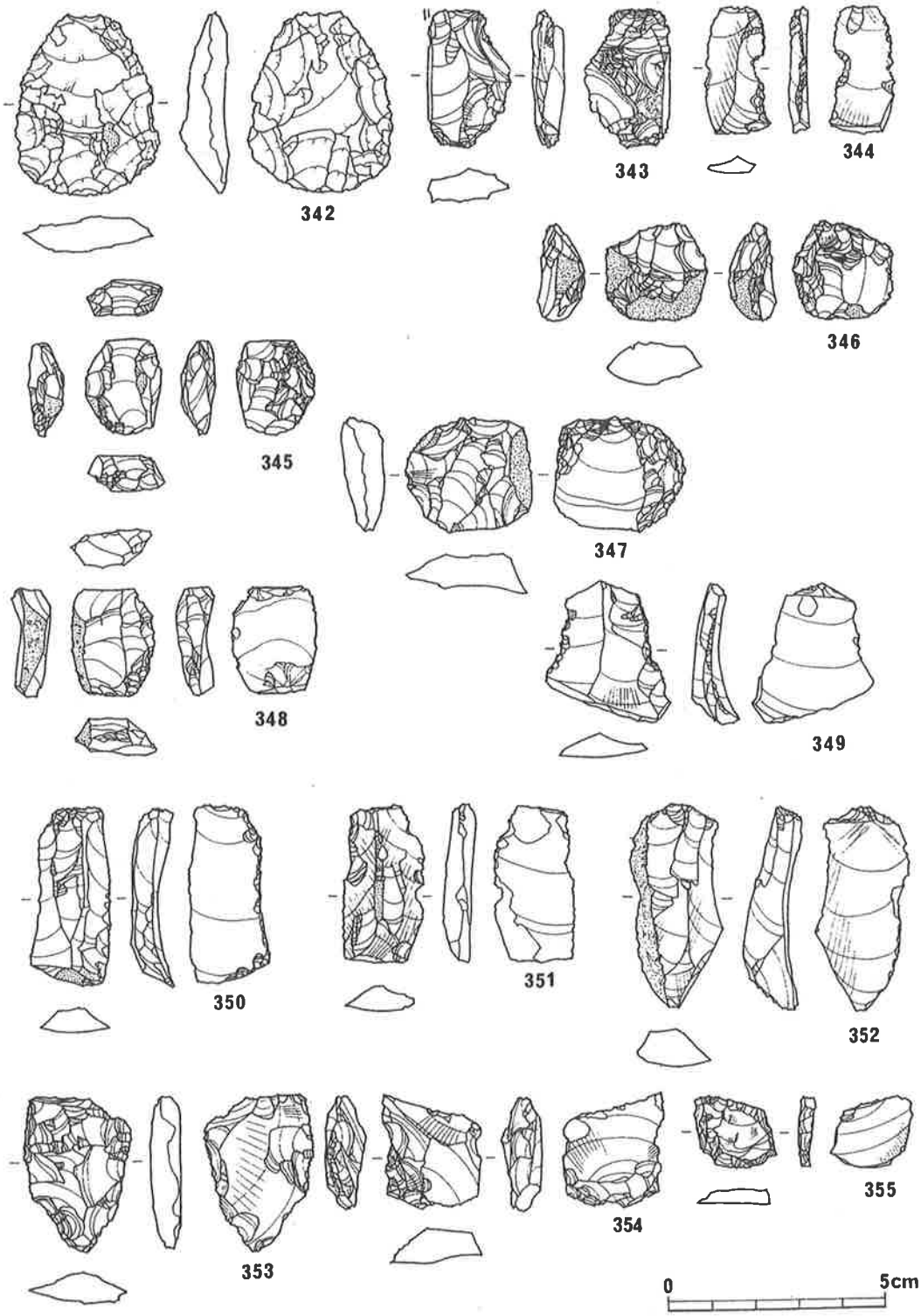
第4表　石鏃計測表

（　）は推定値

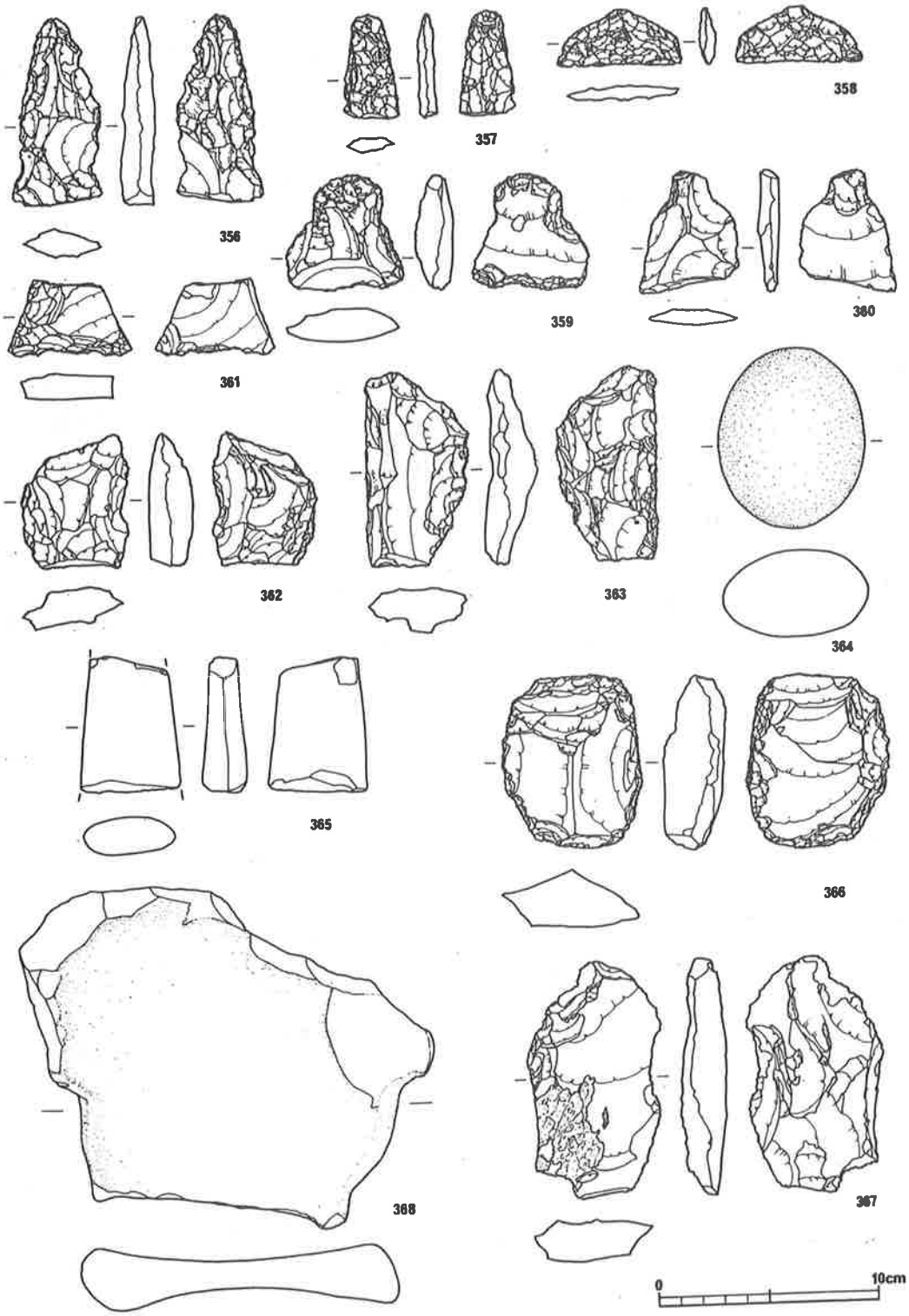
挿図番号	出土地区	石　材	重量 (g)	大きさ (cm) 長さ	幅	厚さ	抉り (cm) 深度	幅	先端角度	欠損部位
299	AA 31−45	黒色 ob	1.5	2.7	1.9	0.4	0.8	(0.9)	40°	片　脚
300	AB 26−579	〃	0.4	(1.7)	1.5	0.3	0.4	(1.0)	57°	〃
301	AA 27−342	〃	0.8	2.6	(2.0)	0.4	0.9	—	40°	〃
302	AB 28−77	〃	0.6	(1.9)	—	0.4	—	—	63°	〃
303	AC 33−84	〃	0.7	—	1.3	0.4	0.5	1.1	46°	先　端
304	AA 30−239	〃	0.9	2.1	(1.8)	0.4	0.8	(0.7)	53°	片　脚
305	AA 28−138	〃	0.8	—	—	0.4	0.7	—	—	片脚・先端
306	AC 10−3層	〃	0.5	—	—	0.35	—	—	67°	〃
307	AA 28−142	〃	1.4	2.4	(2.1)	0.4	0.4	(1.1)	—	片　脚
308	AA 27−178	〃	0.5	—	—	0.3	0.4	—	41°	〃
309	AC　8−3層	〃	0.6	—	—	0.35	—	—	51°	両　脚
310	AD　9−3層	〃	0.3	1.9	(1.4)	0.2	0.7	(0.3)	47°	片　脚
311	AA 29−126	〃	1.8	—	—	0.4	—	—	37°	両　脚
312	AB 25−119	〃	0.6	—	—	0.3	—	—	43°	〃
313	AC 25−34	〃	1.0	—	—	0.3	—	—	30°	両脚・先端
314	AA 28−132	灰青色 ob	1.3	—	—	0.35	—	—	25°	〃
315	AB 27−72	黒 色 ob	1.5	2.0	2.0	0.5	0.4	1.5	35°	先　端
316	AC 32−32	〃	1.4	3.2	1.9	0.35	0.4	1.4	26°	完　形
317	AB 28−46	〃	0.7	2.2	(1.7)	0.3	0.5	(1.4)	42°	片　脚
318	AB 30−267	〃	1.7	3.4	2.1	0.4	0.6	1.4	38°	〃
319	AB 30−252	〃	0.3	1.6	(1.0)	0.3	0.15	0.4	42°	〃
320	AA 27−175	〃	1.0	2.2	1.6	0.4	0.2	1.2	44°	完　形
321	AB 31−246	灰青色 ob	2.6	3.5	2.1	0.55	0.2	(1.5)	32°	片　脚
322	AA 27−4	黒色 ob	2.9	—	2.2	0.5	0.2	(1.0)	26°	片脚・先端
323	AB 31−484	〃	0.5	1.9	(1.4)	0.3	(0.1)	(0.8)	36°	片　脚
324	AA 31−8	〃	0.5	—	(1.4)	0.25	0.3	(1.2)	36°	片脚・先端
325	AA 27−83	〃	0.3	1.1	1.1	0.3	0.1	0.8	59°	完　形
326	AA 27−101	〃	0.7	—	(1.8)	0.3	0.2	(1.0)	—	先　端
327	AC　4−4層	〃	1.1	—	1.6	0.3	0.2	1.4	30°	〃
328	AB 25−21	〃	2.6	(3.3)	(2.0)	0.5	0	0	37°	片脚・先端
329	AD　9−3層	〃	1.2	—	1.4	0.4	0	0	—	先　端
330	AC 31−21	〃	1.4	(2.6)	1.9	0.4	0	0	35°	〃
331	AB 25−55	黒色 ob	2.8	—	—	0.6	0	0	—	両端・先端
332	AB 25−41	安 山 岩	2.7	2.3	2.1	0.7	—	—	51°	完　形
333	AA 27−4	黒色 ob	6.9	3.2	2.7	0.95	—	—	53°	〃
334	AC　7−5層	〃	1.5	—	—	0.4	—	—	27°	両　脚
335	AB 27−195	〃	0.8	—	—	0.3	—	—	48°	基　部
336	AB 29−320	〃	1.5	—	—	0.5	—	—	69°	〃
337	AA 27−113	〃	0.6	—	—	0.2	—	—	41°	〃
338	AB 27−179	〃	0.4	—	—	0.2	—	—	52°	〃
339	AB 27−291	〃	0.6	—	—	0.3	—	—	—	基部・先端
340	AA 30−96	〃	1.6	—	—	0.6	—	—	—	〃

である。**341**は両面とも入念な加工を加えた正方形に近いサイト・ブレイドである。**342**は安山岩製の掻器である。**343**は彫器で、表面の側縁部に2条の樋状剥離を施している。**344**はノッチドスクレイパーである。**345**～**348**は黒色黒曜石製の掻器である。**349**～**351**は黒色黒曜石製の縦長剥片の両側縁部に使用痕がある。**352**は黒色黒曜石製剥片。**353**～**355**は加工痕のある黒色黒曜石製剥片である。**356**は安山岩製の石鋸である。基部が平坦で、横に広がっている。先端部及び側縁部は両面から調整加工し作り上げている。長さ8.6㎝、幅（最大幅）4㎝を側る完形のものである。**357**は尖頭器の先端部分である。安山岩製。薄い剥片を素材として両側縁から調整加工を施している。**358**～**360**は石匙である。**358**は2次加工は刃部及び周縁において比較的細かく丁寧に施されている。安山岩製。**359**はつまみ部分が大きく作り出されている。安山岩製。**360**は中程より下端を欠損していると考えられるもので縦形の形態を成すものであろう。2次加工はつまみ部分から側縁にかけて施されており、剥片のときの状況を有している。安山岩製。**361**～**363**は安山岩製のスクレイパーである。**361**は一側縁全体に加工が施されている。**362**は表裏面より粗雑な刃部加工をもつ。**363**は肉厚の剥片に表面より刃部加工を施している。**364**は硬質砂岩の磨石である。**365**は両端を欠損する磨製製品であろう。石材は不明。**361**は大型の掻器で、安山岩製である。**367**も安山岩製のスクレイパーで、一側縁にのみ両面から2次加工が施されている。**368**は砂岩製の石皿である。欠損品のため、本来の大きさ、形状は不明である。表裏両面とも摩耗痕が認められ、両面使用されたものと考えられる。両面とも摩耗状態が深いためかなりの使用の痕跡をうかがわせる。出土地区は**341**はＡＢ27－315。**342**はＡＡ表採。**343**はＡＢ30－239。**344**はＡＢ29－358。**345**はＡＢ26－505。**346**はＡＢ30－3。**347**はＡＢ29－407。**348**はＡＡ29－298。**349**はＡＢ30－325。**350**はAC 32－12。**351**はAA 31－168。**352**はＡＣ30－6。**353**はAA 28－9。**354**はAB 28－70。**355**はAB 26－54。**356**はAB 30－101。**357**はAB 29－154。**358**はAB 28－157。**359**はAA 29－148。**360**はAA 27－211。**361**はAA 27－154。**362**はAB 26－450。**363**はAB 27－359。**364**はAA表採。**365**はAA 29－448。**366**はAE 13－4層。**367**はAC 30－29。**368**はAC 3－4層出土。**369**～**375**は縄文晩期の貝殻条痕を施す甕形土器で、全て外面条痕で内面ナデ調整である。胎土に雲母を含む。**371**は口縁端部に突帯をめぐらしている。**373**～**375**は甕形土器の底部である。**373**～**375**は底部が薄いもので、**374**は底部円盤が厚く、断面台形で、平坦である。出土地区は**369**はAC 33－122。**370**はAB 27－208。**371**はＡＢ 26－418。**372**はAC 33－45。**373**はAB 27－110。**374**はAE 13－4層。**375**もAE 13－4層出土である。

弥生時代の遺物は54点を図示した。**376**～**385**は壷形土器の頸部から胴部上位の資料である。**376**～**378**・**380**は羽状文が施されている。内外面淡褐色を呈す。胎土は粗い。**379**は貝殻による連続する縦位鋸歯文を施す。外面黒褐色を呈す。**381**は貝殻による鋸歯文を朱塗りした彩色壷でわずかに朱塗りの痕跡が認められる。外面茶褐色を呈す。**382**も連続する縦位鋸歯文を施す。いずれも胎土に石英粒と雲母の極微粒を混入している。**383**は片羽文の下位に突帯がめぐ

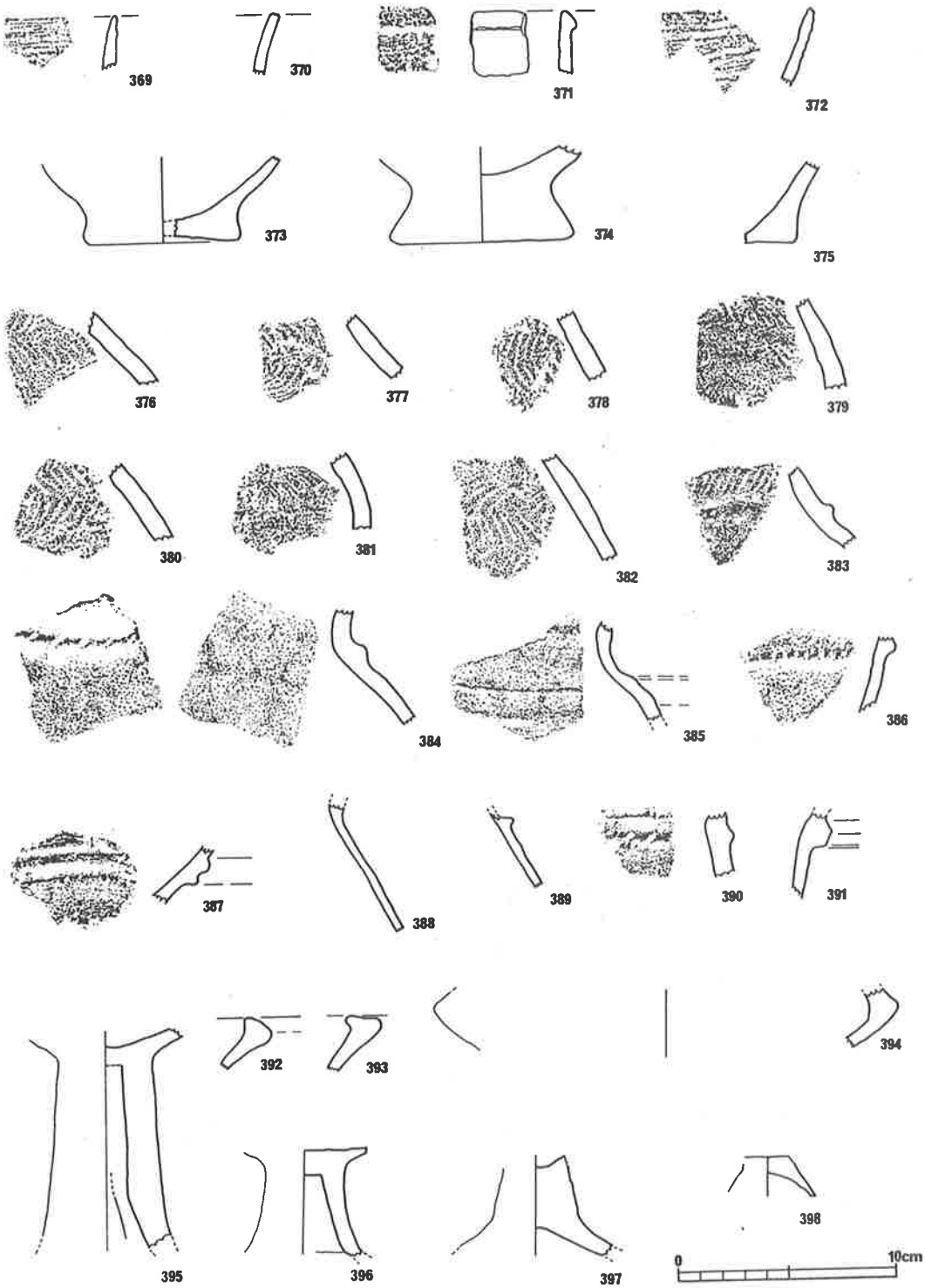


第47図　第３次・第４次調査出土遺物⑤（$\frac{2}{3}$）

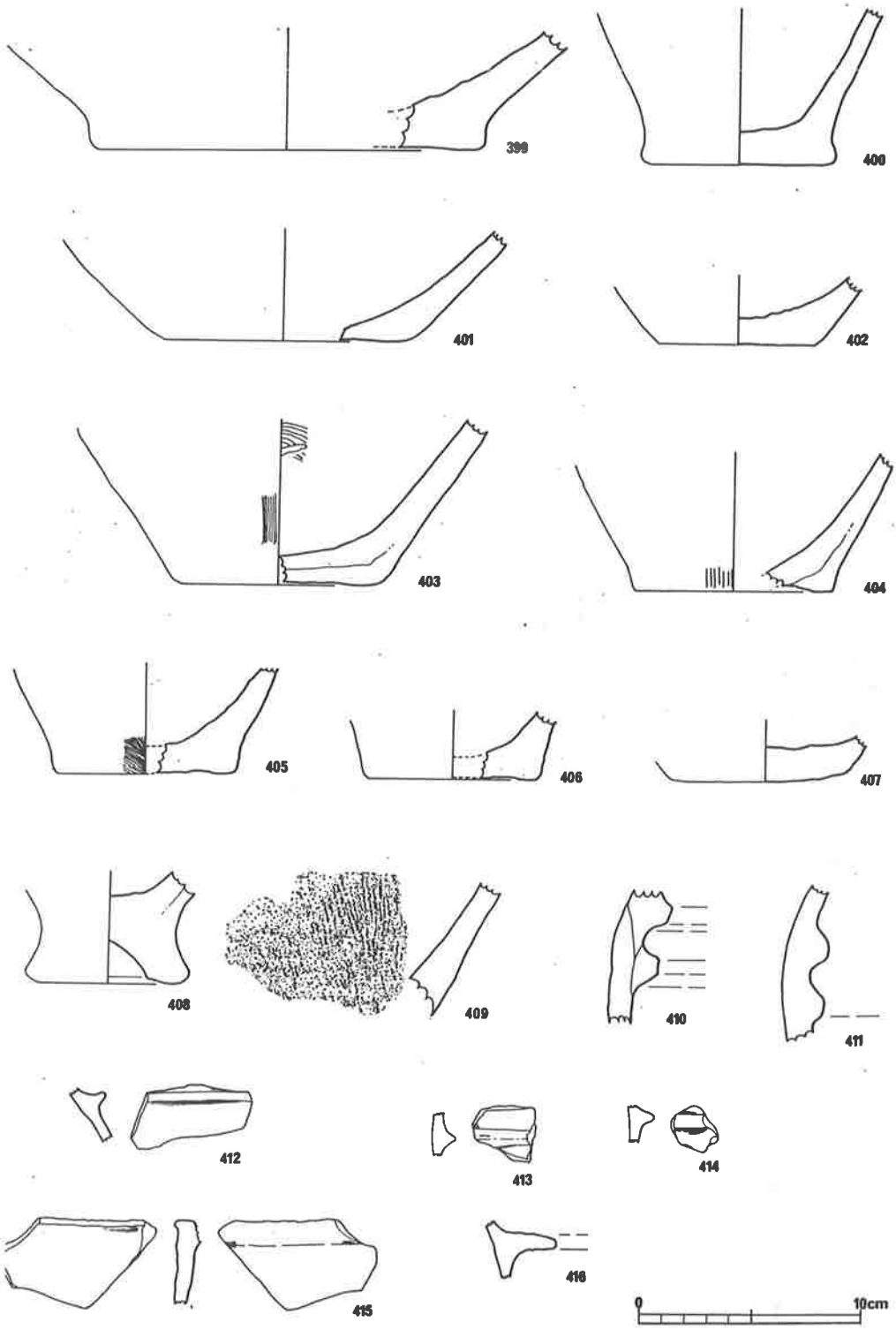


第48図　第３次・第４次調査出土遺物⑥（$\frac{1}{3}$）

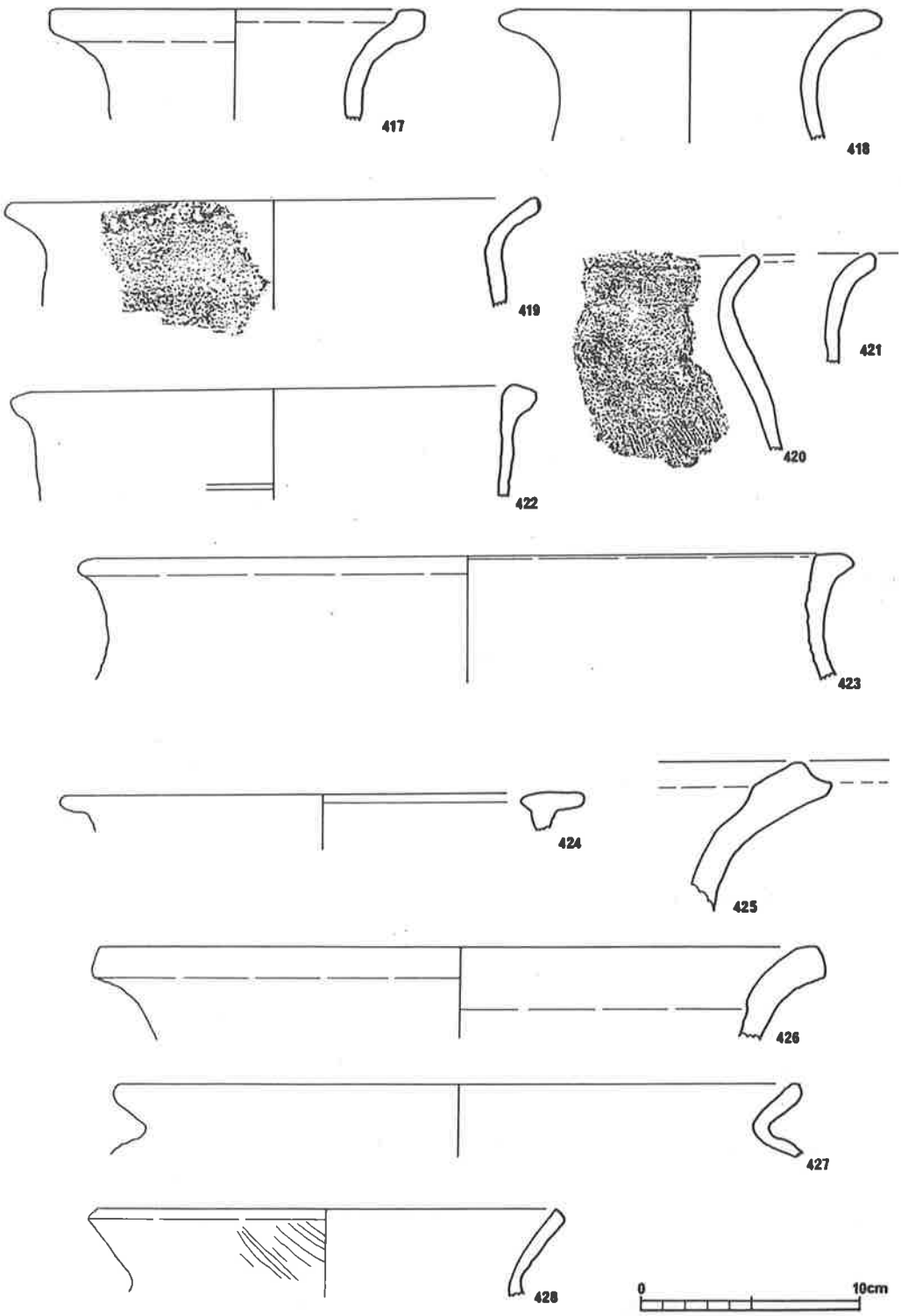
る資料である。**384**は頸部に刻目のある突帯をめぐらし、胴部にハケ目が残っている。**385**は肩部につまみ出して付けたような突帯が2条めぐっている。**386**は甕形土器で、貼り付けられた突帯上にヘラによる刻目をつける。茶褐色の胎土には石英粒を多く含む。**387**は胴部は2条の突帯が施されている甕形土器である。**388**・**389**は甕形土器の頸部から胴部上半の資料で、**388**はハケ目調整が施され、内面ヘラ磨きしている。茶褐色を呈す。**389**は突帯をめぐらしている。淡褐色を呈す。**390**・**391**は甕形土器である。**390**は貼り付けられた突帯に刻目を施している。褐色を呈す。**391**は断面台形状の幅広の突帯をめぐらしている。**392**～**394**は口縁部が袋状に二重になる壷形土器である。口縁は上方につまみ上げ尖り気味におさめている。後期の資料である。**395**～**398**は高杯脚部である。**395**は筒状のまま裾部に至り、曲線的に開いている。筒部内面はヘラケズリ。**396**は脚中位以下で曲線的に裾広がりになる。内外面ヨコナデ仕上げ。**397**は裾部が屈折して大きく広がる。**398**はミニチュア品である。**399**～**407**は甕形土器底部のみの資料である。**399**は底径16.8㎝を測るため甕棺底部ではないか。黄灰色を呈す。いずれも胎土に石英粒を混入し、焼成も良い。内面指ナデ、外面はハケ目調整が見られる。中期中葉と思われる。**408**は特徴のある上げ底のもので、外方向へ開き方がやや大きい。底径6㎝を測る。全体にナデて仕上げている。内外面とも赤褐色を呈する。中期初頭から前半代にかけてのものと思われる。**409**は胴部片である。**410**・**411**は甕棺胴部の突帯部分である。突帯は断面台形状を呈す。**411**の突帯は磨滅が著しい。**412**～**416**は朱塗りの土器で、5点出土している。**412**が壷で、**413**・**414**は甕形土器で、頸部に1条の三角突帯が付く。**415**・**416**は甕形土器で、口縁端部を欠損している。**417**は壷形土器の口縁部で、直線的に立ち上がり急激に外反する。肥厚した平坦口縁である。外面はナデて仕上げて内外面とも褐色を呈する。口径17㎝を測る。中期初頭のものと思われる。**418**も強く外反している壷形土器で、口縁部はわずかに肥厚し、尖り気味におさめている。淡褐色を呈す。口径16㎝を測る。**419**は甕形土器で、口縁は大きく外反し、やや平坦な口唇部に刻目をもつ前期末の資料である。外面ヨコナデ、内面は風化しているがナデ仕上げである。外面淡黄茶色、内面灰黄色を呈す。口径23.8㎝ある。**420**も甕形土器で、口縁は大きく外反し、平坦な口唇部をもつ。外面は斜縦位のハケ調整、内面はナデ仕上げ。外面黒褐色で内面淡茶褐色を呈す。**421**も甕形土器で、ゆるやかに外反している。前期末の資料である。**422**は甕形土器の口縁部である。口縁は断面三角形の貼り付けで、胴部に1条の沈線がめぐる。器形より中期初頭であろう。**423**は壷形土器の口縁部で、口径34㎝の大形品である。外面淡茶褐色、内面淡黄灰色を呈し、胎土に多くの石英粒と金雲母片を含んでいる。中期初頭の資料と思われる。**424**は平坦な口縁で「L」字状を呈す。口縁内側は鍬先状に尖っている。淡褐色を呈す。**425**・**426**は壷形土器で、大型化している。**425**は外反して立ち上り口唇部を肥厚させ、口唇下位を上方へつまみ上げている。刻目は不明。口縁下には浅い1条の沈線があるようだ。器面の調整はナデ仕上げである。**426**は口縁内側に粘土帯を粘り付けている。**427**は甕形土器で、口縁は外反し、基部より端部をやや肥厚ぎみにおさめ、赤



第49図　第３次・第４次調査出土遺物⑦（$\frac{1}{3}$）



第50図　第３次・第４次調査出土遺物⑧（$\frac{1}{3}$）

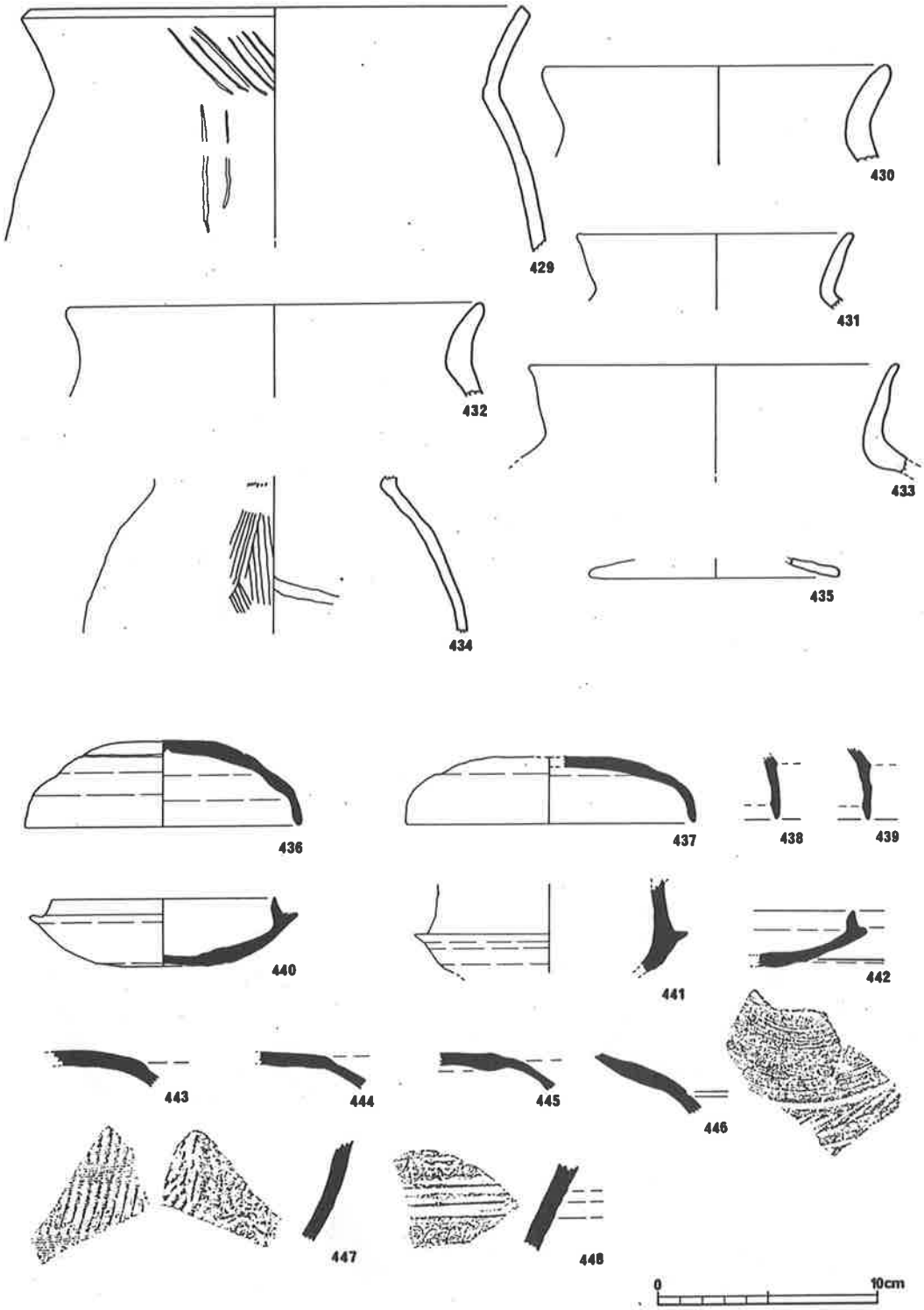


第51図　第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑨（$\frac{1}{3}$）

褐色を呈し、胎土に雲母を含む。後期初頭であろう。**428**・**429**は口縁部が立ち気味になり、「く」字状をなす甕形土器である。口唇部は平坦に仕上げている。**428**は外面にハケ目調整あり。口径21㎝で、淡黄褐色を呈す。**429**は内外面にハケ目調整あとナデで仕上げている。口径22.4㎝を測る。後期後半代の資料である。出土地区はAE13－4層が**376**～**379**・**382**・**386**・**400**・**401**・**403**・**404**・**406**・**408**・**409**・**411**・**417**～**419**。AE13－3層が**380**・**385**・**389**・**396**・**402**・**405**・**407**・**410**・**415**・**421**・**423**・**428**・**429**。AE13－2層が**383**・**398**である。**381**・**420**・**422**はAE14－3層。**384**はAA29－253。**387**はAC26－35。**388**はAA27－317。**390**はAA28－273。**391**はAA27－277。**392**はAA29－358。**393**はAB31－227。**394**はAB30－303。**395**はAC34－62,63。**397**はAA30－42である。**399**・**425**はAD7－5層。**412**はAC26－8。**413**はAA30－300。**414**はAB26－381。**416**はAB26－394。**424**はAA27・53・124の接合。**425**はAD7－5層。**426**はAC4－4層。**427**はAB30－275出土である。

古墳時代の遺物は22点を図示した。**430**～**435**は土師器である。**436**～**451**は須恵器である。**430**～**433**は甕形土器で、口縁は頸部より口唇部にかけて薄くなり外反する。**430**・**432**の器壁は厚く、端部を上外方につまみ出している。**433**は外面ヨコナデ仕上げである。**434**は口縁部を欠損するが、甕形土器であろう。体部は球形を呈し、外面にハケ目が施されている。器壁は薄い。内面は粗いヘラ削りが認められる。外面は淡灰褐色を呈し、内面は淡灰茶褐色である。布留式土器である。**431**と**434**は同一個体の可能性がある。**485**は高杯脚部であろう。赤褐色を呈するが一部煤が付着する。**436**～**439**、**443**～**446**は杯蓋である。**440**～**442**は杯身である。杯蓋では天井部と口縁部の境に明瞭な沈線が入る**446**、口縁部が直に近く、天井部と口縁部の境に段を有する**438**・**439**がⅢA形式に属するものである。杯身では立ち上がりが2.2㎝あり、受部内径が11.3㎝ある**441**がこれにあたる。丁寧なヨコナデを施している。その他の杯蓋、杯身はⅢb形式と考えられるものである。**436**・**437**は口縁端部を丸くおさめている。**436**の口径は12.4㎝。**437**は13㎝である。**440**の受部内径は11.1㎝、立ち上がり0.8㎝。**442**の立ち上がりは0.8㎝である。**447**は甕体部片である。調整はタタキ目の後カキ目を施す。内面は同心円文とナデによる調整である。**448**は甕の体部片か。外面に9条の櫛描波状文と沈線の組み合わせがある。内面はナデ仕上げである。**449**～**451**は甕である。**449**は外面は平行タタキがみられ、内面は青海波文とナデによる調整。**450**は体部片で、外面は縦方向の平行タタキの後に平行沈線をめぐらす。内面同心円文による調整。**451**は外面格子目タタキ調整。内面は青海波文による調整である。出土地区はAE13－2層が**447**。AE13－3層が**430**・**436**。AE13－4層が**432**。AE14－3層が**437**・**440**・**443**・**444**・**450**。**446**はAE13－2層とAC8－3層との接合資料である。**448**はAC8－3層。**449**はAC7－5層。**431**・**434**・**435**はAC9－3層。**441**はAD9－5層。**433**はAB29－195。**438**はAA28－347。**439**ABは26－191とAB27－44の接合資料。**442**・**445**はAA表採。**451**はAA31－130出土である。

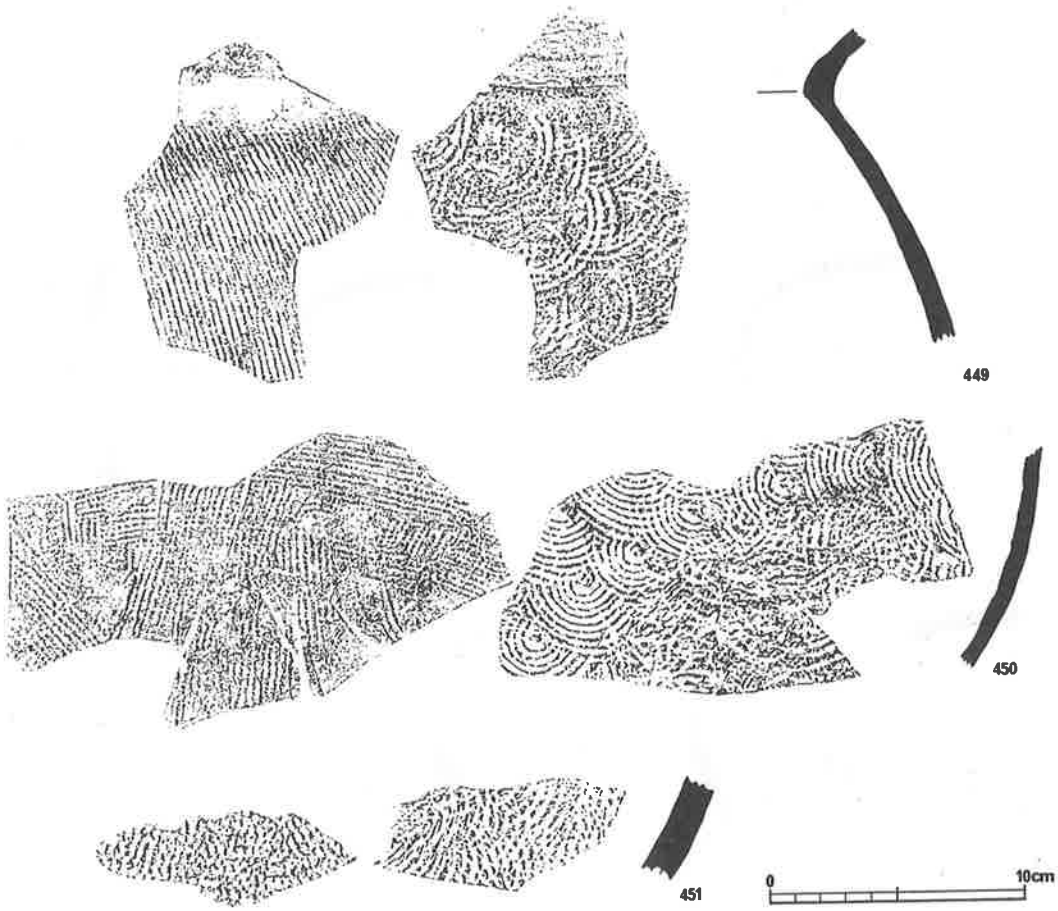
中世の遺物は、大きく区分すると青磁・白磁に代表される輸入陶磁器と土師器に代表される



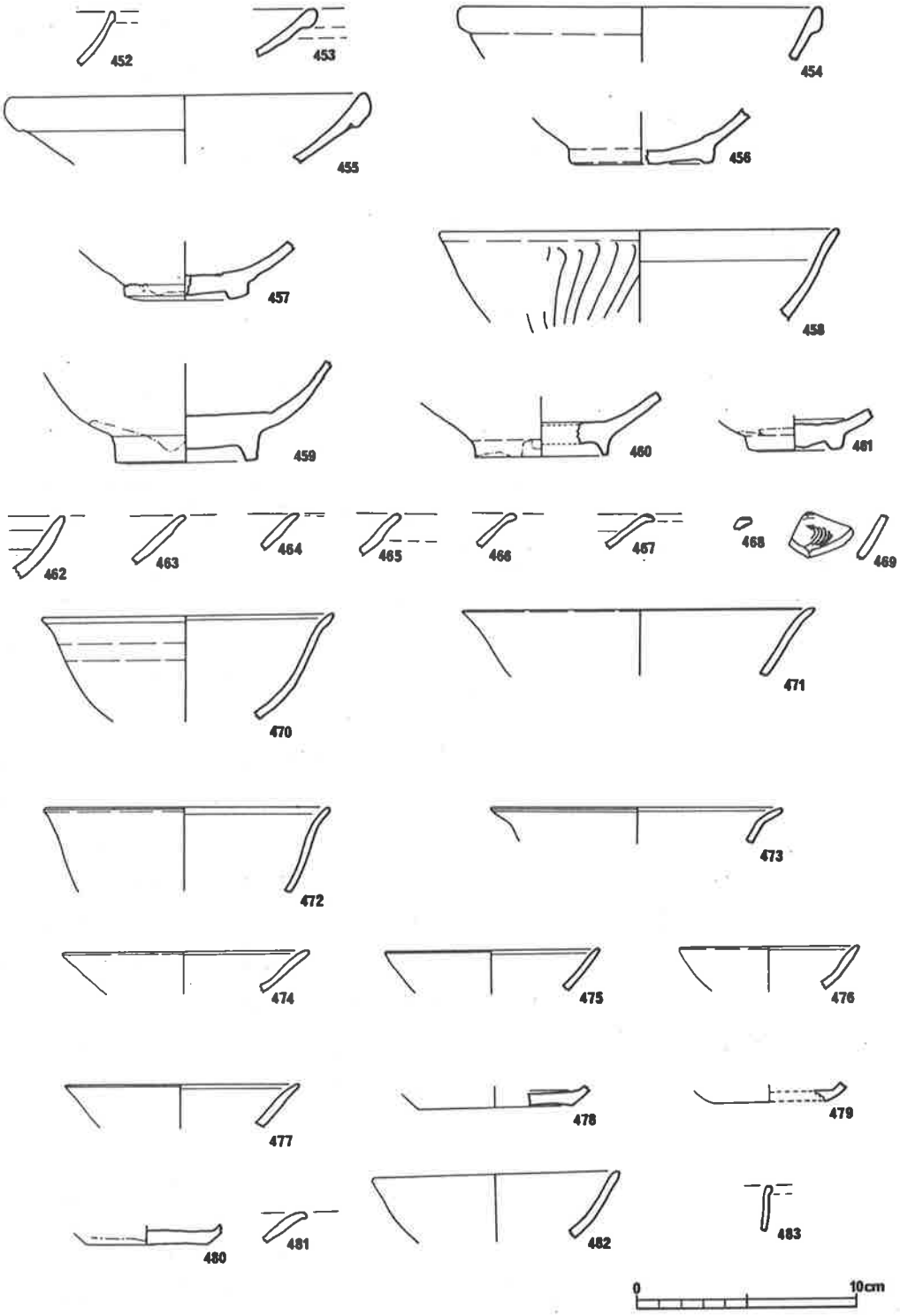
第52図　第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑩（$\frac{1}{3}$）

国内産土器と滑石製品に分かれる。輸入陶磁器では出土量より白磁・青磁・輸入陶器の順で、国内産土器では圧倒的に土師器が多い。ついで瓦器、東播系の順番である。滑石製品では石鍋再利用品がある。

白磁は北側地区で105点、南側地区で261点が出土している。破片が多く、このうち32点を図示した。青磁は北側地区で330点、南側地区で231点、このうち67点を図示した。**452～460**・**462～471**は碗で、**461**・**472～482**は皿である。**452**・**453**は口縁部に小さい玉縁をもつⅡ類である。**454～456**はⅣ類の口縁部と底部片で口縁部に玉縁をもつ。**456**は低い高台を有し、釉は灰色気味の白色を呈する。Ⅰ類の可能性もあるがここではⅣ類に含めておく。**456**は見込みの部分を強く押え凹まして段をつけているⅣ－1・b類である。**457～460**はⅤ類である。**457**は外面体部に櫛目文を有するⅤ－2・b類である。口径18*cm*を測る。**458**・**459**は底部で内底見込みに沈線状の段を有している。**461**は内底見込みの釉を輪状にカキ取った皿Ⅲ類である。高台は高く細い。**462～468**は口縁部のみの資料で、細分が可能でⅤ類・Ⅷ類に分かれる。**469**は体部内面に櫛目が施文されている。**470～472**はⅨ類で口縁部に釉がかからな



第53図　第３次・第４次調査出土遺物⑪（$\frac{1}{3}$）



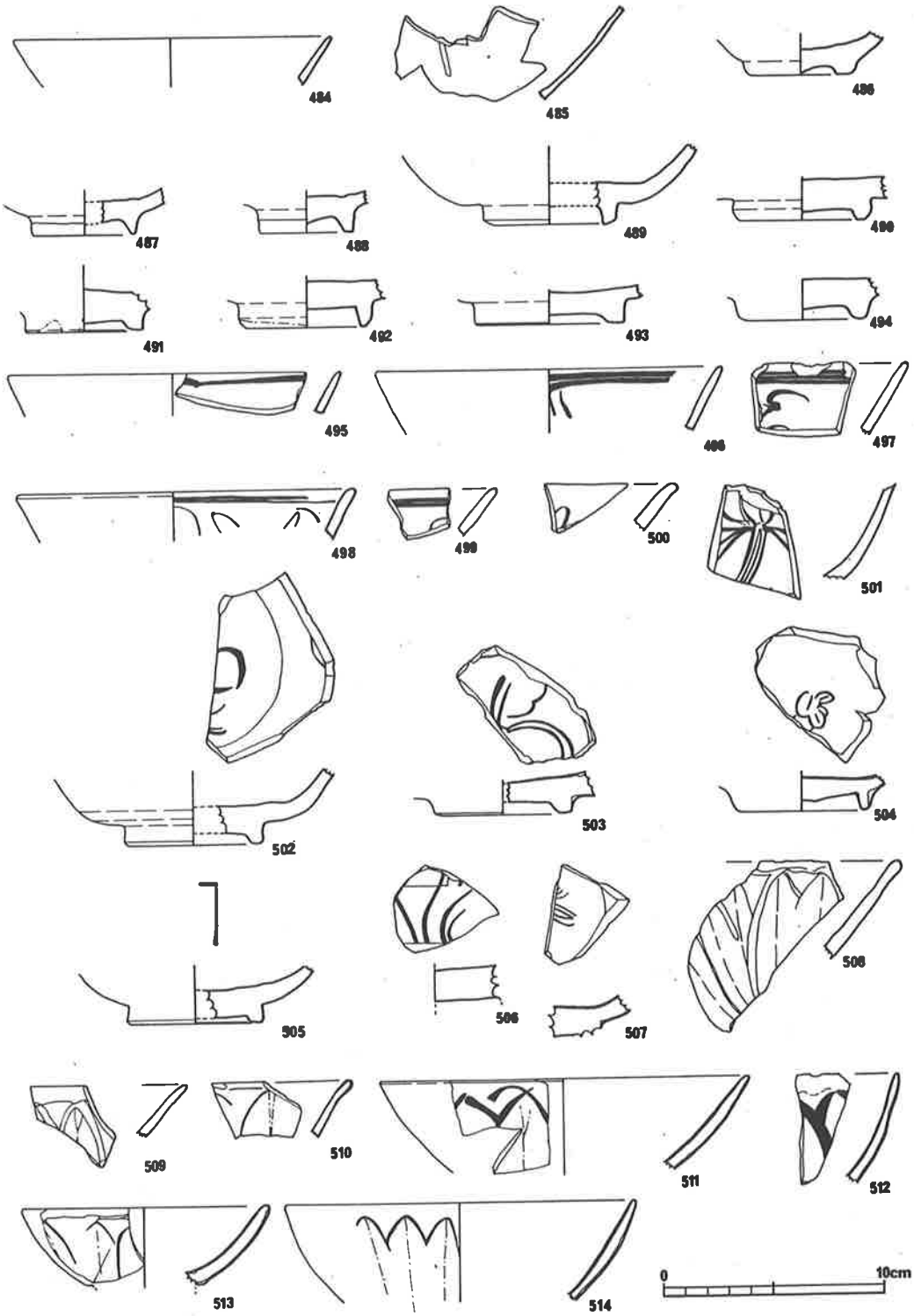
第54図　第３次・第４次調査出土遺物⑫（$\frac{1}{3}$）

い口禿の資料である。釉はいずれも灰白色を呈する。**473**～**480**は口縁端部が口禿になったⅨ類である。釉は空色を帯びた白色を呈す。底部は全面施釉のⅨ－1類が**478**・**479**。外面体部下位から底部に施釉されていないⅨ－2類の**480**がある。その他の白磁では**481**は口縁部が外反し、端部を丸くしている。口縁部には浅い輪花があるが隆線で分割していない資料である。**482**は小碗の口縁部である。釉は非常に薄く光沢のあるやや緑味を帯びた灰色で、胎土には黒い粒は含まず灰色である。陶器に含まれるものか。産地は不明である。**483**は釉がガラス質で貫入が走る口縁部破片である。釉は同安窯系青磁に類似している。胎土は濁黄白色を呈す。小壷であろうか。

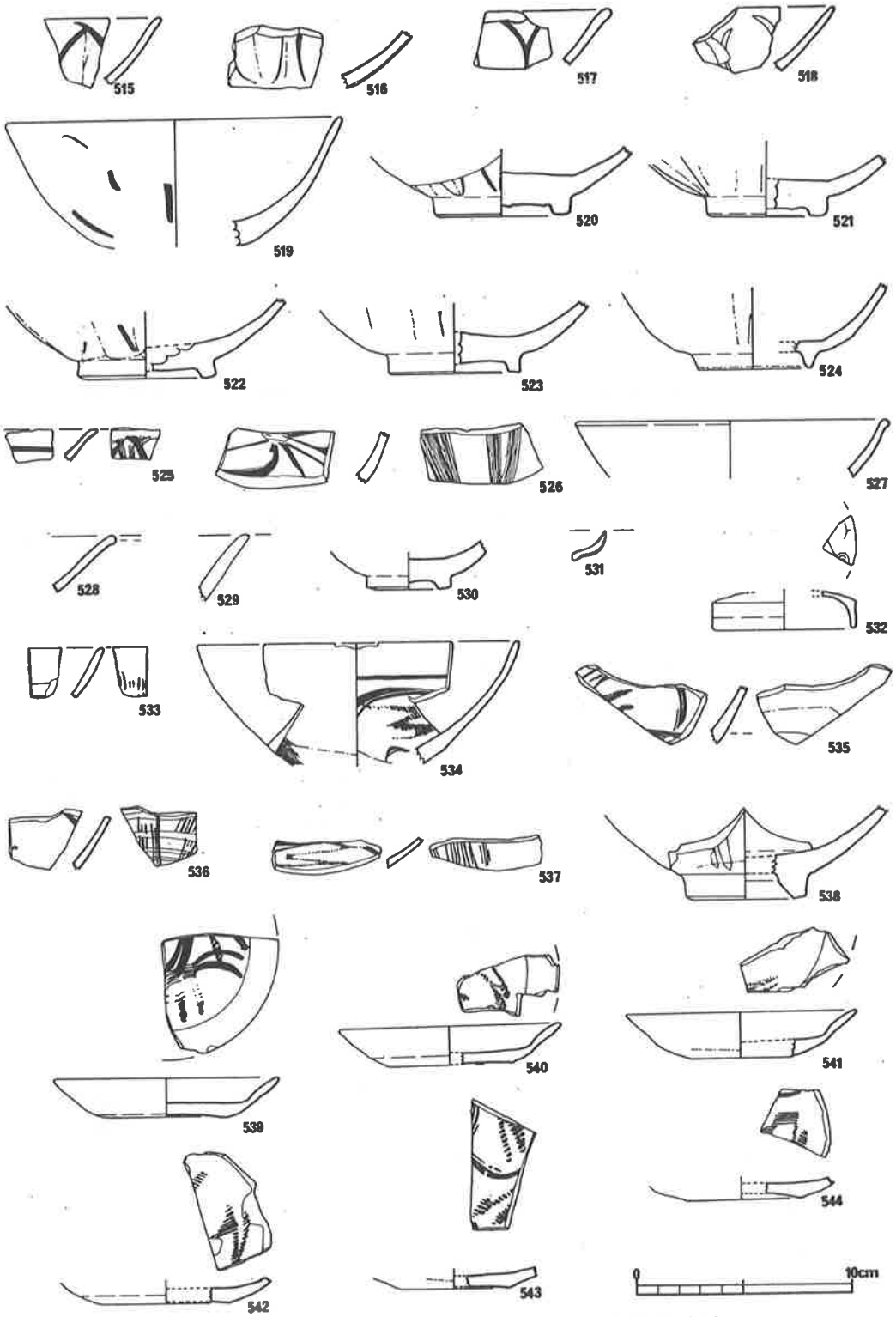
越州窯系青磁は4個体が出土している。**484**・**485**は胎土・釉調より同一個体で**485**は4片の接合である。体部外面に縦沈線を入れている碗Ⅰ類である。釉は黄緑色を呈し、胎土は密で灰色を呈す。**486**～**487**は底部で畳付部を除いて全面施釉されている。内底見込みには重ね焼きの目跡が残っている。

489～**529**は龍泉窯系青磁碗である。**489**～**494**はⅠ－1類の底部である。**491**・**492**は円盤状陶磁製品のメンコ類遊戯具に転用している。**495**～**501**は内面口縁部から体部に施文されており、**495**～**499**はⅠ－4類である。**500**は時期的に若干後出する。**501**はⅠ－2類である。**502**～**507**は内底見込みに施文されている資料で、**502**・**503**はⅠ－2類である。**504**・**507**はⅠ－4類で花文様を片彫りしている。**505**は文字スタンプと思われる枠が残っている。**508**～**516**は外面体部に鎬蓮弁文を有するⅠ－5・b類である。釉は**508**が灰緑色、**509**は淡緑色、**510**は茶灰色、**511**は濃緑色が厚く、**512**は黄味帯びた緑色、**513**は濃緑色、**514**は淡青色が厚く施釉されている。**511**は口径16.8㎝。**513**は11㎝。**514**は15.6㎝を測る。**515**は緑色、**516**は淡緑灰色を呈す。**517**・**518**は鎬のないⅠ－5・a類である。**517**の釉は濁黄灰色、**518****519**は同一個体で濁黄色である。**520**～**524**はⅠ－5・b類の底部片である。釉調は**520**は緑灰色で外底見込みに砂目跡あり。**521**は黄味帯びた緑灰色、**522**は灰色、**523**は濁黄褐色、**524**は**514**と同一個体の可能性あり。釉は畳付部を残して全面施釉されている。**525**と**526**はⅠ－6・b類で外面蓮弁の上から櫛目を縦に入れており、内面に蓮華文を施文している。**525**の釉調は淡緑色、**526**は緑灰色である。その他の青磁では**527**～**532**がある。**527**は口縁部を外反し丸くおさめている。釉は黄味を帯びた緑色を呈す。**528**は内外面無文の口縁部で外反させている。釉は淡黄緑色で胎土は濁白色である。**529**は体部器壁が厚く、釉は緑色を呈す。**530**は底径2.8㎝の小碗でⅠ－4類に類似する。**531**は杯の口縁部片である。口縁部は鋭く外反し、端部は直上に引き出すものでⅢ－3類に属する。**532**は青磁合子蓋である。釉は口縁端部から天井部に黄緑色が施釉され、内面には施されていない。

533～**550**は同安窯系青磁である。**533**～**538**の碗と**539**～**550**までの皿がある。同安窯系の特色は細かな櫛目による文様が特徴的である。**533**はⅠ－1・b類の内面上位に沈線があり、外面に細かい櫛目を有している。釉は空色を帯びた白色を呈す。**534**・**536**・**537**はこれに属



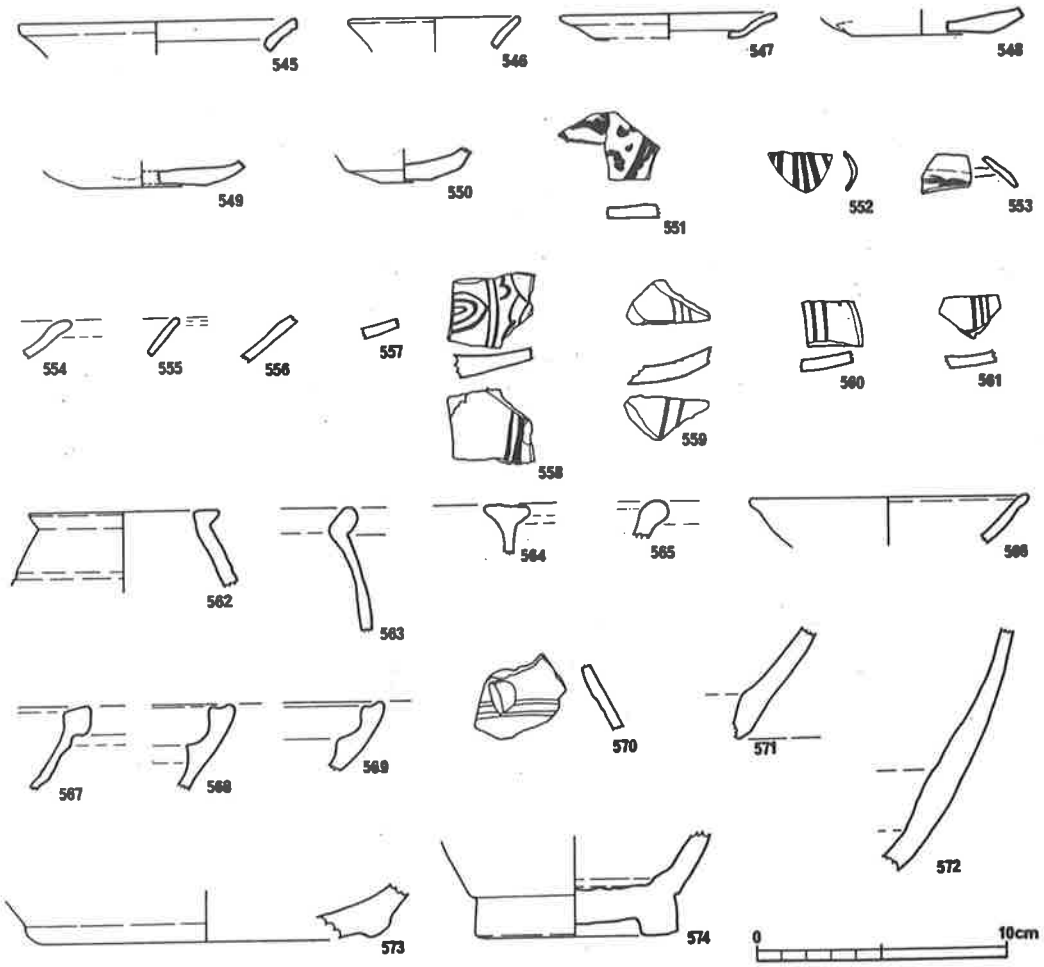
第55図　第３次・第４次調査出土遺物⑬（$\frac{1}{3}$）



第56図　第３次・第４次調査出土遺物⑭（$\frac{1}{3}$）

する。**533**・**536** は同一個体であろう。内面体部には櫛目による文様が描かれている。**535** は外面無文のⅠ－1・a類である。**538** は体部外面にヘラ状施文具により片彫り風の沈線を入れているⅢ－1・a類に属する。**539**～**544** は内面にヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文様を有するⅠ－1・b類である。いずれも外面体部下位と底部には施釉されていない。**539** は$\frac{1}{4}$の残存で口径10.4㎝、器高1.8㎝である。**540** は口径10.2㎝、器高1.8㎝である。**541** は口径10.7㎝、器高2.1㎝を測る。**545**～**550** は体部中位で屈曲し、体部と見込みの境に段を有する。内外面無文のⅠ－1・a類である。

青白磁は4点出土している。うち3点を図示した。**551** は合子蓋で外面天井部に花文が描かれている。釉は青白色で天井内面も施釉されている。胎土は黄灰色を呈す。**552** も合子で身と思われる。明青白色の釉が連子下位まで施されている。**533** は小壷であろうか。灰白色の釉か内外面に施釉されている。外面体部に花文であろうか施文されている。内面につぎ目がみられる。胎土は白色を呈す。



第57図　第3次・第4次調査出土遺物⑮（$\frac{1}{3}$）

緑釉陶器は10点出土している。このうち**554**～**557**の4点を図示した。この緑釉陶器に関しては太宰府でも生産が行われていたと考えられているが、まだ不明瞭な点が多いため本報告では輸入陶磁器の項で説明を行う。**554**は口縁部片で、内湾気味に立ち上がった体部は口縁部でやや外反している。釉は深緑色で全体に薄くかけられているため、剥離部分が認められる。胎土は黄褐色で軟質である。同一個体が3点あり、1点は底部片である。**555**は口縁部片で直線的な口縁部をもち口唇部は丸くおさめている。釉は淡緑色で薄くかけられている。釉の剥離が顕著である。胎土は淡黄褐色で軟質である。この2点は奈良期の所産と思われる。**556**・**557**は体部片である。**556**は暗灰色硬質の胎土に緑色の釉が施釉されている。同一個体が1点ある。**557**は体部片である。1点同一個体がある。釉は明緑色で光沢がある。全体に薄くかけられている。胎土は暗灰色である。この2点は前述の2点とは明瞭に差を生ずる。平安期の所産と思われる。図示はしなかったが胎土は軟質で黄灰色を呈し、釉調は外面が深緑色で、内面が濃緑色の破片の資料がある。

朝鮮産陶磁器では、粉青沙器が出土している。**558**は内面体部に白象嵌で剣頭文と二重圏線を有する。外面にも二重圏線を施している。釉は濁黄灰色で胎土は灰色を呈す。**559**は白象嵌で内面に三重と外面に二重圏線がある。釉は緑色で、胎土は暗灰色を呈す。**560**・**561**とも内面に白象嵌で三重圏線がある。

輸入陶器は13点を図示した。壷・盤・鉢・皿がある。北側地区で53点、南側地区で83点が出土している。**562**はやや小ぶりの口径7.6㎝ある壷口縁部片である。釉は外面黒褐色を呈し、内面には施釉されていない。胎土は暗灰色である。口唇部に目跡がある。**563**も壷である。茶褐色の釉を呈し、胎土は茶褐色で紫色粒を含んでいる。口縁部は「く」字形に短く外反している。**564**・**565**は盤の口縁部で、**564**は「T」字形を呈している。釉は黄釉で、胎土は明灰色を呈す。**565**は口唇部を肥厚させ、玉縁状を呈している。釉は黄釉で、口唇部は褐色を呈している。**566**は口径11㎝を測る皿である。釉は灰黄色で、胎土は暗灰色を呈する。内外面に黒色を呈する部分が認められる。**567**は盤である。黄釉が薄くかかり口唇部は赤褐色を呈する。**568**・**569**は鉢である。**568**は口縁部内面に淡褐色の釉が薄くかかる。胎土は青灰色を呈するが粗い。内面に1条の突起を有し、口縁端部が内面にせり出しているため2条の突起にみえる。**569**もほぼ同じ形態である。内外面に灰白色の釉をかけている。**570**は壷の耳の部分である。耳の下には横沈線が2条めぐる。釉は黄灰色で、胎土は灰色である。**571**は壷の体部下位である。釉は外面褐色で内面淡褐色を呈する。**572**は壷体部下位で底部に近い破片である。釉は黄色釉で剥離が目立つ。外面露台部分は灰紫色を呈する。**573**は底部片である。施釉はされていない円盤状の高台を有する。**574**は壷底部片である。淡灰色を呈する胎土で、赤褐色砂粒を含む。内面に淡茶色の釉がかかる。

出土地区は白磁では、**452**はAA 37－2。**453**はAB 32－50。**454**はAB 29－235とAB 29－380の接合資料。**455**はAB 34－41。**456**はAB 28－263とAB 28－194の接合資料。**457**はAC

32－9とAC 33－62の接合資料。**458**はAB 34－122とAB 24－2とAB 31－32との接合資料。**459**はAB 34－124。**460**はAC 8－3層。**461**はAC 10－4層。**462**はAB 30－308。**463**はAA 31－151。**464**はAA31－101。**465**はAB 26－609。**466**はAA 27－221。**467**はAC 31－19。**468**はAB 25－30。**469**はAB 31－465。**470**はAB 27－22とAB 28－207とAA 30－31との接合資料。**471**はAB 26－267とAB 31－202の接合。**472**はAD 10－5層。**473**はAC 5－4層。**474**はAE 14－2層。**475**はAC 7－5層。**476**はAC 34－111。**477**はAA 31－190。**478**はAB 32－35とAA 27－15の接合。**479**はAC 32－31。**480**はAB 28－236とAB 26－649の接合。**481**はAB 32－34。**482**はAB 31－301。**483**はAA 30－171の出土である。

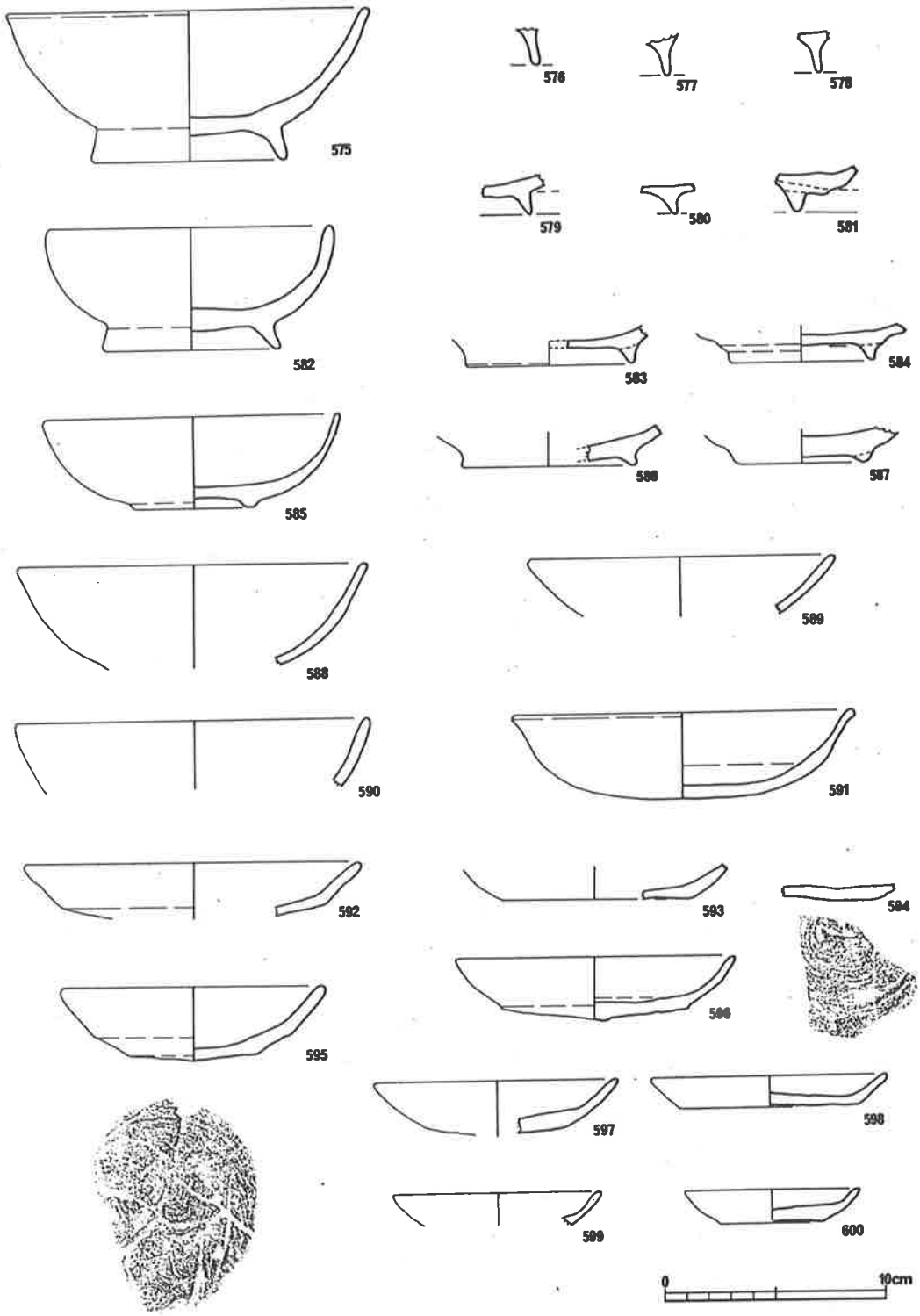
越州窯系では、**484**はAB 30－278。**485**はAA 29－276とAA 29－139とAB 29－522とAB 31－33の接合資料で同一個体にAB 31－496とAB 29－119がある。**486**はAD 11－5層。**487**はAB 25－70。**488**はAB 31－436出土である。龍泉窯系では、**489**はAD 7－2層とAC 10－2層の接合。**490**はAC 3－3層。**491**はAB 36－2層。**492**はAB 36－2層。**493**はAB 31－5とAA 30－112の接合。**494**はAD 10－5層。**495**はAD 7－4層。**496**はAD 7－2層。**497**はAE 13－3層。**498**はAB 33－69とAB 33－58の接合。**499**はAC 31－3層。**500**はAB 34－162。**501**はAD 7－4層。**502**はAC 1－3層。**503**はAC・Dのベルト。**504**はAB 36－2とAB 33－47。**505**はAE 14－3層。**506**はAC 31－17。**507**はAC 27－21。**508**はAB 28－17。**509**はAC 9－3層。**510**はAB 25－184。**511**はAB 25－268とAB 26－444接合。**512**はAD 8－4層。**513**はAC・Dベルト。**514**はAD 9－5層。**515**はAC 34－24。**516**はAB 27－71。**517**はAB 25－262。**518**はAC 4－3層。**519**は第1次調査との接合資料でC2－3・C4－3層とAC 3－3層出土。**520**はAD 7－5層。**521**はAA 30－48。**522**はAD 11－6とAD10－5層。**523**はAA 27－32とAB 28－118とAB 27－150である。**524**はAC 8－3層・AC 10－2接合。**525**はAD 7－2層。**526**はAB 33－35。**527**はAB 29－440。**528**はAB 34－62。**529**はAE 13－2層。**530**はAD 10－2層。**531**はAC 26－6。**532**はAA 30－24出土である。同安窯系では、**533**はAC 10－2層。**534**はAC 7－2層とAC 7－5層の接合。**535**はAC 8－2層。**536**はAD 7－5層。**537**はAD 10－5層。**538**はAC・D 10ベルト。**539**はAD 7ベルト。**540**はAC 4－4層と第1次調査のC 6－3層との接合資料。**541**はAC 9－3層と第1次調査のC4－3層との接合。**542**はAC 25－10。**543**はAE 14－2層。**544**はAC8－3層。**545**はAC 4－2層と第1次調査で出土したC1－3層との接合。**546**はAD 11－5層。**547**はAC 10－8層。**548**はAB 33－44。**549**はAC 2－3層と第1次調査のC6－4層との接合である。**550**はAC 10－2層出土。青白磁では、**551**はAD 9－4層とAD 10－2層の接合資料。**552**はAD 10－4層。**553**はAD 10－5層出土である。

緑釉陶器では、**554**はAA 29－163。同一個体資料にAA 29－66・AB 27－109・AC 28－4がある。**555**はAB 31－373。**556**はAB 29－112。同一個体にAB 26－230。**557**にAA 30－47。同一個体にAB 30－175がある。図示しなかった資料にAB 31－451がある。朝鮮産陶磁器では、**558**はAB 34－69。**559**はAD 7－3層。**560**はAD 9－3層。**561**はAC 2－3層。輸入陶器では、

562はAD10−4層。**563**はAB30−340とAB31−44との接合。**564**はAC32−13。**565**はAC2−3層。**566**はAA28−87とAC28−2とAC26−2とAB31−131の4点接合である。**567**はAD9−4層。**568**はAA27−56。**569**はAC33−9。**570**はAD9−4層。**571**はAC34−44。**572**は5点の接合でAA27−167とAB30−4とAB33−21とAB30−89とAB31−75である。**573**はAA37−2。**574**はAD7−4層とAC9−3層の接合資料である。

国内産土器では土師器、瓦器、東播系須恵質捏鉢、瓦質土器、黒色土器、内黒土器と多種にたっている。中でも土師器の出土が圧倒的に多い。

土師器には、碗・杯・皿・小皿が出土している。破片が多いため個々の分析はできていない。北側地区で569点、南側地区で2,039点が出土している。**586**を除く**575**〜**588**は土師器碗である。**575**は器形の$\frac{1}{3}$の残存である。体部は内湾気味に立ち上がり口縁部を丸く仕上げている。赤褐色を呈す。口径16㎝、器高6.8㎝、底径2.6㎝である。**582**は器形の$\frac{1}{3}$ほどの資料である。体部は**575**よりは丸味をもって立ち上がっている。口縁部は外反していない。器壁は厚く、淡褐色を呈する。口径12.6㎝、器高15.5㎝、底径7.8㎝を測る。**585**は**582**と同じ器形を呈するが、器壁が薄く低い高台を有している。淡褐色を呈する。口径13.2㎝、器高41.5㎝、底径5.4㎝を測る。**586**は内黒土器であるが出土点数が少ないため土師器の項で説明を行う。底部のみで器形を知りえないが、高台は若干外側にはり出している。内面ミガキが施されている。胎土に小さい雲母片を含んでおり、密である。外面は淡黄灰色を呈する。**576**〜**581**は高台部分の破片であるが、高い高台を有し若干外反気味の**576**〜**578**がある。**579**・**580**は直線的に立ち上がっている。**581**・**583**・**584**は低い高台で、断面が三角状を呈する。**587**は**585**の器形に類似している。**588**は体部から口縁部の破片である。立ち上がりは**575**に類似している。淡褐色を呈し、口径15.5㎝を測る。**589**〜**597**は杯で、9点を図示した。切り離しにはヘラ切りと糸切りがある。ヘラ切りは**591**・**596**がある。糸切りは**594**・**595**がある。**593**は外面底部に板状圧痕が施されている。**589**・**590**・**592**・**597**は体部から口縁部の破片である。色調は赤褐色から淡褐色を呈する。**591**は口縁部を一部欠損するがほぼ完形に近い丸底杯である。口縁部外面を強くヨコナデしている。内面中位から底部にかけて淡赤褐色を呈する。内面中位に磨滅しているが1条の浅い沈線がめぐる。口径15.2㎝、器高3.9㎝を測る。**593**・**594**は平底部分の破片である。**594**は他の土師器に比べると胎土が粗く砂粒を含んでいる。赤褐色を呈する。**595**は器形の$\frac{1}{2}$が残存していた。外面体部中位に浅い段を有する杯である。口径11.6㎝、器高3.3㎝を測る。**596**は器形の$\frac{1}{3}$の残存である。口縁部は内湾気味に立ち上がる。底部と体部の境界に張り出しが認められる。上面からの圧力によるものか。内外面淡灰黄色を呈し、胎土に茶色の粒を含む。外面底部中央は、ヘラ切りによる盛り上がりが見られる。口径12.6㎝、器高2.8㎝を測る。**598**〜**604**は小皿である。**598**は切り離しは不明。口径10.5㎝、器高1.4㎝、底径7.9㎝を測る。**599**は黄褐色を呈し、口径10.5㎝を測る。**600**は体部が内湾気味に立ち上がっている。**602**・**603**は直線的に立ち上がる。**601**は口径7.9㎝、器高1.3㎝、底径5.5㎝。**602**は口

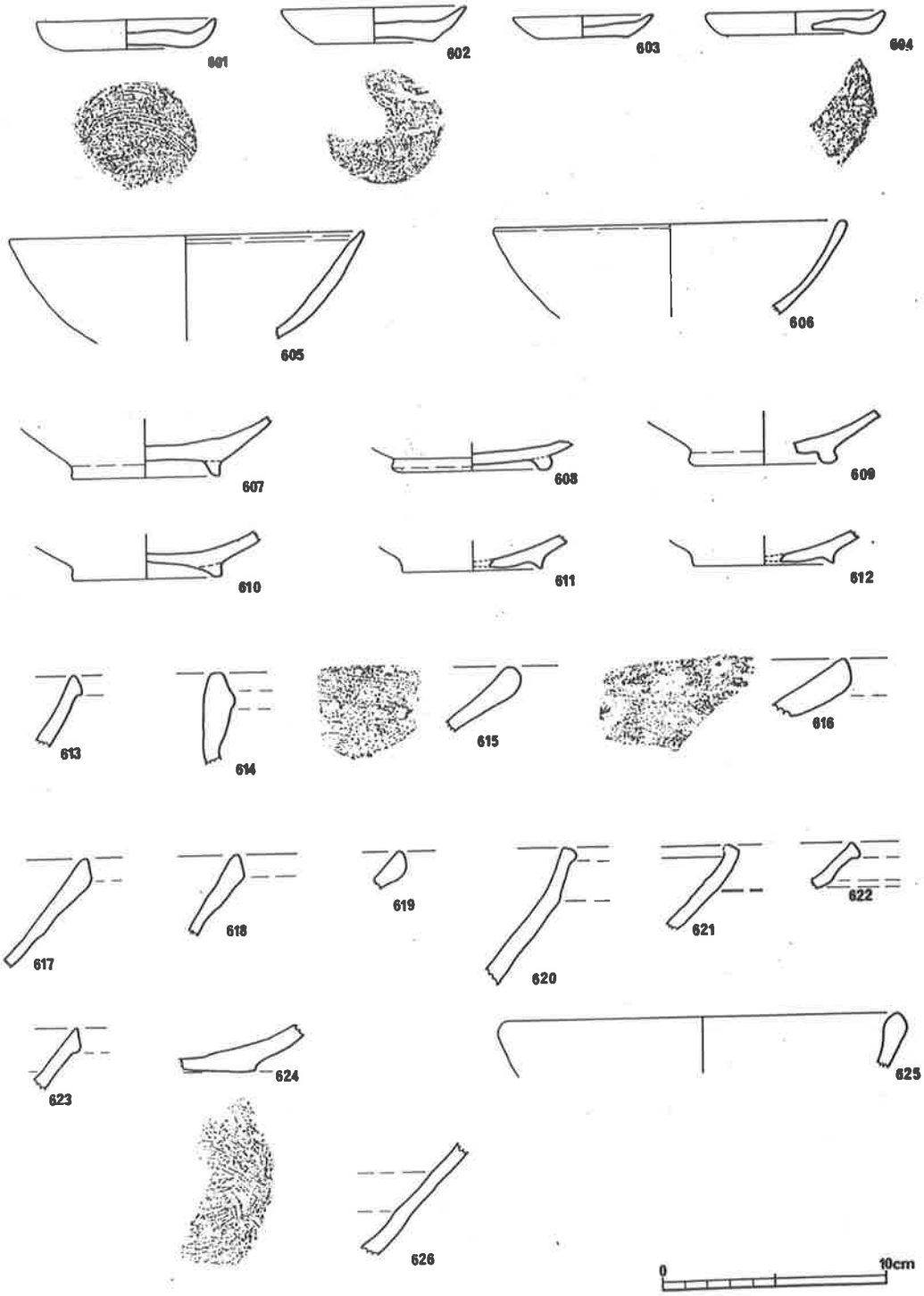


第58図　第３次・第４次調査出土遺物⑯（$\frac{1}{3}$）

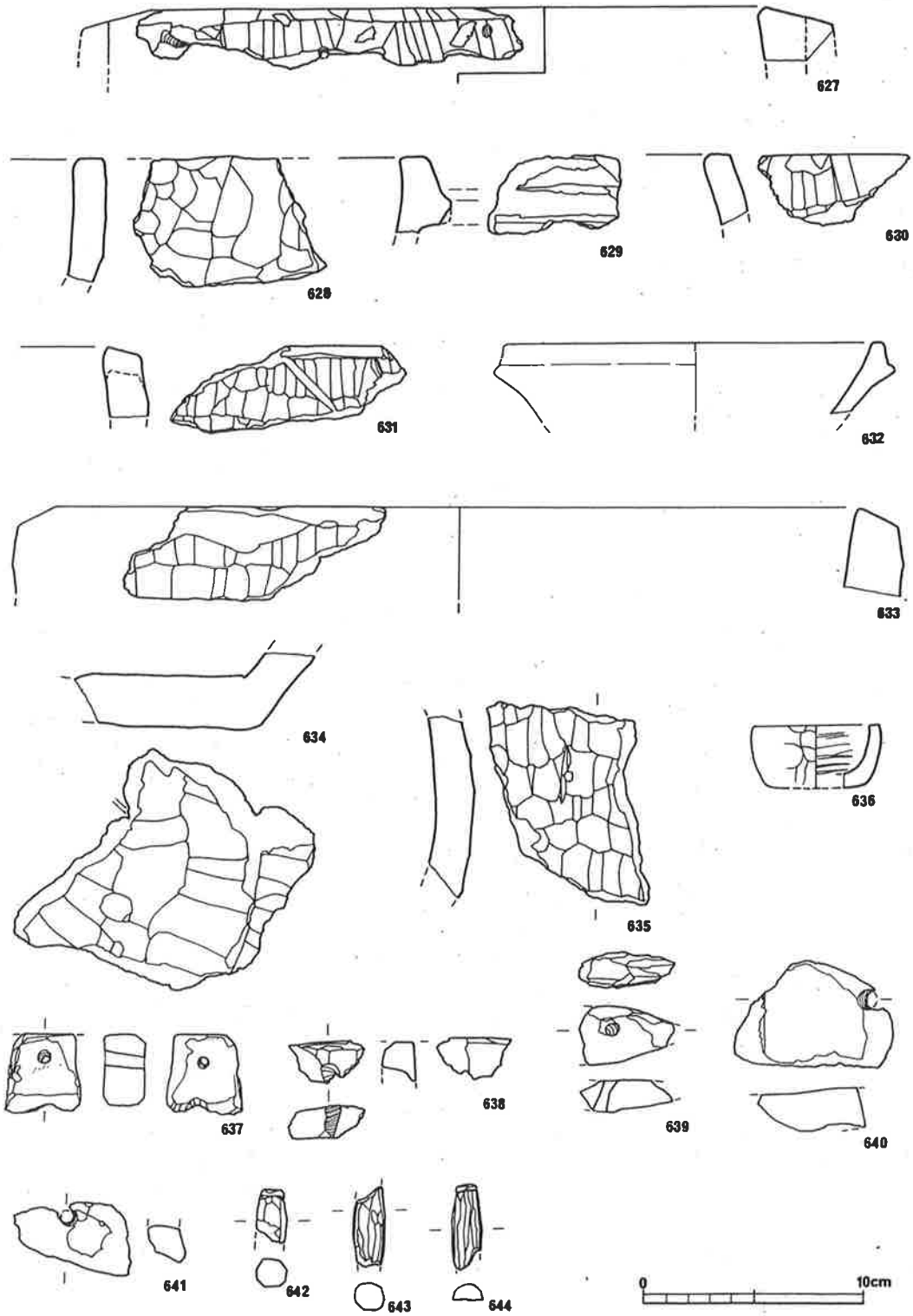
径8.1㎝、器高1.3㎝、底径5.2㎝。**603**は口径6.1㎝、器高1㎝、底径3.9㎝。**604**は口径7.7㎝、器高1㎝、底径6㎝である。**601**・**602**は糸切りであるが、**603**・**604**は不明である。

605～**612**は瓦器碗である。北側地区56点、南側地区210点出土している。**605**は口縁部内側に1条沈線をめぐらしている碗である。内面は摩耗が著しく明瞭ではないが、ヘラミガキが施されている。外面は不明である。黄褐色を呈す。畿内型瓦器である。**608**を除く**606**～**612**は在地型瓦器である。**608**は黒色土器の底部片であろう。内外面とも黒色にいぶされている。貼付け高台を有し、底部はヘラ切り離しである。高台は高台内面より外側にはり出し、外反させている。瓦器の高台はいずれも低い。**610**は内面にヘラミガキしている。**613**～**616**は瓦質土器である。**613**は揑鉢である。体部内面に横位のハケ目が僅かに残っている。口縁端部を下方につまみ出している。**614**は火鉢である。白味を帯びた胎土で、微細な砂粒を含む。口縁部は肥厚させている。口縁下に突帯がめぐる。突帯の下は下方へ向けて櫛状工具による沈線が確認できるが鮮明ではない。**615**・**616**は揑鉢で内面に斜めのハケ目が施されている。**615**は内外面灰黒色を呈し、**616**は灰白色を呈している。**617**～**625**は東播系須恵質揑鉢である。北側地区で22点、南側地区で14点出土している。すべて鉢で碗は出土していない。**617**・**618**は口縁端部が垂直状に立っている。**618**は端部に自然釉あり。**619**は口縁部を丸く仕上げて玉縁状を呈し、外面が黒色を呈する。**620**～**622**は体部と口縁部にきわだった差がなく、内面体部と口縁部はほぼ直角をなしている。**620**・**622**は端部を下方につまみ出している。**621**は上方につまみ出している。外面体部に浅い沈線がある。**623**は内面が直線的に外反し、口縁端部を下方につまみ出している。**624**は揑鉢の底部片である。切り離しは静止糸切りである。**625**は口縁部内外面を丸くおさめている。口径17.4㎝を測る。**626**は底部よりやや上位の破片である。粘土紐積み上げによって成形されている。

滑石製品には石鍋と石鍋再利用品と石錘と小型容器がある。滑石製品の出土点数では北側地区で129点、南側地区で234点が出土している。**627**～**635**は石鍋である。**627**は従来の分類には含まれていないため新しくA－3類と分類する。器形の特徴は方形の耳を有するのは従来と同じであるが、口縁部が水平ではなくやや下方に下がり気味で、口縁端部を意識的に削りおとして、丸く仕上げている。口縁部には外面からの穿孔痕が3箇所認められる。口径17㎝を測る。**628**は口縁部外面に煤が付着している。A－2類である。**629**は鍔が付くB－2類で外面に煤が付着している。**630**は口縁部には鍔は付いていないが、体部が内湾する器形からB－1類に相当する。外面には煤が付着している。**631**は方形の耳が付いていないが器形よりA－3類にあたる。実測図右側は3段の削痕が認められる。当初より段を有していたとも考えられる。内面は丁寧に磨かれている。**632**はC－2類で鍔の削り出しが粗い。外面に煤が多量に付着している。内面は磨かれている。口径は16.8㎝を測る。**633**は口縁部が水平でなく下がり気味なA－3類である。方形の耳は付いていない。口径は36.5㎝を測る大型品である。**634**は大型の石鍋の底部片である。石鍋片を再利用のため、鋸で切りはなそうとした痕跡が残っている。内



第59図　第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑰（$\frac{1}{3}$）



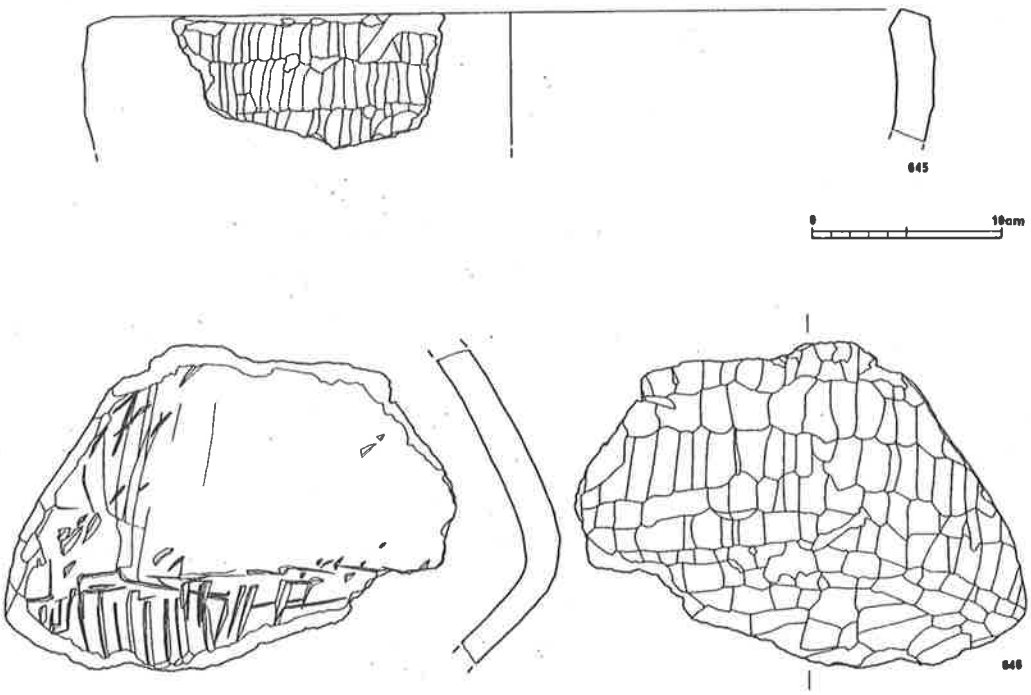
第60図　第３次・第４次調査出土遺物⑱（$\frac{1}{3}$）

面にはノミ跡を磨いている。**635**は石鍋の体部片である。横位の削りが見られる。**636**は小型容器である。体部は内湾しており、口縁端部は水平である。内面は粗い削り痕が認められる。外面は横位の削りが施されている。口径5.7㎝、器高2.9㎝を測る。**637**～**641**はいずれも穿孔している資料である。**637**は破片の中央よりやや上方に穿孔がある。**638**は石鍋の口縁部片に外面から穿孔されている。外面には煤が付着している。**641**は両面より穿孔している。穿孔より右に貫通していない穿孔跡がある。放棄した痕跡が認められる。**642**～**644**は紡錘形の石錘である。**642**・**644**は短軸の上部に溝を一周させている。欠損しているが本来は下部にも溝があったと思われる。**645**は石鍋のA－3類である。内面に貫通していない穿孔跡が1箇所ある。途中で放棄したものである。口径は41.6㎝を測る。**646**は大型の石鍋の底部片である。内面にノミの削り跡が顕著に認められる。外面底部にはススが付着している。

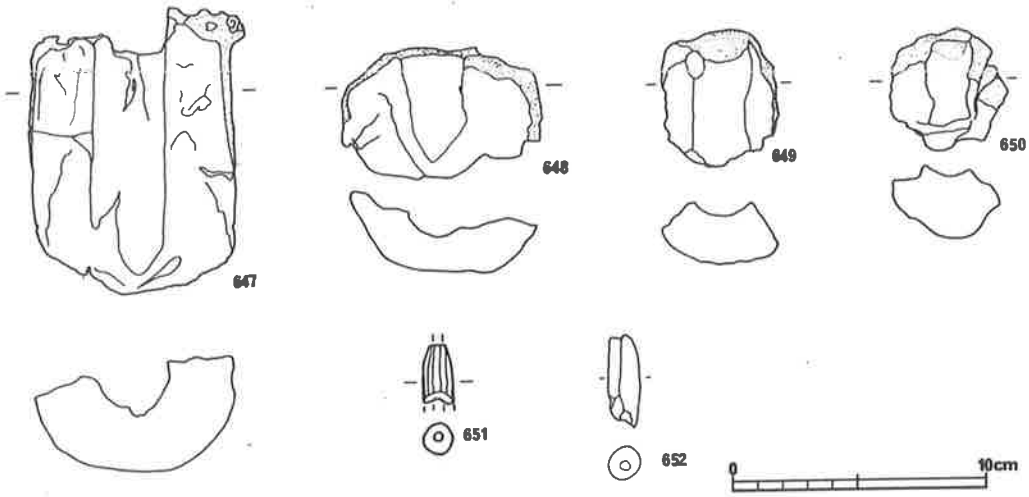
647～**650**は鞴の羽口である。いずれも外面上位に黒色のガラス質のスラッグが付着している。出土地区も北側に集中しているが製鉄関係の遺構は検出できなかった。スラッグは北側地区で14点、南側地区で8点が出土している。

651・**652**は管状土錘である。**651**は灰色を呈し瓦質である。中央部がややふくらむ形である。**652**は淡褐色を呈し、両端を欠損している。細身の紡錘形を呈する。

土師器では、**575**が5点の接合資料でいずれもAB34区出土の3・115・125・137・148である。**576**はAB31−362。**577**はAA30−17。**578**はAC34−78。**579**はAB26−332。**580**はA



第61図　第3次・第4次調査出土遺物⑲（$\frac{1}{4}$）



第62図　第３次・第４次調査出土遺物⑳（$\frac{1}{3}$）

Ｂ31－255。**581**はＡＡ30－149。**582**はＡＣ３－３層。**583**はＡＢ33－34。**584**はＡＢ31－441。**585**はＡＥ13・14ベルト。**586**はＡＢ27－253。**587**はＡＣ34－102とＡＣ34－105の接合。**588**はＡＣ34－37。**589**はＡＣ34－80。**590**はＡＢ33－120。**591**はＡＢ27－4。**592**はＡＣ34－56。**593**はＡＣ10－4層。**594**はＡＢ29－474。**595**はＡＤ7－4層。**596**はＡＢ34の138～140・152の４点接合。**597**はＡＢ34－116。**598**はＡＢ34の153と３の接合。**599**はＡＤ9－4層。**600**はＡＢ26－405。**601**・**602**はＡＤ7－4層。**603**はＡＤ9－4層。**604**はＡＥ14－3層出土である。

瓦器碗では、**605**がＡＢ34－123。同一個体にＡＢ34－119とＡＢ34－131の接合資料がある。**606**はＡＢ34－147とＡＢ32－99とＡＢ34－145の接合。**607**はＡＢ34－121。**608**はＡＣ34－50とＡＣ34－85の接合。**609**はＡＤ9－4層。**610**はＡＢ33－125。**611**・**612**は同一資料でＡＥ13－3層出土である。瓦器質土器では、**613**・**614**はＡＤ9－3層。**615**・**616**はＡＤ7－4層出土である。東播系須恵質捏鉢では、**617**はＡＤ10－5層。**618**はＡＢ25－173。**619**はＡＤ7－5層。**620**はＡＡ　表採。**621**はＡＡ28・29のベルト。**622**はＡＡ30－320。**623**はＡＤ10－4層。**624**はＡＡ30－230。**625**はＡＡ28－85。**626**はＡＤ9－5層とＡＣ9－3層の接合資料である。

滑石製品では、**627**はＡＣ34－20。**628**はＡＢ31－269。**629**はＡＤ7－4層。**630**はＡＢ30－228。**631**はＡＡ27－207。**632**はＡＤ10－4層。**633**はＡＤ10－5層。**634**はＡＢ27－115。**635**はＡＢ27－163。**636**はＡＤ9－4層。**637**はＡＣ33－39。**638**はＡＤ7－4層。**639**はＡＢ29－127。**640**はＡＥ14－3層。**641**はＡＢ30－70。**642**はＡＢ26－21。**643**はＡＡ28－106。**644**はＡＢ32－59。**645**はＡＡ29－350。**646**はＡＣ10－8層出土である。

鞴の羽口では、**647**はＡＤ9－4層。**648**はＡＤ10－4層。**649**はＡＤ8－4層。**650**はＡＤ9－4層出土である。

土錘では、**651**はＡＢ29－588。**652**はＡＢ27－311出土である。

Ⅴ　ま　と　め

今回実施した宮ノ下（みやさが）り遺跡は、松浦市の中心である志佐町の中央を南北に流れる志佐川下流域の右岸に位置する。昭和60年度の遺跡発見から昭和63年度の圃場整備事業に伴う発掘調査及び報告書刊行まで、実に３年の歳月を要した訳です。この間の調査では旧石器時代から中世までの遺物27,000点に及ぶ土器、石器を検出することができた。特に第２次調査での古墳時代の竪穴住居跡や箱式石棺墓、古式土師器の資料は当地域では初見資料であり、今後の地域史の研究にもそれなりの意義があると考えられる。

調査の結果から当遺跡は、旧石器時代から中世後半に営まれた生活遺跡であると考えられる。遺構としては竪穴住居跡２基、箱式石棺墓、集石土壙、柱穴等がある。出土遺物は後期旧石器時代のナイフ形石器・台形様石器・細石核・細石刃等がある。しかし、これらは中世の土層中に混在するかたちで出土しており、流れ込みが考えられる。

縄文時代については、当初第２次調査において期待されていた包含層は、中世期の削平を受けてほとんどが失われ、前述同様中世の土層中に混在して、石鏃・石銛・掻器・晩期土器等が出土している。一方、第２次調査ではＴ22の８層から11層において縄文晩期前半期の貝殻条痕を主体とする黒川式土器・石鏃の単純層が確認できた。本市においては昭和63年度調査の池田遺跡から刻目突帯文土器が出土しているが、黒川式は初見である。黒川式は標高約10mで出土しており、周辺には住居跡等が検出される可能性が十分考えられる。石銛は西北九州の海岸部に立地する遺跡で出土しており、本市楼楷田遺跡・隣接の田平町つぐめのはな遺跡等で多数出土している。この石器は縄文早期から後期まで使用されたと考えられているが、本遺跡では同時期の土器片が出土していない。機能的にはクジラ・イルカ等の大形海獣類を対象としたと考えられよう。

弥生時代の遺物は北側のＡＥ13を中心として、前期末の貝殻腹縁による羽状文の壷が出土している。この調査区では縄文晩期から弥生前期、中期におよぶ壷形土器、甕形土器、後期後半の甕形土器が多数出土している。中には甕棺片とも思われる２条の突帯をもつ土器片もある。これらの地区は東側の棚田からの流れ込みと考えられる。石器では扁平磨製片刃石斧が遺跡発見地の工事壁面から採集されているのみである。包含層の確認はできなかった。しかし、対岸には内行花文鏡片を副葬した石棺墓が検出された栢ノ木遺跡があり、興味深いものがある。

今回の調査で最も成果があったのが古墳時代である。竪穴住居跡２基は、１号住居跡が５世紀代で２号住居跡が４世紀後半代に位置づけられる。１号住居跡は確かな年代を与えることはできなかったが、２号住居跡は出土遺物の中に鋭く屈折して外反する口縁部をもち、体部は球形を呈する布留式土器の甕が出土しており、４世紀後半代の時期に位置づけられる。また、周辺からは球形に近い体部をもち肩部に一条の沈線を有する布留（古）式の甕の出土がある。また、調査後の圃場整備実施中にも周辺で数基の住居跡が検出（宮ノ下りＣ遺跡、Ｄ遺跡）され

ており、4世紀中頃から4世紀後半、5世紀代にかけての住居跡群であることが認められる。また、箱式石棺墓も1基検出している。時期等を決定する土器の出土はなかったが、ガラス小玉が328個出土している。玉の形状は両端が平行をなすものと、管状に延ばしたガラス管を不規則に切断した方向性のないものがある。本県においてはガラス玉は弥生中期初頭から出土し、後期以降になると玉の数を多数副葬するようになっている。隣接する田平町中野ノ辻5号石棺から346個、同6号石棺108個、本市栢ノ木遺跡2号石棺から約350個が出土している。古墳時代に入っては5世紀中頃の峰町恵比須山1号石棺から85個。美津島町海落2号石棺から17個。平戸市田助3号石棺から418個出土しており、両端を切断したガラス玉が出土している。当遺跡のガラス小玉は化学分析を行っていないが、両端を切断したガラス玉は古墳時代に特徴的にみられるところから、同時代の遺物である可能性が高い。つぎに石棺の法量から見てみると、石棺の法量は、長径138㎝、東側短径22㎝、西側短径41㎝、深さ21㎝を測る。方位は長軸が南西～北東を向き、頭部の向きは西枕である。前述の中野ノ辻遺跡では10基の石棺の時期について、石棺の法量・方位・枕方位から、棺の長径が長い程時期が後出する傾向にあると指摘されている。しかし、本遺跡の石棺はこの傾向に対比することができない。したがって竪穴住居跡等と考え合わせると、5世紀の石棺と考えた方が妥当に思われる。溝状遺構については後日再検討する必要があろう。特に4世紀から5世紀代にかけての古式土師器のまとまった出土の例は、当松浦地域では最初であり、近畿地方からの文化的影響があったことを窺い知ることができる。

第2次調査においては範囲確認調査であったため、宮ノ下りC遺跡全体の集落の全貌を明らかにすることはできなかった。現在東側を流れる小河川が、宮ノ下りに集落が形成された時期にも流れていた可能性を持っている。また、西側には志佐川が北流しており、このような二つの河川に挟まれた、狭長な自然堤防上が当時の生活面であったことが判る。従って集落の規模も、さほど大きなものと考えられず、20基以内の小規模な単位集団と思われる。また、D遺跡も同様に考えられる。D遺跡は10基以内と考えられるが、本工事中に発見した遺物中には、5世紀後半代の土師器の高杯、6世紀初頭の土師器の甕。また、7世紀中頃から後半の須恵器の長頸壺、杯蓋、杯身が出土しており、時期に若干幅があるようである。本報告では紙面の都合上説明のみで、後日その任を果したいと思っている。

古代から中世においては、本市でも初見の緑釉陶器の発見がある。黄褐色軟質の胎土をもつ**554**・**555**と、灰色硬質の胎土をもつ**556**・**557**があり、これらは奈良期と平安期が考えられる。しかし、生産地についてが今後に残された問題である。本遺跡では明確な遺構が検出されておらず、遺物が認められるだけであった。したがって、ここでは最近の研究の成果を学びながら本遺跡の出土品の編年的位置づけを行ってみる。

第Ⅰ期（9世紀後半～11世紀中頃）

土師器では破片が多く細分にわたっての検討ができていないが、9世紀後半の**575**。10世紀前半の**582**・**596**。11世紀中頃の**591**、内黒碗**586**もこの時期である。輸入陶磁器では、白磁

碗Ⅱ類、越州窯系青磁もこの時期にあたる。

第Ⅱ期（11世紀後半～12世紀前半）

この頃から瓦器（605）が出現し、輸入陶磁器碗の出土量が多くなる傾向を示す。北宋後半代の白磁碗Ⅳ～Ⅷ類、皿Ⅷ類がある。石鍋ではA類が急増する。

第Ⅲ期（12世紀中頃～13世紀前半）

龍泉窯系青磁と同安窯系青磁が主体となる時期である。龍泉窯系青磁碗Ⅰ－2、Ⅰ－4。同安窯系青磁碗Ⅰ－1、同皿Ⅰ－1がある。石鍋ではB類がこれにあたる。

第Ⅳ期（13世紀中頃～14世紀中頃）

龍泉窯系青磁で鎬蓮弁文碗と、口禿の白磁碗・皿が主体となる時期である。輸入陶器類及び東播系須恵質捏鉢、瓦質捏鉢、土師器の糸切り底の小皿がこれに含まれる。

第Ⅴ期（14世紀後半～15世紀中頃）

出土数が極単に少なくなり、龍泉窯系青磁でも明代と思われる無文碗がある。粉青沙器がこれに含まれる。

以上のようにⅠ～Ⅴ期にまで分けてみたが、遺跡の中心をなすのはⅡ～Ⅳ期にあるようだ。中世の時期を検討する上でも重要な遺物には土師器がある。本市楼楷田遺跡同様、土師器は細片が多く接合できないために、輸入陶磁器を中心として位置づけを行った。将来的にはこの点をもう一度検討して本市における編年を確定していきたいと考えている。第1次調査でのC1～C6の調査区と第3次・第4次調査で行った北側・南側とを対比してみるため、土師器・青磁・白磁の出土点数から考えてみる。仮にA・B・Cと呼称する。Aでは土師器448点、青磁304点、白磁245点である。Bでは土師器569点、青磁330点、白磁330点である。Cでは土師器2,039点、青磁231点、白磁251点であり、A・Bではほぼ同じ比率であるのに対して、圧倒的に土師器の出土数が多い。この点は、遺跡自体が何らかの原因で縮小し、土師器に依存しなければならなかったのか、それとも遺構の中心が発掘区域から離れていることなどが上げられる。この宮ノ下りA遺跡では遺跡の東側の段丘からの流れ込みが十分考えられるため、将来はこの地区から県道沿いまでの水田地帯の発掘調査が是非必要になってくるであろう。

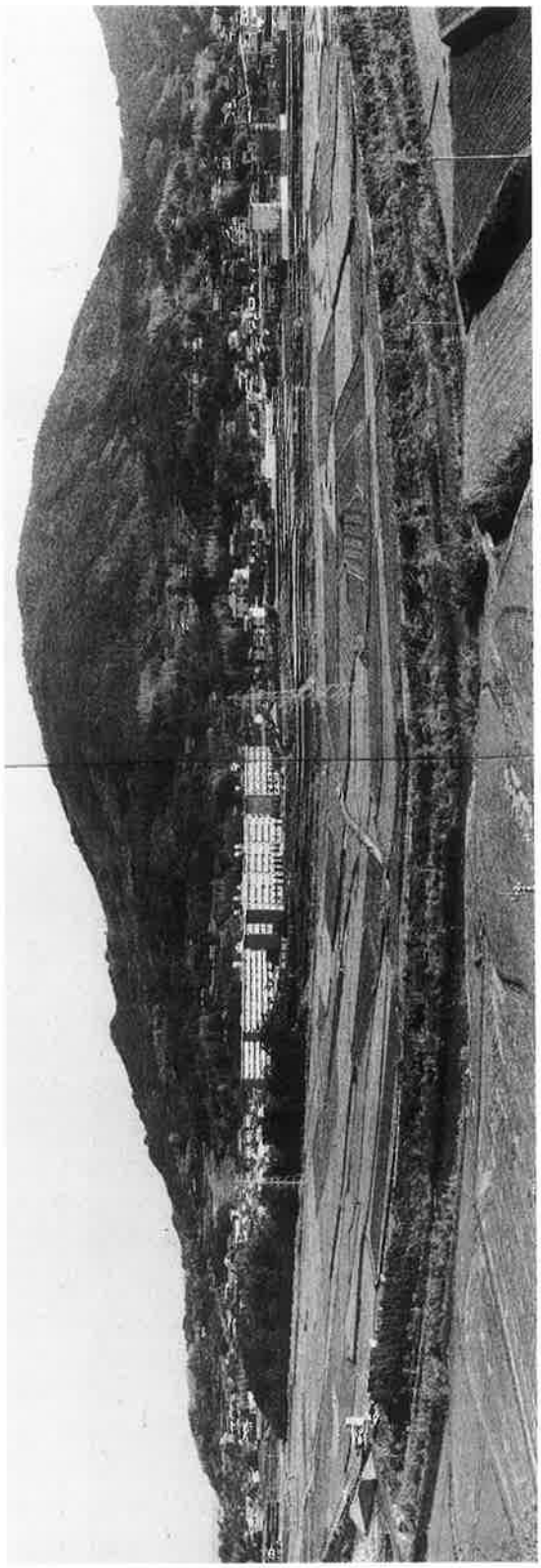
最後になったが、本報告が内容的に意を尽せぬままの刊行となってしまった。これも偏に筆者が浅学菲才であり、また、時間が限定されるきらいがあったため言及できなかった点が多いことを反省している。後日改めて稿を起こしたいと考えている。先学諸氏の御指導、御批判を賜わればと思う次第であります。

本報告は、発掘調査から整理作業を通して、多くの人達の御協力、御助言によって刊行することができました。また、県文化課宮崎氏には本報告の為に多くの御教示を頂いた。文末ながら、記して感謝の意を表したい。

昭和60年度の遺跡発見に端を発し、ここに一応の成果を見るに至り、本報告が松浦の歴史と文化の解明に寄与できれば幸いに存じます。

図　　版

PLATES



遺跡遠景（西より）

第 1 次調査風景

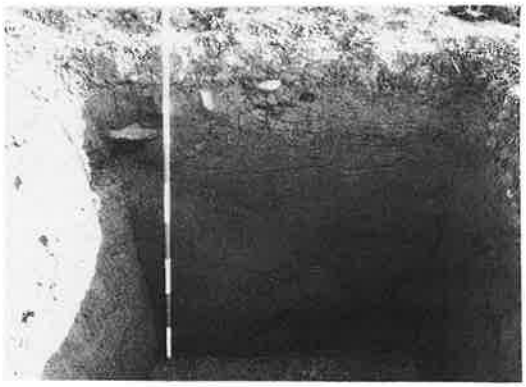
第 3 次調査風景

第 4 次調査風景

A 地点土層

B 地点土層

C 地点土層



T 22土層

T 43土層

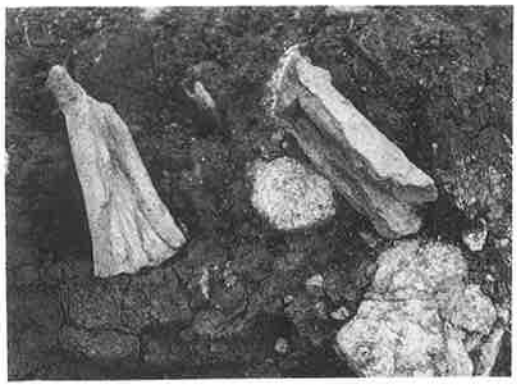
AB 30土層

調査区の土層

T 24　柱穴検出状況

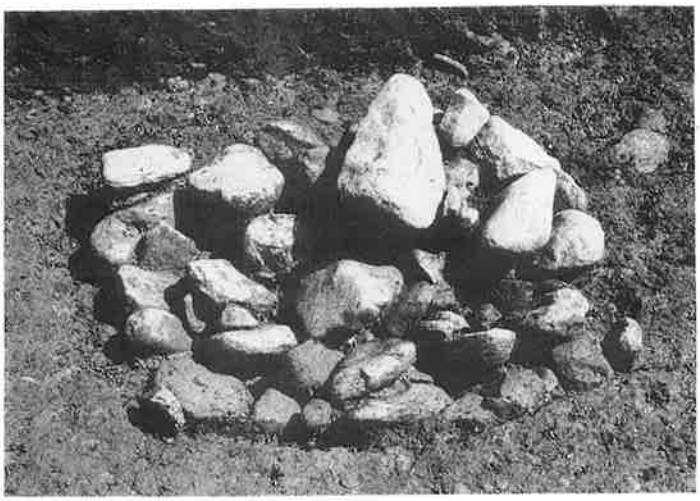
A B 25　柱穴検出状況

A B 30　柱穴検出状況

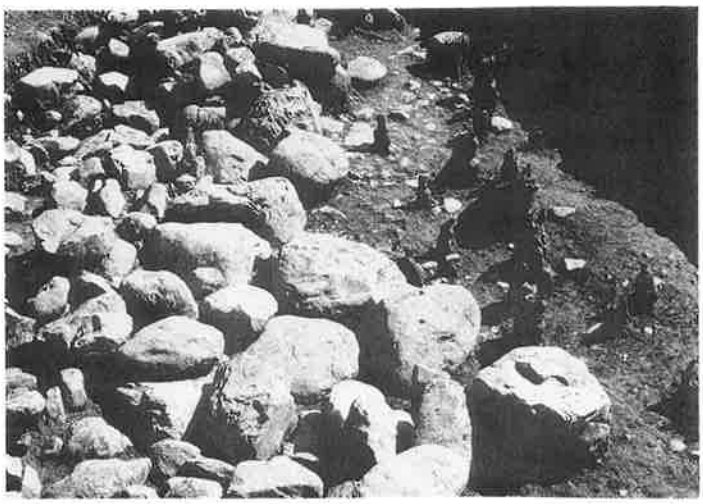


遺物出土状況

集石土壙検出状況（北より）



集石土壙検出状況（西より）



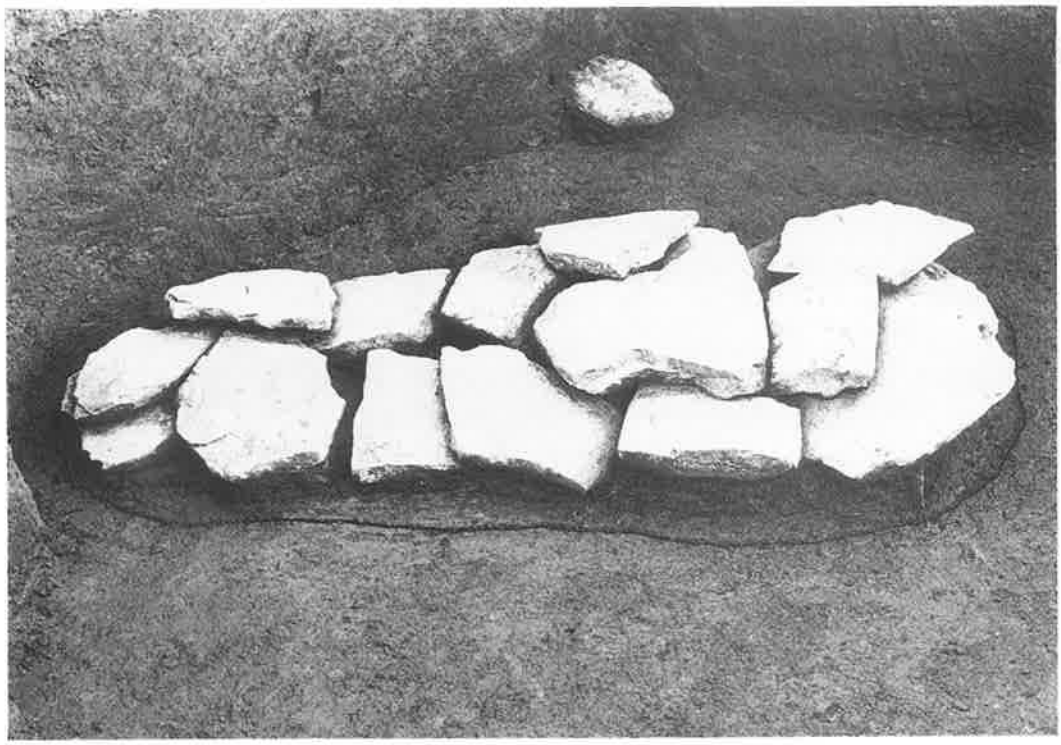
B 地点配石検出状況

1 号住居跡検出状況（東より）

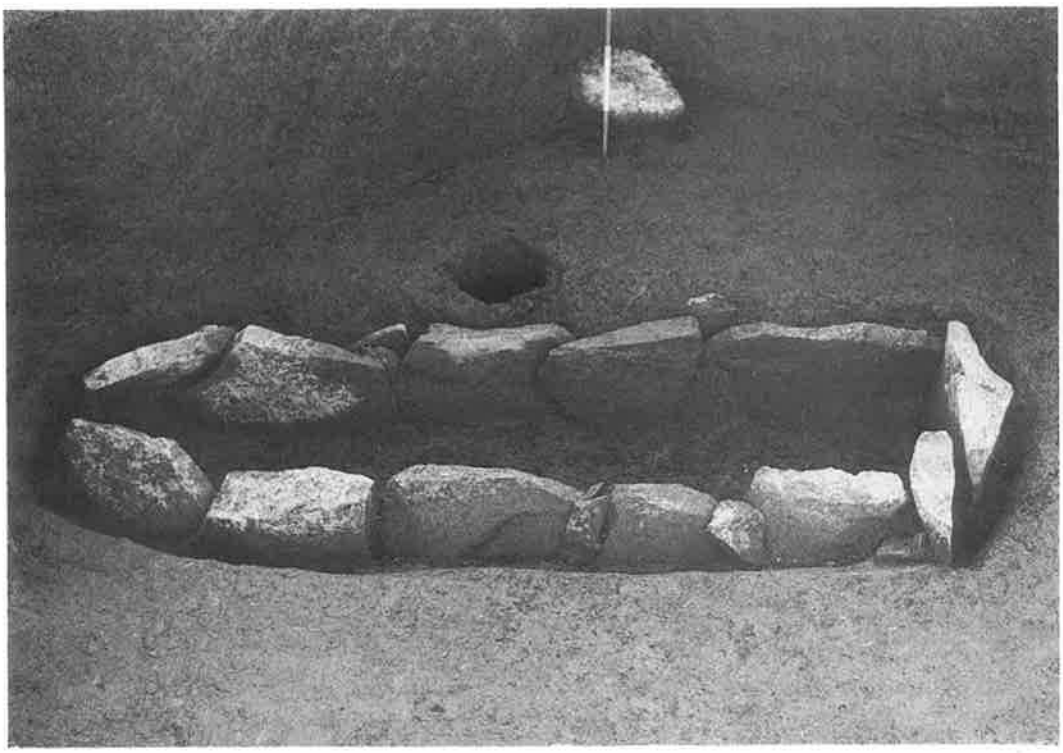
1 号住居跡検出状況（東より）

2号住居跡検出状況（北より）

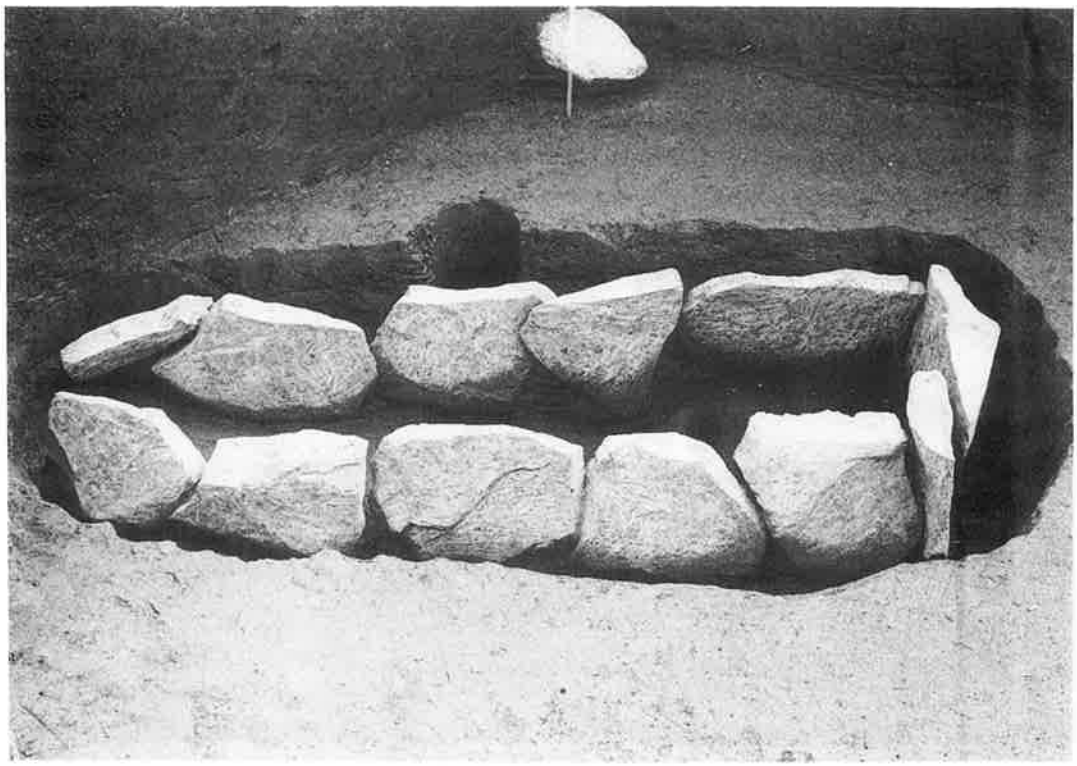
2号住居跡完掘状況（北より）



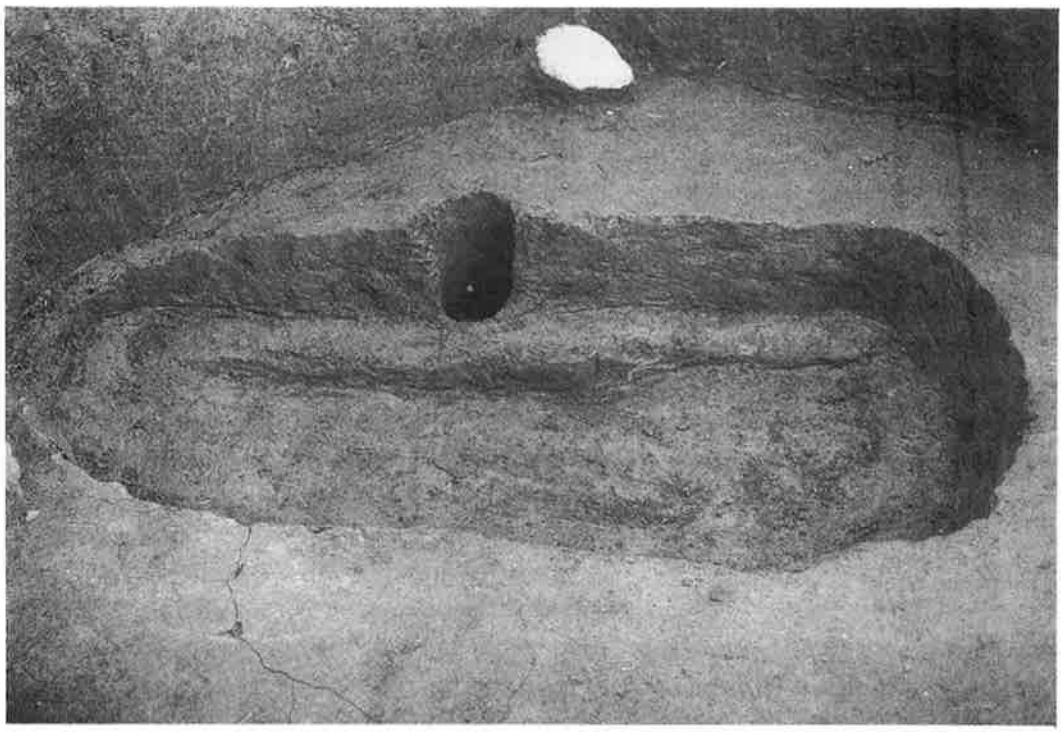
1 号石棺検出状況（北より）



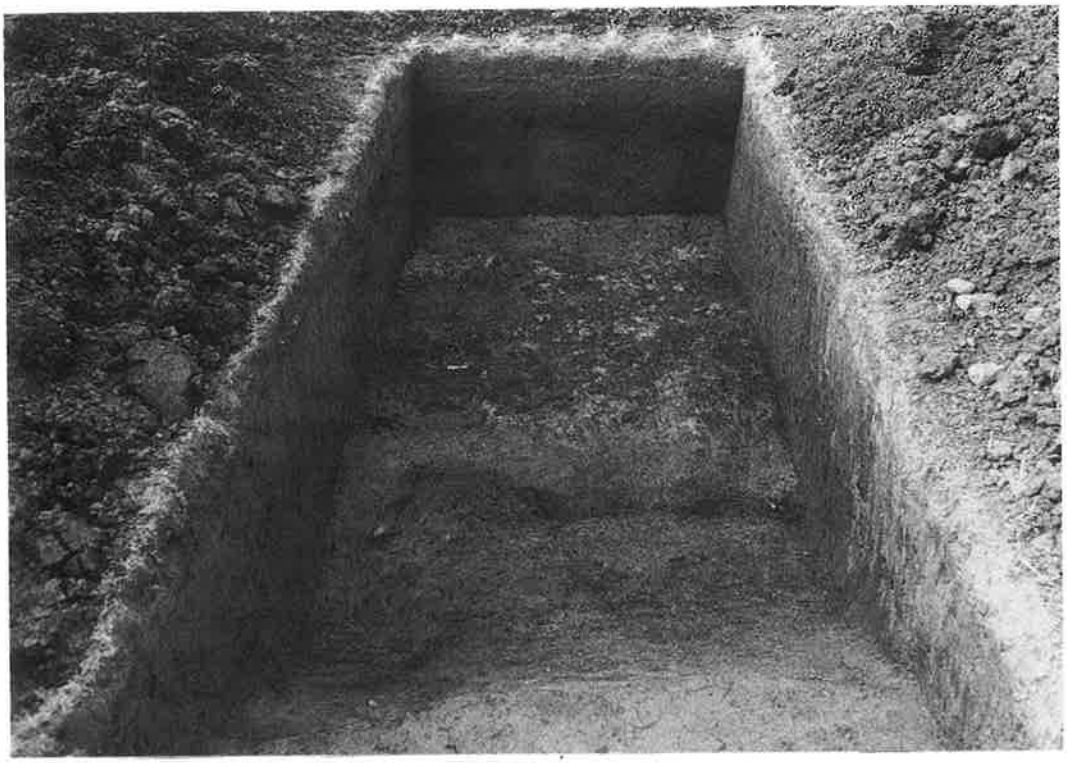
1 号石棺検出状況（北より）



1 号石棺検出状況（北より）

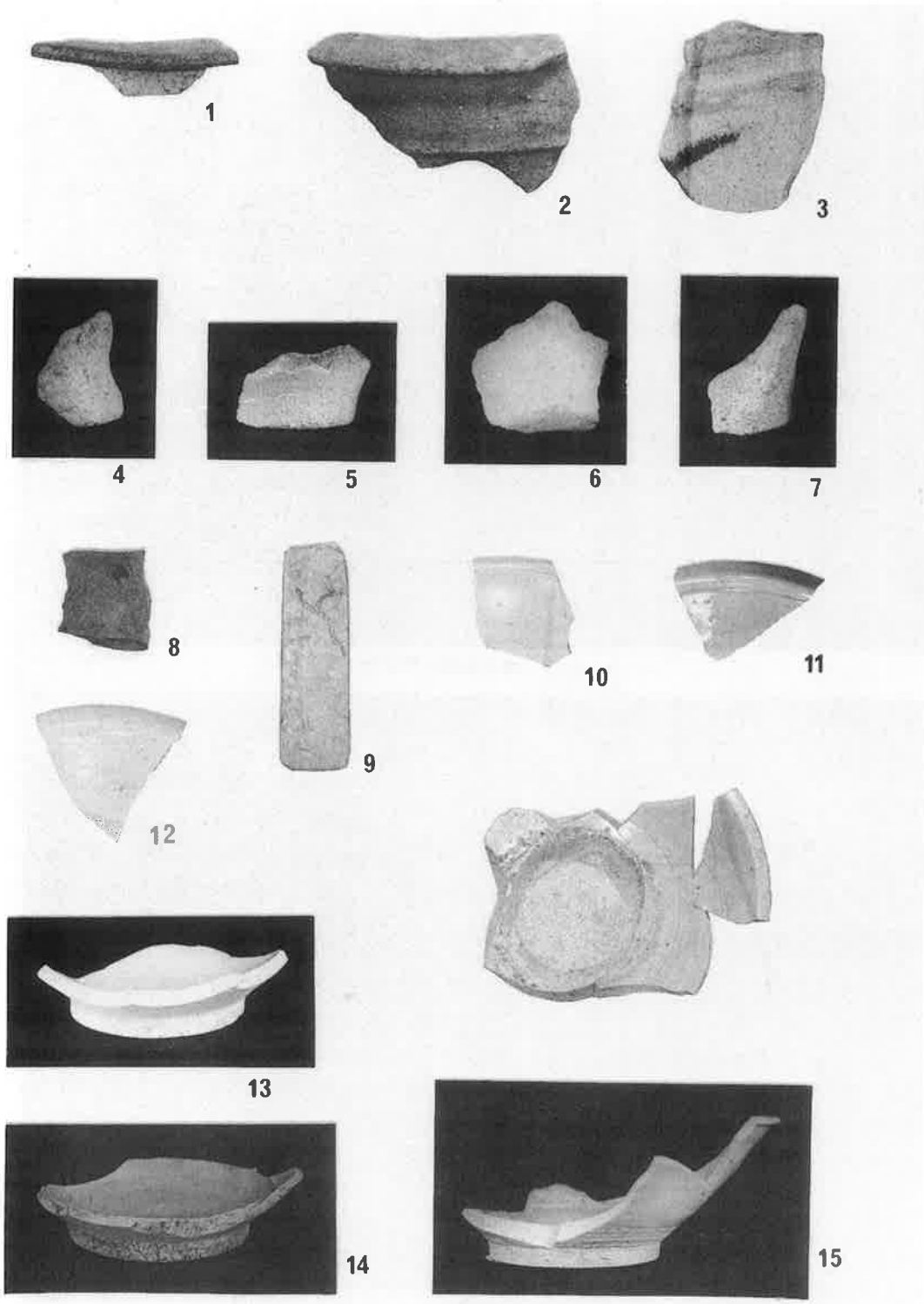


1 号 石 棺 土 壙 （北より）

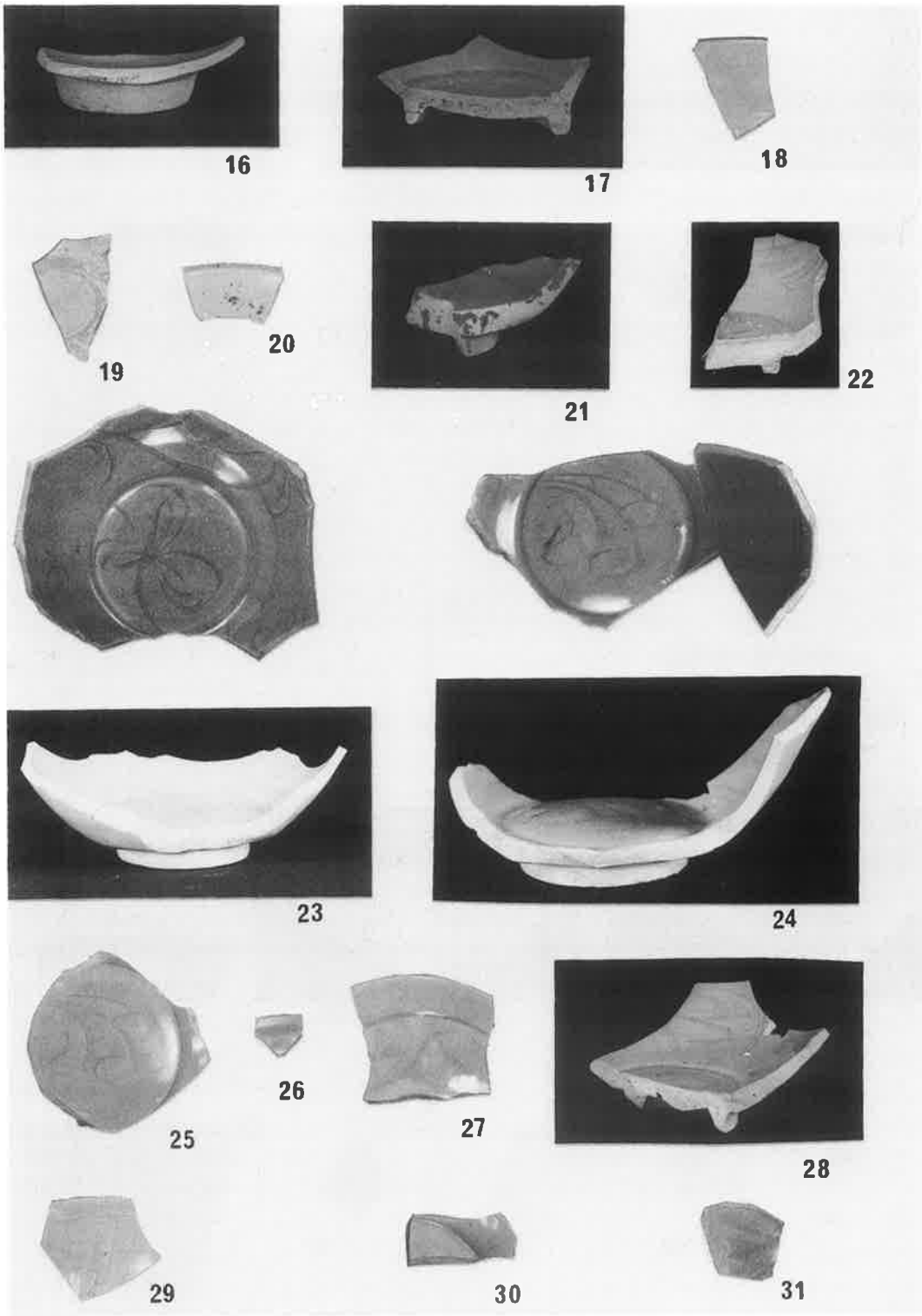


T 32　溝状遺構検出状況（東より）

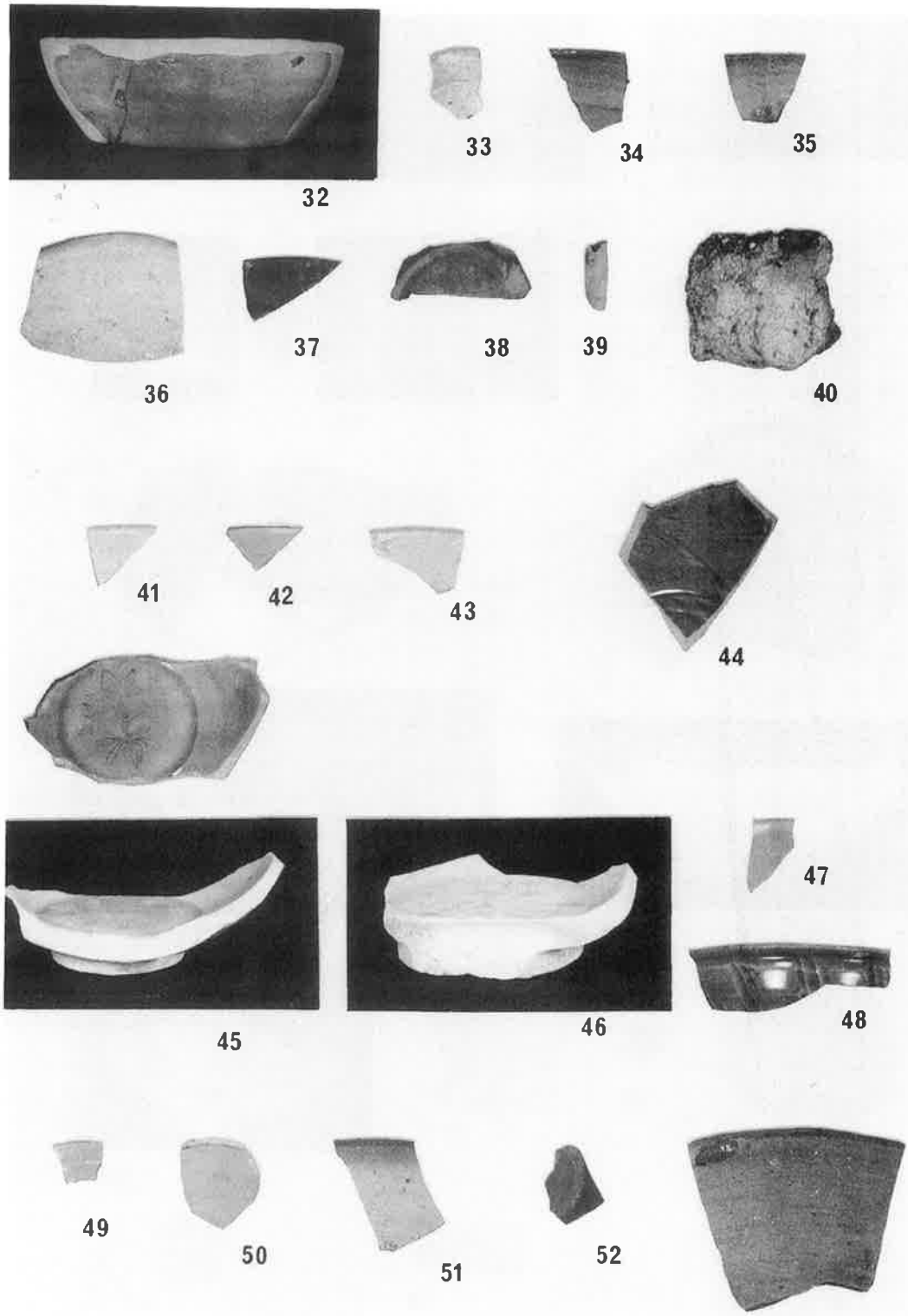
T 32　溝状遺構検出状況（南より）



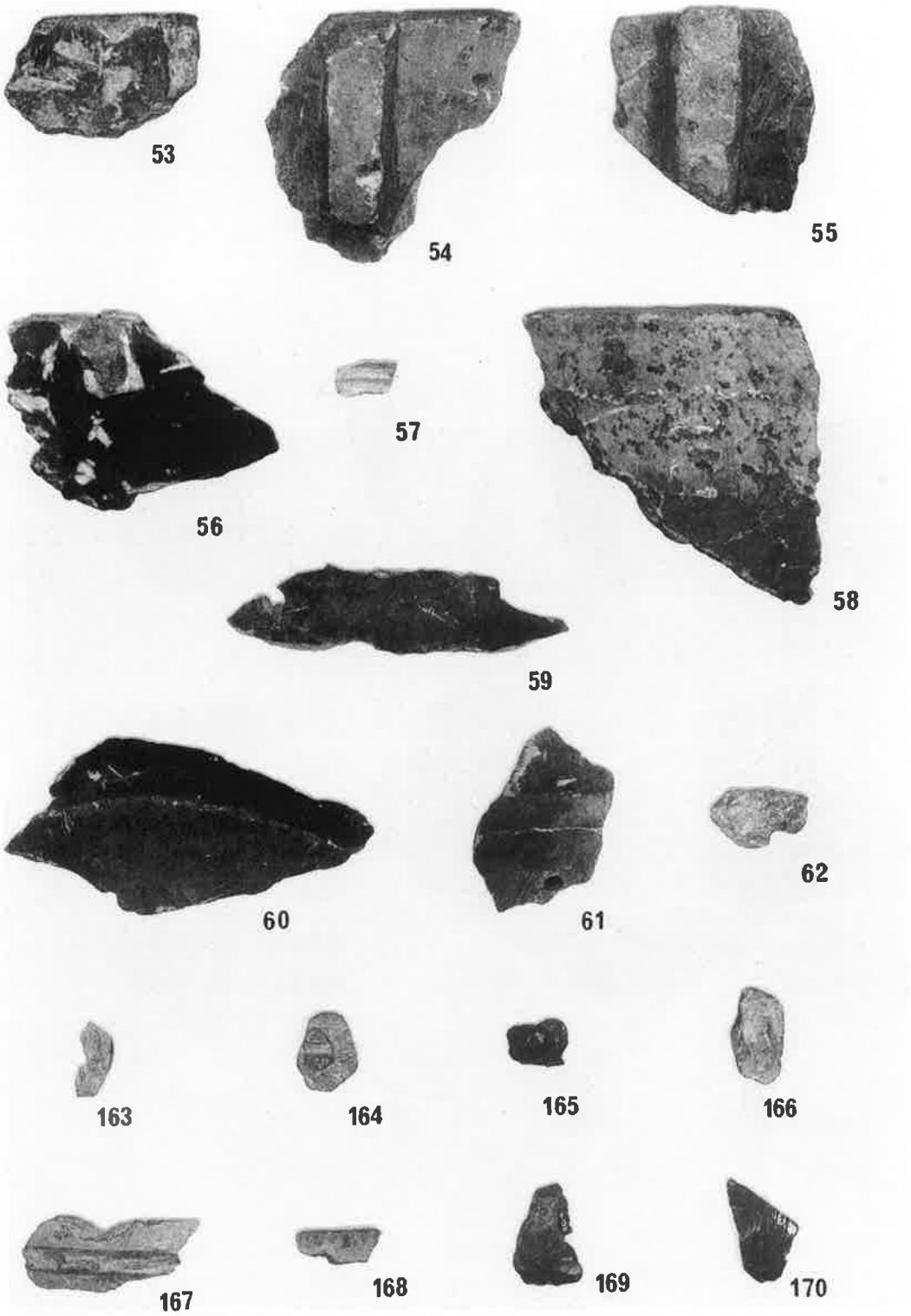
第1次調査出土遺物① (1/3)



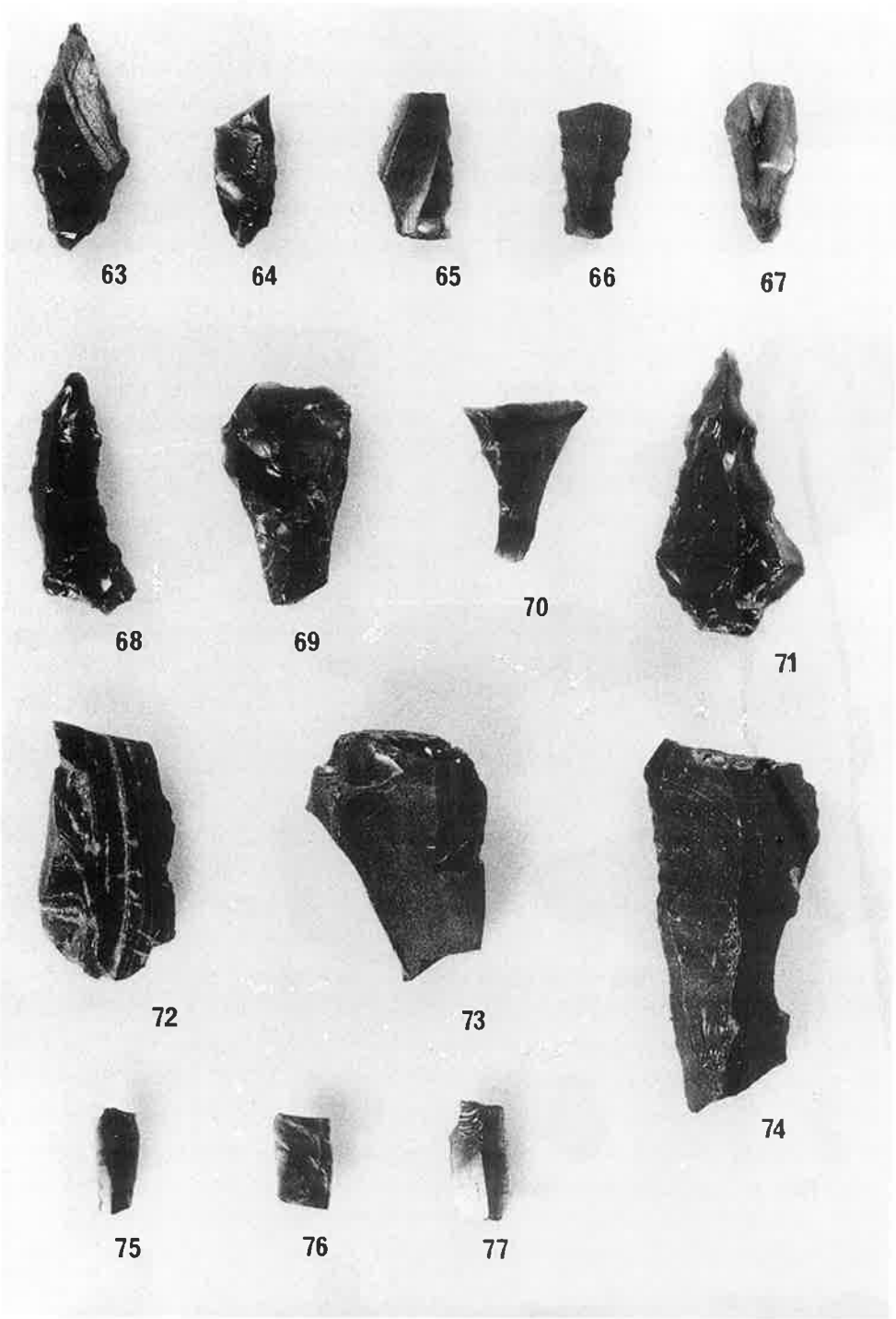
第 1 次調査出土遺物② ($\frac{1}{3}$)



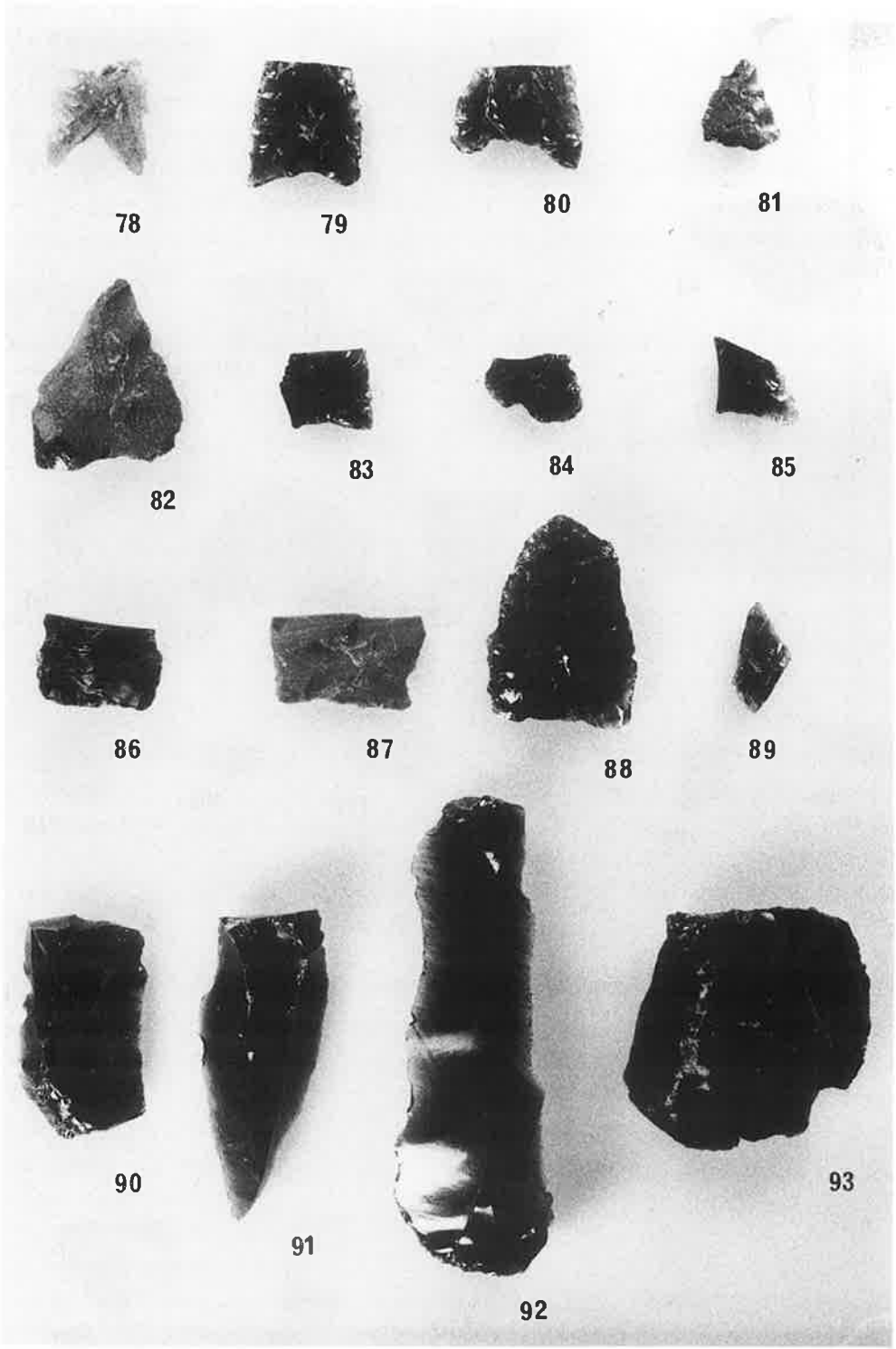
第 1 次調査出土遺物③（$\frac{1}{3}$）



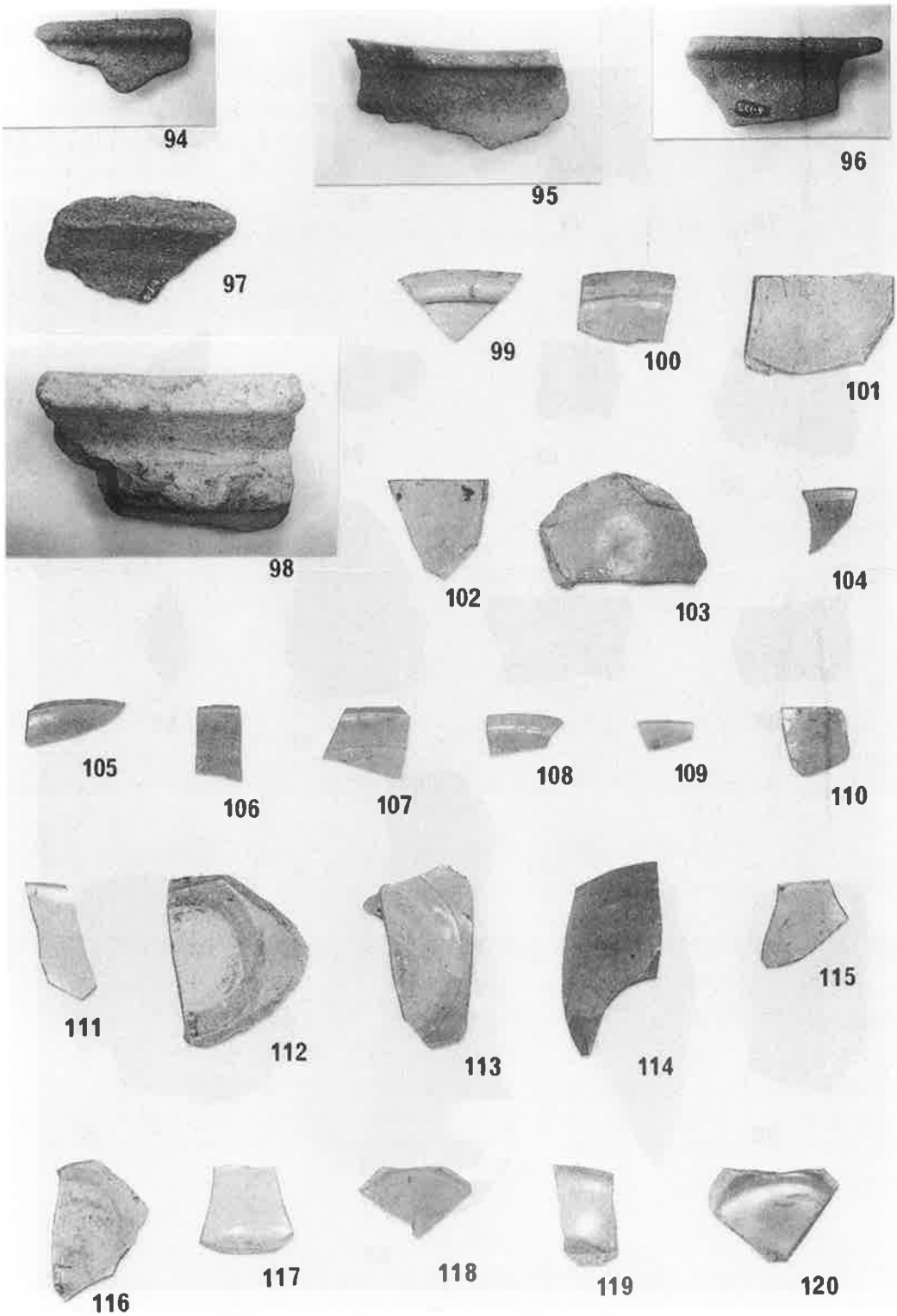
第 1 次調査出土遺物④（$\frac{1}{3}$）



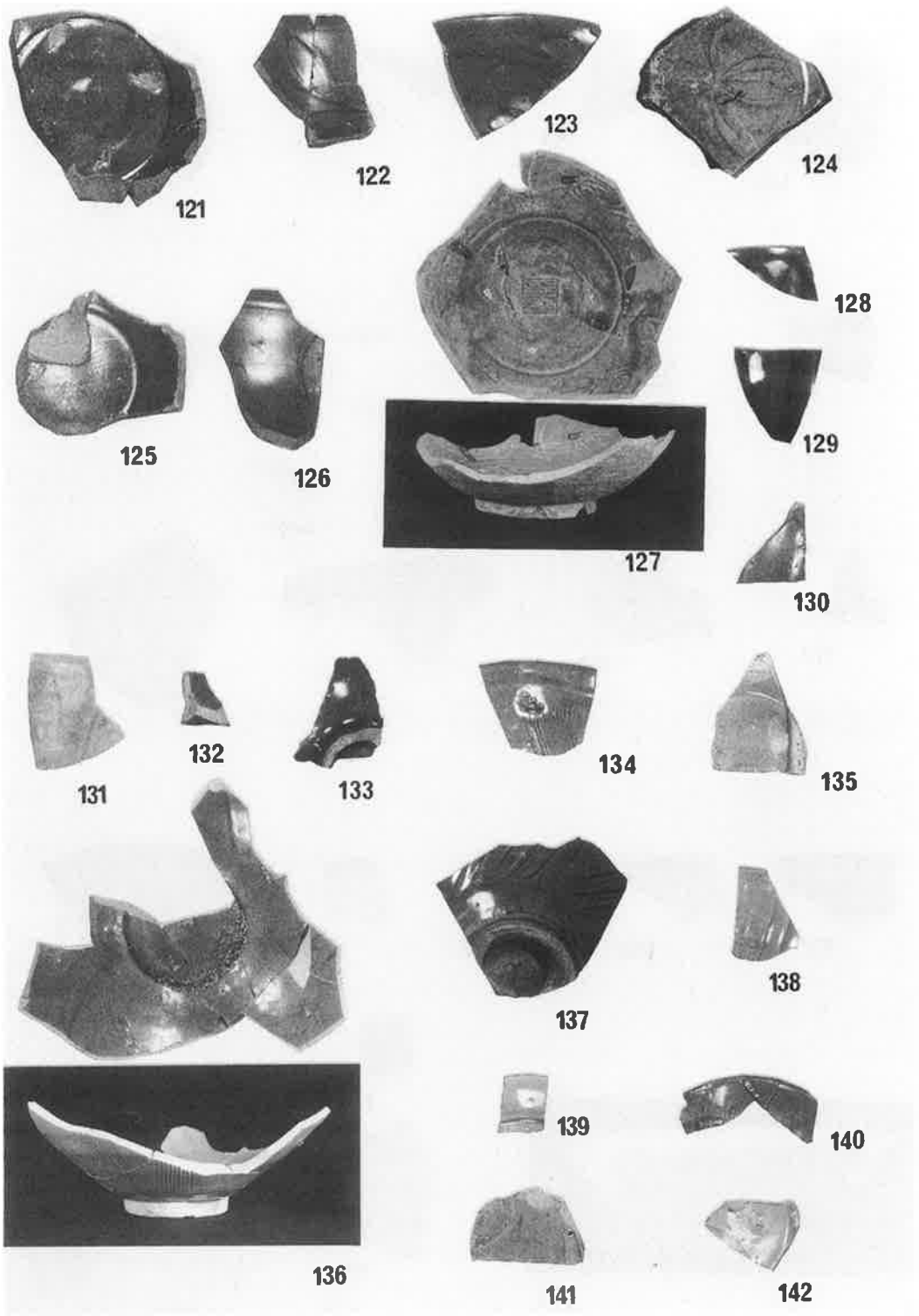
第1次調査出土遺物⑤（$\frac{1}{1}$）



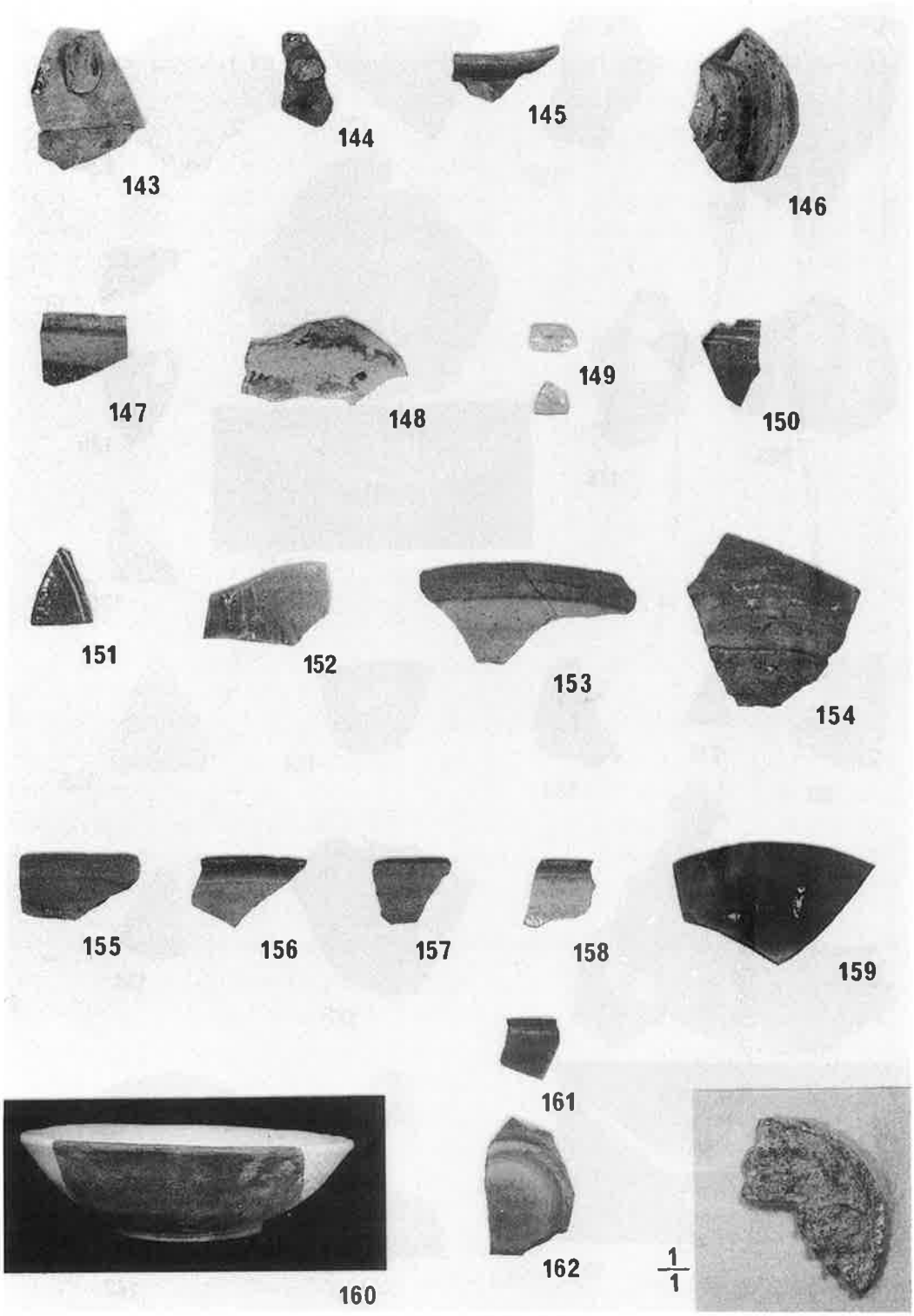
第 1 次調査出土遺物⑥（$\frac{1}{1}$）



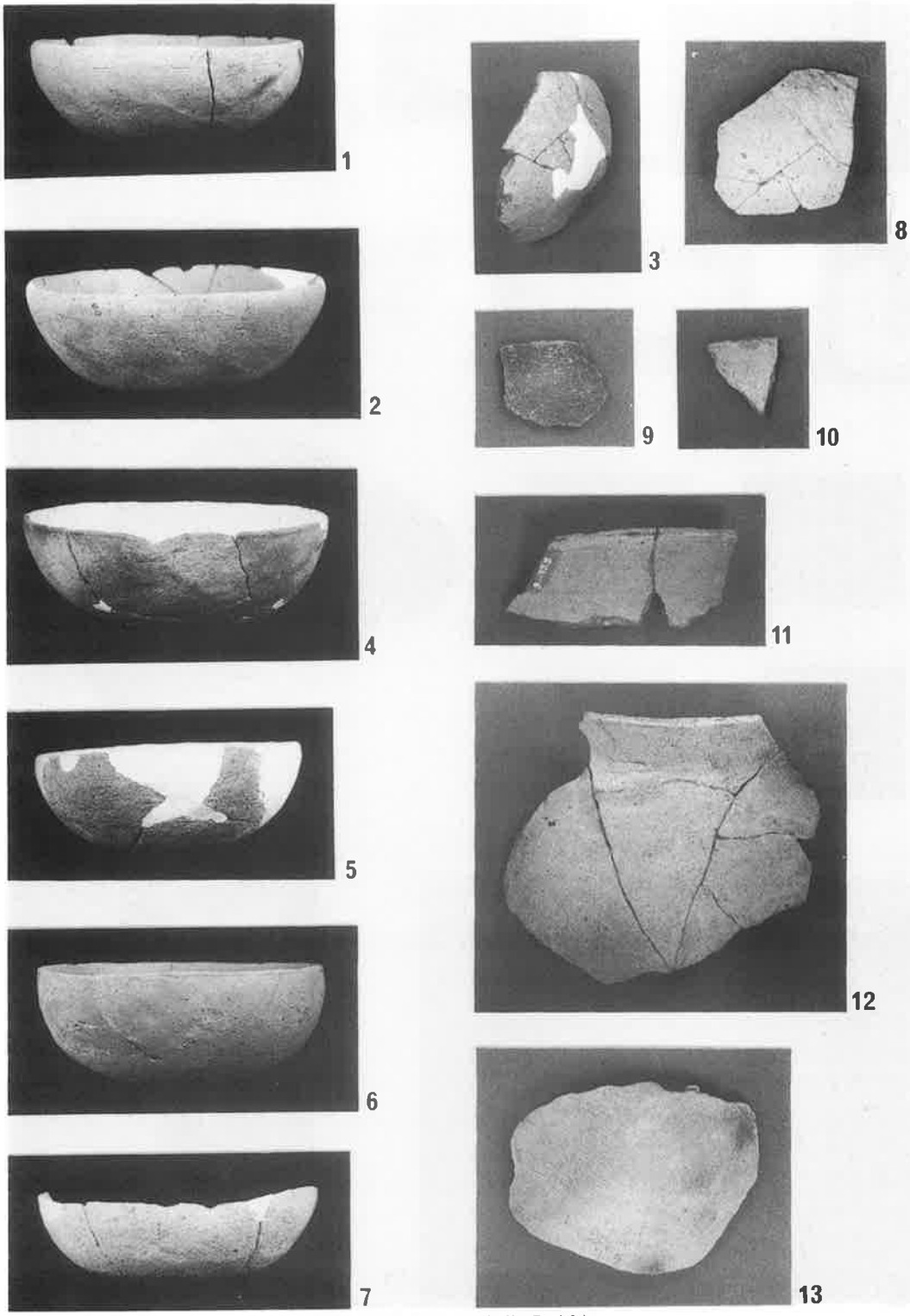
第 1 次調査出土遺物⑦（$\frac{1}{3}$）



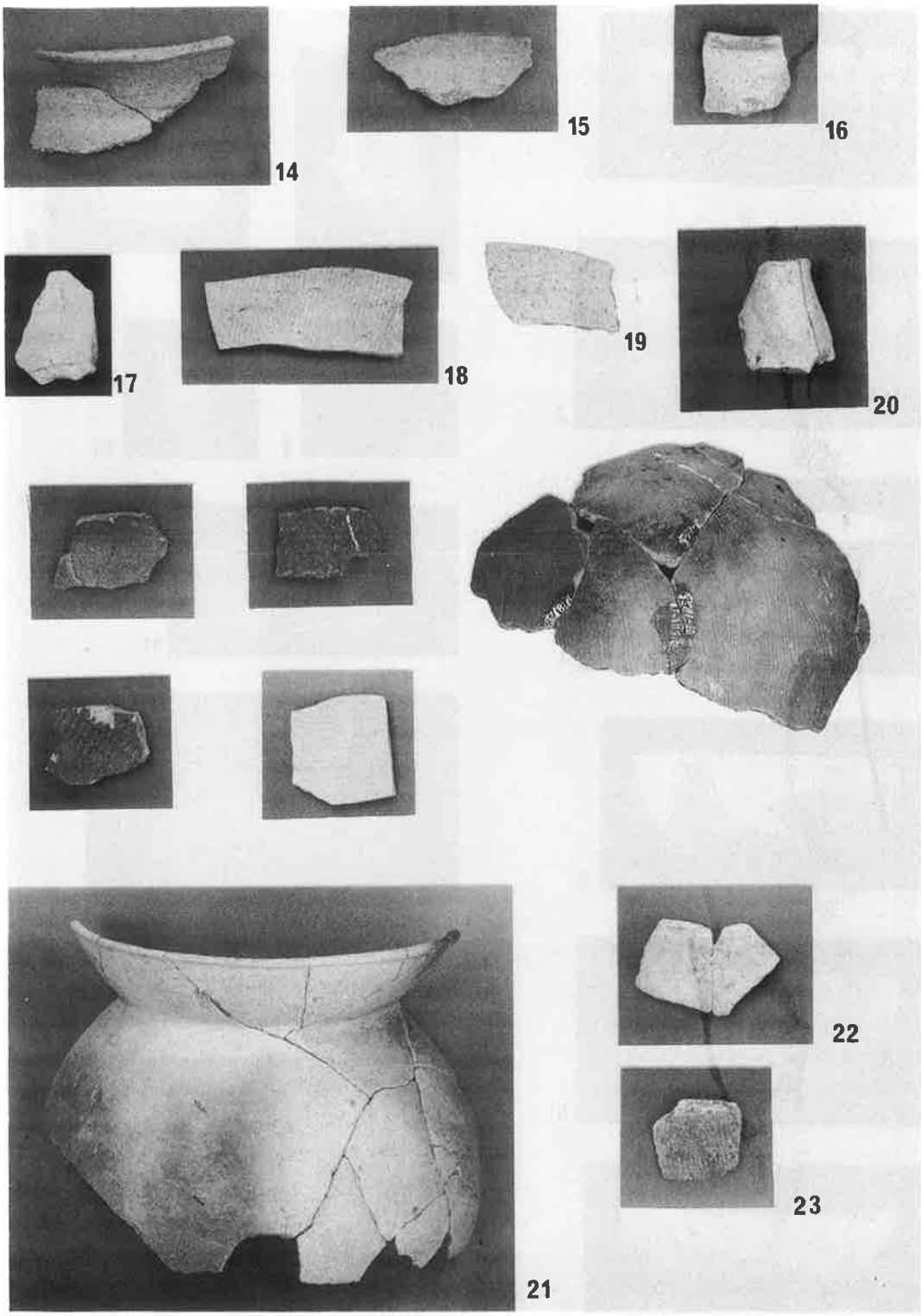
第 1 次調査出土遺物⑧（$\frac{1}{3}$）



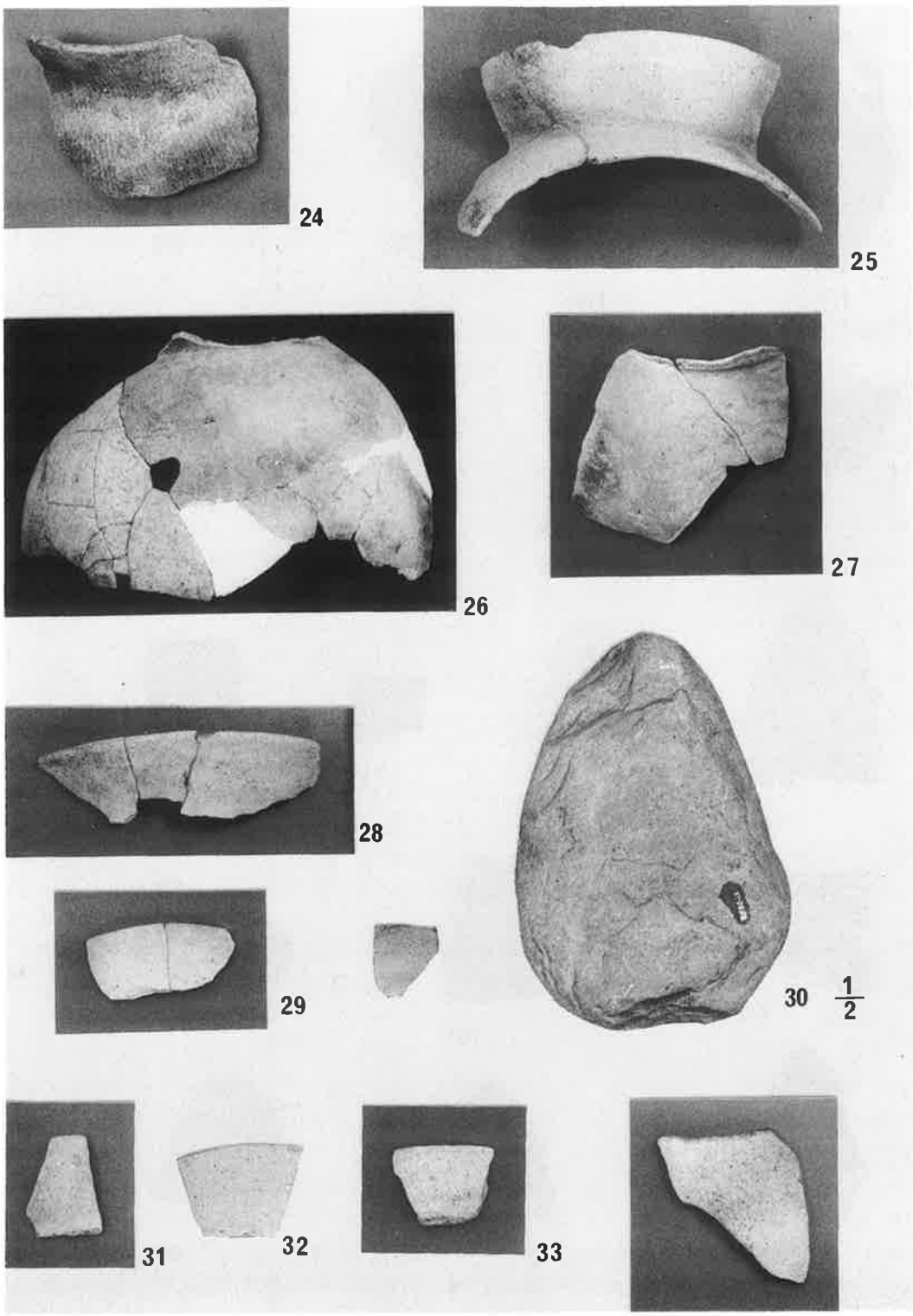
第1次調査出土遺物⑨（$\frac{1}{3}$）



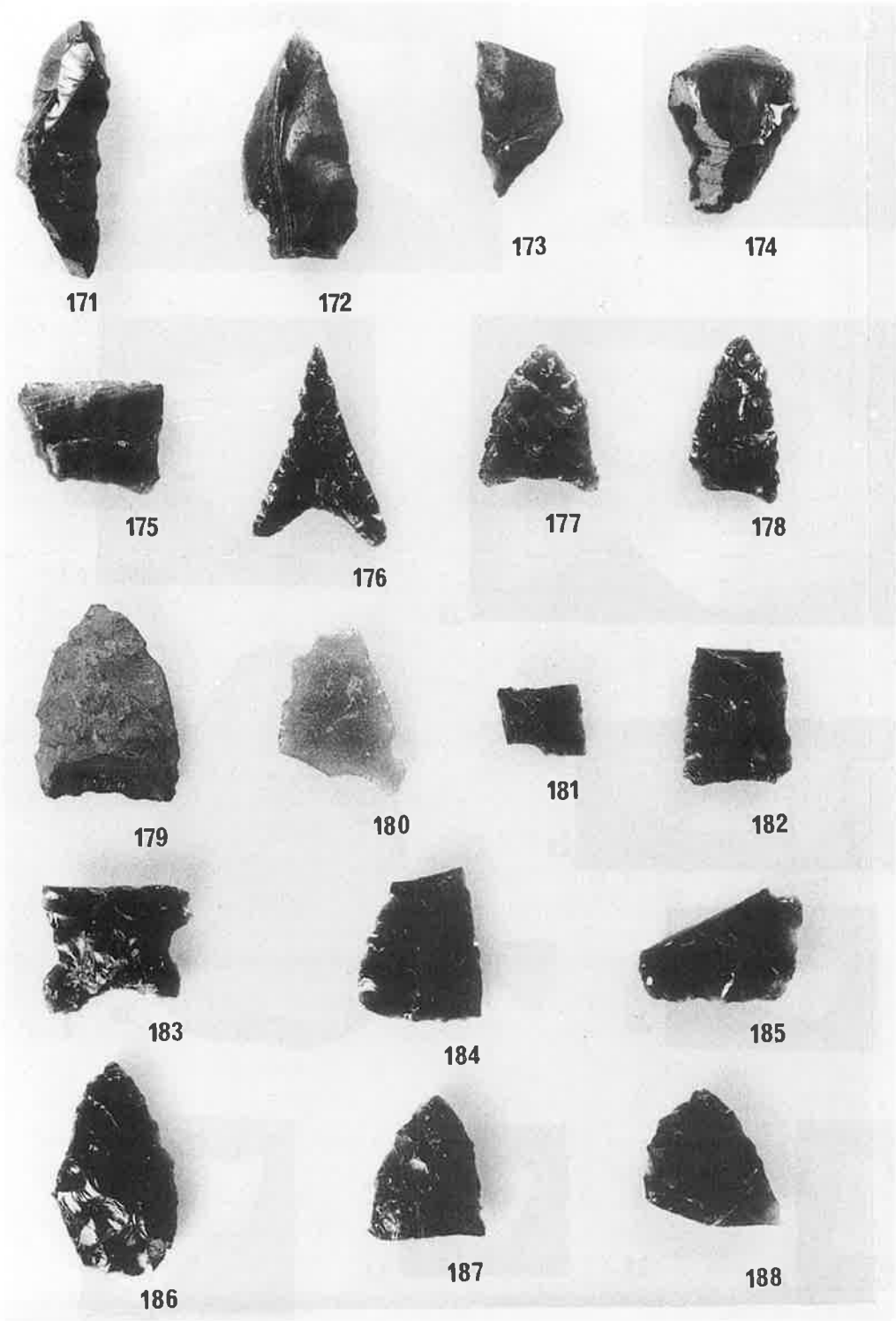
第 2 次調査出土遺物① (1/3)



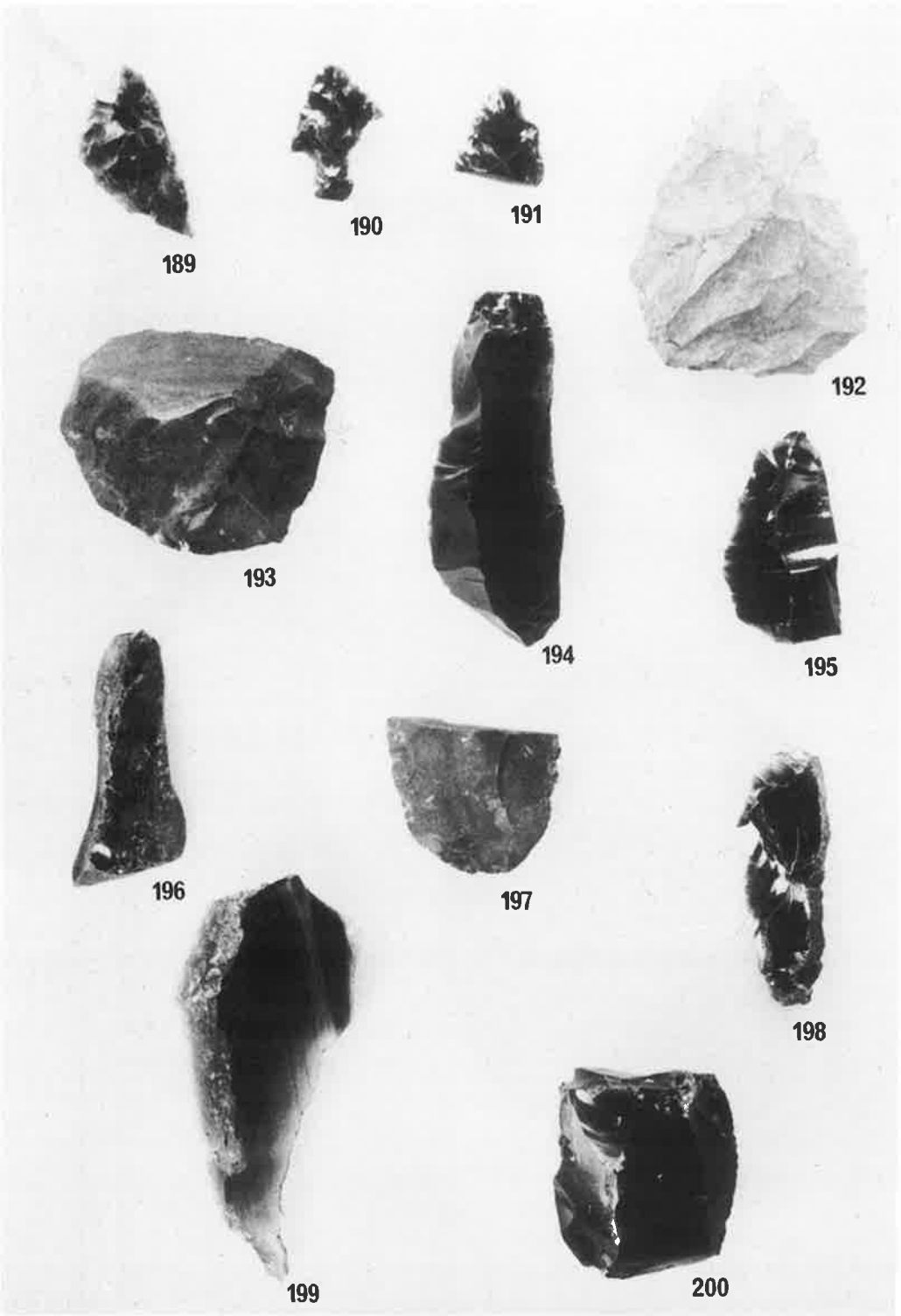
第 2 次調査出土遺物② (1/3)



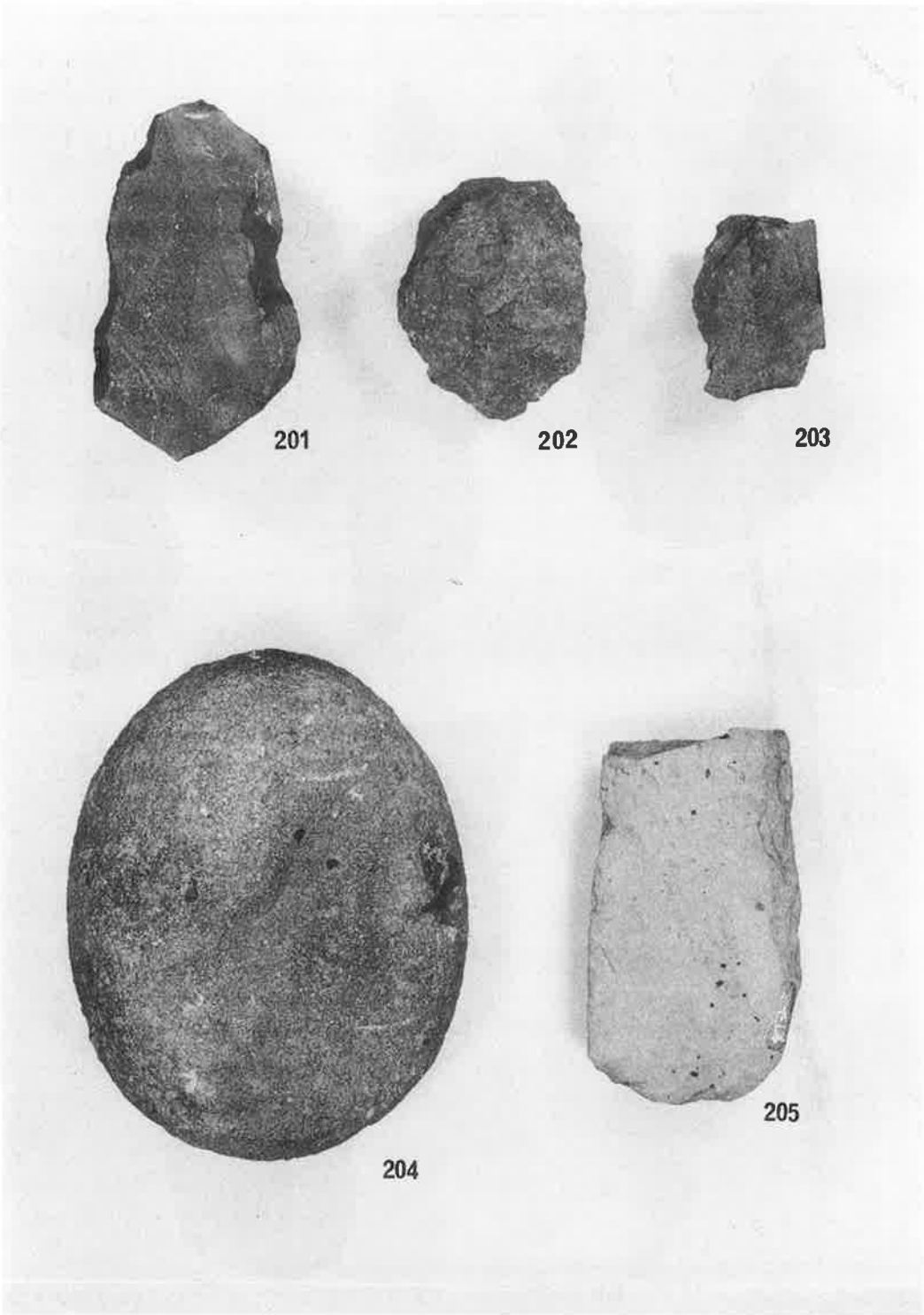
第 2 次調査出土遺物③（$\frac{1}{3}$）



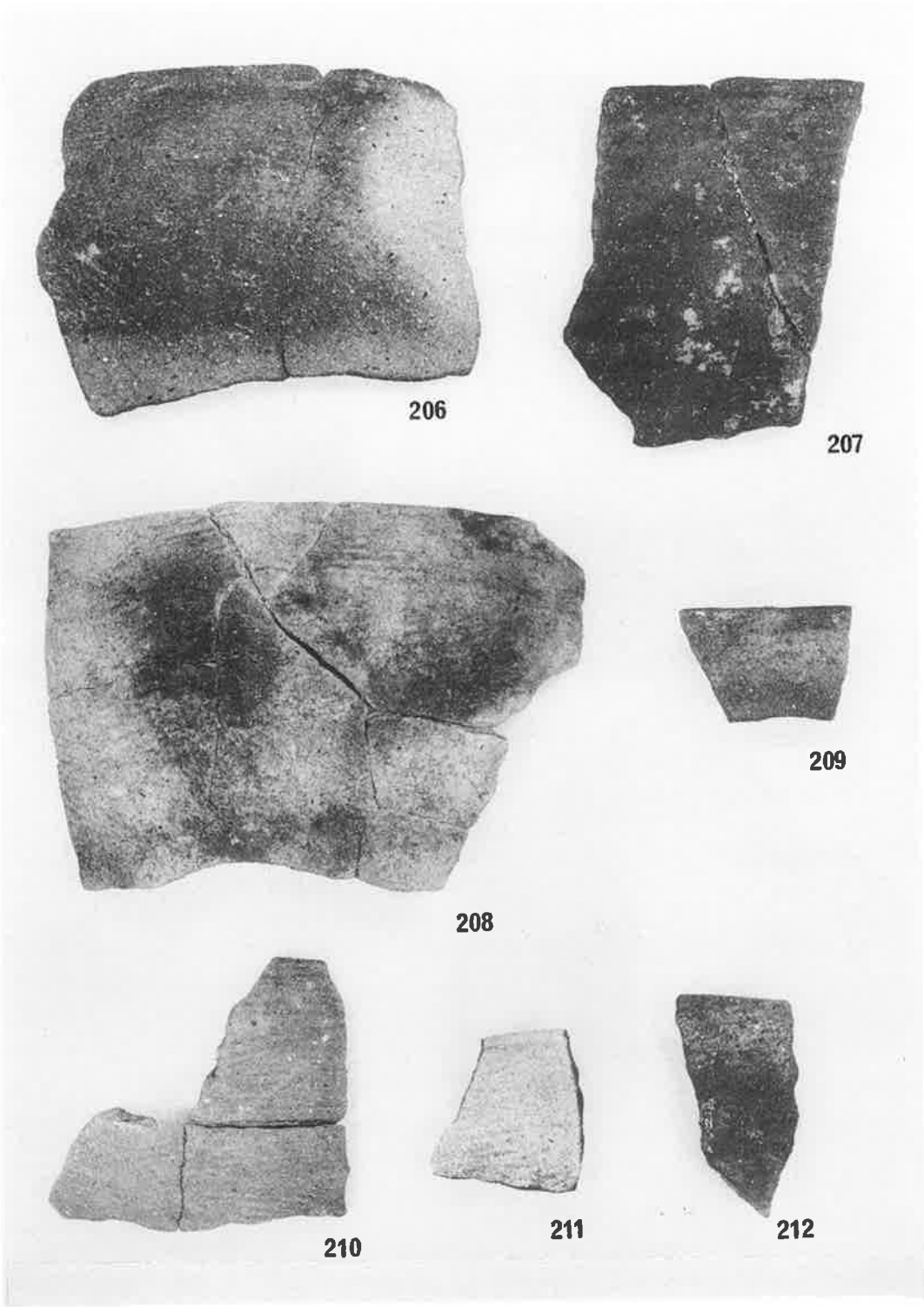
第2次調査出土遺物④（$\frac{1}{1}$）



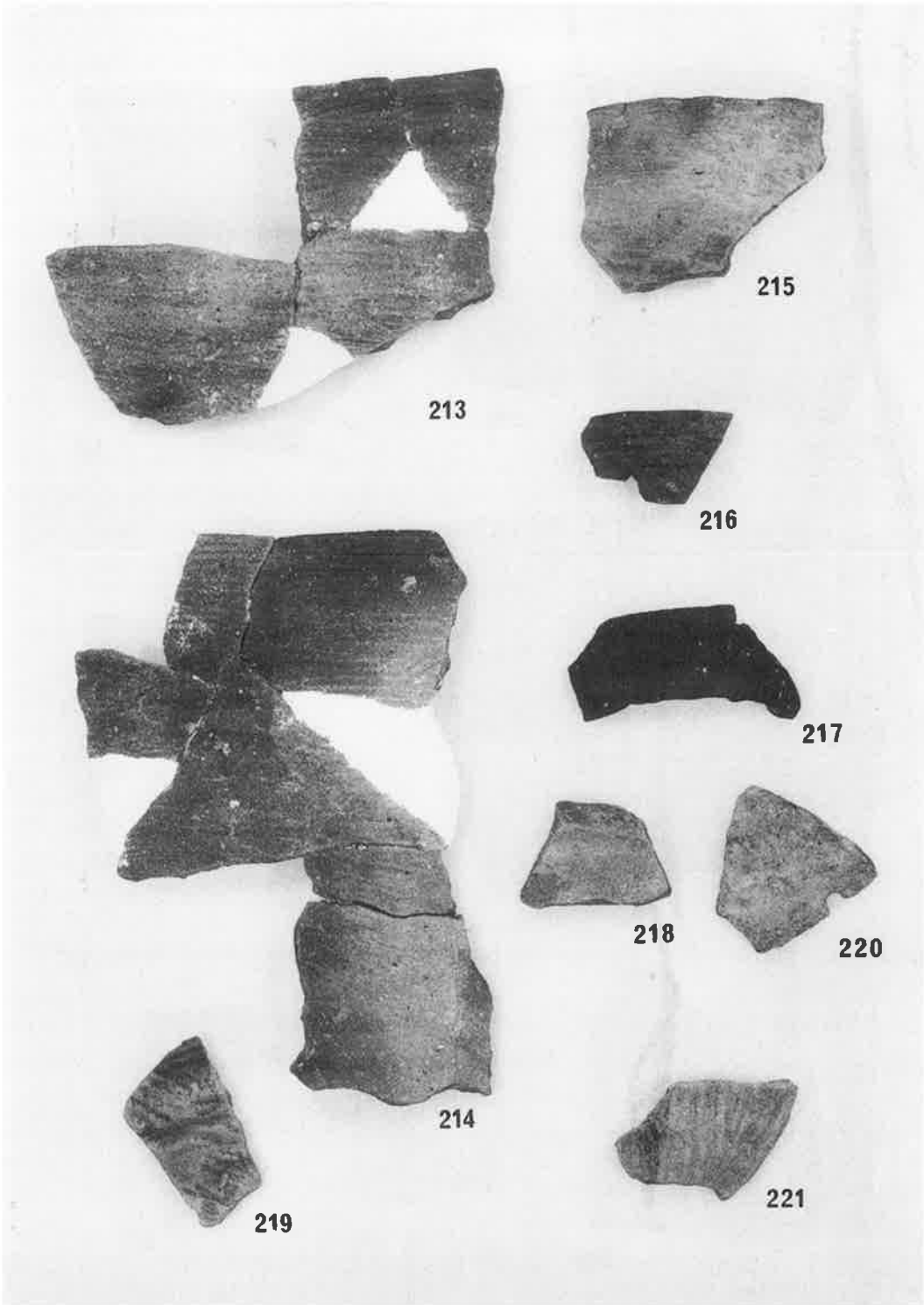
第 2 次調査出土遺物⑤（$\frac{1}{1}$）



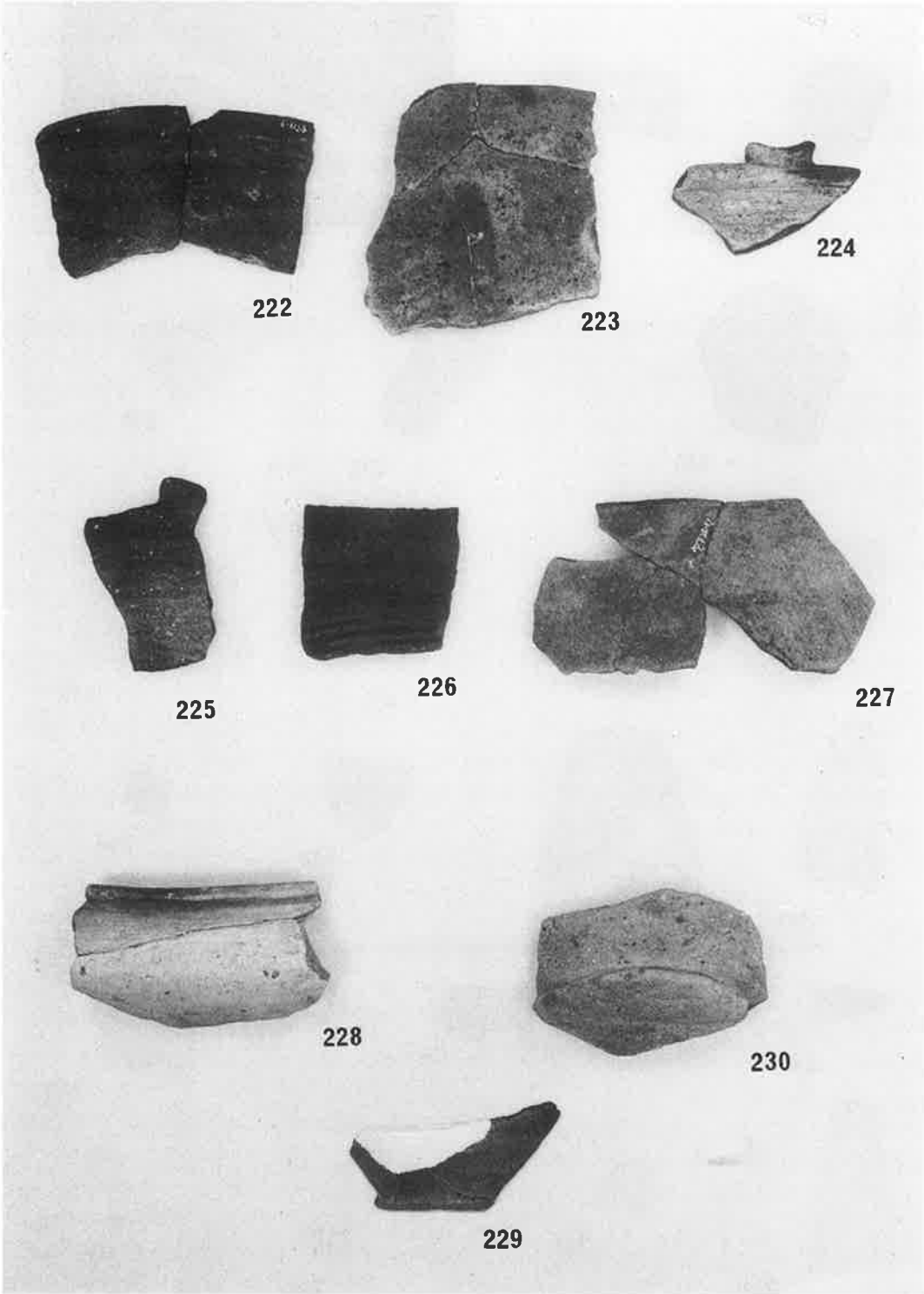
第 2 次調査出土遺物⑥（½）



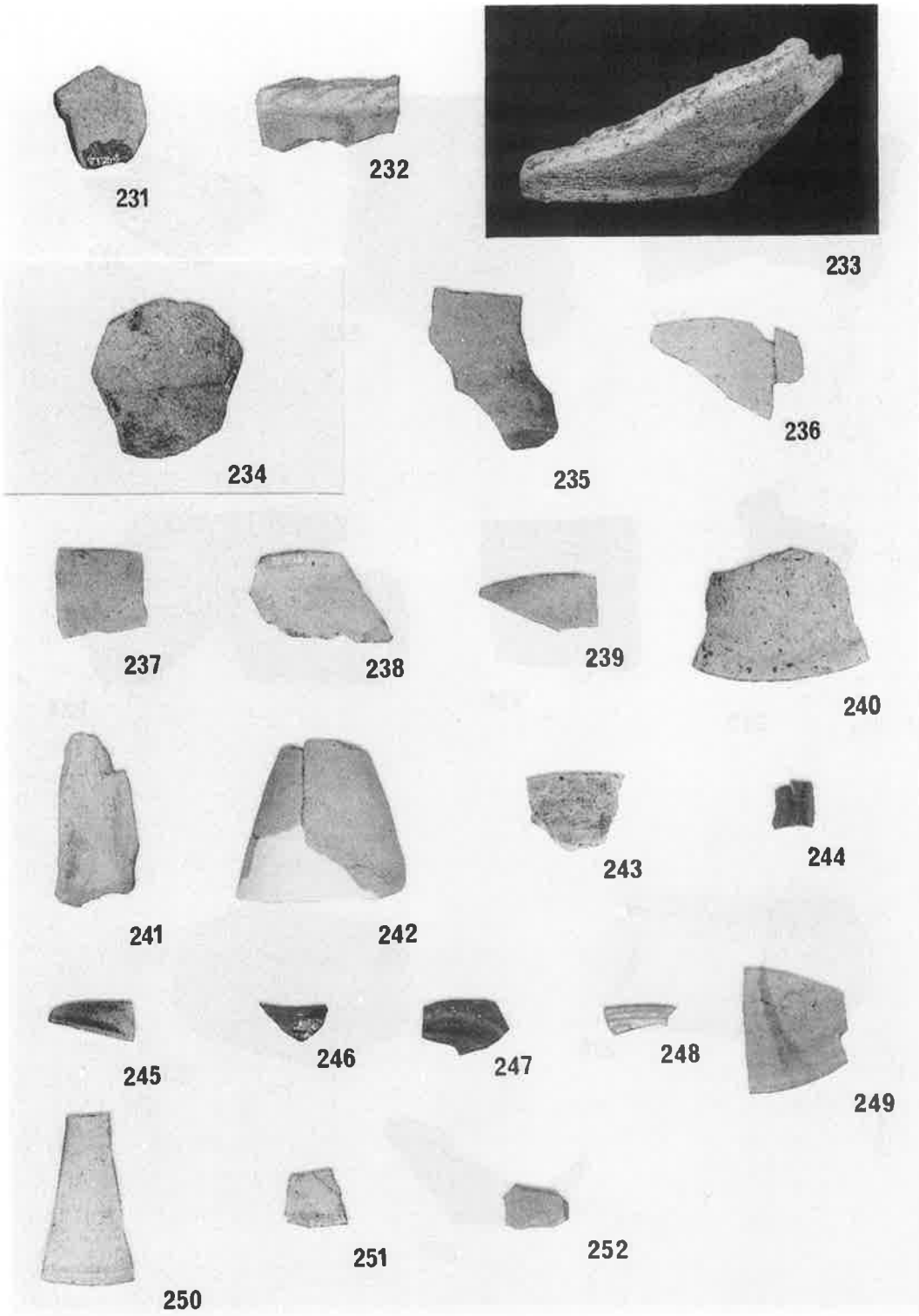
第 2 次調査出土遺物⑦（½）



第2次調査出土遺物⑧（½）



第 2 次調査出土遺物⑨（½）



第 2 次調査出土遺物⑩（$\frac{1}{3}$）

253

254

255

256

257

258

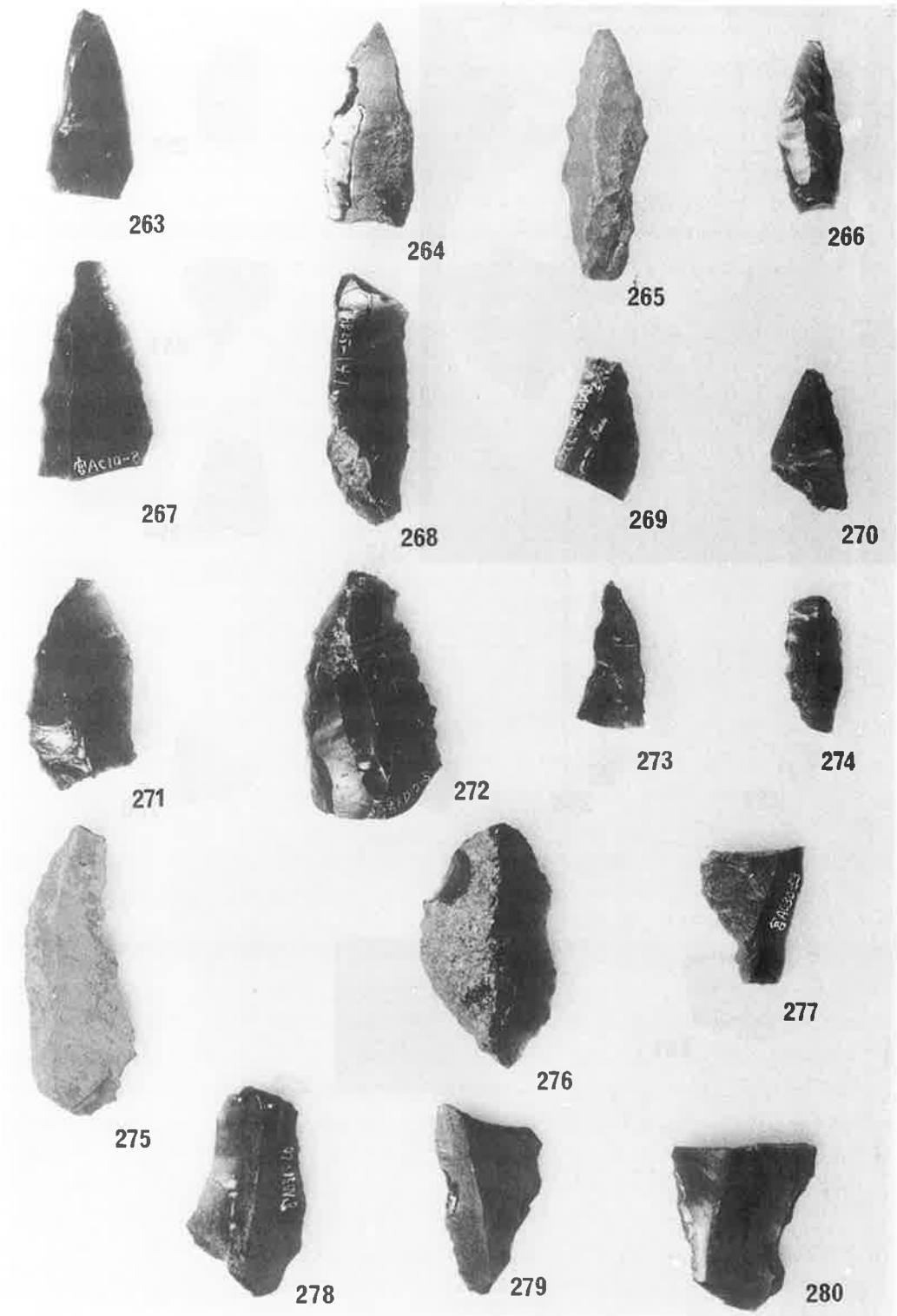
259

260

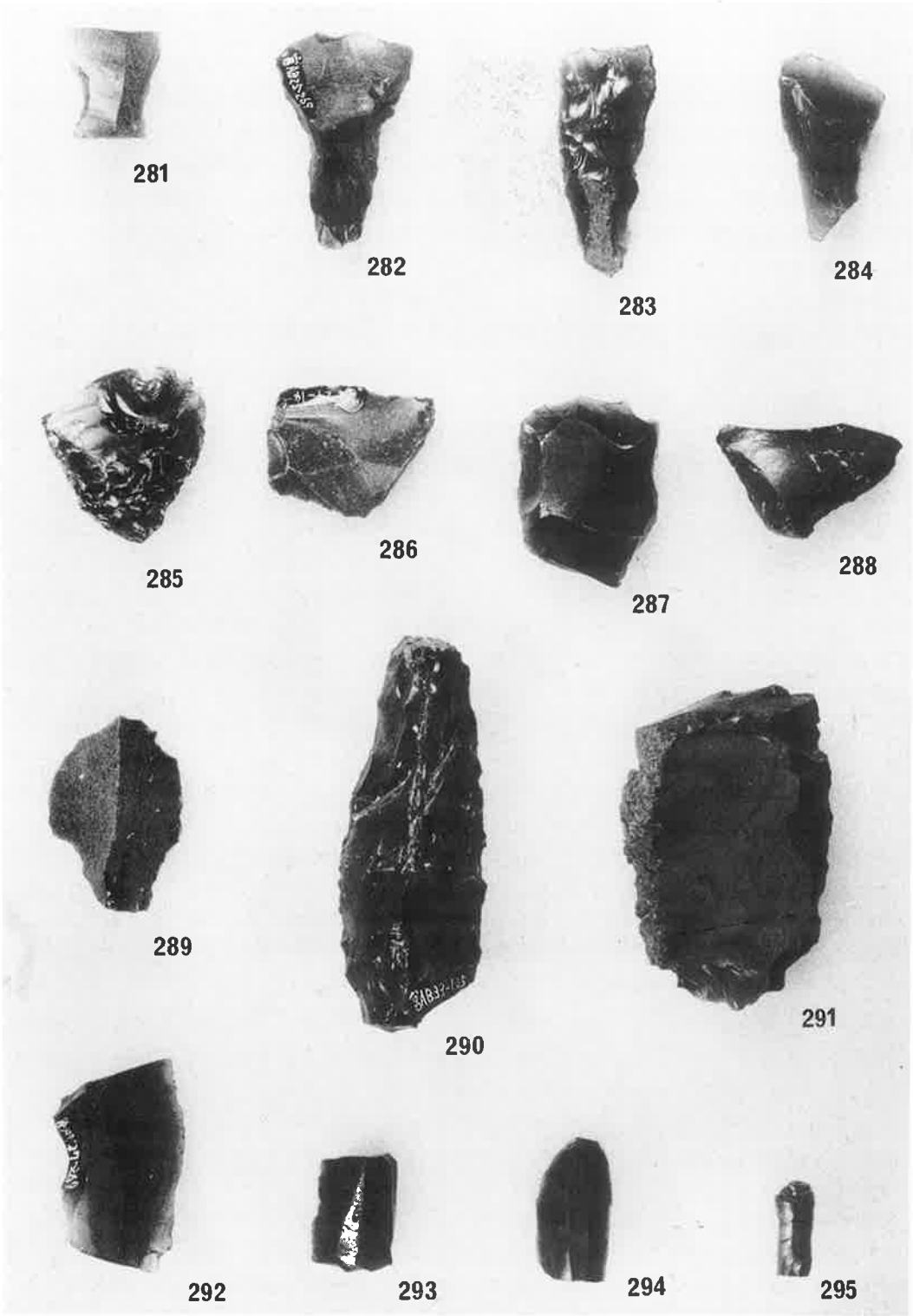
261

262

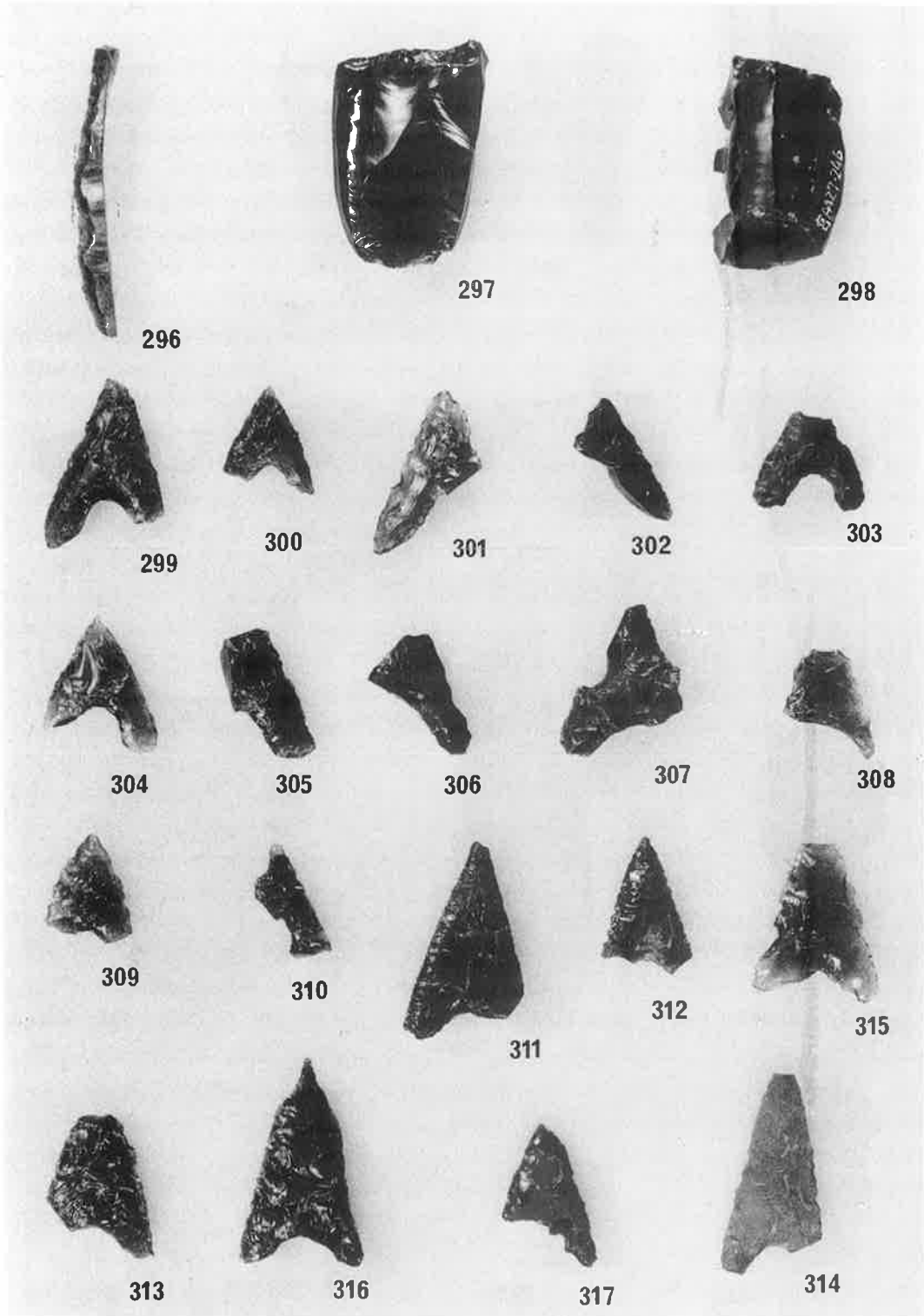
第 2 次調査出土遺物⑪（$\frac{1}{3}$）



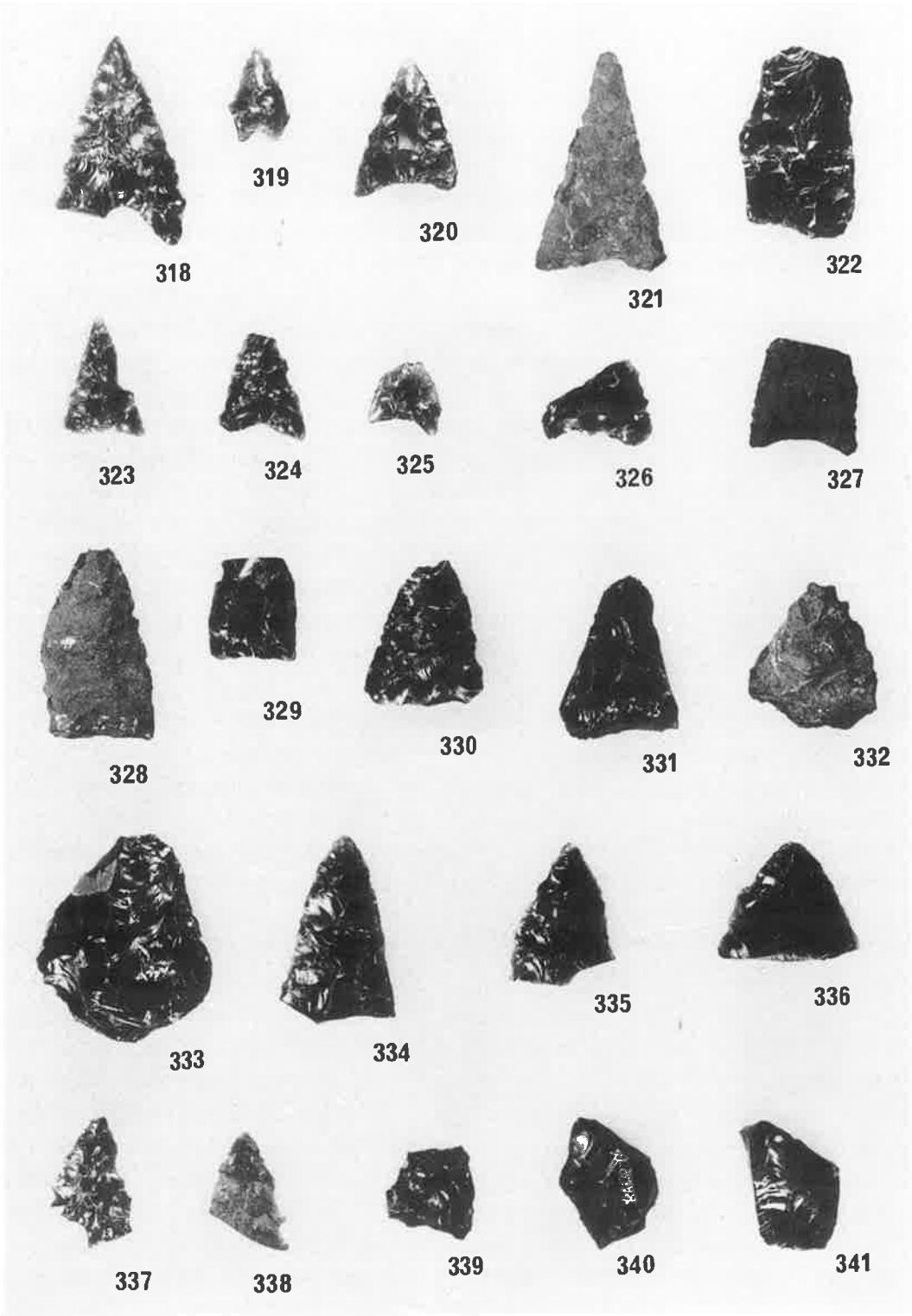
第3次・第4次調査出土遺物① (1/1)



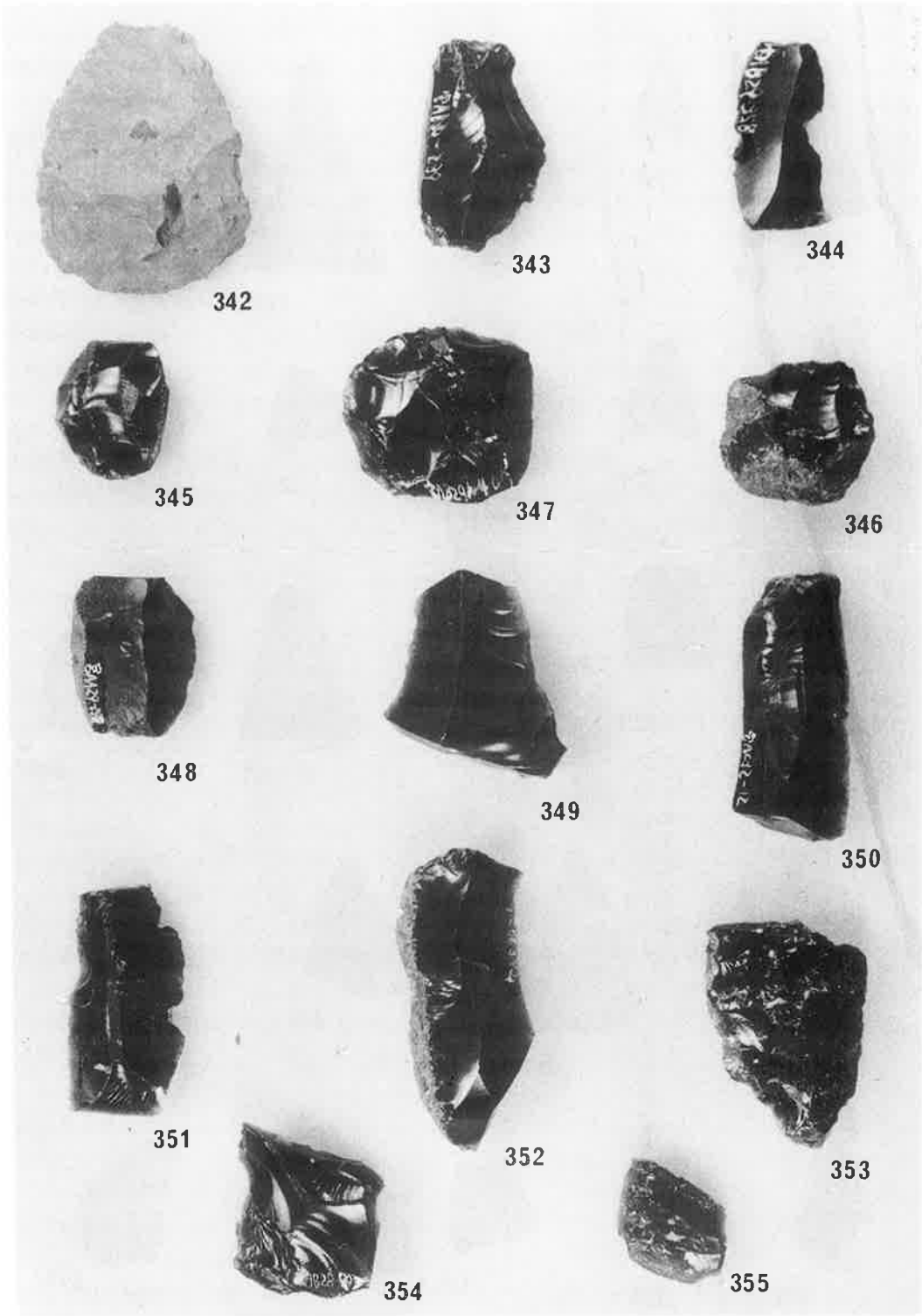
第 3 次・第 4 次調査出土遺物② （$\frac{1}{1}$）



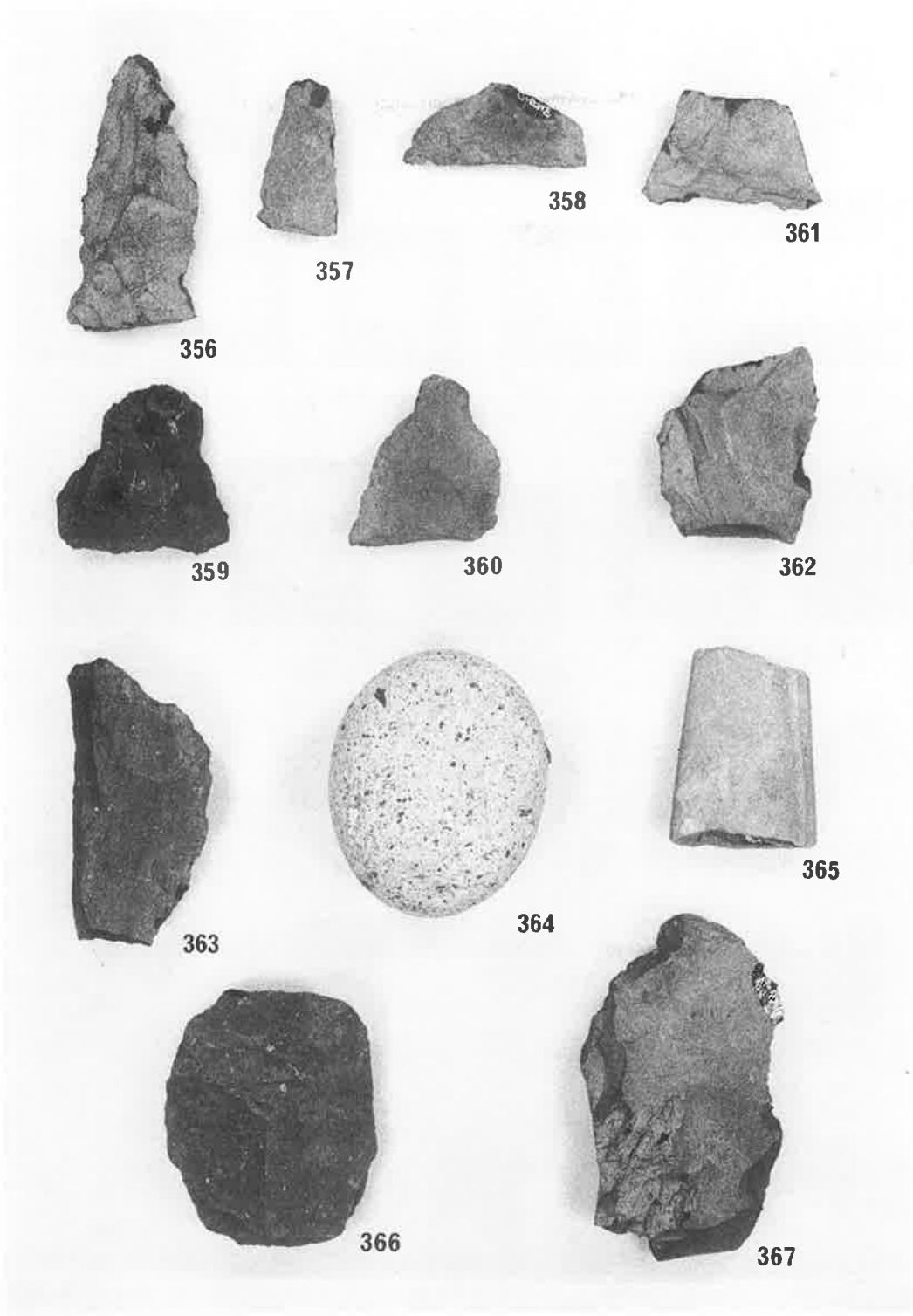
第 3 次・第 4 次調査出土遺物③（$\frac{1}{1}$）



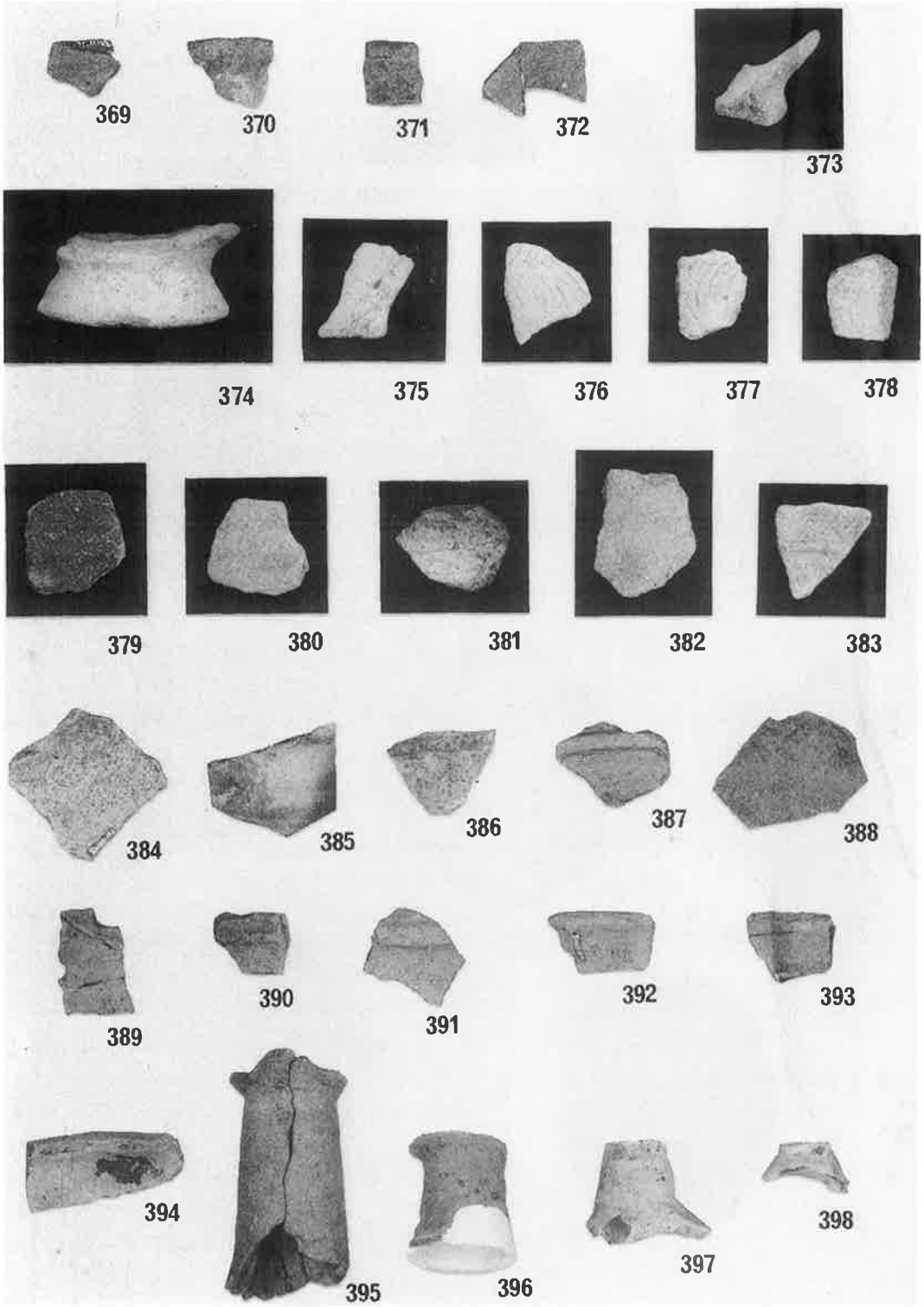
第3次・第4次調査出土遺物④（$\frac{1}{1}$）



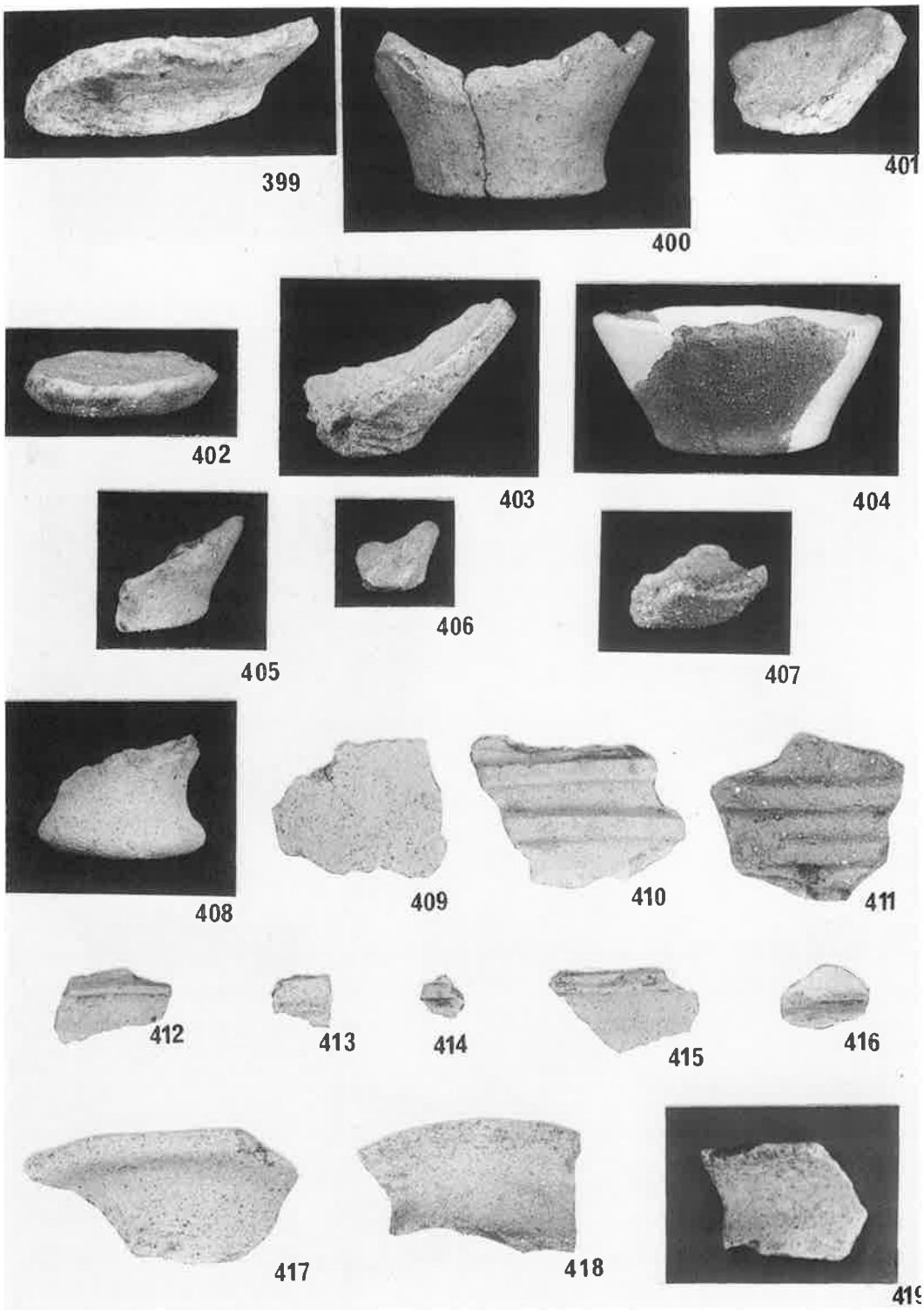
第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑤（$\frac{1}{1}$）



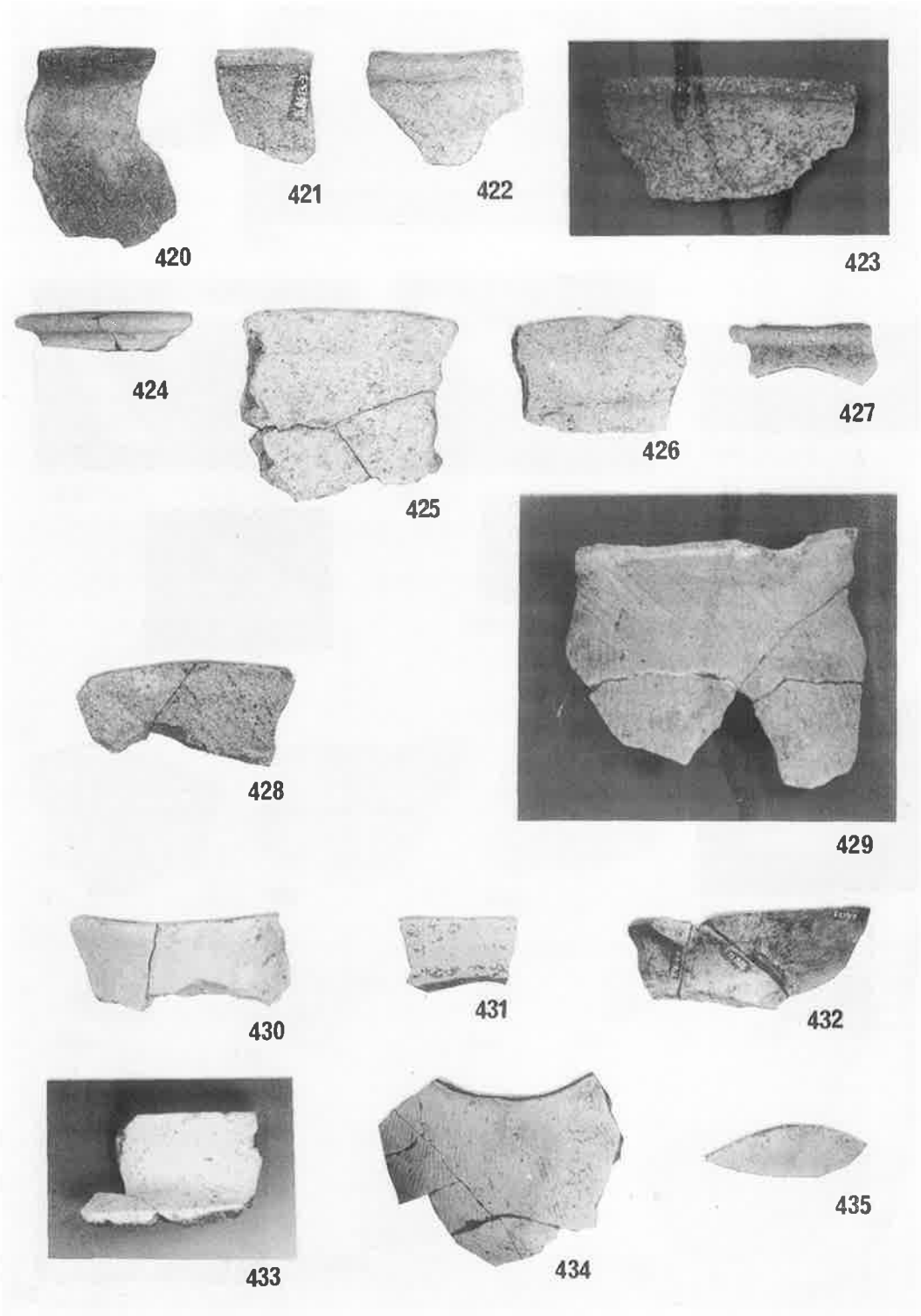
第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑥（$\frac{1}{2}$）



第3次・第4次調査出土遺物⑦（$\frac{1}{3}$）



第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑧（$\frac{1}{3}$）



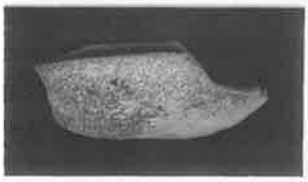
第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑨（$\frac{1}{3}$）

436

437

438

439


440

441

442

443

444

445

446

447

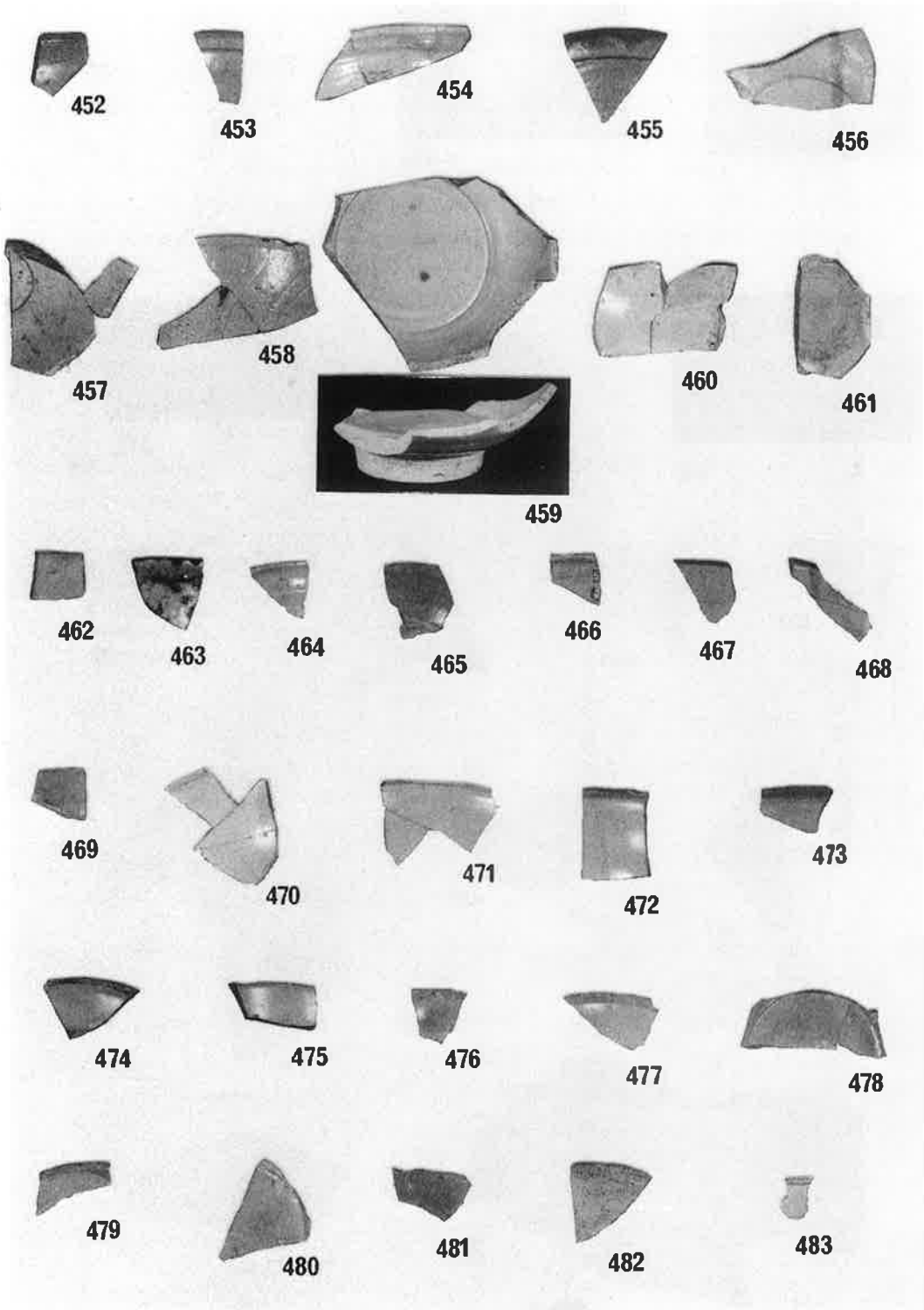
448

449

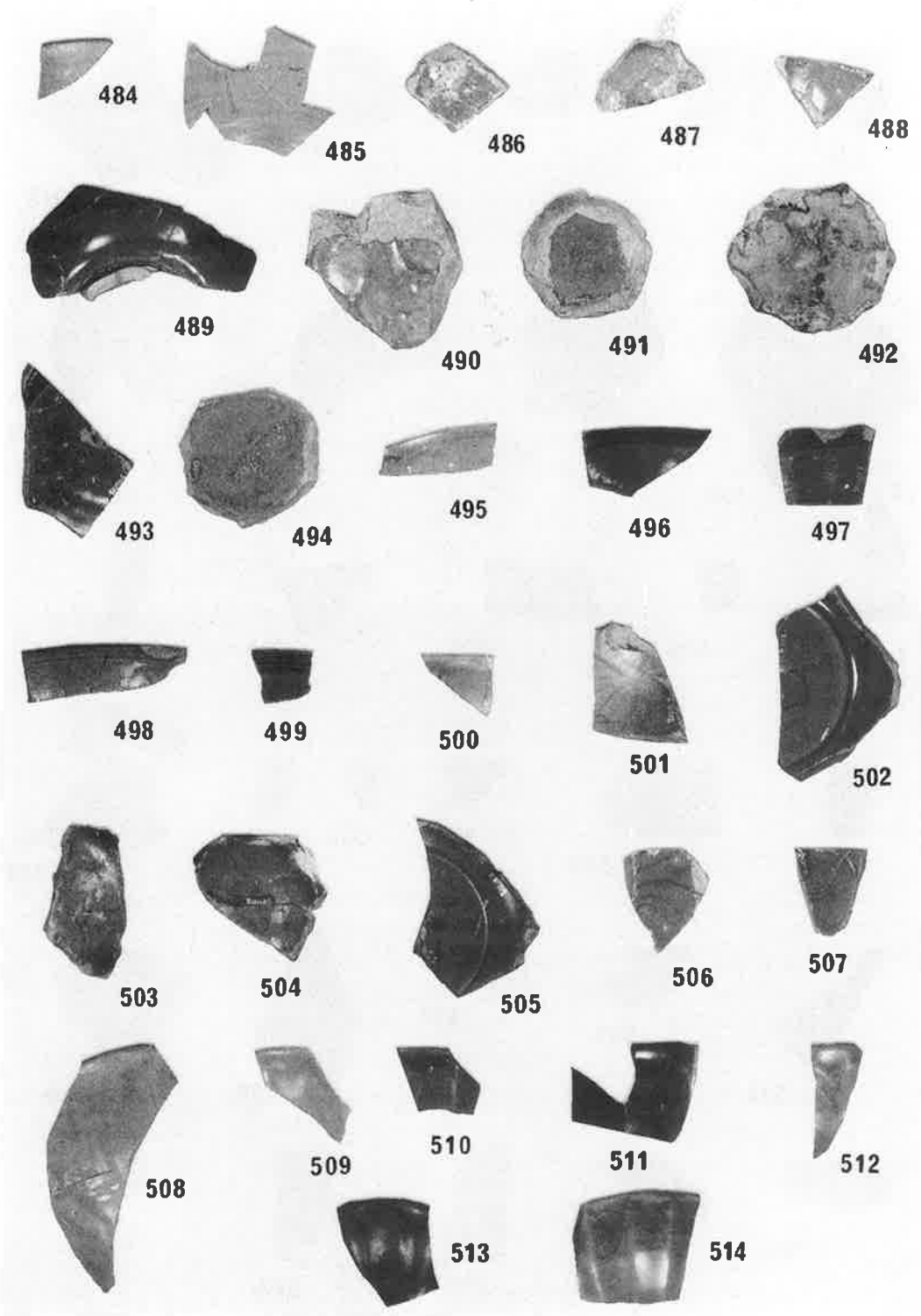
450

451

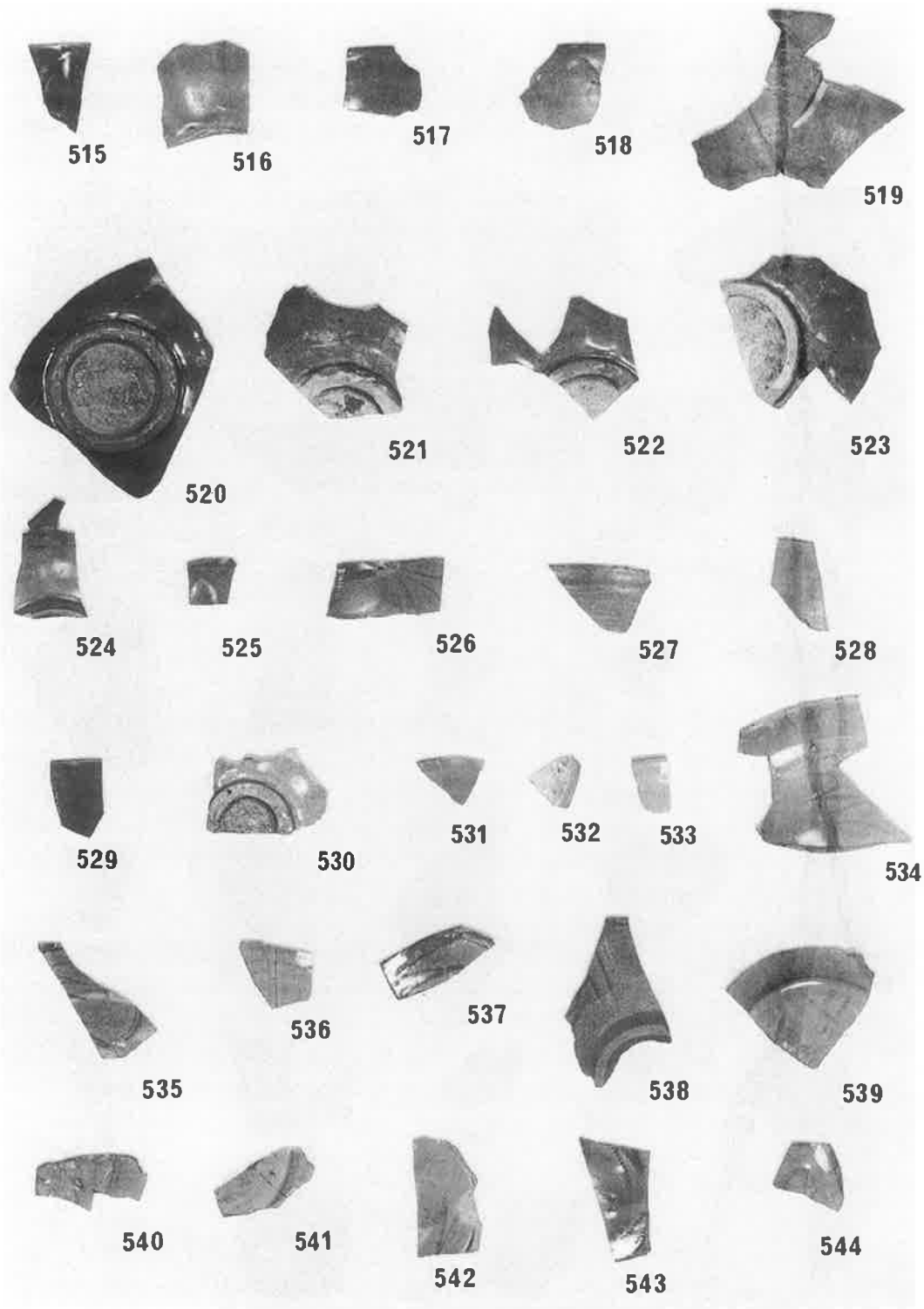
第3次・第4次調査出土遺物⑩（$\frac{1}{3}$）



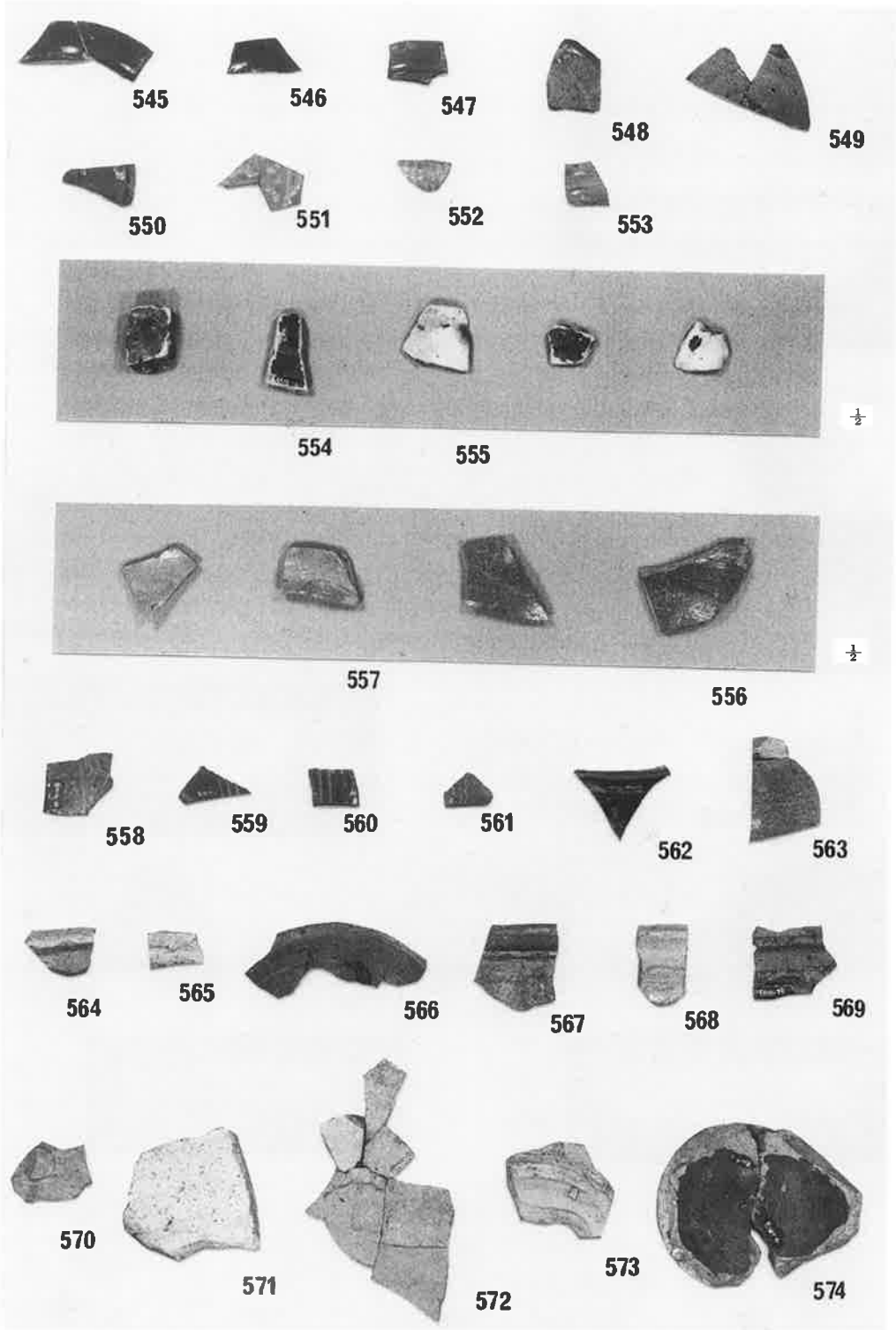
第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑪（$\frac{1}{3}$）



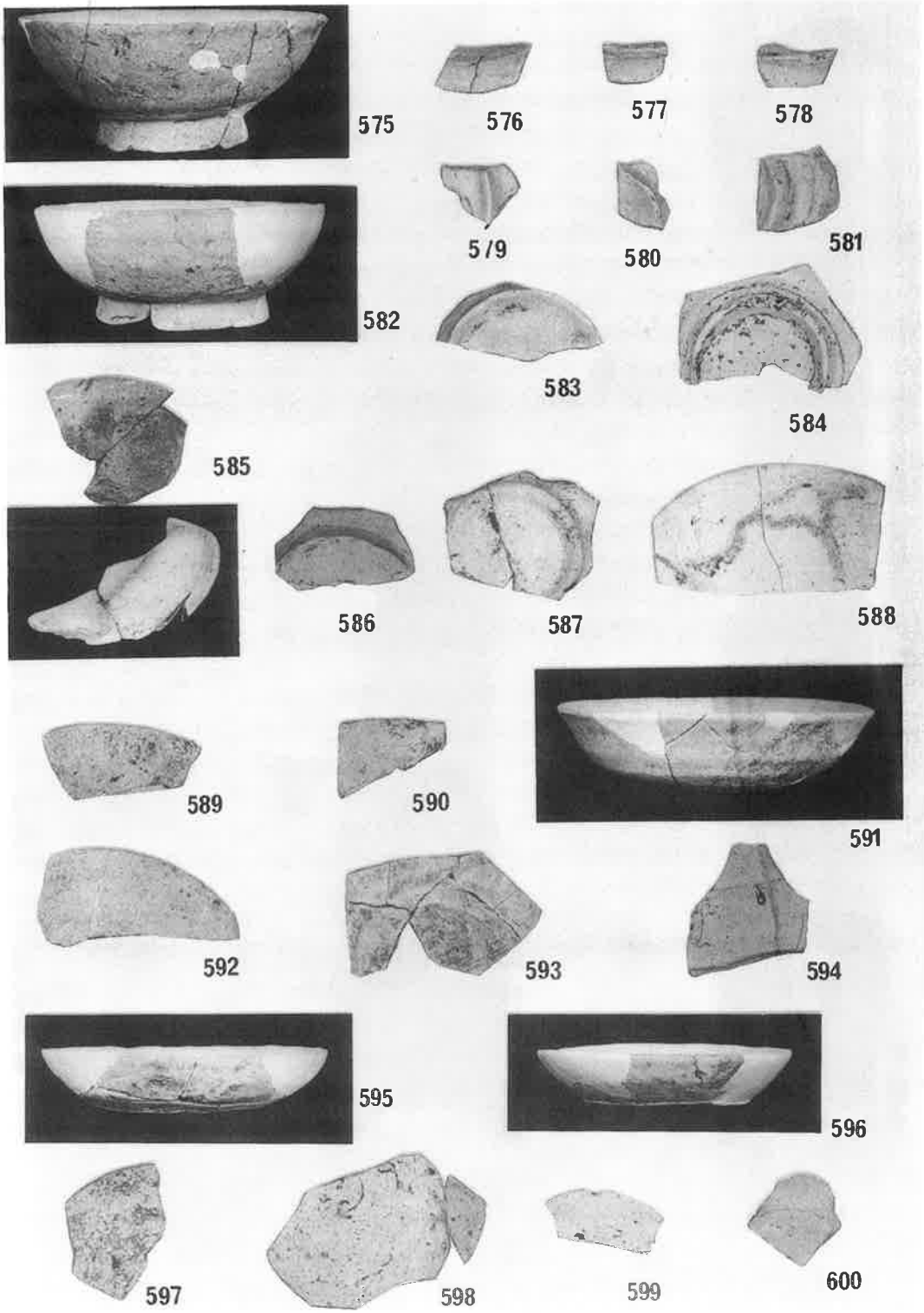
第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑫（$\frac{1}{3}$）



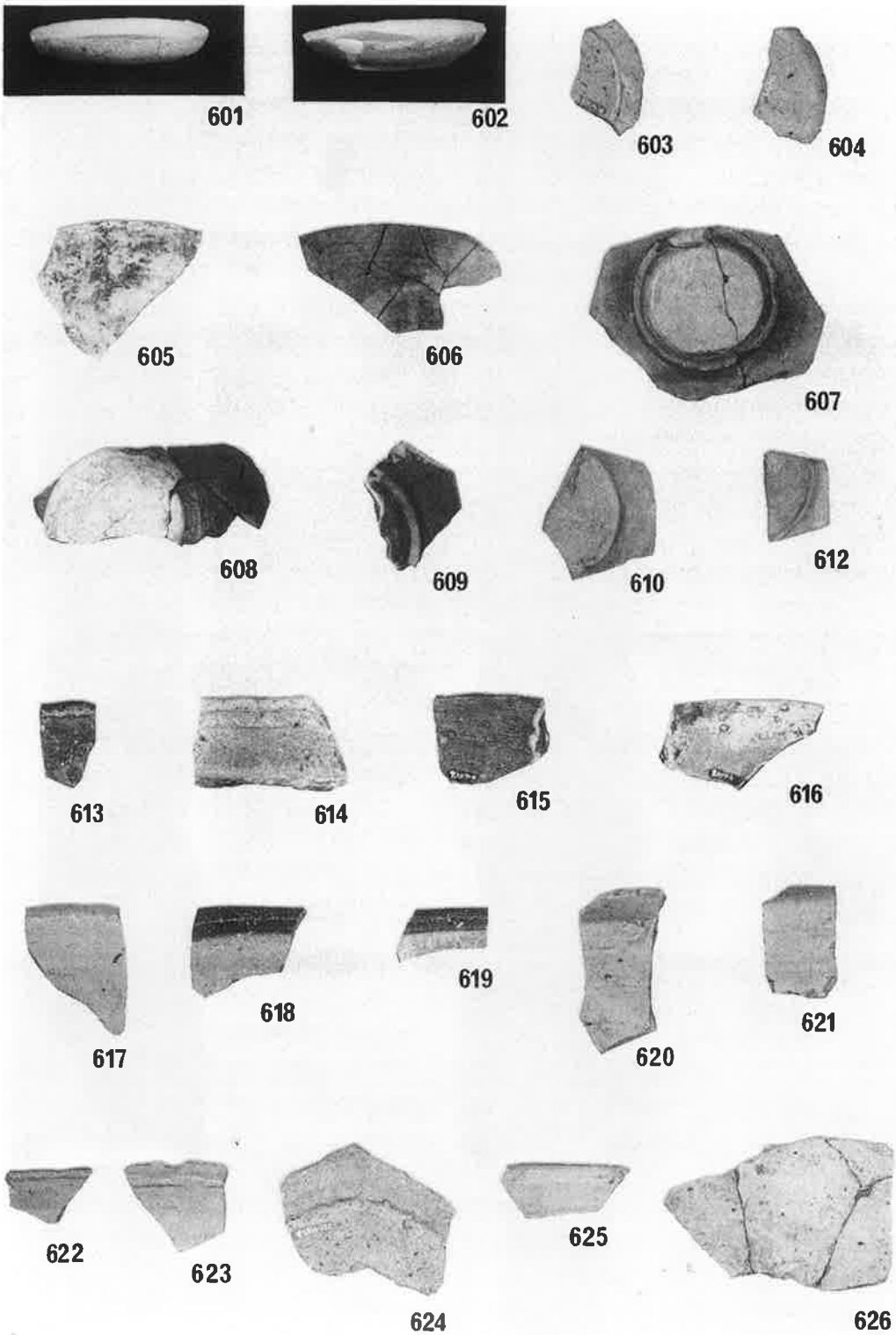
第3次・第4次調査出土遺物⑬（1/3）



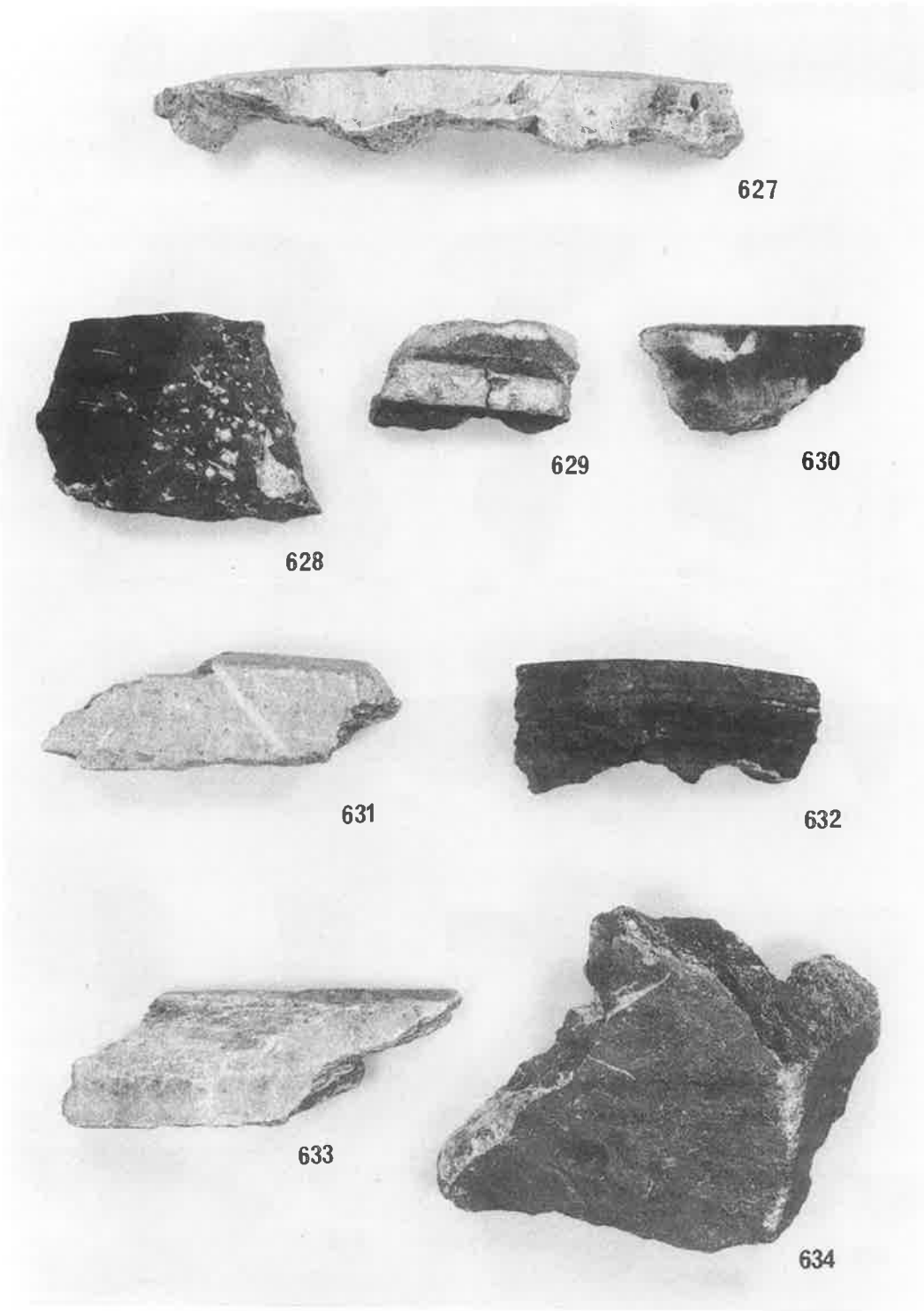
第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑭（$\frac{1}{3}$）



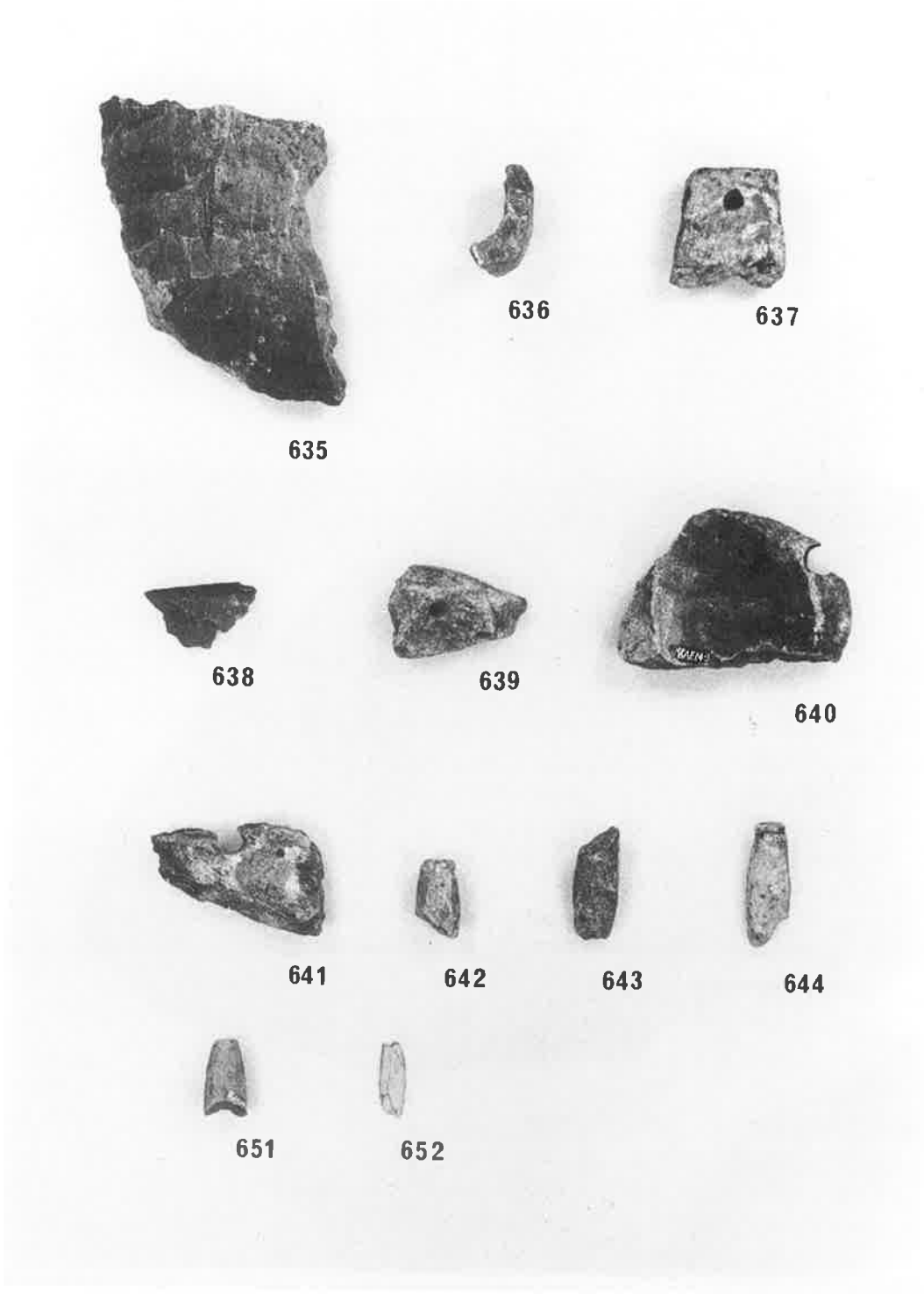
第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑮（$\frac{1}{3}$）



第3次・第 4 次調査出土遺物⑯（$\frac{1}{3}$）



第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑰（½）

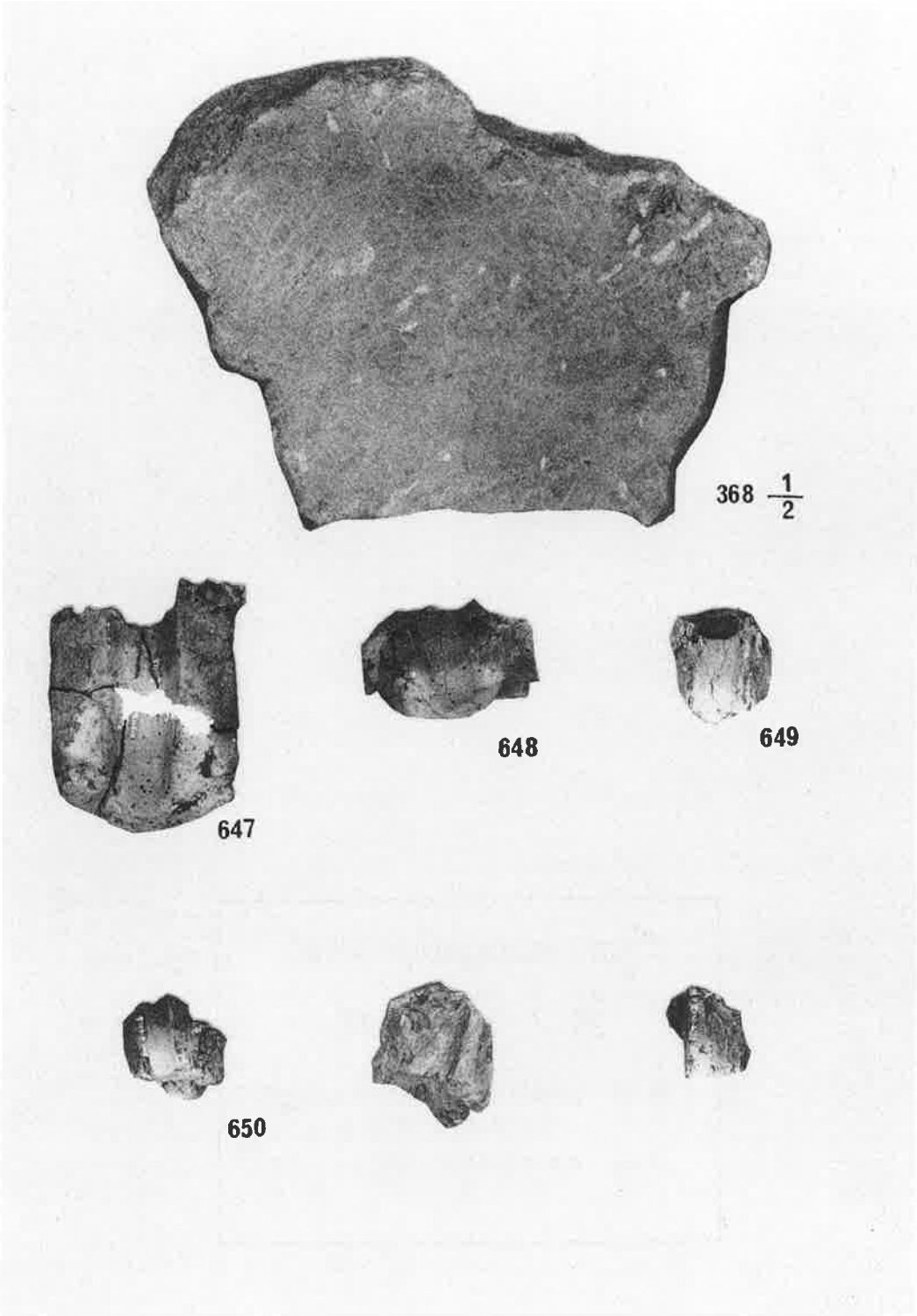


第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑱（$\frac{1}{2}$）

645

646

第 3 次・第 4 次調査出土遺物⑲（½）



第 3 次・第 4 次調査物出土遺物⑳（$\frac{1}{3}$）

松浦市文化財調査報告書　第５集

宮ノ下り遺跡

発 行　長崎県松浦市志佐町里免365番地
松浦市教育委員会
印 刷　長崎県佐世保市山祇町１９－１３
Ｓ　Ｋ　印　刷